

備前・備中における仏教民俗の研究

―報恩大師伝承の浸透と日蓮宗不受不施派の信仰―

平松 典晃

目次

序 論 本稿における研究の目的と方法	4 頁
第一章 報恩大師伝承と備前四十八ヶ寺	10 頁
第一節 中世前期の伝承	10 頁
はじめに	
一 大和における報恩大師の伝承	
二 真言子島流にみる子島寺から高野山への伝播	
三 伝承の伝播と備前・備中における報恩大師伝承の確立	
四 平安末期から南北朝期までの伝承	
おわりに	
第二節 中世後期から近世初期の伝承	25 頁
はじめに	
一 備前四十八ヶ寺の成立	
二 中世後期の備前四十八ヶ寺と豪円	
三 備前四十八ヶ寺と日蓮宗	
四 中世後期の報恩大師伝承	
おわりに	
第三節 近世における報恩大師伝承の浸透	37 頁
はじめに	
一 江戸時代の報恩大師伝承	37 頁
二 備前四十八ヶ寺巡礼と報恩大師信仰の定着	
三 備中における報恩大師伝承	
おわりに	
第二章 現代の報恩大師と智明権現の信仰	51 頁
第一節 現代の報恩大師信仰	51 頁
はじめに	
一 現代における報恩さまの祭り	
二 報恩大師に関する口承伝承	
おわりに	
第二節 現代の智明権現信仰	65 頁
はじめに	

一 智明権現を祀る寺院	
二 大賀島寺の権現祭り	
三 熊山神社春祭り	
四 智明権現の勧請	
おわりに	
第三章 民間寺院の成立と先祖信仰……………	85頁
第一節 備中日差寺と福山寺に起源をもつ民間寺院の成立……………	86頁
はじめに	
一 日差山宝泉寺の成立と先祖信仰	
二 日差寺に起源をもつ民間寺院	
三 福山寺に起源をもつ民間寺院	
おわりに	
第二節 岡山市東区瀬戸町大井における民間寺院の成立と先祖信仰……………	104頁
はじめに	
一 瀬戸町大井の概要	
二 大井における蓮久寺の成立と不受不施派の信仰	
三 蓮久寺跡の墓地における先祖信仰	
おわりに	
第四章 日蓮宗不受不施派の信仰……………	115頁
第一節 備前における不受不施派の特徴……………	115頁
はじめに	
一 不受不施派の信仰と歴史的経緯	
二 岡山藩における寺社整理と内信	
三 本妙院日珠	
四 不受不施派の再興	
おわりに	
第二節 和気町益原の不受不施派信仰……………	121頁
はじめに	
一 和気町益原における法華信仰の歴史的展開と杉本家	
二 『法泉寺文書』にみる内信	
三 杉本家にみる不受不施派信仰	
四 和気町益原における現代の不受不施派信仰	

五 不受不施派檀家の年中行事

おわりに

第三節 岡山市北区御津矢原の不受不施派と不受不施日蓮講門宗の信仰……………151頁

はじめに

一 御津矢原の概要と不受不施派信仰の展開

二 矢原村における不受不施派の内信

三 現代における不受不施派と講門宗の儀礼

おわりに

第四節 岡山市東区瀬戸町における久米右衛門派の信仰……………161頁

はじめに

一 久米右衛門派の概要と歴史

二 森末にある内信者の墓と御庵の位牌

三 久米右衛門派の儀礼と信仰

おわりに

第五節 岡山市北区加茂の政所講中にみる白川門流日題派の信仰……………172頁

はじめに

一 白川門流日題派と政所講中の信仰

二 政所講中における信仰の変遷と石塔調査

三 京都長栄講中からもたらされたオタカラ

おわりに

結 語……………178頁

序論 本稿における研究の目的と方法

仏教民俗とは仏教と民俗の習合文化であり、仏教が民俗に吸収される、あるいは仏教が民俗を包摂して民俗宗教化したものである。仏教は民俗化することで庶民に定着した。仏教民俗学の提唱者である五来重氏は、仏教民俗の事象を分析することで仏教の民俗化の実相を^①探る必要があると述べている。

本論では岡山県南部にあたる備前とその西側に隣接する備中東南部をフィールドとして、歴史民俗学の手法を用いて仏教の民俗化と仏教民俗の諸相について研究を行う。表題に備前・備中の名称を用いたのは中世・近世の事象を中心に仏教民俗の考察を行うためである。

調査・研究の対象とした地域は大部分が岡山藩の領域と重なっている。近世初期の岡山藩領内では天台・真言の密教寺院が過半数を占め、四割近くが日蓮宗寺院であったことが明らかにされている。その後寛文六年（一六六六）に岡山藩が実施した寺社整理では、各宗派が整理の対象になったものの、日蓮宗については徹底した弾圧を受け、多くの寺院が廃寺になった。廃寺になった日蓮宗寺院は寛文五年に幕府によって禁じられた不受不施派であったとされる。^②

備前・備中の仏教民俗はこのような宗教環境の中で展開された。密教寺院のなかには多くの山岳寺院がみられ、これら寺院を中心に報恩大師伝承が持たれていることが指摘できる。備前・備中の報恩大師伝承は、古文書や寺院縁起を中心に平安末期から近世に至るまで確認でき、現代でも多くの寺院で大変な誇りとして語り継がれているほか、生きた民俗として庶民の信仰対象にもなっている。この報恩大師伝承を時代ごとに検証し、伝承が主張される目的を明らかにすることで、仏教が民俗化する過程に迫ることができると考える。

また寺社整理の際に多くの日蓮宗寺院が廃寺になるが、不受不施派をはじめとする不受不施諸派の教えを信仰する人々は、内信という方法で弾圧に耐えながら信仰を継続した。現在も弾圧当時の内信の様子がありありと伝承されている。

この地域における仏教の庶民への浸透や、仏教民俗の諸相を明らかにするために現地で民俗調査や古文書・文献調査によって史料の収集を行い、歴史民俗学の手法で実証的に考察する。

本論は四章から成っており、各章の研究目的と方法は次の通りである。

第一章では備前・備中にみられる報恩大師伝承の展開について論じる。報恩に関してはこれまで数々の研究が行われており、特に岡山では注目されているテーマである。

戦前には永山卯三郎氏が岡山県各地の寺院に所蔵されている古文書や地誌、中央史料の

比較検討を行っている。⁽³⁾ 次いで妹尾薇谷氏が報恩を顕彰する立場から、岡山県内各地に伝わる伝承をそのまま史実として受けとめ報恩の出生から遷化に至る歴史をまとめている。⁽⁴⁾

歴史学の面では、下出積與氏は報恩の出自について備前説と大和説があることを指摘し、備前と有縁の人物であろうと述べている。⁽⁵⁾ 達日出典氏は各地の報恩大師伝承を子島山寺系伝承、『本朝神仙伝』所収の伝承、興福寺系伝承、高野系伝承、備前系伝承に分け伝承の再構築を行っている。そのなかで報恩の備前出生説と大和出生説について検討を行い、備前の報恩大師伝承は外部から持ち込まれたものであるとして備前出生説を否定し、大和出生説が有力であるとしている。⁽⁶⁾ 小林崇仁氏は各地の報恩大師伝承を時代状況に照らし合わせ、その史実性について考察し、備前の伝承についても何らかの史実を反映している可能性があるとしている。⁽⁷⁾

文学の面では、中川真弓氏が、『備中日差山宝泉寺縁起』（昭和三二年書写）などの分析を行っている。宝泉寺の縁起は『金山観音寺縁起』（治承四年・一一八〇）をもとに作成されたものとみられるが、『金山観音寺縁起』もまた日差山に伝わる縁起を取り入れて作成された可能性があることを指摘している。⁽⁸⁾

岡山県の伝承については、難波俊成氏が報恩大師によって開かれたとされる備前四十八ヶ寺の成立について論じている。備前四十八ヶ寺は金山寺が宇喜多氏のもとで神社総監の立場にあった際に、天台宗寺院の優位性を確保するために天台寺院を結集させたものであるとし、また備前の報恩大師伝承については都から導入されたもので、備前四十八ヶ寺が結集した際に共有が図られたとしている。⁽⁹⁾ 中田利枝子氏は備前四十八ヶ寺を構成する寺々の史料を検証し、備前四十八ヶ寺が成立した時点では天台宗のみではなく真言宗と日蓮宗の寺を含んでいたと推測している。⁽¹⁰⁾

以上の先行研究の中で、難波氏は報恩の伝承は都からもたらされたとし、達氏は報恩大師の出生地について備前説と大和説があるなかで大和説が有力であるとしている。筆者も両氏の説に立って考察を進めることにする。

本章では備前・備中の寺院などに伝わる古文書や縁起、地誌などから報恩に関する記載を抜き出して時代ごとに考察し、報恩大師伝承を主張する目的を明らかにし、さらに寺院縁起からは報恩大師伝承の内容と発展について検証する。また江戸期には報恩大師を祀る堂が建立され、報恩によって開かれたとされる備前四十八ヶ寺の巡礼を示す「備前四十八ヶ寺巡礼かがみ」の版木がみられるようになる。これらを調査し報恩大師信仰が庶民に受け入れられていく過程を検討する。

第二章では報恩大師と智明権現の信仰について論じる。

備前・備中の報恩大師伝承についてはこれまで文献史料をもとに研究が行われてきたが、庶民の報恩大師信仰や口承伝承については注目されることはなかった。筆者は現在もムラにある堂で報恩大師を祀り、毎年祭りを行っている事例を確認した。報恩大師信仰は中世の山岳寺院の勧進活動で語られた伝承が民俗化し庶民に定着したものと考ええる。本章では現代の報恩大師信仰と、その浸透を示す口承伝承について調査・考察を行う。

また、報恩大師伝承を共有する備前四十八ヶ寺を中心に備前の寺院では、伯耆大山寺の本尊である智明権現を祀る例がみられる。備前では備前四十八ヶ寺の構成寺院である大賀島寺（天台宗・瀬戸内市邑久町豊原）で現在も本地仏である地藏を神輿に乗せて渡御する祭りが行われている。また現在熊山神社（赤磐市奥吉原）の春祭りも、近世には地藏権現（智明権現の異称）の祭りであった。これらについても調査結果をもとに祭りや信仰の実相に迫りたいと考える。

第三章では民間寺院の成立と先祖信仰について論じる。

竹田聴洲氏は浄土宗寺院の由緒を記した『蓮門精舎旧詞』の分析を行い、民間寺院のもつ性質について検証している。特に民間寺院の開基についてその檀越・開山僧・非宗旨的契機の三点から分析し、開基檀越を大名・領主級武士、地侍・藩臣級武士、単独の庶民、庶民の同信集団、惣村、史上の在俗名士に分類し、開創時期について文亀から寛永年間に多く、中でも天正から寛永にかけて開創が集中することを見出している。そしてその成立は先祖祭祀を目的とした事例が多いことを述べている。⁽¹⁾赤田光男氏は中世的な氏寺が近世的な檀那寺に変化する一般的な事例に対し、庶民階層にとっては菩提供養所としての役割も果たした持庵や仏堂こそ近世檀那寺の祖型であり、両墓制の詣墓としての性格をもつものであることを論じている。⁽¹⁾⁽²⁾

筆者は備前・備中地域で民俗調査や近世の地誌などを用いた文献調査を行うなかで、創建年台やムラの先祖信仰を目的として建立された寺院など、竹田氏が示した民間寺院の性質に当てはめることができる事例を発見した。備中に位置する中世の山岳寺院である日差寺と福山寺が近世初期に解体され、それぞれの子院が近隣のムラに移り、先祖信仰を担う寺院へと姿を変えている事例である。さらに備前に位置する今日の岡山市東区瀬戸町大井で、近世初期にムラの人々が先祖祭祀を目的として寺院を創建した事例である。

本章では備前・備中地域の民間寺院の成立について考察する。民間寺院の成立は仏教が民俗化する過程でみられる最も顕著な事象であると考ええる。

第四章では日蓮宗不受不施派と同派から分かれた不受不施諸派の信仰について論じる。

日蓮宗不受不施派の信仰は備前・備中の特徴と言え、多くの自治体史などに取り上げられている。

不受不施派に関する先行研究としては影山堯雄氏が編集した『日蓮宗不受不施派の研究』があり、各著者が「不受不施」の思想・教義・歴史・事跡について論じている。⁽¹³⁾ 宮崎英修氏は身池対論以後の不受不施派と受不施派の対立の展開、幕権介入の経緯などから禁制宗門不受不施派の成立に迫るとともに、弾圧下の内信にみられる諸問題や信仰の実相について考察を行っている。⁽¹⁴⁾ 相葉伸氏は不受不施派信仰を思想史の中でとらえた。⁽¹⁵⁾ 安藤精一氏は社会経済史的な視点から不受不施派の考察を行い、不受不施派の成立や同派が禁止される前後に見られる日本各地の不受不施派の動向を検証したうえで、不受不施派農民の抵抗について論じている。近世に弾圧された宗教の中でも不受不施派の場合は僧が国主諫暁・天下諫暁に堂々と挑戦したことや、不受不施派の正当性と幕府の誤りを主張し、積極的な布教活動が続けたところが特色であるとしている。⁽¹⁶⁾

岡山では長光徳和氏と妻鹿淳子氏が不受不施派に関する古文書などの記録資料を分析し『日蓮宗不受不施派読史年表』を作成したほか、不受不施派の一派である久米右衛門派の史料調査を行い報告している。⁽¹⁷⁾ 中務克己氏は『岡山県史』の編集に携わり、岡山県の不受不施派について執筆している。中務氏は調査・執筆を行うなかで、すでに消滅したと思われるいた白川門流日題派の信仰を岡山市北区加茂にある政所講中の人々が行っていることを知って調査し、主に同講中の年中行事の概要や僧侶不在であるため法号は用いず、俗名を石塔に刻むことなどを報告している。また政所講中には白川門流日題派の中心的な組織であった京都中京組長栄講中からもたらされた史料に注目し、長栄講中と史料の概要について報告している。⁽¹⁸⁾

近年の不受不施派に関する研究としては、田中久美子氏⁽¹⁹⁾と内藤幹生氏の論考がある。⁽²⁰⁾ これらの先行研究で不受不施派の歴史、信仰組織、教理、思想などが明らかにされてきた。本論では不受不施派の信仰を続ける四か所で民俗調査を実施し、弾圧下の内信の実相を探った。

まず、不受不施派の歴史を確認し、備前出身で三宅島流僧となり、三宅島から内信者組織を構築した日珠について確認する。

和気町益原では、信仰の中心的な役割を果たしていた杉本家で調査をさせていただいた。杉本家には弾圧下に不受不施僧を匿ったとされる部屋が蔵の中に残されているほか、日珠から授かった曼荼羅本尊や仏具などが伝えられている。『法泉寺文書』のなかにも日珠から杉本氏に宛てられた書簡が複数含まれており、不受不施派の高僧とのやりとりの様子をみることができる。また聞き取り調査で得た内信時代の伝承や杉本家の位牌・石塔に記された

た法号を分析することで弾圧下の信仰の様子が明らかになった。

岡山市北区御津矢原には日珠が庵主を務めた本妙庵があり、現在も信仰の拠点になっている。調査の際に「清者」と刻まれた石塔を確認し、近世の矢原村に内信者から不受不施僧である法中に布施をする際に、施主の役割を担う清者が実在したことをつかめた。

岡山市東区瀬戸町の鍛冶屋を中心に信仰されていた久米右衛門派では内信時代の様子がありありと聞くことができた。

岡山市北区加茂で白川門流日題派を信仰する政所講中では弾圧下の信仰の様子が伝承されているほか、京都の日題派からもたらされたオタカラと呼ばれる史料が伝えられており、その中に遺歯・遺髪・遺骨が含まれていることがわかった。

以上のような不受不施派や不受不施派から分かれた諸派の信仰について調査を実施し、その結果をもとに弾圧下信仰の様子を明らかにしたいと考える。

以上の各テーマを通して、備前・備中における仏教の民俗化の過程と民俗仏教の諸相について、以下の章で詳細に述べることにする。

【註】

(1) 五来重『日本仏教民俗学の構築』五来重著作集第一巻、法蔵館、二〇〇七年。

(2) 圭室文雄「岡山藩の寺社整理について」『明治大学人文科学研究所紀要』四〇、一九九六年。

(3) 永山卯三郎『岡山県通史』上、岡山県、一九三〇年。

(4) 『吉備考古』一五、一九三一年。『吉備考古』一六、一九三三年。

(5) 下出積與「報恩大師伝説考」下出積與編『日本史における民衆と宗教』所収、山川出版社、一九八九年。

(6) 達日出典『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版、一九九一年。

(7) 小林崇仁「吉野山の報恩法師」『現代密教』第一七号、二〇〇四年。

(8) 中川真弓「観音冥応集」と宝泉寺縁起―蓮体の備中における書写活動をめぐって―『詞林』四一、二〇〇七年。

(9) 難波俊成「報恩大師と備前四十八カ寺伝承」『岡山民俗特集号』岡山民俗学会、一九八一年。

(10) 中田利枝子「報恩大師の足跡」『中庄の歴史』六、中庄の歴史を語り継ぐ会、二〇一一年。

- (11) 竹田聰洲『民俗仏教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年。
- (12) 赤田光男「仏堂建立過程の一史料」『日本民俗学』七三、一九七一年。
- (13) 影山堯雄編『日蓮宗不受不施派の研究』立正大学仏教学会、一九五六年。
- (14) 宮崎英修『禁制不受不施派の研究』平等寺書店、一九五九年。
- (15) 相葉伸『不受不施的思想の史的展開』講談社、一九六一年。
- (16) 安藤精一『不受不施派農民の抵抗』清文堂、一九七六年。
- (17) ①長光徳和・妻鹿淳子編『日蓮宗不受不施派読史年表』開明書院、一九七八年。②長光徳和・妻鹿淳子編『久米右衛門派鍛冶屋庵(旧森末庵)文書』長光徳和、一九六六年。
- (18) 中務克己 史料調査報告「白川門流日題派の調査―幻の信徒を訪ねて」『岡山県史研究』一二、一九九〇年。
- (19) ①田中久美子「寺院における男女の役割と女性の信仰心の醸成―日蓮宗不受不施派を事例に」『福岡工業大学環境科学研究所報』三、二〇〇九年。②田中久美子「地域社会における仏教の需要とくらしの景観…日蓮宗不受不施派寺院を事例として」『民俗学論叢』二七、相模民俗学会、二〇一二年。
- (20) 内藤幹生「明治期における房総地方の日蓮宗不受不施派」『千葉県文書館』二五、二〇二〇年。

第一章 報恩大師伝承と備前四十八ヶ寺

岡山県南部にあたる備前国と備中国の東南部にある賀陽郡・都宇郡・窪屋郡には、報恩大師伝承を持つ寺院が多数存在する。備前と備中東南部は隣接する地域であり、一つの伝承圏を形成しているものと考ええる。

報恩大師が実際に活躍したのは奈良時代の大和であるとされるが、備前・備中の寺院では大和を大きくしのぐ数の伝承がみられ、報恩大師が庶民の信仰対象となっている。報恩大師伝承と報恩大師信仰の存在は備前・備中地域にみられる仏教民俗の大きな特徴といえることができる。この地域にみられる報恩大師伝承は複数の研究者によって考察されてきたほか、岡山では研究者に限らず多くの人が伝承を認識し関心をもっている。

筆者も備前・備中の仏教民俗について調査研究を行う中で多くの寺院が共有している報恩大師伝承に強い関心を持ち、情報の収集に努めてきた。近年、岡山県赤磐市穂崎でムラのなかに報恩大師が祀られ、毎年八月二十七日に「報恩さま」の祭りが行われていることを知り、現地調査を実施した。その結果、現代においても生きた報恩大師信仰が展開されていることを突き止めた。そこで報恩大師に対する庶民信仰の形成とともに、そこに至るまでの報恩大師伝承の展開についても考察し、備前・備中の報恩大師伝承と信仰の体系化を試みることにした。

備前・備中の報恩大師伝承は、①中世前期、②中世後期から近世初頭まで、③江戸時代の三つに分けることができると考える。①の時代には金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）をはじめとする天台宗寺院の優位性を示すものとして主張された。②の時代には寺院再建に関わる勧進に伴って伝承が拡大され、③の時代では藩など為政者に対して由緒の正しい寺院であることを認識してもらうほか、庶民に対して報恩大師伝承の存在を主張し、信仰心を獲得する目的があったと考える。報恩大師信仰については③の江戸時代中期以降になると、報恩大師によって開かれたとする備前四十八ヶ寺で巡礼が行われるようになり、報恩大師像が複数の寺院に設けられるようになるなど庶民が信仰するための環境が整うようになる。本章では時代ごとに報恩大師伝承を主張することの目的を明らかにするとともに、報恩大師信仰の実相を明らかにしたいと考える。

第一節 中世前期の伝承

はじめに

報恩大師の伝承は大和の子島寺（真言宗・高市郡高取町観覚寺）を中心に京都清水寺、高野山などに伝えられているほか、備前と備中の東南部、伊予の西山興隆寺（真言宗・愛媛県西条市丹原町）で確認されている。

報恩大師についてはすでに先学によっていくつかの研究が行われている。主に大和を中心とする地域の伝承については達日出典氏による研究があり、⁽¹⁾備前では報恩大師開基伝承を共有する備前四十八ヶ寺について、難波俊成氏の先行研究がある。⁽²⁾筆者は備前・備中における伝承の展開に関心をもち、その過程を明らかにしたいと考えている。

報恩大師については備前出生説と大和出生説があり、達氏は後者が有力であるとし、「備前系伝承は、後世において、ある目的のために意図的に作り上げられた伝承であると考えざるを得ない」と述べている。⁽³⁾また備前を中心とする地域の伝承は治承四年（一一八〇）の紀年銘をもつ『金山観音寺縁起』によって確立され、その後、報恩大師開基伝承を共有する備前四十八ヶ寺の成立などによって発展・拡大している様子が見受けられる。『金山観音寺縁起』には達氏が最も古い報恩大師伝承とする子島寺に伝わる縁起と共通する内容もみられることから、筆者は備前の報恩大師伝承は子島寺の伝承が、備前にもたらされたものと考ええる。本節では大和を中心とする地域から備前・備中への伝承の伝播について検討を行い、備前・備中にみられる南北朝期までの伝承の展開とその目的を明らかにしたい。

一 大和における報恩大師の伝承

大和の報恩大師伝承を考察した達氏が、もともと古くに成立したとする伝承が子島寺に伝わる縁起である。子島寺は現在、子島山観音院（真言宗・同高取町大字上子島）と子島山観覚寺（真言宗・奈良県高市郡高取町大字観覚寺）（写真1）の二寺がある。前者は報恩が創建した子島山寺の名残で、後者は子島山寺に入った真興により真言子島流の道場としてその寺域内に建てられたとされる。⁽⁴⁾

子島寺の縁起には『大日本仏教全書』所収の『子島山観覚寺縁起』とその付録である『子島山寺建立縁起大師伝』があり、達氏は後者をもっとも古くに成立した報恩大師伝承であるとし、その成立は報恩の没後百年前後としている。次に示すのが『子島山寺建立縁起大師伝』である。長文ではあるが後に形成される報恩大師伝承の基礎となることが考えられるため全文を記す。

右大師報恩大十禅〔考〕^考禅下恐脱師字、^考齡十五歳出家入道也。獨尋深山、常涉幽谷。

各心念二大悲觀音一。口誦二根本神呪一。練行之功聞二於四海一。威神之力光二於六合一。辞二謝闔里一。閑二居山河一。既及二于数十年一也。於レ是高野姬天皇天平勝宝四年壬辰十月八日。依二勅旨一加二持天皇御病一。於レ是未レ及二数返之呪。須臾之間御病消除。即天皇下二恩詔一曰。天皇詔旨勅命衆聞食宣。服^{〔考〕}服恐朕月来之間受レ病煩苦于今不。

^{〔考〕}恐有脱字而大師之呪力ヲ蒙テ病源之苦流ヲ絶。其驗ヲ見。昔時モ今時モ未レ有ニ如レ此

之者二也。今須令二得度一。唯大師之報恩。高天同^{〔考〕}同恐罔極。仍授二号報恩一也。殊

有レ所レ思寢殿一字及難空^{〔考〕}難空恐離宮等賜フト宣二天皇御命一。衆聞食宣。勅了而後

大師以二件物一宛二於大和国高市郡八多郷子島山之住侶庵室一。新而後弥入二深山一。苦修

練行。暫經二九ヶ年一。以二廃帝淡路天皇天平宝字四年庚子三月十一日一。還二来本山子

島神所一。以二去天平勝宝四年所レ賜寢寢殿宝物等一。而奉二為子国家一建二立伽藍一

院二字号三子島山寺一。法号南觀音寺。奉レ造二丈八尺檀像觀音菩薩一体七尺四寸大玉一。

延曆四年乙丑二^{〔考〕}一恐十一月十五日。依二勅旨一參二入於長岡空一^{〔考〕}空恐宮加

返二之間。九重地震。六返振動。則聖帝心恠。侍臣骨驚。不レ經二時日一無レ滿二呪返一。

大悲觀音放レ光現前。於レ是御病消除。既天皇下二恩詔^{〔考〕}語恐詔曰。天皇詔旨勅命衆

聞食宣。朕受レ病以後日月如レ無レ光。東西如レ失地。苦無レ比病罔極。而忽依二大師加

持二大悲觀音現二法身之体一。如レ雲如レ影放レ光現前。即病除愈。朕志子如レ慕レ母。苗如

レ沾レ雨。今以二一印面封戸并輿輦侍從者二而殊授二号修行大十禪師一。宜自レ今以後至二于

永代二大小法侶共可レ為二大師一者也宣二御命一。衆聞食宣。勅了而後大師出レ殿入レ房。于

レ時諸寺衆山智德。驗雨降雨。雲ノ如絲ノ如クナルヲ。随喜讚歎云。大師者是沙門之枢機。法

藏之棟梁也。威神之力往古無レ比。真言之驗当二今難レ窮。何況六十二見之中宜レ知二三

十三身之一一者也。我等法侶宜如二恩勅一為二永代之大師一也。其後大師不レ令レ知二於進

^{〔考〕}進恐近人。密還二本山一。天皇專乍驚下二勅命一令レ荷二鳳輿一追二尋本山一奉レ迎

二大師一。爰恐怖レ能二乘輿一。独身步行随二勅使一還參二於内裏一。後而後殊有二勅使二五二

品於大師親母二送二大師於子島山寺一也。時皇太子下二令旨一奉レ造二一丈六尺觀世音菩

薩像二体并左右脇士菩薩一。為二就^{〔考〕}就恐龍灯分抄二施二入上野国庄家一處也。其

後大師住侶加藍。始自二天平宝字四年歲次庚子二至二于延曆十四年歲次乙亥一。合三十

六ヶ年。如既以二件寺一付二属第七入室弟子延鎮修行大法師一。而後以二三月^{〔考〕}月恐同

延曆十四年歲次乙亥六月二十八日一遷化也。

達氏は『子島山寺建立緣起大師伝』は九世紀から一〇世紀に原型が成立したとし、その内容は一世紀から一二世紀に成立したとみられる『子島山觀覺寺緣起』の前半部分に引き継がれているとしている。^{〔6〕}その内容を次に示す。

和州高市郡子島山觀覺寺。報恩法師之開基也。其地以子島邑^一号子島寺^一也。報恩歲十五歲而離^レ家。三十而入^二吉野山^一。持^二觀音呪^一。而四五年之間早得^二靈感^一。天平勝宝四年帝不豫。詔^レ恩令^二加持^一。帝病即愈。桓武帝在^二長岡宮^一時。嬰^二沈痾^一。巫医萬方不^レ効。又詔^レ恩令^二加持^一。恩入^二宮中^一。持^二觀音大悲呪^一五十遍。而宮中大動。觀自在菩薩形^二於殿上^一。帝疾立愈。賞給甚厚。不^レ幾而潛反^レ山。帝詔^二内臣^一。昇^二鳳輦^一追^二迎于路^一。恩謝而不^レ乘。徒步而歸矣。天平宝字四年三月。和州高市郡子島神祠之畔建^二伽藍^一。安^二置一丈八尺觀音像及四天王像^一。号曰^二子島寺^一。今改為^二子島山^一事見^二于下^一。報恩之徒延鎮。繼^二師業^一而居^二此寺^一。宝龜九年四月八日。夢中告^レ鎮云。汝信^二觀音^一數年。自^レ是上。木津川上方有^二觀自在尊之靈地^一。到此所^一可^二住居^一云云。(中略)夢覺而不^レ知^二其人^一。鎮思惟。仏説曰。八月十八日觀音有縁之日也。然則觀音所^レ告也。則往^二木津川^一泝^レ流。一支流有^二金色之流^一。到^二其水源^一有^二瀧水^一。傍有^二草廬^一。白髮老翁坐^レ焉。鎮問。何人哉。翁曰。吾名行叡。雖^二補陀落之教主^一也。為^二度生^一分身而此來也。吾待^レ汝久而汝來焉。吾住^二此地^一七百歲。為^二下守^一護帝城^一利^中益衆生^上。口誦^二千果^一焉。汝可^レ住^二此地^一也。言終出行^二東方^一也。鎮住^二于此^一五年。于^レ時延暦二年。坂上田村麿自^二奈良^一出。到^二木津川東山^一而放^レ鷹。到^二鎮草庵^一而問^二其行法^一。鎮告^レ持^二觀音名号^一。阪氏信^二其行^一。且語^二其妻^一〈三善氏高子〉之病痾^一。請^レ鎮令^二加持^一。鎮令^二加持^一。其婦持^二觀音之名号^一。與^二加持之符^一。高子病患速愈。高子信悅而奇^一。附^二自宅^一。謂^二田村^一而成^二当寺之仏殿^一。然後延鎮草^二創洛東觀音寺^一。名^二清水寺^一。以^二子島山^一名^二南清水寺^一。鎮北遷之後。其徒相承而守^二此寺^一矣。

ここにも天平勝宝四年(七五二)に天皇の病を治したとあるから、この天皇が孝謙天皇であることが分かる。続いて桓武天皇の病を治したこと、天平宝字四年(七六〇)に子島神祠のほとりに子島寺を建立したことなど『子島山寺建立縁起大師伝』と共通した内容がみられる。その後には弟子の延鎮による京都清水寺草創の様子が記され、引用箇所以後には興福寺から子島寺に入り、後に觀覺寺を興して真言子島流の道場とした真興に関する内容が記されている。またこの引用箇所の前半部分については、元亨二年(一一三二)に虎関師鍊によって作成された『元亨釈書』にある「吉野山報恩」の項目に引き継がれていることがわかり、子島寺に伝わる二つの縁起をもとに作成されたものと考えられる。『元亨釈書』の内容は次の通りである。

釈報恩。十五歲離^レ家。三十入^二吉野山^一持^二觀世音呪^一。四五載間早得^二靈感^一。天平勝宝四年上不豫。勅^レ恩加持。帝疾乃瘳。時恩為^二沙弥^一。勅得度賜^二名報恩^一。辞反^二本山^一勤修益甚。桓武帝在^二長岡宮^一嬰^二沈痾^一。腹結如^レ纏^レ繩眼暗似^レ隔^レ縠。巫醫万方皆不^レ効。帝誓曰。仏法力痊^二朕疾^一朕願勤^二弘伝^一。不^レ然者仏法無^レ驗在^レ国何益。聴者震恐。

恩応^レ詔入^レ宮閉^レ目持^二根本呪^一五十遍。宮中大動。大悲菩薩顯^二形殿上^一。上疾立痊。上感激宣問曰。法師蘊^二何行業^一。対曰、久居^二深山^一誦^二觀自在根本呪^一。上起礼^レ恩給賞甚渥。不^レ幾潛反^二山上^一。遣^二内臣^一昇^二鳳輦^一追迎^中于路上。恩謝而不^レ乘徒步返^レ宮。初天平宝字四年三月恩於^二和州高市郡子嶋神祠畔^一建^二伽藍^一。安^二一丈八尺觀自在菩薩像及四天王像^一。号曰^二子嶋寺^一。覃^レ承^二桓武帝遇^一勅^二親族^一賜^二官祿^一。恩又受^二封戸^一。延暦十四年六月寂^⑧。

『元亨釈書』に記された報恩の記述は、近世の備前・備中で作成された縁起に引用されている^⑨。

報恩が三〇歳で入ったとされる吉野山にも伝承があり、鎌倉時代末期から室町時代初期にかけて成立したとされる『金峯山草創記』には次のようにある^⑩。

宝 塔 報恩法師建立。千手観音并二十八部衆安^二置之^一。桓武天皇御悩之時。諸寺

高僧失^レ験之刻。報恩法師加持力^一御悩忽平愈。仍諸寺高僧百余人捧^二二字^一云云^⑪

この記録から五来重氏は「報恩法師こそ、金峯山の開創者とすることができるとは、その伝が明らかでないのは、やはり無銘の優婆塞だったからであろう」と述べている^⑫。

二 真言子嶋流にみる子嶋寺から高野山への伝播

『覚鑊聖人傳法会談義打聞集』 又云真言宗談義聴聞集（以下『打聞集』）は興教大師覚鑊が平安末期の長承から康治（一一三二―一一四三）の頃に行った談義の内容を、弟子の聖応が筆記したものである。このなかにも報恩に関する記述がある。

報恩大師ハ、初メ剃髪ノ時、為^レ報^二釈迦ノ恩ヲ^一故ニ、吾^二ラバ名^一ク^二ト報恩ト^一云フ。祈親ハ究竟ノ美童トシテ、国主ナムドニ召サル。十八出家ス。為^メニ母ノ菩提ヲ祈^ガ一也。吾^二ラバ名^一ケ^二祈親ト^一、
（以下略）^⑬

ここでは報恩の名の由来について述べている。『子嶋山寺建立縁起大師伝』、『元亨釈書』などが、孝謙天皇の病を治した見返りに報恩の名を賜ったとしているのに対し、『打聞集』では「為^レ報^二釈迦ノ恩ヲ^一故ニ」という異なる説を示し、続けて祈親上人定誉について述べている。祈親は報恩大師伝承を有する子嶋寺で真興から子嶋流を伝授された人物で、追塩千尋氏はこの引用箇所にもみられる報恩と祈親について報恩は子嶋寺の開祖であり、覚鑊は子嶋寺を媒介にして祈親―報恩という連鎖を働かせたのだらうと述べている^⑭。つまり祈親によって子嶋寺と高野山を結ぶことができ、報恩大師伝承伝播の経路とみることができ

る。

また、『打聞集』では報恩の弟子とされる延鎮の清水寺創建に至る経緯にも触れている。清水寺へ、本へ報恩ノ弟子延珍、大師ニ被^ニレ^キ惡、山城ノ国ニ到^ニテ水ヲ飲^ムニ、如シニ甘露ノ一也。尋^ニテ水ヲ上ルニ、水上ヲ歩ミ、次ニ水源ニ登ルニ、有リニ三十計ノ僧一。タラノ木ヲ遶^リ御ス。汝何僧ゾト被^レル^レ仰セ。夜千手陀羅尼誦シテ坐ス。延珍自リレ本千手陀羅尼ノ持者也。故ニ問フニ其ノ由ヲ一。僧答テ云ク、我在^ル此ニ三百歳此ノ木ヲ遶^ル。汝亦遶^テレ此ヲ、千手ニ造テ、無間ノ衆生ヲ利益セヨト云テ、僧飛^テレ空ヲ去^ル。延珍遶^ルコト不^ザル^レ止数日、在^ニ左近衛助田村將軍一。將軍ノ女房産ノ後、頭ヲ立^テ病ム。為^ニレ藥ノ鹿ヲ求^ム。鹿不^ニ尋^テ得^レ還^ル。初メ郎等、清水寺ノ水ヲ飲ム。道心ヲコル。為^レ知亦飲メバ、亦発スニ道心ヲ一。郎等八人、吾ヲ合^テ九人、発スニ道心ヲ一。捨^テニ弓箭ヲ一、尋ヌ^レ源ヲ。源ニ僧アリ。僧ノ道心無^レ尽。速ニ汝等以^テレ水ヲ女房ニ令^シメヨ^レ飲マ。汝等公ニ仕^テ、此ノ木ヲ以^テ造^レトニ千手觀音ヲ一、取^テレ水ヲ還^ス。女房即時ニ病止ヌ。其ノ時奈良京ヲ、平安京ニ渡^ル。域渡^テ暇無シテ、不^レ造^ラニ堂仏ヲ一。檀越ノ女房、延珍ヲ請シテ、ツレテ還^ル山。時報恩大師、尋^ニテ延珍ヲ一、件ノ木ノ許ニ到^リ給ヌ。延珍此ノ木ノ許ヨト云テ、十一面觀音ニ造^リ給フ。延珍、檀越ツレテ行^キ見^レバ、十一面觀音ヲ造^リ給フ。クビ如何ント云テ怪メバ、報恩云ク、十一面觀音コソハヤレ、千手ヨトトク、帳ヲタレヨトノ給フ。女房ノ父、大納言、屋ヲ破^テ堂ニ立ツ。田村次ニ將門ヲウツ。延珍ニ約束シテ、征手ノ使ニ下^ル。陣ニ立^テ南無觀世音、並ニ延珍ト云バ勝ツ、征シ得^テ還^ル。国王賞ヲ賜フニ、將軍申^サク、非ズニ吾力ニ一。延珍ガ法力ナリ。彼ニ大師号ヲ給^ヘト云テ、延鎮大師ト云フ也。⁽¹⁶⁾

この記述は『子島山觀覺寺縁起』や『清水寺縁起』などの内容と類似している。『打聞集』にみられる報恩に関する伝承はこの二つであるが、報恩大師伝承が覺鑊によって語られていることは伝承の拡大を考える上で一つの重要な要素になると考える。高野山では正暦（九〇〇・九九五）の大火の後に、祈親が大勸進聖人として勸進聖の指揮にあた⁽¹⁷⁾った。五来重氏が初期高野聖に位置づける覺鑊は当時も依然として祈親以来の高野山復興に関わる勸進を進行しており、覺鑊は勸進聖たちの指導にあた⁽¹⁸⁾っていたのである。覺鑊らの説話を聞いた勸進聖らが各地で唱導を行い、数ある説話の中から報恩大師について語ることもあっただろう。覺鑊が報恩や延珍（延鎮）について語っていることは地方への伝播を考える上で重要な要素であり、考えられる伝播経路の一つとして指摘しておきたい。

三 伝承の伝播と備前・備中における報恩大師伝承の確立

備前・備中における報恩大師伝承の初見は金山寺（岡山市北区金山寺）（写真2）に伝わ

かなやまじ

る仁安三年（一一六八）の文書であり、その後『金山観音寺縁起⁽¹⁹⁾』がまとめられる。同縁起では子島寺に起源をもつ伝承に報恩の備前出生説や備前における弟子智久の伝承などが付与され、備前独自の報恩大師伝承として確立されている。同縁起は治承四年（一一八〇）の紀年銘をもつが、苅米一志氏は浦上則宗の花押を持つことなどから実際の筆写は明応五（六年（一四九六）一四九七）としている。しかしその内容の分析から延久以降の記事については『金山寺文書』の内容とも矛盾がないとし、治承四年の成立と考えて良いだろうとしている。さらに執筆の動機としては縁起の後半部分で述べられる治承二年三月五日に焼失した本堂再建のための勧進を指摘している⁽²⁰⁾。報恩に関する伝承についても『金山寺文書』にみられる報恩の伝承を分析し、仁安三（一一六八）年の文書（表1の1）から寿永二（一一八三）年の文書（表1の3）の間に伝承が脚色され、再構成された可能性は極めて高いとし、縁起にある治承四年という年記が、この間に位置することを指摘している⁽²¹⁾。

同縁起は一〇段に分けることができ、そのうち第一段から第四段までに報恩に関する記述がみられる。まずはその部分を見ておきたい。

備前国金山観音寺縁起

第一段 夫当寺者、孝^(マ)嫌^(マ) 天皇御宇天平勝宝元年、報恩大師蒙詔命、令建立靈場也、本尊者、大師自作千手観音、清水寺同木異体菩薩（草冠二つ）像也、寺号者、摸山称、則銘金山観音寺矣、大師尋其俗姓者、当国津高郡駅郷（国人用馬矢字）、波河村百姓野人子也、是則観音大悲之余、為济度群生、欲令宿胎女人之胞腹給之時、母堂其夜感靈夢云、漫々蒼海中有峨々高山、聳峯一片之紫雲々上有蓮華、沙門乘之、現忍辱容貞、出柔和之語示云、我是観音也、宿生汝胎中、可利群類、夢覺之後、雖成奇異之思惟、敢不語佗人、然後不經幾時日懷妊、自懷妊之後、異香滿室、紫雲聳軒、晝者見瑞相、夜者感靈夢、產生之時者、天蓋現虚空、大地頻振、初生之始表奇瑞、稚童之間靈異、口常念観音、身鎮崇観音、頭光忽然照蓬戸、身体繇然^(カ)拳空中、逐忘芥鷄之戲、習鷄距之跡、自其以降、出二親之茅室、逐出家之素懷畢、自出家之後者、大師為観音化身之間、一期專以大悲心呪為自行之勤、爰^(マ)孝^(マ)嫌^(マ) 天皇瘡病御悩之御時、被下宣旨、忝參禁中、大師以大悲心呪、主上之御瘡病^(マ)於奉落、于時御悩立所御平愈之間、依其御叡感、賜報恩大師諡号畢、

第二段 其後、大師登備中州日差山、建立一寺、付属一人弟子、所謂、大師寄宿備中国津坂駅子住宅給、共宅中^(マ)有十二三計童子、此童子放頭光、照大師、々々見彼光、成奇妙之思、問家主駅子云、此童子者汝子歟、駅子答云、而也^(マ)、大師亦云、此童子者非直人也、於我現奇瑞、汝者見哉否、駅子云、我不見、又大師云、此童子、汝我^(マ)令与、於日差山令建立一寺、欲之付属稚童、于時駅子、依大師之約諾、奉付童子於大師畢、其後童子給大師、長大之後遂出家之素懷畢、其諱（号智久）、即大師如命建立日差山、付属

智久之間、於彼山居住年來之処、其御代国王有盲目御惱、于時天下降宣旨、彼尋求有驗高德僧侶之刻、備中州日差山居住有驗之僧侶候之由官奏云々、即立勅使、下詔命被召之、智久随召、即与勅使共上京、道之間、对勅使示不思議之瑞相、勅使自拝見之、天奏此由、依宣旨、遂智久参鳳闕、則於南殿示奇瑞現靈瑞之間、公卿感嘆、称希前代、于時主上遙聞食瑞相之不思議、嗅異香之芬馥、智久於御前近被召、欲令有觀覽時、盲目御眼忽然開、眼睛令清明云々、其時主上御觀感之余、可令行勸賞、宣旨云、汝何物子、沙門申云、備中州馭子馭護子候申上、御門即被聞食之、汝心正直清浄也、可下賜大師号心浄大師云々、其後環日差山逝畢、其廟在日差山也、乙大師廟者是也、

第三段 次報恩大師渡兒島之藤戸^{当州}、造一寺畢、次同島登瑜伽山、建立寺畢、其後於大和国高市郡矢田郷造立一寺、名兒島寺、其故者、大師自当州兒島、大和国^ニ渡給、建立此寺故、爾名也、此兒島寺^ヲハ報恩大師御弟子一百余人門徒之中、第三入室弟子延珍禪師^七付属畢、然而後、大師兒島寺、延暦十四年六月廿八日遷化給畢、

第四段 本尊者、大師自取斧令造立、安置清水寺觀音同木異体之千手觀音也、大師記云、当寺自作觀音昔者生身菩薩（草冠二つ）也、此御衣木之残者、有利衆生機応之所者、忽然生木現、可被作觀音之像、其時機到来者、我弟子經五十余廻星霜、感瑞相、造立一寺、同可安置千手之像、譬如一月浮万池云々、謹檢旧記、当山建立者天平勝宝元年、清水寺草創者延暦十七年也、時代首尾及五十余廻之間、符号記文畢、其故者、大師弟子延珍禪師夢見、自淀河金色之水三筋流、上^{サカ}サマへ上ル、禪師付水、即上給、遙上谷上々見、此平石上有化人、又立木一本生^{タリ}、件金色水此^ニシテ止マル、化人云、汝此所^ニ可造立一寺云々、即隱畢、夢覺後、廻思慮、如夢臨淀河見、此金色水上^{サマニ}上ル、又如夢谷^ニ有大石、亦立木生^{タリ}、又化人如夢見^{ヘテ}、隱了、因茲、禪師語將軍等四人之壇越、建立清水寺、即以其立木為御衣木、奉造立彼本尊之故、当寺本尊与清水寺觀音同木異体之条炳焉也、然者清水寺者、金山觀音寺祖師御門徒建立也、後三条院御宇延久元年五月日、当寺俄炎上之間、不及奉取出本尊、空本堂成灰燼之間、寺僧等ヲ始トシテ近隣道俗、國中緇素、形者雖替、心者同歎之、經日之處、或夜一和尚夢見、觀音不焼給、自灰燼中放光出現給、夢覺、成奇特之思、灰燼掃除之處、灰燼之中、金色聖容赫奕坐給、此時和尚拝見之、流隨喜之涙、凝渴仰之誠、本堂建立之間者、造借葺、構仏壇、奉安置之、希代不思議也、⁽²²⁾

第一段では、金山寺は孝謙天皇の詔により報恩大師によって創建されたこと、本尊は清水寺の觀音と同木異体であること、報恩は「当国（備前国）津高郡馭郷波河村百姓」の子であることが記されている。さらに報恩の名前の由来については『子島山寺建立縁起大師伝』と同様に孝謙天皇の病を治した見返りに賜ったことが記されている。つまり子島寺系の伝承に、独自の備前出生説が付与されていることがわかる。

第二段では備中の日差山（現倉敷市山地）^{ひさしやま}に一寺を建立したことが記されている。第三段では、備前国の藤戸（現倉敷市藤戸）と瑜伽山（現倉敷市児島由加）にそれぞれ一寺を建立し、大和国へ渡り高市郡矢田郷に児島寺（子島寺）を建立したこと、この児島寺を弟子の延珍に譲り、延暦一四年（七九五）六月二八日に遷化したことが記されている。ここに記された没年月日も『子島山寺建立縁起大師伝』と一致している。第四段では、第一段に記された清水寺の観音と金山寺の本尊が同木異体であることの経緯について述べている。

天平勝宝四年に孝謙天皇（高野姫天皇）の病を治し、報恩の名を賜ったこと、児島寺（子島寺）を建立し、弟子の延珍（延鎮）に与え、延暦一四年六月二八日に遷化したことなどは『子島山寺建立縁起大師伝』と、延珍による清水寺建立については『子島山観覚寺縁起』と共通している。また『金山観音寺縁起』独自の伝承としては報恩大師の備前出生説や、備前・備中における弟子、智久の伝承、また金山寺と清水寺の本尊が同木異体であることなどがあげられる。

延鎮による清水寺創建の経緯を述べた史料は『子島山観覚寺縁起』や『清水寺縁起』の他にもいくつか存在しており、達氏はこれらの伝承を大和系（子島山寺系と興福寺・高野山系にわかれる）と清水寺系に分けている。⁽²³⁾『金山観音寺縁起』にみられる内容がどちらの系統に分類できるか判断するのは難しいが、同縁起では延鎮が化人に遭遇し、清水寺本尊の原木を得た場所を「淀川」を遡った場所としている。この河川を淀川としているのは清水寺系の『清水寺縁起』⁽²⁴⁾と『今昔物語集』巻一にみられる「田村將軍始建清水寺語第卅二」⁽²⁵⁾で、大和系の『子島山観覚寺縁起』には木津川と記されている。「淀川」という河川の名称については、清水寺系の縁起と共通点がみられることになる。⁽²⁶⁾また延鎮の名を「延珍」としている点は、『打聞集』と共通している。以上のことから縁起の作成にあたって大和など中央に伝わる史料を用いて報恩大師伝承の確認が行われたものと考ええる。

次に備前における報恩の弟子、智久に関する記述について検討を行いたい。先に示した『金山観音寺縁起』の第二段には、報恩の弟子とされる智久の行状が記されているが、第六段にも智久が登場する。その一文は次の通りである。

抑当寺為体、孤峯高聳、曠野四廻、野火焼寺、荒風払地之砌也、然間、寺僧等愁仏閣僧房之灰燼而送数廻星霜歳月之处。自寺中南方去十五町、有往古山寺之旧跡（号智地寺）、是又大師御弟子智久禅师建立之古所也、当所之為体、峯⁽²⁷⁾ハ名三古峰、其形如三古也、

（後略）

ここにある「三古峰」とは現在金山寺がある金山の山頂に当たると思われ、ここにかつて智久が創建した智地寺があったという。智久の伝承は第二段に登場する日差山の日差寺（倉敷市山地）にもある。このことについて中川真弓氏が興味深い指摘をしている。中川氏は『金

山観音寺縁起』と日差山の法灯を継ぐとされる宝泉寺（真言宗・倉敷市矢部）に伝わる『宝泉寺縁起』の分析を行っている。『宝泉寺縁起』が『金山観音寺縁起』を参照していることから『金山観音寺縁起』の成立が先であったとした上で、その『金山観音寺縁起』も元来は日差山に伝わる縁起を取り入れて作られた可能性を指摘している⁽²⁸⁾。

また、苅米氏は報恩と智久の性格の類似を指摘している。報恩は備前国津高郡駅郷の生まれ、智久は備前国津坂駅の駅吏の子で共に駅家に関係があること、両者は共に幼いころから異常な能力を発揮し、天皇の病を治した山林修行者であることから、本来は一人の僧侶に関する伝承であったものを、意図的に子弟の事績として分けた可能性を指摘している⁽²⁹⁾。さらに、実際に備前・備中の山岳寺院で知られていたのは智久であり、そのために「報恩は備中の日差山を智久に譲った」「金山寺が移転した先は智久の開いた智地寺であった」と語らなければならなかったとし、備前・備中においては智久の方が現実性の高い存在であり、その人物を分割することで縁起における智久と報恩の類似性が生まれたとしている⁽³⁰⁾。

つまり、備前・備中にはもともと智久の伝承があった。そこに都で活躍した高僧である報恩の伝承を導入することで寺の権威付けをはかった。また智久の伝承を分割して報恩の伝承と合わせることで報恩大師備前出生説を形成し、備前・備中独自の伝承を確立したことになるだろう。『金山観音寺縁起』の作成にあたっては子島寺や清水寺の縁起と共通する部分がみられるため、これらの史料をもとに報恩大師伝承の形成が行われたものと考ええる。

四 平安末期から南北朝期までの伝承

これまでに大和の子島寺を起源とする報恩大師伝承が備前・備中に伝えられ、独自の伝承として確立されたことが明らかになった。その後中世末期から近世初頭にかけて報恩大師伝承を共有する備前四十八ヶ寺が成立するなど、伝承が拡大した様子が窺える。そこでまずは南北朝期までの伝承を確認したい。

備前・備中の伝承圏において南北朝期までに報恩の名が記された古文書を有する寺院は、備前に位置する金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）と弘法寺（真言宗・瀬戸内市牛窓町千手）のみである。表1は両寺に伝わる報恩大師に関する記述が登場する平安末期から南北朝期までの古文書の一覧である。

備前国における報恩の初見が仁安三年の『金山寺文書』（表1の1）であり、そこでは本尊については観音の霊地であることのみを述べている。寿永二年（一一八三）以降の文書（表1の3・4・5・6）には京都清水寺の観音と金山寺の本尊が同木異体であること、さらに

元暦二年（一一八五）以降の文書（表1の4・5・6・8）には報恩大師自作の霊像であることが加えられている。報恩大師の名がみられる南北朝期までの『金山寺文書』は大部分が国衙などに宛てられた解状であり、由緒の確かな寺であることを主張し為政者に対して庇護を求めたものである。金山寺の報恩大師伝承については、応安三年（一三七〇）の文書（表1の15）を最後にしばらく確認できなくなる。その後は明応期に筆写されたとみられる『金山観音寺縁起』があり、さらに天和三年（一六八三）に作成された『金山寺縁起⁽³¹⁾』で再び報恩の名が登場する。

つぎに、金山寺に次いで古くから報恩の伝承を有する弘法寺の伝承について検討したい。弘法寺では、建長三年（一二五一）の文書（表1の10）に初めて報恩の名が登場し、金山寺同様に観音の霊場であることを述べている。この文書は弘法寺の位置する豊原庄政所から千手寺（弘法寺）住僧に宛てられた下文で、検断使の不入権を与えたものである。文永元年（一二六四）の文書（表1の11）は寺院内で起こった不祥事に基づく契状であり、それぞれ冒頭で報恩大師の霊場であることを主張している。

表1の12は元亨三年（一二三三）正月四日に堂塔が焼失したため、嘉暦二年（一二二七）に伽藍の復興を願い出るために作成されたものである。ここでも報恩大師建立であること、大師自作の千手観音が本尊であることが記され、金山寺から影響を受けている様子が窺える。また同じ文書に、元亨三年三月に「千手寺住侶等」によって作成された『勸進帳』（表1の12）の記述が含まれており、勸進に伴って報恩大師伝承を主張していることがわかる⁽³²⁾。弘法寺では応安七年（一二七四）を最後に、近世になるまで報恩大師伝承を含んだ記録史料は確認できなくなる。現在の弘法寺は真言宗であるが、中世には天台宗であった⁽³³⁾。以上のように南北朝期までの備前・備中においては、二か寺で報恩の伝承を確認することができた。この時代には国衙や荘園の政所などに対して寺の由緒を示して保護を求めているほか、『金山観音寺縁起』や弘法寺における勸進帳の存在から、勸進に伴い報恩大師開基伝承を主張したことが分かる。

おわりに

本節では大和における報恩大師伝承の中心地である子島寺から高野山へ伝承が伝播し、そこから地方へ拡大した可能性があることを述べたほか、備前・備中における伝承の中心である『備前金山観音寺縁起』にみられる内容の考察を行った。また荻米氏や中川氏による先行研究により、備前においては智久の伝承が先に存在しており、ここに報恩の伝承を付与する

ことで備前・備中独自の報恩大師伝承が形成された可能性が指摘されている。

都で活躍した報恩の伝承を導入することで寺の権威付けが図られたと考えられること、また勧進に伴って報恩大師伝承が主張されていることがわかった。

このように金山寺で備前・備中独自の伝承として確立され、天台寺院間で伝承が拡大したものと考えられる。中世末期には報恩大師伝承を共有する備前四十八ヶ寺が成立するなど、さらなる発展と広がりを見せる。以後備前・備中における伝承の展開についてもその実相に迫っていきたい。

(本節は『奈良学研究』二二号(二〇二〇年二月)に掲載した「報恩大師伝承の伝播に関する試論―大和から備前への伝播と備前における伝承の確立―」を加筆修正したものである。)

【註】

(1) 達日出典『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版、一九九一年。

(2) 難波俊成「報恩大師と備前四十八ヶ寺伝承」『岡山民俗文化論集』岡山民俗学会、一九八一年。

(3) 前掲(1)。

(4) 前掲(1)、二二八頁。

(5) 鈴木学術財団『大日本仏教全書』第六八巻寺誌部三、講談社、一九七二年、二七〇～二七一頁。

(6) 前掲(1)二三七頁。

(7) 鈴木学術財団『大日本仏教全書』第六八巻寺誌部三、講談社、一九七二年、二六九頁。

(8) 鈴木学術財団『大日本仏教全書』第六二巻史伝部一、講談社、一九七二年、一一三頁『元亨釈書』。

(9) 『遍光山千手寺縁起之記』都窪郡教育会『都窪郡史』(全)、名著出版、一九六九年、七四一～七四四頁。元禄四年(一六九二)に著された『遍光山千手寺縁起之記』の冒頭部分は『元亨釈書』をもとに作成されたことか窺える。

(10) 宮家準編『修験道章疏解題』国書刊行会、二〇〇〇年、二九五頁。

(11) 日本大蔵経編纂会『修験道章疏』第三巻、国書刊行会、二〇〇〇年、三六四頁。

(12) 五来重『修験道霊山の歴史と信仰』五来重著作集第六巻、法蔵館、二〇〇八年、一〇一頁。

(13) 『興教大師全集』世相軒、一九三五年、四四五頁。

(14) 塚本善隆『望月仏教大辞典』第三巻、世界聖典刊行協会、二〇二四頁。

- (15) 追塩千尋「子島寺真興の宗教的環境―摂関期南都系仏教の動向に関する一考察―」『仏教史学研究』三四卷、仏教史学会、一九九一年、四八頁。
- (16) 前掲(13)、四四八～四四九頁。
- (17) 五来重『高野聖』角川学芸出版、二〇一一年、一〇四頁。
- (18) 同前、一一八頁。
- (19) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、二五頁。
- (20) 苅米一志『備前金山観音寺縁起の成立』『年報赤松氏研究』第五号赤松氏研究会、二〇一二年、五頁。
- (21) 苅米一志『中世初期における備前国衙と天台寺院―播磨国との比較において―』『吉備地方文化研究』第二二号、就実大学吉備地方文化研究所、二〇一一年、六二～六三頁。
- (22) 前掲(19)、二五～二七頁。
- (23) 前掲(1)。
- (24) 『大日本仏教全書』大日本仏教全書刊行会、一九三二年、二一九頁。
- (25) 『新訂増補国史大系』一七卷、吉川弘文館、一九六六年、五八～六一頁。
- (26) 木津川も淀川水系の河川であり、京都府大山崎町の付近で宇治川・桂川と合流し淀川となる。つまり淀川を遡ると木津川に至ることができるため、同一の河川であると見る事ができる。
- (27) 前掲(19)、二八頁。
- (28) 中川真弓『『観音冥応集』と宝泉寺縁起―蓮体の備中における書写活動をめぐって―』『詞林』第四一号、二〇〇七年、六二頁。
- (29) 前掲(20)、一五頁。
- (30) 同前、一九頁。
- (31) 岡山市史編集委員会『岡山市史』古代編、岡山市役所、一九六二年。
- (32) 表1の11では天平宝字年中(七五七～七六五)の草創であるとしているが、表1の12では「天智天皇御宇」(六六八～六七二)としながらも「四十八代之天朝」⁽³⁶⁾(称徳天皇・七六四～七七〇)とし、さらには文武天皇の時代である「大宝年中起立」(七〇一～七〇四)としたうえで報恩大師の建立であるとするなど、多くの矛盾を含んでいるが、報恩大師の開基であり、勧進に伴い由緒の正しい寺であることを主張しようとする様子が表れている。第四八代は孝謙天皇が重祚した称徳天皇である。
- (33) 關信子『千手山弘法寺踰供養』千手山弘法寺踰供養推進委員会、二〇〇五年、一六頁。弘法寺が真言宗になった事がわかるのは寛文五(一六六五)年になってからの事である

表 1 備前国における平安末期から南北朝期の報恩大師伝承

番号	年記	寺院名	表 題	報恩に関する記述内容
1	仁安3 (1168)	金山寺 ※1	金山寺住僧等解并備前国目代外題	金山寺者報恩大師建立觀音靈驗地也、
2	治承4 (1180)		浦上則宗袖判備前国金山觀音寺縁起写「金山觀音寺縁起」 (明成5・6年頃(1496～97)の筆写)	・報恩自作の千手觀音、清水寺觀音と同木異体 ・備前国出生説初見 ・日差山、藤戸寺、瑜伽山、大和国児島寺登場 ・報恩の弟子・智久(心浄大師・乙大師)初見
3	寿永2 (1183)		金山寺住僧等解并備前国司外題	当寺者報恩大師建立千手千眼靈地也、所謂清水寺觀音同木異体之靈像也、
4	元暦2 (1185)		金山寺住僧等解并備前国司外題	右当寺者、是報恩大師建立千手觀音靈場也、所謂清水寺觀音同木異体金容、恩大師手自所造靈像也、
5	建久3 (1192)		金山寺住僧等解并備前国司外題	当山者は報恩大師建立千手觀音靈場也、所謂清水寺觀音同木異体金容、即大師自作尊像、
6	建久4 (1193)		金山寺住僧等解并東大寺重源外題	云道場者、報恩大師建立也、言本尊者、大悲千手也、是清水寺觀音同木異体の尊像也、即大師方便巧手自作之像也
7	建保3 (1215)		備前国留守所下文	右当寺者、報恩大師之建立、觀自在尊之靈地也、
8	貞応元 (1222)		金山寺住僧等解并六波羅探題北条泰時外題	当山者は報恩大師建立、千手觀音現所也、取大師自斧、顯觀音靈像、
10	建長3 (1251)		備前国豊原庄政所下文	右当寺者報恩大師之建立地、觀音薩埵之靈驗所也、
11	文永元 (1264)		弘法寺衆徒等契状	右元者、当寺四至之内者大師結界之地、宝字年中之草創也、 『勸進帳』
12	元亨3 (1323)		弘法寺 ※2	天智天皇御宇、曾送四十八代之天朝矣、思其草創者、大宝年中起立、屢迎六百余歳之星霜焉、盖是報恩大師之建立、俗呼曰千手寺、
13	嘉暦2 (1327)			報恩大師御建立備前国邑久郷内千手山弘法寺衆徒等 誠皇諒恐謹言(中略)右謹考旧記、当寺者是大師結界之靈岨、宝字年中草創、既送六百余廻之星霜、復涉四十八代之天朝、本尊者千手千眼靈像、大師自作古仏、利益無双本尊者也、
14	元弘3 (1333)	弘法寺衆徒等申伏案	天智天皇之御宇宝字年中之草創、報恩大師之建立、嚴重殊勝之靈場也、本尊者是千手千眼満月之尊容、	
15	応安3 (1370)	※1 沙弥了宗置文	右於当寺者、孝謙天皇勅願寺、將軍家之御祈禱所、本尊是法恩大師御自作千手千眼也、	
16	応安7 (1374)	※2 弘法寺免田畠注文	右当寺者天智天皇之御宇宝字年中之草創、報恩大師之建立嚴重殊勝之靈場也、本尊者千手千眼満月之尊容、	
※1『金山寺文書』。『岡山県古文書集』第2輯所収				
※2『弘法寺文書』。『岡山県古文書集』第3輯所収				
※3元亨3年の文書は嘉暦2年の文書に付属している。				

瀬戸・津守

い。



写真 2 金山寺



写真 1 子島山観覚寺

第二節 中世後期から近世初期の伝承

はじめに

前節で備前・備中の報恩大師伝承は『金山観音寺縁起』（治承四・一一八〇）で独自の伝承として確立されたことを述べた。その後、中世末期から近世初頭にかけて成立したとみられる備前四十八ヶ寺は報恩大師によって開かれたという伝承があり、この寺院集団の成立とともに報恩大師伝承が拡大した様子が窺える。

備前四十八ヶ寺に関する先行研究としては、難波俊成氏と中田利枝子氏の研究があり、両氏の論考にその後の研究や筆者の見解を加え考察を進めたいと考える。また中世後期の報恩大師伝承の展開についても検討したい。

一 備前四十八ヶ寺の成立

金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）は、備前・備中最古の報恩大師伝承を有する寺院であり、報恩大師が創建した備前四十八ヶ寺の惣本寺とされる。同寺には治承四年の紀年銘をもつ『金山観音寺縁起』があるが、この縁起には備前四十八ヶ寺に関する記述はみられない。備前四十八ヶ寺の初見は禅光寺（安住院・真言宗・岡山市中区国富）に伝わる天正一九年（一五九一）の『勧進帳』である。その内容は次の通りである。

当寺者孝謙天皇御願報恩大師開基也
倩尋其元由天平勝宝候使大師祈玉体之不祥於是景雲現于空示悉地也
瑞遂則三昧法験惣持妙薬速感速応御悩除愈貴体平安叡信之余命於官吏建立四十八箇所之精舍
当山是其一也厥後大師以補陀落界之靈木刻千手千眼之龍像安置之本堂^①

この『勧進帳』は禅光寺本堂の再興に伴って作成されたものであり、ここで孝謙天皇の命により報恩が創建した備前四十八ヶ寺の一つであることが主張されている。また禅光寺の本尊は報恩が自ら刻んだ千手観音であるとしていることから、『金山観音寺縁起』の影響を受けて形成されたものであることが明らかである。

備前四十八ヶ寺を構成する寺院は、『金山寺文書』のうち、文禄四年（一五九五）の『備前四拾八ヶ寺領并分国大社領目録』に含まれる「備前四拾八箇寺書立之事」^②で初めて知ることができる。このなかには「四十八箇寺之外御寄附寺領之事」「御分国大社之事」などもあり、合わせて三千石の寺社領が金山寺を通じて宇喜多氏領内の寺社へ分配されたことが

記されていて、当時の金山寺の立場がよく表れている。

表1は「備前国四拾八箇寺書立之事」に記された構成寺院とそれぞれに分配された石高を表にしたものである。同史料は備前四十八ヶ寺の初見である天正一九年の禅光寺に伝わる『勸進帳』から四年後に作成された史料である。図1は難波俊成氏作成の備前四十八ヶ寺分布図を筆者が「備前国四拾八箇寺書立之事」の記載順の番号に改めたものである。⁽³⁾

次の史料としては長楽寺（天台宗・和気町田土・現在は和気町矢田）（写真1）の『杉沢山長楽寺縁起』がある。この縁起は金山寺を再興した豪円の弟子、澄運が慶長一二年（一六〇七）に著したもので、備前四十八ヶ寺については次のように記されている。（〈内は割注〉）

夫、当山者孝謙天皇為御勅願、報恩大師（本州津高郡波河村ノ生^レ玉^フ民家^ニ、然^レトモ本非^ニ凡人^ニ、祈子^ニテ観音ノ変作^{ナリシ}故、其名天下^ニ無^レ隠、帝ノ御悩ノ時召^レニ大内^ニ、加持^シ玉^フニ御悩忽^チ止^ミ御乎復^ニ御成リノ時御褒美有^下任^{スト}ニ師意□^ニ勅命上、即奉^レ詔ヲ四十八ヶノ寺院御建立^{アリ}、天平勝宝年中ノ御開基也、為^ニ顕密兼備之道場^一、表^シニ四十八願之其^一ヲ、為^ニ千手擁護ノ靈地^ト、安^ニ置^ス天下泰平ノ靈像^ヲ、⁽⁴⁾

この縁起も『金山観音寺縁起』の内容に四十八ヶ寺の一つであることを付け加えて作成されている。備前四十八ヶ寺が成立した時点で、このような伝承の共有が図られたものと推測する。

三 中世後期の備前四十八ヶ寺と豪円

備前四十八ヶ寺成立の背後には、伯耆大山寺を出身とする豪円の動きが垣間見える。豪円（円智）は伯耆国汗入郡寺内村に生まれ、七才で伯耆大山寺に入った後、永禄四年（一五六一）には比叡山東塔にある西谷地福院の住侶となり大山寺を兼務した。その後は荒廃した大山寺を再興し、永禄一一～一二（一五六八～一五六九）頃に備前金山寺に入ったとされる。同寺においても松田氏の焼き討ちによって焼失した伽藍を再興するために、宇喜多直家の庇護を受け天正三年（一五七五）に本堂の再興を果たしている。その後、比叡山に戻り織田信長によって焼かれた伽藍を再興し、後に僧正となり豪円を名乗るようになるが、慶長一六年（一六一一）には大山寺と金山寺に巡錫し、その途中金山寺で遷化している。⁽⁵⁾

金山寺の焼失と再興については『金山寺縁起』に次のように記されている。（注の部分）は、『岡山市史』にあるものをそのまま引用した。筆者によるものではない。）

一、弘治年中津高郡主松田将監当寺可改不受不施日蓮宗之由、寺僧不順之、寺院ニ放火

焼亡此節靈宝等紛失、同年同日ニ吉備津宮茂焼払。(注、吉備津宮は備前の吉備津宮)

一、天正年中国守浮田直家公從沼ノ城岡山今之時御在城御築之時、当山観音江御立願、依御願成就如先規寺領五千九百石余御寄附、国中寺領ニ配当、其上当山本堂並坊中屋敷今之地へ引移給。⁽⁶⁾

この記述から松田氏によつて備前吉備津宮(現吉備津彦神社・岡山市北区一之宮)とともに金山寺が焼き払われたこと、その後宇喜多直家によつて現在の場合へ境内が引き移されたことが記されている。宇喜多直家による再興については、豪円が著した天正三年の『遍照院中興縁起』には、天正二年正月に着工し、翌年には一寺が完成したことや宇喜多直家兄弟と豪円が親密な関係を築いていたことが記されている。その部分を次に示す。

(前略) 是以天正式年^{甲戌}正月月中旬比、祈天道創一草、礼地神催一簣、心思仏家、手取世鍬、口唱仏語、身崩盤石、感仏陀処覺大石自動、加神力処知山谷自平、加之、吉事追日重、靈驗追年嚴、然同三年^{丁亥}終開四神相応地形、前満一寺建立願海、(中略)就中旦那三宅朝臣直家宇喜多和泉守、同舍弟忠家、願人当時院主法印円智、師檀既如水魚相応、満諸願、俗出全如水乳真符、治国家、弥武運増長要路、倍万民与樂指南、又者天長地久靈瑞、御願円満感通也⁽⁷⁾(後略)

また備前四十八ヶ寺のなかには、豪円によつて再興されたとする伝承を有する寺院がいくつかある。先に示した『杉沢山長楽寺縁起』には、「文禄年中我師比叡山探題僧正豪円来ニ金山寺^ニ、処々ノ興^ニ、復シ^シ廢寺^ヲ一、当山^ヲ命^ス予再興^{セヨト}」⁽⁸⁾とあり、縁起を著した澄運に対して豪円が長楽寺の再興を命じたことが記されている。このほかにも口伝ではあるが、大賀島寺(天台宗・瀬戸内市邑久町豊原)にも伝承があり、「元龜元年本堂・鎮守堂・仁王門等炎上、慶長元年正月円智僧正其復興に当ると伝う」⁽⁹⁾というものである。同寺は宇喜多氏の菩提寺とされている。また『瀬戸町誌』によると願興寺(天台宗・岡山市東区瀬戸町肩脊)には元禄四年(一六九一)に著わされた『備之前州磐梨郡中津山願興寺記』があり、「天正年間(一五七三〜一五九二)、本堂が倒壊したため本尊を僧舎に移した。堂塔は荒れるに任せていたが、文禄・慶長のころ豪円僧正によつて堂宇の修復がなされた」という内容が記されている⁽¹⁰⁾。いずれも備前四十八ヶ寺を構成する寺院であり、豪円によつて構成寺院の再興が行われたことは明らかである。

次に備前四十八ヶ寺の成立時期と形成された目的について考えてみたい。難波俊成氏は備前四十八ヶ寺の結集時期について論じており、金山寺本堂が再建された天正三年から『備前国四拾八ヶ寺領并分国中大社領目録』が作成された文禄四年までの二〇年間にまとまったのではないかとしたうえで、次のように述べている。

金山寺としては、国中の寺院を支配下におくとともに、特に法類を同じくする寺院を

結集させ、他宗寺院よりも、より上の地位と權益を確保するために。各寺の開基伝承はともあれ、一律に天平勝宝元年報恩大師開基と、金山寺本尊で報恩大師自作、そして京都清水寺観音と同木異体の靈驗観音を前面に出し、ここに結集した寺院も同じく本尊を観音に統一させて、「これ蓋大師は観音の化身にてまします故に、本師阿弥陀仏の本願を表示し給ふなり」と『阿弥陀經』にみえる四十八願教説に基づき、天台宗寺院のみによる観音信仰の寺院郡、「備前四十八カ寺」を構成したのであった。⁽¹²⁾

つまり金山寺が豪円の影響下にある時期に、天台宗寺院によって結集したという。江戸期以降の備前四十八ヶ寺には真言宗と日蓮宗の寺院も含まれるが、安養寺(天台宗・和気町)の寺蔵文書のうち、天和四年(一六八四)三月二六日の「和気郡昭光山安養寺由来書上事」に「天台宗四十八ヶ寺内」とあることと、寛政から享和(一七八九〜一八〇四)の頃に成立したとされる岡山藩の総合的な資料集『吉備温故秘録』の中にある四十八ヶ寺の項には、構成寺院の内天台宗以外の寺院について「後真言宗に改宗」、「後日蓮宗に改宗」と記してあること等を根拠として示している。⁽¹³⁾

現在真言宗となっている弘法寺や静円寺(瀬戸内市邑久町本庄)、真言宗の廃寺である石蓮寺跡(赤磐市石蓮寺)、満願寺跡(備前市吉永町福満)、善興寺跡(瀬戸内市邑久町福中)などには、日吉神社が祀られている。ほかに天台宗である金山寺、余慶寺(瀬戸内市邑久町北島)、大賀島寺(瀬戸内市邑久町豊原)、安養寺(岡山市中区賞田)、浄土寺(岡山市中区湯迫)などでも日吉神社が祀られている。このように真言寺院で日吉神社が祀られているということは、それらの寺院がかつては天台宗であったことを物語っている。このことから構成寺院がかつては天台宗であった可能性が高いと考える。

中田利枝子氏は備前四十八ヶ寺について、成就寺(岡山市北区建部町富沢)が一六世紀中ごろには日蓮宗に改宗していること、安住院(禅光寺)が一五世紀半ばには真言宗であったと断定できること、福生寺(備前市大内)を中興した良全・良忠が東寺の僧であるため、真言への改宗は永禄(一五五八〜一五七〇)以前に遡ることなどを示し、文禄四年の時点ではすでに天台宗以外の宗派も含まれているとしている。さらに『備前国四拾八ヶ寺領并分国中大社領目録』(文禄四年)のなかに「備前国四拾八箇寺」と「四十八箇寺之外」が区別されており、四十八ヶ寺に含まれる寺院であっても全三〇〇〇石の内、一〇石しか分配されない寺院がある一方で「四十八箇寺之外」として書き上げられた寺院にも大雲寺(浄土宗・岡山市北区表町)が二〇〇石、蓮昌寺(日蓮宗・岡山市北区田町)が七〇石など、優遇された寺院もみられることから、宇喜多直家の篤い帰依を受けた金山寺豪円が、宇喜多氏の重んじる寺院の中から、古くは天台宗であった寺院を特別扱いするために選んだ可能性を指摘している。⁽¹⁴⁾

難波氏が結集の時点ですべてが天台宗であるとしているのに対し、中田氏は古くは天台宗であった寺院を選んだとしている。改宗の時期について考えに差があるものの、かつて構成寺院が天台宗であったという点では一致している。

四 備前四十八ヶ寺と日蓮宗

ここまでは備前四十八ヶ寺の成立について先行研究をみてきたが、いずれも経済的・政治的な理由によって備前四十八ヶ寺が形成されたと説いている。

ここで筆者なりに備前四十八ヶ寺の形成について考えてみたい。備前四十八ヶ寺はかつては天台宗寺院で構成されていたとされるが、文禄四年の『備前国四拾八ヶ寺領并分国中太社目録』に記された構成寺院を享保六年の『備陽記』で確認してみると、この時点で真言宗と日蓮宗に改宗しているものが多数含まれている。

備前四十八ヶ寺はその名称から阿弥陀四十八願に基づいていることは明らかである。天台浄土教をもつ天台宗は当然ながら、本来密教である真言宗においても中世にはその経済を支えた高野聖が阿弥陀信仰と念仏の唱導を行⁽¹⁴⁾った。このようなこともあって真言宗寺院が備前四十八ヶ寺に加わることに抵抗は少なかったものと考ええる。

ところが、現世利益に重きを置く日蓮宗は、宗祖日蓮の四箇格言にある「真言亡国」「念仏無間」という語句に現れているように、真言宗や浄土信仰に批判的な立場を取っていて、阿弥陀四十八願に依拠する備前四十八ヶ寺に加わることは矛盾していると言える。和気郡浦伊部村の妙圀寺（日蓮宗・備前市浦伊部）も天正一四年（一五八七）、同寺における「かうしやうねんふつ」を禁止しており、当寺の備前における日蓮宗の姿勢が窺⁽¹⁵⁾える。このようないふことから、備前四十八ヶ寺の形成は構成寺院が日蓮宗に改宗する以前である可能性が考えられる。

次に備前四十八ヶ寺に含まれる各日蓮宗寺院の改宗時期について検討する。表2は近世の地誌類から松田氏によって改宗された、あるいは改宗を迫られたとする寺院を整理した一覧である。寺号を太字で示したものが備前四十八ヶ寺に含まれる寺院である。松田氏によって改宗された寺院の全容が不明であり傾向を窺うには十分な数ではないが、一六世紀に改宗を要求された寺院が多くみられる。このほかに備前四十八ヶ寺の内、日蓮宗となった寺院は、石井寺（廃寺・岡山市北区岩井付近か）、市倉山（廃寺・和気町木倉）であるが、これらの寺院はいずれも寛文六年の寺社整理で廃寺になったとみられ、改宗時期を窺うことはできない。

備前の日蓮宗は松田氏の庇護のもとで、新規に寺院を建立したり、既存寺院を改宗させてりして勢力を拡大しており、金山寺を中心とする天台宗勢力にとつては脅威であったと考える。実際に金山寺は松田氏の改宗要請を拒否し焼き討ちに遭っている。金山寺をはじめとする密教勢力と日蓮宗勢力とは対立関係にあったと考えられ、密教勢力の結束が促された可能性が考えられるだろう。

筆者の考える備前四十八ヶ寺の成立過程を整理してみると、まず天台宗寺院が備前各地に形成され、その後構成寺院のなかにも真言寺院がみられるようになる。また松田氏の政策により日蓮宗が勢力を拡大し始め、これに危機感を覚えた金山寺を中心とする密教勢力（真言宗を含む可能性がある）が阿弥陀四十八願を拠り所とする集団を形成した可能性があると考ええる。その後、松田氏の政策によって一部の構成寺院は日蓮宗に改宗されることになるが、松田氏は永禄一一年に宇喜多氏によって滅ぼされる。

丁度この頃に伯耆大山寺より豪円が金山寺を再興するために同寺へ入ったとされる⁽¹⁶⁾。天正三年には金山寺が再興され、文禄四年には備前四十八ヶ寺の構成寺院が初めて確認できる。豪円によって金山寺が再興された天正三年から文禄四年の二〇年間は、難波氏が備前四十八ヶ寺の結集が行われたとする時期である。筆者もこの時期に豪円によって金山寺を中心とした天台寺院の地位や勢力の確立が図られるとともに、宇喜多氏の政治的な思惑により日蓮宗と真言宗を含めて最終的に備前四十八ヶ寺が成立したものと考ええる。

備前四十八ヶ寺を構成する寺院にはその立地や景観に共通点があり、多くの寺院は山上や深い谷に位置する中世的な山岳寺院である。また薬王寺（真言宗・廃寺・瀬戸内市長船町福岡）、西大寺（真言宗・岡山市東区西大寺中）、岡山寺（天台宗・岡山市北区磨屋町）の三か寺は平野部に位置している。この内、薬王寺のあった福岡と西大寺は備前における重要な市が設けられていた場所で、岡山寺は宇喜多直家が整備した岡山城下にある。備前四十八ヶ寺を構成する寺院は中世以来の有力寺院であり、児島郡を除く備前国全域に分布している。このことから宇喜多氏の行政的・軍事的な思惑が垣間見える。

五 中世後期の報恩大師伝承

次に中世後期の報恩大師伝承を取り上げる。中世後期には報恩大師によって開かれたとされる備前四十八ヶ寺が成立し、報恩大師伝承が拡大した様子が窺える。ここで扱う伝承の下限については、岡山藩が寺社整理を実施した寛文六年（一六六六）とする。江戸時代初期には寺院の本末関係の固定や寺檀関係の形成が進んだ。さらに岡山藩では寛文六年に寺社

整理が行われ寺院を取り巻く環境が大きく変化している。そこで寛文六年を区切りとしそれ以前の報恩大師伝承について検討したい。

表3は中世後期から寛文六年の間にみられる伝承の一覧である。まずは備前四十八ヶ寺に関する史料が登場する以前の伝承について検討したい。

まず報恩大師伝承がみられるのは備前四十八ヶ寺の一つである禅光寺（安住院・真言宗・岡山市中区国富）である。同寺の寺蔵文書のうち文明十一年（一四七九）と文明二十二年の『勧進帳』である。⁽¹⁷⁾ 同寺も備前四十八ヶ寺を構成する寺の一つである。前者（表3の1）は本堂の再興、後者（表3の2）は鎮守の再興に伴う勧進のために作成されたもので、これらには同寺が孝謙天皇の命により報恩大師によって建立されたこと、本尊である千手観音は報恩の自作であることが述べられている。

その次の史料が『金山観音寺縁起』⁽¹⁸⁾である（表3の3）。同縁起は治承四年（一一八〇）の紀年名があるものの、先行研究により実際の筆写は明応五〜六年頃（一四九六〜一四九七）とされている。⁽¹⁹⁾ ただしその成立はほぼ紀年銘通りであることが指摘されている。

以上三点の史料を確認することができた。この内二点は禅光寺で作成された『勧進帳』であり、勧進に伴って報恩大師伝承が活用されたことは明白である。

次に備前四十八ヶ寺の成立以後の伝承を見ていきたい。備前四十八ヶ寺の成立後は報恩大師によって備前四十八ヶ寺が創建されたとする伝承の共有が図られたものと考ええる。

まず備前四十八ヶ寺の初見史料である、天正一九年（一五九一）に作成された禅光寺の『勧進帳』⁽²⁰⁾（表3の4）に報恩の伝承をみることができる。本堂の再興に伴って作成されたもので、ここには同寺が孝謙天皇の勅願により報恩大師によって開基された寺で、本尊が報恩自作の千手観音であることと共に、四十八ヶ寺の一つであることが記されている。

また同寺では本堂に納められた慶長六年（一六〇一）の棟札（表3の5）にも、報恩によつて開かれた備前四十八ヶ寺の一つで、報恩が刻んだ千手観音を安置する本堂であることが記されている。⁽²¹⁾ この本堂が先の勧進によつて再興されたものと考えられる。

その後は長楽寺（天台宗・和気町田土・現在は同町矢田）に伝わる慶長一二年（一六〇七）の紀年銘をもつ『杉沢山長楽寺縁起』（表3の6）に備前四十八ヶ寺に関する記述がある。この縁起も孝謙天皇の勅願により報恩が天平勝宝年中に開いた寺であること、報恩が備前の津高郡波河村の生まれであることなどが記され『金山観音寺縁起』の影響を受けていることがわかるとともに、阿弥陀四十八願に依拠した四十八ヶ寺の一つであることが記されている。⁽²²⁾

以上が寛文六年までの備前にみられる報恩大師伝承である。中世後期の伝承はそれ以前

と同様に勧進に活用されていることがわかる。また備前四十八ヶ寺が成立してからは報恩大師が開いた備前四十八ヶ寺の一つであるという伝承に変化している。さらに構成寺院に報恩大師と備前四十八ヶ寺の伝承が取り入れられ、寺格の高さを示す伝承として主張されていることがわかる。

おわりに

先行研究によると備前四十八ヶ寺を構成する寺院は天台宗であったとされているが、後に真言寺院がみられるようになる。さらに中世の武将である松田氏の政策により備前に日蓮宗が勢力を拡大した。これに危機感を覚えた金山寺を中心とする密教勢力が結束し、備前四十八ヶ寺の成立に繋がった可能性があると考ええる。

この頃、伯耆大山寺出身の豪円が金山寺を再興するために同寺へ入り、宇喜多氏の庇護のもとで天正三年（一五七五）に金山寺を再興する。その他にも備前四十八ヶ寺を構成する複数の寺院で豪円によって再興されたとする伝承が確認できる。その後、天正一九年（一五九一）には禅光寺（安住院・真言宗・岡山市中区国富）の寺蔵文書により、備前四十八ヶ寺が成立していることがわかる。難波氏は天正三年から文禄四年の二〇年の間に備前四十八ヶ寺の結集が行われたとしている。筆者もこの時期に豪円によって金山寺を中心とした天台寺院の地位や勢力の確立が計られると同時に、宇喜多氏による政治的な思惑が反映され、真言宗と日蓮宗を含む備前四十八ヶ寺が最終的に成立したものと考える。

中世後期には複数の寺院が寺の権威を示す伝承として報恩大師伝承を取り入れ、勧進に伴って伝承を主張していることが明らかになった。さらに備前四十八ヶ寺が成立してからはその中核寺院である金山寺の報恩大師伝承を構成寺院が取り入れていることがわかった。（本節は『奈良学研究』第二三号（二〇二二年三月）に掲載した「備前における報恩大師伝承の拡大と備前四十八ヶ寺の成立」を加筆修正したものである。）

【註】

（１）岡山市役所『岡山市史』第一、岡山市役所、一九三六年、五五六頁。

（２）藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、三七～四〇頁。

（３）難波俊成「報恩大師と備前四十八ヶ寺伝承」『岡山民俗文化論集』土井卓司先生古稀

記念、岡山民俗学会、一九八一年。

(4) 和気郡史編纂委員会『和気郡史』資料編、上巻、和気郡史刊行会、一九八一年、二六四頁。

(5) ①岡山市役所『岡山市史』第二、岡山市役所、一九三六年、一八一七～一八一八頁。

②『国書人名事典』岩波書店、一九九五年、二〇四～二〇五頁。

(6) 前掲(1)。

(7) 前掲(2)、三三～三四頁。

(8) 前掲(4)。

(9) 小林久磨雄編『改訂邑久郡史』下巻、邑久郡史刊行会、一九五四年。

(10) 瀬戸町誌編纂委員会『瀬戸町誌』瀬戸町、一九八五年、三二五～三二六頁。原文は掲載されていない。

(11) 前掲(4)、二七九～二八〇頁。

(12) 同前、二八〇頁。

(13) 中田利枝子「報恩大師の足跡」『中庄の歴史』第六号、二〇一一年、一八頁。

(14) 五来重「高野聖」『聖の系譜と庶民仏教』五来重著作集第二巻、法蔵館、二〇〇七年。

(15) 斎藤一興編『黄薇古簡集』岡山県地方史研究連絡会協議会、一九七一年、二二七頁。

(16) 『岡山市史』第二、岡山市役所、一九三六年、一八一七頁。

(17) 岡山市役所『岡山市史』第一、岡山市役所、一九三六年、五五四～五五六頁。

(18) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、二五～三〇頁。

(19) 苅米一志『備前金山観音寺縁起の成立』『年報赤松氏研究』第五号赤松氏研究会、二〇一二年。

(20) 前掲(17)、五五六～五五七頁。

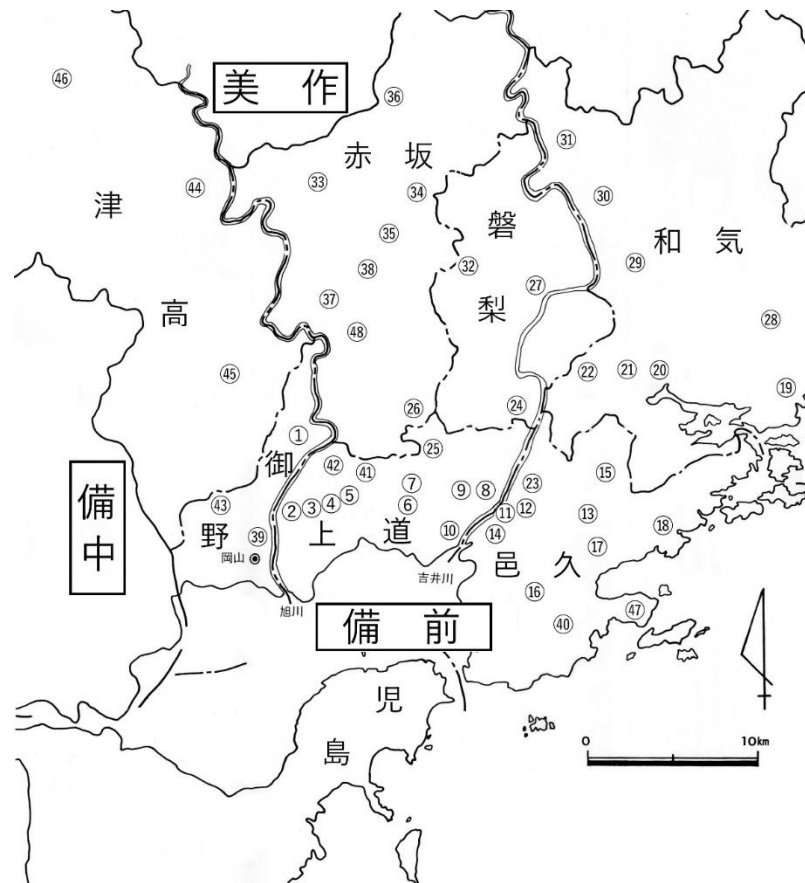
(21) 同前、五四九頁。

(22) 和気郡史編集委員会『和気郡史』資料編、上巻、和気郡史刊行会、一九八一年、二六四頁。

表 1 「備前四拾八箇寺書立之事」に記載のある寺

記載順	名 称	石高	記載順	名 称	石高	記載順	名 称	石高
①	金山寺	150	⑮	庄田寺	50	③⑤	菖蒲谷山	20
②	瓶井寺	80	⑯	正楽寺	15	③⑥	踏石山	20
③	沢田寺	30	⑰	真光寺	50	③⑦	幡寺山	20
④	今谷寺	30	⑱	小幡山	30	③⑧	笠寺山	20
⑤	岩間寺	30	⑲	大瀧山	50	③⑨	岡山寺	光珍寺30
⑥	広谷山	30	⑳	薬王寺	15			円明院20
⑦	室山寺	50	㉑	中津山	20			月窓院20
⑧	馬路山	60	㉒	築地山	110			観音堂30
⑨	塚原山	50	㉓	石井原	40			清鏡寺20
⑩	西大寺	50	㉔	元恩寺	20			宗福寺20
⑪	鯛山寺	30	㉕	満願寺	15	④①	千手山	110
⑫	南谷寺	20	㉖	安養寺	50	④②	湯迫山	50
⑬	真徳寺	20	㉗	市倉山	15	④③	脇田山	50
⑭	上寺山	60	㉘	杉沢山	20	④④	石井山	20
⑮	今寺山	30	㉙	石蓮寺	10	④⑤	藤田山	30
⑯	大賀島寺	80	㉚	大松山	10	④⑥	菅野山	30
⑰	横尾寺	50	㉛	正満寺	10	④⑦	円城寺	20
						④⑧	牛窓山	20
						④⑨	上地山	10

図 1 備前四十八ヶ寺分布



付図・付表・写真

表 2 松田氏に改宗を迫られた寺院

郡	寺院名※1	改宗時期	宗派の変更	要 因	典 拠
津高	成就寺	延文3(1358)	※2→日蓮	金川臥龍山玉松城松田左近将監	『成就寺誌』H14年、記念寺誌編集委員成就寺護持会
	幸福寺※2	文明年中 (1468～1487)	天台→日蓮	いにしへは天台宗なりしに、文明年中、松田左近将監のすゝめによつて、日蓮宗に改む。	「吉備温故秘録」 『吉備群書集成』8, P.18
	日応寺	永禄2(1559)	天台→日蓮	松田左近将監改宗せしめ、今の山号を寺号に改む。 永禄2年金川城主松田左近将監の威圧により日蓮宗に改宗	「吉備温故秘録」 『吉備群書集成』8, P.18 『宗祖七百年遠忌記念誌 勅命山日応寺』 勅命山日応寺, H6年, P.6.
	妙浄寺	永正年中 (1504～1521)	天台→日蓮	永正年中に、松田左近将監元成がすゝめにて、日蓮宗に改む。	「吉備温故秘録」 『吉備群書集成』8, P.19
	孝徳寺	永正年中	天台→日蓮	古へは天台宗なりしに、永正年中、松田左近将監がすゝめに依て、日蓮宗に改む。	「吉備温故秘録」 『吉備群書集成』8, P.19
御野	金山寺	弘治年中 (1555～1558)	天台のまま	津高郡主松田将監の焼討ちにあう。	天和3年「金山寺縁起」 『岡山市史』古代編
	妙法寺	弘治年中	天台のまま	弘治年中松田左近将監堂舎焼払ふ。	「吉備温故秘録」 『吉備群書集成』8, P.15
赤坂	妙光寺	永禄の頃 (1558～1570)	改宗せず※2 (現・真言宗)	永禄の頃、金川城主松田左近将監が、法華宗にならないかと云ふので、堂宇を焼き払った。 日蓮宗に宗旨替えを迫った金川玉松城主松田氏の命を聞かなかった為、数多くある寺院僧房が焼き払われたという伝承がある。	『改訂赤磐郡誌』S15年, P.393 石川富雄 『御津町を通る古道大山道』 H1年, P.70.

※1 太字は備前四十ハヶ寺を構成する寺院。

※2 妙福寺が寛文6年に廃寺になったのち、幸福寺として再興されたという。

※3 古くは天台宗であったと考えられるが、日蓮宗への改宗を迫られた時点での宗派は不明。ただし天台か真言のいずれかであろう。

写真 1 長楽寺山門



表 3 戦国期から江戸時代初期の伝承

番号	寺院および史料名	年記	表題等	報恩に関係する記述	出典
1	瓶井山禅光寺 （『岡山市史』）※1	文明11 （1479）	請持蒙十方檀那恩助再興備前州瓶井山禅光寺本堂成就自利利他大願之状	当寺者天平勝宝候依有不思議奇瑞孝謙天皇被勅言報恩大師建立処也、本尊者補陀落界之靈木則 大師御作千手千眼尊容 也	『岡山市史』第1 （昭和11年）
2		文明12 （1480）	請持蒙十方檀那助縁再興備前州瓶井山鎮守社頭成就壞災招福大願之状	当寺者天平勝宝候報恩大師 柘練若干千手観音 為本尊	
3	金山寺 （『金山寺文書』）	治承4 （1180）	浦上則宗袖判備前国金山観音寺縁起写「金山観音寺縁起」（明応5・6年頃（1496～97）の筆写）	（報恩自作の千手観音、清水寺観音と同木異体）（備前国出生説初見）（日差山、藤戸寺、瑜伽山、大和国児島寺登場）（報恩の弟子・智久〔心浄大師・乙大師〕初見）	『岡山県古文書集』第2 輯
4	瓶井山禅光寺 （『岡山市史』）	天正19 （1591）	請持蒙十方旦那恩助再興備前瓶井山禅光寺本堂成就自利利他之大願之状	当寺者孝謙天皇御願報恩大師開基也傳尋其元由天平勝宝候使大師祈玉体之不祥於是景雲現于空示悉地之瑞遂則三昧法験惣持妙薬速感速応御惱除癒平愈貴体平安叡信之余命於官吏建立 四十八箇所之精舎当山是其一也 厥後 大師以補陀洛界之靈木刻千手千眼之龍像 安置之本堂	『岡山市史』第1 （昭和11年）
5		慶長6 （1601）	瓶井山禅光寺本堂棟札	奉新造立備前国瓶井山禅光寺本堂粵当寺者孝謙天皇御願報恩大師開基也傳尋其元由天平勝宝候建立四十八ヶ精舎、当山是其初也厥後刻千手千眼龍造安置之本堂	
6	長楽寺 （『和気町史』）	慶長12 （1607）	杉沢山長楽寺縁起	夫、当山者孝謙天皇為御勅願、報恩大師本州 津高郡波河村 生民家、然本非凡人、祈子観音變作故、其名天下無隠、帝御惱時召大内、加持御惱忽止御平復御成時御褒美有任師意口勅命、即奉詔 四十八ヶ寺院御建立 、天平勝宝年中御開基也、為顯密兼備之道場、表四十八願之其一、為千手擁護靈地、安置天下泰平靈像、	『和気郡史』資料編 上 巻

第三節 近世における報恩大師伝承の浸透

中世前期の報恩大師伝承は都から導入され、寺の由緒を示す伝承として主張された。さらに勧進に伴って拡大したことを第一節で述べた。近世には寺院縁起に報恩大師伝承が確認できるほか、備前四十八ヶ寺が巡礼霊場として認識されていることを示す史料や報恩大師像を設ける寺院がみられるようになる。また報恩大師自体が信仰対象とされている様子が見受けられる。さらに備中の史料でも報恩大師伝承が確認できるようになる。

本節では近世における報恩大師伝承浸透の実相に迫りたい。

一 江戸時代の報恩大師伝承

岡山藩主である池田光政によって寛文六年（一六六六）に寺社整理と宗門改を神職が行う神職請けが実施された。その後光政の子である綱政の代には寺請けが再開され、光政は天和二年（一六八二）に没している。その翌年にあたる天和三年には金山寺が新たに縁起を作成し、備前四十八ヶ寺を構成する寺院でも徐々に縁起が作成されるようになり、報恩大師伝承も更なる拡大をみせることになる。

寺社整理によって寺院を取り巻く環境や価値観が大きく変化し、報恩大師伝承を主張する意味合いにも変化がみられるものと推測する。そこで寛文六年以降にみられる報恩大師伝承の展開とその目的を検討していきたい。

寺社整理の後、まず確認できるのが『金山寺縁起』である。同縁起は天和三年に金山寺の賢厚によって作成されたものである。報恩大師と備前四十八ヶ寺に関する記述を次に示す。

備前国御野郡銘金山観音寺者孝謙天皇之御宇報恩大師草創地也、従天平勝宝元年天和三年癸亥年迄九百三十五年。

一、孝謙帝御惱之時、当寺開山報恩大師蒙勅命、於宮中以大悲神呪加持護念依有効驗、環我山為国家安全每歲正月十七日夜音声不断大悲神呪之祈祷至今無退転、依勅許國中四十八ヶ寺建立、其本尊者各千手観音、依之当山者四十八ヶ寺之惣本寺二而当国隣国ニ茂末寺有之。

（中略）

一、当山本尊千手観音者開山報恩大師之彫刻之、其残木再知有衆生利益之靈瑞、大師以此木擲海上、星霜五十年之後、此残木ヲ以テ報恩之弟子延鎮彫刻、洛東清水寺之観音

是也、故当山之観音与清水寺之観音同木異体云々。

- 一、報恩大師於備中国所々草創、其後児島二而藤戸寺瑜伽寺開基、從夫大和国高市郡二子島寺者第三弟子延鎮附属云々、其後報恩大師延暦十四年乙亥六月廿八日於和州示寂。
- 一、当寺第二世智久禪師之行業縁起二具也、時之帝不予也勅久、令加持上疾乃愈云々。
- 一、当山改天台宗而已來每歲從六月廿日至七月十日法華三昧修行于今無退轉四十八カ寺法之^①

縁起の内容は基本的には『金山観音寺縁起』の内容を引き継ぎ、新たに「国中二十四カ寺建立、其本尊者各千手観音、依之当山者四十八カ寺之惣本寺二而」とあるように、備前四十八ヶ寺に関する記述とその惣本寺であることが加えられている。

表1は寛文六年以降から幕末までに作成された、備前四十八ヶ寺を構成する寺院の縁起である。すでに活字化され作成年が明確なものに限られるが、四十八ヶ寺のうち一三か寺で縁起を確認でき、そのうちの七か寺の縁起に報恩大師に関する伝承がみられる。その他に一七か寺が口承伝承などの寺伝として報恩大師伝承を有しており、縁起や伝承の有無が不明な寺院が九か寺、廃寺が九か寺ある。

縁起が確認できた一三か寺の内、残りの六か寺は報恩大師に関する伝承を有しておらず、如法寺（真言宗・岡山市東区広谷）は大輪和尚、安養寺（天台宗・和気町泉）は信源上人、朝日寺（真言宗・瀬戸内市邑久町庄田）は智蔵上人、福生寺（真言宗・備前市大内）と妙光寺（赤磐市石上）は鑑真和尚としている。このうち安養寺と福生寺は備前四十八ヶ寺の一つであるとしながらも報恩大師については触れていない。つまり報恩大師伝承の導入は各寺の裁量によるものであったことが表れている。またこの時期には多くの寺院が縁起を作成し、様々な高僧を開基として寺の由緒を主張するようになったことがわかる。

縁起に報恩大師に関する伝承がみられる寺院の内、余慶寺（天台宗・瀬戸内市邑久町北島）ではまず慶安元年（一六四八）に由緒書を作成している。ここには同じ境内にある上八幡宮が推古天皇の時代に建立されたこと、「仏閣」については人皇七六代の近衛院が「天地長久国家安全之御祈願処」として建立したことなどを記しており、報恩や備前四十八ヶ寺には触れていない。^③ところが後の元文三年（一七三八）に作成された『上寺山余慶寺縁起』（表1の11）には「州内四十八寺之一寺、天平勝宝元年報恩大師草創之地也」と述べた上で続けて「師之威徳靈驗^者金山寺之縁起委略之」とあり金山寺の縁起をもとに報恩大師伝承を導入したことがわかる。

また報恩大師伝承を有する場合もその位置付けは様々で、その寺を報恩自身が創建したとする場合もあれば、すでに建立されていた寺院を備前四十八ヶ寺に編入したとするものもみられる。報恩によって備前四十八ヶ寺に編入されたとする伝承は、その寺が報恩大師伝

承を導入する以前に独自の創建伝承を有していたことを物語っている。

二 備前四十八ヶ寺巡礼と報恩大師信仰の定着

備前四十八ヶ寺は金山寺を中心とした天台宗寺院の優位性確保しつつ、宇喜多氏の意向を反映して成立したと推察した。つまり巡礼霊場として形成されたものではないと考える。しかし江戸中期以降には、庶民によって作成され備前四十八ヶ寺が巡礼霊場として認識されていることを示す史料が確認できるようになる。金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）には享保一五年（一七三〇）の紀年銘がある「備前四十八ヶ寺巡礼かがみ」（表1）の版木が伝えられている。同史料には一番から四八番までが記されているが、三枚のうち真中の一枚を欠いていることから二一番から三九番までは不明である。この『巡礼かがみ』は、一日市村（現岡山市東区一日市）の善七郎という人物が作成し、金山寺へ納めたものであるという。⁽⁴⁾ その版木に刻まれた寺院とその順序は表2の通りである。

またこの史料と共通する可能性のある扁額が、いくつかの寺院に伝えられている。この扁額には札所番号、本尊、御詠歌、施主の名が板に刻まれている。元恩寺（天台宗・和気町原）（写真1）、正楽寺（真言宗・備前市蕃山）（写真2）、長法寺（真言宗・備前市伊部）（写真3）、慈眼院（万願寺）（真言宗・岡山市東区南古都）（写真4）には現在も本堂正面付近に打ち付けられているほか、普門院（極楽寺）（真言宗・赤磐市山口）にも同様の扁額が伝えられている。⁽⁵⁾ 扁額が奉納された時期は記されていないが、近世後期のものであると推測する。これらの扁額は普門院のものが五番、元恩寺が十八番、正楽寺が二十一番、長法寺が二十三番、慈眼院の扁額には三十八番と刻まれている。普門院と元恩寺については「備前四十八ヶ寺巡礼かがみ」の番号と一致するが、正楽寺と長法寺についてはその部分を欠いているため確かめることができない。また普門院には昭和一〇年の紀年銘をもつ「四十八ヶ寺巡礼納札」が納められているため、戦前まで備前四十八ヶ寺の巡礼を行う人がいたものと思われる。⁽⁶⁾

ここにみられる順序は備前四十八ヶ寺の構成寺院を記した文禄四年（一五九五）の「備前四拾八箇寺書立之事」⁽⁷⁾ にみられる順序とは異なり、作成者の善七郎が回りやすいように順序を整えたものであるという。⁽⁸⁾

また現在備前には報恩大師像が存在する。筆者は金山寺・千光寺（天台宗・赤磐市中島）・余慶寺（天台宗・瀬戸内市邑久町北島）・弘法寺（真言宗・瀬戸内市牛窓町千手）で木像（座像）を、安養寺（天台宗・和気町泉）⁽⁹⁾ では画像を確認した。

また浄土寺（赤磐市）の境内には「報恩大師塔」と刻まれた六角柱の石塔（写真5）があり、その周囲には同寺の由緒や報恩の示寂年とともに、この石塔が報恩の一千年遠忌に建てられたことが刻まれている。⁽¹⁰⁾

備前にある寺院の中でもっとも報恩大師信仰を受け入れるための環境が整えられているのが弘法寺である。弘法寺の奥の院には報恩大師の塚とされる石積みがあり、その前に設けられた堂の中にかつては報恩大師像が安置されていた。⁽¹¹⁾弘法寺には、報恩の入寂地について記した『報恩大師縁起草案』が伝わる。報恩に関する部分は次の通りである。

夫当山者、人王三十九代天智天皇の御勅願、白鳳年中の起立なり、然に炎上雷火数度に及び、宝物旧記多く散失せり、是ゆへに誰人の開基ということつまびらかならず、其後釈の報恩当国遊化し、此峯に登り本堂を建立し千手観音の尊像を安置し、大書根本の呪を持念し給う。又侍に常行堂一字を造立し丈六の弥陀を安置し、自往生浄土の種因を作し、又諸人をして往生浄土の種因を植しめ給ふ、国中におゐて四十八箇の寺を建立し、無量寿経に説く所の四十八願を抛し給ふ、且観無量寿経の推し説により、上中下三輩の衆生往生浄土の願力にこたへて、阿弥陀如来及観音勢至無量化仏無量菩薩が声聞比丘衆無量諸天行者を来迎し引接し給ふ、儀式を写し、諸人をして決定の信を生せしめ給ふ、それよりこのかた相ついてたふることなし、毎年七月四日如法行の中日に当てこれを執行す、然而報恩此山におゐて終焉し給ひ、遺体を長倉の峯に蔵む、今に一間四方に大石を置きたる墳墓有り、⁽¹²⁾（後略）

またこれに続く文章のなかに、「恩公滅後遺体葬東北之峯 山絶頂置石於一間の四方之古墳於今納毎年七月如法経十種供養之供物於此塚上」⁽¹³⁾とも記されている。ここには報恩大師が同寺で入寂し、今日の奥の院がある永倉山の峰に葬られたことのほか、現在も行われている脚供養を報恩が始めたとしている。この史料は檀家や信者に対して同寺の報恩大師伝承を発信するために作成されたものと考ええる。

この草案の表題には続けて「寂□記」とあることから、天明元（一七八一）年まで弘法寺で住職を務めた寂然⁽¹⁴⁾によって著されたとみられる。

奥の院の塚は報恩大師の墓とされているが、『子島山寺建立縁起大師伝』や『金山観音寺縁起』、さらには天和三年（一六八三）の『金山寺縁起』にも延暦一四年六月二八日に大和の子島寺で遷化したと記されていることから、弘法寺独自の伝承であるといえる。

寛政十一年（一七九九）に弘法寺奥の院にある塚が発掘され、菊花双雀文銅鏡やヤモリ形の銅製品、木の実状の物体が発見されている。これらを収納する箱の蓋裏には「寛政十一己未年四月四日修造報恩大師塚 偶触鉄頭所掘得也 服紗 當將軍家御装束切」とある。これらの出土遺物は平安時代に遡る経塚埋納品であるとみられ、この発見によって同所での報

恩入寂説が力付けられたとされる⁽¹⁵⁾。奥の院にある報恩様の塚は人頭大の石を積み上げた上に五輪塔が建てられていて、周囲には玉垣が巡らされている。正面入り口の門中には寛政二年と記されていることから、発掘のすぐ後に塚の整備が行われたことがわかる。

また、弘法寺の報恩に関する行事としては『弘法寺文書』のうち、宝暦六（一七五六）年の「千手山惣寺中定書」に報恩講という行事が行われていたことが記されている。

當山中興開山報恩大師也、依之、往古者寺中一同報恩講相勤候所、近年中絶、冥慮多恐候、自今已後往古之通毎年十一月廿八日、於本堂報恩講相勤可被申候、尤供養料現米壹石、遍明院預来候間、法事之節者、以件料物惣寺中衆徒中江一汁二菜之齋供可被致事⁽¹⁶⁾

この史料によると、毎年一月二八日に本堂で千手山にある全ての塔頭の僧が本堂に集まり、報恩講を行っていたとある。さらに一度途絶えたものを再開したとあることから、報恩大師が同寺の中興開山であることを再確認し、報恩大師を盛り立てようとしていることが窺える。

安養寺には報恩大師の画像が存在するが、天和四年に作成された『安養寺由来書上』に報恩の名はみられず、その開山を信源としている⁽¹⁷⁾。これは庶民の寺社参詣が盛んになるにつれて備前四十八ヶ寺の一つである安養寺でも、報恩大師像が必要になったと考えられる。また備前四十八ヶ寺の構成寺院ではないが、報恩大師が備前四十八ヶ寺を建立する際に「根本道場」にしたという伝承をもつ日心寺には、正面に「法音大師摩訶聖人 宝永四丁亥五月八日」向かって左面に「施主 一妙院日要」と刻まれた石塔がある（写真6）。伝承の存在を石塔という形で視覚に訴えることで、報恩大師ゆかりの寺であることを印象づけるねらいがあったものと考ええる。

このように江戸時代中期以降になると寺院側も信仰を受け入れるための環境を整えるとともに、庶民が『巡礼かがみ』を作成するなど備前四十八ヶ寺を巡礼霊場として認識している様子が窺える。

三 備中における報恩大師伝承

ここまで備前の報恩大師伝承について検討してきたが、近世になると備中でも報恩大師伝承が確認できるようになる。備中では都宇郡・窪屋郡・賀屋郡の三郡に報恩大師伝承をもつ寺院が存在している。備中の報恩大師伝承は幕末にまとめられた地誌である『備中誌』⁽¹⁸⁾のほか、いくつかの寺の縁起にみられる。これらの史料をもとに備中の報恩大師伝承の拡大

について検証したい。

(1) 日差寺にみる報恩大師伝承の拡大

日差寺(日蓮宗系単立・倉敷市山地)は『金山観音寺縁起』(治承四年・一一八〇)に報恩によって創建されたことが記されている。『備中誌』にはこの日差寺を起源に持つとする寺院が複数記され、そのなかには「報恩大師の法脈」などと記されているものがある。

『備中誌』によると、日差寺は近世初期に備中庭瀬藩主の戸川氏から日蓮宗への改宗を迫られ、これに反発した多くの子院が日差寺を去ったことが記されている。これにより日差寺は解体されることになり、各子院は周辺の村々に移り新たに寺を構えたことがわかる。

表3は『備中誌』にある報恩大師の開基、あるいは報恩大師の法脈を継ぐことなどが書かれた寺院をまとめたものである。この内、3弘福山西方坊興正坊(現・西方院)、4法輪山蓮光院宝性坊(後の宝性寺・現宝福寺)、5両部山無量院浄土坊(後の霊福寺、宝性寺と合併し現宝福寺)、6遍光山蓮華寺千手院(千手寺蓮華院の誤りとみられる。現・千手寺)、7大内山無量院大蔵坊、廃寺になった8神皇寺、9圓光坊、10百々寺の計八か寺が日差寺に起源をもつこととともに「報恩大師の法脈」である旨が記されている。これにより中世の山岳寺院である日差寺が解体され、近世的な民間寺院に変化していく過程で、報恩大師伝承が拡大したことがわかる。

『備中誌』には表1に示した寺院の他にも、日差寺に起源をもつとする寺院が複数みられる。これらの寺院は後に改称や統廃合が行われ、現在は真言宗の鏡善寺(岡山市北区三手)、宝泉寺(倉敷市矢部)、西方院(倉敷市上東)、宝福寺(倉敷市下庄)、千手寺(岡山市北区大内田)、日蓮宗の受法寺(倉敷市山地)が存続し、今日も報恩大師伝承を受け継いでいる。

(2) 寺院縁起にみる報恩大師伝承

次に備中の寺院縁起にみられる報恩大師伝承を確認したい。

千手寺の縁起 千手寺は現在の岡山市南区大内田にある真言宗寺院で、報恩大師開基伝承を有している。『備中誌』では日差山に起源をもつ寺院とされる。同寺には元禄四年(一六九一)の紀年銘をもつ『遍光山千手寺縁起之記』があり、『都窪郡誌』に収録されている。寺院の名称が『備中誌』の記載とは異なるが、同縁起の作成が先行していることと現在の名称とも一致していることから、『備中誌』の名称が誤りであるとみられる。同縁起の報恩大師について記されている部分は次の通りである。

『遍光山千手寺縁起之記』

備中都宇郡大内田村遍光山千手寺者 乃祖報恩大師挿艸之霊地 而英衲規矩之道場也
窃聞 報恩大師 夙稟靈資 独懷壯志 三十入吉野山 持観世音呪 剋期五載 既獲
現証 天平勝宝四年 上不豫 召恩加持 帝疾忽癒 帝感激 賜名報恩 蓋所以報愈

之恩謂乎 又桓武帝在長岡宮 嬰沈痾 巫医萬方皆不効 帝誓曰 仏法力痊朕疾 願
勒弘伝 若無驗 則在罔何益 聴者震恐 恩応召入宮 宮中大振動 大悲薩埵 顯形
殿上 上疾立痊 上起礼恩 給賞甚渥 辞反本山 勤修益嚴也 厥後遊歷諸方 經營
梵刹凡幾宇 歳久雖不可敷 然当寺則其一也 大師嘗遊此山 郷人尊之 遂為立寺
乃擬其本誓之薩埵 山号遍光 寺称千手 且安千手薩埵 以為本尊 志不忘所自故也
由是宝塔聳空 玉殿架雲 薩埵之金軀 晃耀於中央 大師之慈水 湯々於法界 世人
仰之 如泰山北斗 又且贖山以広樵采地 立田以克香膳之需 法物供器無不畢備 天
平勝宝四年三月 大師又於和州高市郡子島神社畔 建伽藍 号曰子島寺 延暦^{乙亥}六月
二十有八莫 寂于子島寺⁽¹⁹⁾ 矣

『備中誌』には同寺について「是も日指山衆徒の内にて報恩大師の法脈也しか寛永三年戸
川氏領内の寺々内心法華宗に改られし時彼の地を去て此地に遷⁽²⁰⁾る」とあるものの、同寺の
縁起にそのことは記されていない。

性徳院の縁起 性徳院（真言宗・倉敷市中庄）は山号を安生山、寺号を来迎寺という。同寺
には寛文一二年（一六七二）年に作成された『安生山来迎寺性徳院略縁起』がある。ここに
みられる報恩大師伝表は次の通りである。

（以前略） 検旧記人皇四拾六代孝謙帝之御宇天平勝宝年中報恩大師遊化之砌金山寺日
指寺開基之□遷此渚創草之道場而四拾八箇等之随一也則彫刻弥陀之聖容安置重修度生
之處⁽²¹⁾也

ここには報恩が金山寺、日差寺（日指寺）を開基した後同寺を開いたことが記されてお
り『金山観音寺縁起』（治承四年・一一八〇）の影響を受けていることがわかる。

宝幢院の縁起 宝幢院（真言宗・倉敷市鳥羽）は山号を万寿山、寺号を報恩寺といい、とも
に報恩大師開基伝承をもつ。同寺の『万寿山縁起文』にみられる報恩大師伝承は次の通りで
ある。

（以前略） 往昔在^二一人之聖^一者号^二報恩大師^一隆^三誕迹備前国破我里^二（中略） 爰人皇四
十六代孝謙天皇御宇天平勝宝年中從^二備前金山寺^一移備中日指山^二草^三創伽藍^一安置^二觀
在薩陀之尊像^一以^二智久法師^一為^二住侶^一矣其後渡^二南之渚^一（中略） 大師見^レ之歎^三世々為^二
親族^一悲^三生々為^二恩所^一穿^三柳緑苔^一造^二宮精舎^一勤^三誘悲願^一安置^二弥陀^一祈^二万民之福寿^一
連^三三宝之幡旗^一報^二四恩之厚德^一所也⁽²²⁾

『万寿山縁起文』については作成された年代が記されていないが、性徳院の縁起と共通す
る部分が多くみられ、近い時期に作成された可能性が考えられる。同寺の縁起には報恩が破
我里（波河）に生まれたことや金山寺・日差寺を開いたこと、日差寺を智久に与えたことな
ど『金山観音寺縁起』と共通する部分がみられる。

(3) 備中の四十八ヶ寺伝承

四十八ヶ寺といえば、報恩大師によって創建されたとする伝承をもつ備前四十八ヶ寺が知られているが、備中でもいくつかの寺院で「四十八ヶ寺」の一つであることを主張する例がある。先に示した『安生山来迎寺性徳院略縁起』には「創草之道場而四拾八箇等之随一也」と記され、『備中誌』にある日間山日間寺⁽²³⁾の説明にも「備中四十八ヶ寺」の一つであると記されている⁽²⁴⁾。備中に「四十八ヶ寺」という寺院集団が存在したことは確認できず、備前四十八ヶ寺の影響を受けて形成された伝承であると考ええる。

おわりに

江戸期には寺院縁起に加えて備前四十八ヶ寺で巡礼霊場として認識されていることを示す史料や、報恩大師が庶民の信仰対象になっていることを示す史料がみられるようになる。江戸期の寺院が報恩大師伝承を主張することの目的には、庶民の信仰を集めるねらいがあったと推察する。

『備前四十八ヶ寺巡礼かがみ』の存在により、江戸中期には庶民によって巡礼霊場として認識されていたことが明らかである。西国三十三観音霊場や四国八十八ヶ所巡礼などの模倣ではない備前独自の巡礼霊場であり、戦前頃までは巡礼を行う人がいたこともわかった。また江戸期には弘法寺奥の院に報恩大師が祀られ、他の寺院でも報恩大師像を祀るようになる。これによって報恩大師を庶民の信仰対象にしようとしていたことがわかる。これらの信仰は寺社整理が行われた寛文六年（一六六六）以降に、縁起に報恩大師伝承を取り入れる寺院が増加することと対応している可能性があると考ええる。

報恩大師は奈良時代に大和を中心とした地域で活躍したとされ、その伝承が平安末期までに備前にもたらされ、寺院に由緒を示す伝承として主張された。また中世には勧進に伴って報恩大師伝承の存在が語られた。さらに中世後期には報恩大師によって開かれたとされる備前四十八ヶ寺が確立し、江戸時代には報恩大師伝承の存在を主張する寺院が増える。これは報恩大師ゆかりの由緒正しい寺院であることを主張し、信仰心を獲得する願いがあつたと考えられる。

備中の寺院でも近世になると金山寺の報恩大師伝承を取り入れて縁起を作成していることがわかる。また備中にも「四十八ヶ寺」伝承が拡大している様子が見受けられる。

このように備前・備中の人々が報恩大師を必要とした理由も時代によって変化していることが明らかになった。また報恩大師伝承は決して過去のものではなく、今日も岡山の人々

に受け継がれ、信仰の対称になるなど民俗のなかに生き続けている。これについては章を改めて述べることにしたい。

（本節は『日本文化史研究』第五〇号（二〇一九年三月）に掲載した「備前国における報恩大師信仰と備前四十八ヶ寺巡礼―聖による霊場形成の可能性」を加筆修正したものである。）

【註】

（1）岡山市史編集委員会『岡山市史』古代編、岡山市役所、一九六二年、五〇二～五〇三頁。

（2）すでに自治体史や古文書集などで翻刻が行われた縁起がある寺院を除き、近代の郡誌、現代の自治体史などで報恩大師伝承を有していることが確認できた構成寺院は次の通りである。「和気郡」真光寺・正楽寺。「邑久郡」大賀島寺・金剛頂寺。「岩梨郡」元恩寺・願興寺。「赤坂郡」極楽寺・浄土寺・正満寺・西光寺。「上道郡」恩徳寺・常楽寺・浄土寺・安養寺・西明寺・満願寺・明王寺。

（3）邑久町史編纂委員会『邑久町史』史料編（上）、瀬戸内市、二〇〇七年、六一一頁。

（4）岡山県立博物館平成三〇年度企画展「報恩大師信仰と寺院縁起―四十八ヶ寺を中心に」出品資料。

（5）同前。

（6）同前。

（7）水野恭一郎・藤井駿『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、三七～四〇頁。「備前四拾八ヶ寺領并分国中大社領目録写」に含まれる。

（8）岡山県立博物館、平成一四年度特別展図録『備前四十八寺…近世備前の霊場と報恩大師信仰』二〇〇三年、七五頁。

（9）前掲（8）、三〇・六四頁。

（10）六角中の石塔正面には「報恩大師塔」と刻まれ、表面左側から順に「当山者孝謙帝御願 而天平勝宝元年大師」「創当国之四十八箇寺 其第五建立也後延暦」「十四年六月二十八日 大師於和州児島寺示」「寂也今年寛政六年直 一千年遠忌設法建伸」「供養故謹建知恩塔而 欲垂此於不朽」と刻まれている。台座にも文字が刻まれていたが、目視のみでは判読できなかった。

（11）現在は塔頭の東寿院に安置されている。

（12）牛窓町史編纂委員会『牛窓町史』資料編二、牛窓町、一九九七年、四六四～四六五頁。

(13) 牛窓町史編纂委員会『牛窓町史』通史編、牛窓町、二〇〇一年、四六四頁。

(14) 廣井・弘『客殿・庫裡・遍照閣落慶記念千手山弘法寺遍明院記念誌』遍明院参与会、二〇〇三年、八九頁。

(15) 前掲(8)、六四頁。

(16) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第三輯、山陽図書出版、一九五六年、八八頁。

(17) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第一輯、共同印刷製本、一九五三年、八一頁。原文では「信源」とあるが、それ以前の文書に信源の開基であることが記されているため、間違いないであろう。

(18) 吉田研一編『備中誌』日本文教出版、一九六二年。

(19) 都窪郡教育会(編)『都窪郡誌』全、名著出版、一九六九年、七四一〜七四四。

(20) 前掲(18)、一二四頁。

(21) 永山卯三郎(編著)『倉敷市史』第五冊、名著出版、一九七三年、六五二〜六五三頁。六五五〜六五六頁。

(22) 同前、六五二〜六五三頁。

(23) 日間山法輪寺(真言宗・倉敷市羽島)が現存し、日間寺の法灯をついでいる。

(24) 前掲(18)、三二三頁。

表 1 寺社整理以後における備前四十八ヶ寺の縁起

資料番号	寺院名と宗派	史料名など	成立年	開基 (建立年)	中興・来訪など (時代) ※	本尊(作者)に関する記述	報恩の位置づけ	備前四十八ヶ寺に関する記述	出典
1	金山寺 (天台)	『金山寺縁起』	天和3 (1683)	開基 報恩 二世智久	葉上僧正(栄西) (再興)	千手観音 (報恩 ・清水寺同木異体)	草創	当山者四十八カ寺之惣本寺 ニ而当国隣国ニ茂末寺有之。	『岡山市史』古代編 (昭和37年)所収
2	安養寺 (天台)	『安養寺由来書上』	天和4 (1684)	信源 (康保元年)	—	釈迦弥陀薬師・毘沙門(智証大師) 大仏之阿弥陀(恵心僧都)	—	天台宗四十八ヶ寺 内	『備前安養寺文書』 『岡山県古文書集』第1輯所収
3	岡山寺 (天台)	『岡山寺中興縁起』	貞享2 (1685)	報恩 または金光氏 (天平勝宝年中)	信源(中興) (天暦年中)	千手観音	創建	四十八箇之寺院 第二之草創也	『岡山寺誌』所収
4	朝日寺 (真言)	『庄田山朝日寺由来記』	貞享4 (1687)	智蔵上人 (養老元年)	—	—	—	な し	『朝日寺文書』 『邑久町史』資料編(上)所収
5	満楽寺 (真言)	『赤坂郡上地山満楽寺縁起』	元禄元年 (1688)	—	—	地藏(地藏の自作または釈尊の開眼)	—	な し	『西山村史』所収
6	弘法寺 (真言)	『千手山弘法寺由来記』	元禄12 (1699)	不知其初何人何啓 (天智天皇御願)	報恩 (再興) (天平勝宝3年、または天平宝字年中)	千手千眼観自在像 (弘法大師)	再興・編入	又創 精舎窟四十八区 、比慈氏之院則減一、	『弘法寺文書』『岡山県古文書集』第3輯所収
7	福生寺 (真言)	『大瀧山福生寺記』	元禄14 (1701)	鑑真	弘法大師(来訪) (弘仁天長之間)	千臂観世音像 (鑑真)	—	備之前州、殊多勝区、撰而取之、 凡四十八所 、如大瀧山福生寺亦其中傑然者也	『和気郡史』資料編(上)所収
8	静円寺 (真言)	『備ノ前州邑久郡横尾山静円寺記』	元禄14 (1701)	基公(行基) (天平2年)	報恩 (備前四十八ヶ寺に編入) (天平勝宝年中)印喜法師 (延暦年中)弘法大師	千手大悲 (行基)	編入	天平勝宝年中報恩上人者、富徳望邇 当国中四十八箇之名藍 而紹隆焉、	井上章氏所蔵文書 『邑久町史』史料編(上)所収
9	長法寺 (真言)	『小幡山長法寺縁起』	享保2 (1717)	鑑真	弘法大師(来訪)	阿弥陀如来・脇土観音勢至(行基)	編入	桓武天皇之神宇、報恩大師表出此寺、陳列之於名寺 四十八箇 之中、	『備前長法寺文書』 『岡山県古文書集』第2輯所収
10	禅光寺 (真言)	『上道郡瓶井山禅光寺安住院縁起』	享保10 (1725)	報恩 (師銘快賢、号芳賀坊) (天平勝宝元年)	聖宝(中興) (延喜7年)増咩(来訪) (応永2年)	千手千眼観自在尊 (報恩)	草創	報恩大師微号、剌勅備州、創建 四十八箇浄刹 、我寺是其権興也。	『吉備温故秘録』 『吉備文書集成』8 『岡山市史』(昭和11年)所収
11	余慶寺 (天台)	『備前国邑久郡上寺山餘慶寺略縁起』	元文3 (1738)	報恩 (天平勝宝元年)	慈覚大師(再建) (帰朝之砌)	千手千眼観自在菩薩 (報恩)	草創	孝謙天皇之勅願所、 州内四十八寺 之一寺、天平勝宝元年報恩大師草創之地也、師之威徳靈驗者金山寺之縁起委略之本尊者大師自作之千手千眼観自在菩薩立像	『餘慶寺文書』 『邑久町史』史料編(上)所収
12	高福寺 (天台)	『備前国赤坂郡興福寺福壽寺略縁起』	安永6 (1777)	報恩 (天平勝宝の頃)	—	五智如来 (御作・ 報恩 か?)	開基	昔時人王四十六代孝謙天皇の御宇天平勝宝の頃、吾報恩大師勅命を蒙り、 国内四十八箇寺 開基の一場	『高福寺文書』 『吉井町史』史料編(上)所収
13	妙光寺 (真言)	『備前平岡庄大松山妙光寺縁起』	天保10 (1839)	鑑真 (天平勝宝6年)	—	聖観世音菩薩 (毘首羯磨)	—	な し	『吉井町史』 『吉井町史』史料編(上)所収

※ 近世の地誌などに縁起が収録されている場合があるが、作成年の不明なものは本表から除外した。
 ※ 備前西大寺には寛文本、延宝本、享保本が作成されているが、いずれも永正本の続編であるため、ここでは取り上げない。報恩の名や備前四十八ヶ寺の一つとする記述は確認できない。
 ※ 複数回の中興が行なわれている場合があるが、ここでは中世までの中興者を取り上げ、戦国期以降は除外した。

表 2 『備前四十八ヶ寺巡礼かがみ』記載寺院

「備前四十八ヶ寺巡礼かがみ」の表記		備考（通称）
1	御野郡金山銘金山観音寺	天台（金山寺）
2	津高郡菅野村正保山幸福寺	日蓮・廃寺の後再興
3	津高郡藤田山成就寺	日蓮
4	津高郡本宮山圓城寺	天台
5	赤坂郡旗降山極楽寺	真言（普門院）
6	赤坂郡上地山満楽寺	真言
7	上道郡築地山常楽寺	天台
8	磐梨郡中津山元興寺	天台・廃寺の後再興
9	赤磐郡石井原山千光寺	天台
10	磐梨郡平満山石蓮寺	真言・廃寺
11	赤坂郡笠寺山浄土寺	天台
12	赤坂郡大松山妙光寺	真言
13	赤坂郡沓石山高福寺	天台
14	赤坂郡菖蒲山西光寺	天台
15	赤坂郡金仙山聖満寺	天台
16	和気郡杉沢山長楽寺	天台
17	和気郡一倉山いまハなし	日蓮・廃寺
18	磐梨郡岩生山元恩寺	天台
19	和気郡照光山安養寺	天台
20	和気郡黒沢山満願寺	真言・廃寺
21～39は欠失		
40	上道郡金陵山西大寺	真言（観音院）
41	上道郡岩間山西明寺	真言
42	上道郡今谷山長楽寺	真言
43	上道郡沢田山恩徳寺	真言
44	上道郡瓶井山禅光寺	真言（安住院）
45	上道郡湯迫山浄土寺	天台
46	上道郡脇田山安養寺	天台
47	御野郡吉祥山岩井寺	日蓮・廃寺
48	御野郡金光山岡山寺	天台

岡山県立博物館平成14年度特別展「備前四十八ヶ寺：近世備前の霊場と報恩大師信仰」図録掲載の表を改変し作成した。



写真 4 三十八番・慈眼院

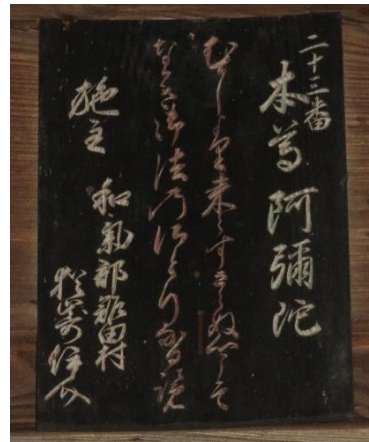


写真 3 二十三番・長法寺



写真 2 二十一番・正楽寺



写真 1 十八番・元恩寺



写真 6 日応寺



写真 5 浄土寺・報恩大師塔

「法音大師魔訶聖人」の石塔

表 3『備中誌』にみられる報恩大師伝承を有する寺院

	寺院名称	宗派	報恩大師と寺の起源に関する記述	村	郡	備考	
1	萬寿山報恩寺宝幢院	古義真言	報恩大師開基というより号せしにや	鳥羽村	都 宇 郡	日 差 寺 に 起 源 を も つ 寺 院	
2	安生山生徳院	古義真言	開山報恩大師	辻村			
3	弘福山 西方坊 興正坊	記載なし	元日指山の衆徒にて興性坊報恩大師の余波なり 寛永十三年戸川氏領内日蓮宗と改められし時日指山去りて爰に移る	上庄村			
4	法輪山連光院宝性寺	記載なし	報恩大師の法脈を継たり 日指山衆徒の防中にて見松坊といひしが寛永十三年戸川氏内心帰依にて領分の寺々彼宗派に改れし時其命に应せず日差山を去て爰に移る	下庄村			
5	両部山無量院浄土坊	記載なし	報恩大師法脈也 是も宝性坊と同じく日差山の衆徒也	大内田村			
6	遍光山蓮華寺千手院	記載なし	是も日差山の衆徒の内にて報恩大師の法脈也しか寛永三年戸川氏領内の寺々内心法花宗に改られし時彼の地を去て此地に遷る				
7	大内山無量寺大蔵坊	記載なし	此寺も日指山衆徒にて報恩大師の統を継て寛永三年此地に来る				
8	(廃寺) 日差山神皇寺	記載なし	開山報恩大師也いつれの頃にや廃寺せられたり				
9	(廃寺) 日差山圓光坊	記載なし	両寺共日差山衆徒の内にて報恩大師法脈の寺也改宗せずして廃寺と成				
10	(廃寺) 日差山百々寺	記載なし	両寺共日差山衆徒の内にて報恩大師法脈の寺也改宗せずして廃寺と成				
11	日差山日差寺	記載なし	開山報恩大師人王四十六代孝謙天皇御宇天平勝寶六年伽藍と日指の山峰に造る本堂聖観音の像を安置す報恩大師の作 報恩大師開寺於備前国五十箇寺於備中国日差寺性徳院其余数箇寺造之云々				
12	清明山鏡善寺	古義真言	里諺曰此地昔五坊有 持宝坊 吉祥坊 宝蔵坊 宝蔵坊 石橋坊と云々真言宗開山報恩大師中興快重法印大永元年三月建立本尊地藏古作也	三手村	賀陽郡		
13	日間山日間寺	記載なし	一説に海中出現の像なりという 開山越智泰澄大師次に報恩大師と云々 秀雄云鐘銘には最澄と有り元亨釈書中泰澄備中に来る事を不載不來して何ぞ其寺を作るべきや疑ふらくは報恩大師の開基といふこそ然ともすへし	羽島村	窪屋郡	日間山関係	

第二章 現代の報恩大師と智明権現の信仰

第一章では報恩大師伝承の大和から備前への伝播と、備前における伝承の確立、備前・備中の報恩大師伝承の拡大について考察を行った。中世には主に勧進に伴って報恩大師伝承の主張が行われ、近世には備前四十八ヶ寺の巡礼が行われるようになり、縁起に報恩大師が取り入れる寺院が増えるほか、開山である報恩大師が境内に祀られるようになる。このように近世になると寺院と霊場の開基である報恩大師自体が庶民の信仰対象になる様子が窺える。

現代では備前四十八ヶ寺の巡礼は行われておらず、報恩大師が今も庶民に信仰されている事例は知られていなかったが、筆者は現地調査により報恩大師信仰が現在も行われていることを確認した。

また備前四十八ヶ寺を構成する寺院では伯耆大山寺で祀られている智明権現を祭祀している場合があり、その内の大賀島寺（天台宗・瀬戸内市邑久町豊原）では本地仏である地藏を神輿に乗せて渡御する祭りを現在も行っている。近世には熊山霊山寺（廃寺・天台宗・赤磐市奥吉原）でも地藏権現（智明権現の異称）の祭りが行われており、現在は熊山神社春祭りとして祭礼が継続されていることが明らかになった。本章では現代における報恩大師と智明権現の信仰について報告し、考察を行いたい。

第一節 現代の報恩大師信仰

はじめに

平安末期に備前・備中へと伝えられた報恩大師伝承は、時代ごとに目的を変えながら語り続けられた。江戸期には備前四十八ヶ寺の巡礼やその開基とされる報恩大師も信仰の対象となる。報恩大師の信仰は近代以降も継続され、赤磐市穂崎では現在も「報恩様」の堂を祀り、毎年八月二十七日には祭りが行われている。またムラで語り継がれている報恩大師に関する口承伝承も確認することができた。

本章では現代に展開されている報恩大師の信仰から備前地域の仏教と人々の関わりを明らかにしたいと考える。

— 現代における報恩様の祭り

現代にみられる報恩大師信仰の事例として、弘法寺奥の院の信仰と、赤磐市穂崎で行われている「報恩様」の祭りの二例を確認できた。これらの事例について調査した内容を報告する。

(1) 弘法寺奥の院・報恩様

江戸期の弘法寺(真言宗・瀬戸内市牛窓町千手)における報恩大師信仰については第一章第三節で述べた。近現代の同寺で展開される報恩大師信仰はその延長線上に位置している。同寺の奥の院には報恩大師の墓とされる塚があり(写真1)、その前に設けられた堂には報恩大師像が安置されていた^①。ここは「報恩様」と呼んで親しまれ、昭和の初期まで参詣者の列が絶えなかった^②といい、現在も近隣の人々のお参りがある。

牛窓町千手に隣接する同町鹿忍出身の片山廣道氏が報恩様の「お堂の新築記念の演芸会」と「霊験」について記している。

大正十一年七月二十七日の夕刻、晩飯を早めに済ませた私は、父に連れられて報恩様に参詣した。その日は報恩様のお堂の新築記念の演芸会があり、それを見物するためであった。

お堂に隣接して幕張りの仮舞台があり、見物席は露店にむしろ敷きの野外演芸場であった。出演者は素人ばかりで、千手の青年がその主だったものであった。いろいろあった出し物の中でたった一つだけ忘れずに覚えていいることがある。細かなことは忘れたが、次のような筋であった^③。(後略)

以後は、若者二人がお地藏様の格好をして出し物をしたこと、報恩様のご縁日の夜に片山氏の祖父が亡くなったことを述べ、「報恩様に召されて永遠の眠りについたのであろう。」と添えられている。また報恩様の霊験についても記されており、大正二二年の夏、片山氏の叔父が東京から帰省し、報恩様へお参りをした。ところがその日から目がだんだんと充血して目やにが出るようになり、二日後には目も明けられぬ状態となった。目薬を付けたが一向に良くならない、片山氏の祖母と叔父は「報恩様にお参りして病気になるとは一体どうしたことであろう、これではとても上京は覚束ない」といい、上京を見合わせ治療に専念した。そうしたところ、九月一日には関東大震災がおこり、祖母と叔父は「目が悪くなったのは報恩様のお蔭で、その為命が助かった」と口をそろえた。関東地域が被災するなか東京の自宅は被害もなくそのまま残っており、「報恩様のお蔭としか言いようがない。全快して上京の際、報恩様にお礼参りしたことはいうまでもない。」としている。さらに「報恩様」のある永倉山には「報恩様の霊水」があり、付近で農作業をする人々に有り難がられていたことも記さ

れている。⁽⁴⁾ 当時の人々が、「報恩様」に対してどのような思いを持っていたのかがよくわかる。

「お堂の新築記念」が七月二十七日に行われたとあるが、報恩大師は『子島山観覚寺縁起』の付録である『子島山寺建立縁起大師伝』⁽⁵⁾や『金山観音寺縁起』⁽⁶⁾には大和の子島寺で延暦一四年六月二十八日に遷化したとあることから、月遅れの宵祭りにあたる七月二十七日に行われたものと考ええる。

筆者が平成二八年に瀬戸内市牛窓町千手で行った民俗調査では、いつの頃までか毎年九月二三日に「報恩様」の縁日が行われており、当時の参道沿いにはアイスクリームなどの露店が出ていたと聞くことができた。いまでも毎月二三日か二十七日にはお参りするということがあった⁽⁷⁾。

また、『千手山奥ノ院 報恩大師数へ歌』⁽⁸⁾（写真2）が作成されていて、歌詞を印刷したものが地域に伝えられている。その奥付には昭和四二年の火災で焼失するまで存在していた弘法寺の塔頭、善集院の徳田智圓住職が校閲者として記されている。作成時期は記されていないが、昭和中期以前と思われる。歌の節についてはすでに伺うことができなかった。以上のことから近年までは周辺の村落を中心に多くの信仰を集めていたことがわかる。

（2）赤磐市穂崎・報恩様

筆者は赤磐市穂崎に報恩大師を祀る堂があることと、毎年八月二十七日には祭りが行われることを知り、令和元年八月二十七日の祭り当日に現地を訪れ、報恩大師保存会会長や、穂崎区長をはじめ、祭りに参加する穂崎区の方々に聞き取りを行った。次にその内容を報告する。

赤磐市穂崎の内、本村上^{ほんむらかみ}の丁字路の部分に「報恩様」の堂がある（写真3）。半間四方ほどの小さな堂で、屋根の棟に葺かれた瓦に右から左に向けて「報恩大師」の文字が浮き彫りにされている（写真4）。堂の中には弘法大師像や仏像が安置されているが、報恩大師として祀られている像があるかどうかはよくわからない。「報恩様」では四月二一日に春の大祭が、八月二十七日に夏祭りが行われている。

夏祭りは毎年八月二十七日の一八時から二一時頃まで行われる。報恩様のお堂には赤い幕が張られ、提灯やのぼりが立てられているほか、花やお膳^{ほむら}が本村の人々によって供えられている。僧侶による読経は行われない。「報恩様」と呼んで親しまれているが、赤磐八十八カ所の七〇番札所になっており、のぼりにも「南無大師遍照金剛」と記されている。報恩大師がここに祀られるようになった経緯や信仰の目的については聞くことができなかったが、ムラのなかに祀られ、さらにこれほど盛大な祭りが行われている例は他にない。

丁字路の辺りには穂崎区の方々によって様々な模擬店が設けられ、お年寄りから子供まで地区内外から大勢が訪れている。報恩様の堂に向かって右側にはイッチョウ台を置いて

「お接待」が行われており、お参りした人々は女性たちから「報恩大師様抽選引換券」が張り付けられた煎餅の入りの袋を受け取っていた。お接待は報恩様のお堂に近い一二軒の女性によって行われ、その年に二人ずつ輪番で担当し、当日にはその他数人が手伝う。煎餅の袋詰めも女性らによって行われ、今回は三五〇袋を用意したという。

現在の祭りは平成一〇年に再開され、令和元年で二二回目を迎える。報恩大師保存会と穂崎区の共同で実施されており、模擬店に用いるテントやフライヤーなどの器具も穂崎区で保有している。かつては穂崎の公会堂（現・コミュニティハウス）から報恩様のお堂まで、露天商が立ち並んでいたが徐々に少なくなり、最後には瀬戸町（現岡山市東区瀬戸町）から訪れる金魚すくい一軒のみとなった。

平成一〇年に現在のような形で再開される前には、穂崎の内「山根木（やまねき本村上・本村中・本村西・井ノ坪の一部）」の人々によって準備やお接待が行われていた。かつてのお接待は、報恩様の祭り翌日の朝に行われ、豆モチなどが子どもたちに配られていた。夏休みの終わりに行われる「報恩様」は子どもたちの楽しみであったという。また、かつては報恩様の側にある数軒の家に芸人や旅役者が泊り、その家の門に舞台を組んで芝居や映画などの上映が行われた。平成一〇年までの数年間は露天商が一軒も来ず、数年間はお接待も行われていなかったようである。

「報恩様」では四月二一日に春の大祭が行われるが、お接待のみで露店や模擬店は並ばない。夏の祭りは毎年八月二七日の一八時から二一時にかけて行われる。

以上が現地調査によって得られた祭りの概要である。報恩様の堂がこの場所に祀られるようになったのは現地では大正とも昭和初期ともいわれる。「報恩様」は赤磐八十八力所に組み込まれ、七十番札所となっている。赤磐八十八力所は大正二年に設けられているためその際に堂を設けたか、既存の堂を札所として組み込んだことが考えられるだろう。

穂崎には備前四十八ヶ寺の一つである常楽寺（天台宗・岡山市東区草ヶ部）の檀家があることから、同寺の影響により報恩大師が祀られた可能性も考えられるだろう。穂先の報恩様は、報恩大師がムラで祀られる唯一の事例である。

（３） まとめ

ここに取り上げた二か所の民俗事例を確認することができた。弘法寺における報恩大師信仰は、江戸期以来継続されているもので、寺院による信仰環境の整備が行われた結果であると考えられる。赤磐市穂崎の「報恩様」は寺院の境内ではなく、ムラのなかに祀られたものである。江戸期以来、備前四十八ヶ寺の巡礼や報恩大師信仰が盛んになる中で、ムラ々に報恩大師信仰が浸透・定着した結果、ムラのなかに祀られることになったものと考ええる。中世には勧進に伴って語られた伝承が、江戸時代以降は庶民信仰の対象に変化し、今日に至

るまで生きた民俗として継承されているのである。

二 報恩大師に関する口承伝承

筆者は備前各地で民俗調査を行うなかで、報恩大師に関する口承伝承の存在を知り、これをきっかけに民話集や自治体史などから、報恩大師に関する口承伝承の収集を試みた。その結果、寺やムラに伝わる複数の口承伝承を確認することができた。これらは報恩大師信仰の浸透を表わすものと考ええる。伝承の中には報恩大師の名として芳賀坊と称するものや、天皇が報恩大師に派遣した勅使に関する伝承もあり、これらも合わせて得られた口承伝承を次に示す。

(1) 寺院における伝承

①弘法寺（真言宗・瀬戸内市牛窓町千手）

弘法寺は備前四十八ヶ寺の一つで報恩大師伝承をもつ。

奥の院・報恩様

同寺の奥の院にある塚は報恩大師の墓であるとされる。現在も報恩様として親しまれ、近隣からの参拝がある。近世の史料である『吉備温故秘録』巻之四十三の墳墓の項目には報恩大師の塚に関する記述の他に、報恩の弟子の墓とされる伝承も記されている。その内容を次に記す。

報恩大師墓 千手村弘法寺境内に有り。

永倉峯といふ処に在（又四十九峯とも云）。石碑もなく、ただ石を積みて塚とし報恩大師の墓と古より里民寺僧共に語りし也。

釋報恩は当国津高郡芳賀村の人也。延暦十四年大和小島寺にて寂せり、然るに、当山に墓あるを考ふるに、当村千手山は、天平勝宝三年報恩この寺を再造して、当国四十八ヶ寺の数に加えし也。故に、古くは報恩山興法寺といひし也。〈延暦年中火災、その後弘法大師、この旧跡を見て又新たに寺院を建けりと云、それより千手山弘法寺と改めしなり。〉報恩再興なるに因りて、当山にも逆修の墓を設けしならん。

五輪 同寺仁王門の前に、一本の大松あり、其下に五輪の石塔あり。

報恩大師の弟子にて、当寺住僧の墓のよし、寺僧の説なり。〈古き五輪なれども、はるか後に基きしものならん。〉

（吉備群書集成刊行会『吉備群書集成』八、歴史図書社、一九七〇年、四四三頁。）

②日応寺（日蓮宗・岡山市北区日応寺）

日応寺は報恩大師伝承をもつ日蓮宗寺院で、もとは天台宗であったとされる。同寺には現在明文化された縁起は伝えられていない。同寺には口承伝承として報恩大師に関する様々な伝承が伝えられているほか、桓武天皇が報恩大師に派遣したとされる勅使に関する伝承も伝えられている。これらの伝承を次に記す。

毘沙門天像（一体）・不動明王像（一体）・密迹執金剛像（二対）

これらの像は行基菩薩によって作成され、桓武天皇によって寄付された霊像とされる。大和高市郡小島寺に安置されたが、報恩大師が備前に帰錫する際に日応寺に移転されたものと伝えられる。

（記念誌編集委員会『宗祖七百年遠忌記念誌 勅命山日応寺』勅命山日応寺、一九九六年、平成八年、六・八頁。）

勅使堂

勅使堂は勅使屋敷跡に建つ堂で、桓武天皇が報恩大師に勅使を派遣した際に、勅使が滞在したと言われる旧跡である。後に堂を建てて勅使明王として勧請し、毎年祭事を行った。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二四七頁。）

王御膳所

勅使接待のために設けられた、食膳を調える場所で、勅使帰京後に食器などを埋めて巨石を置き樹木を植えたという。後に祠が設けられたが近年その祠を廃して石碑（写真5）を建てたという。石碑には中央に題目を刻み、その右側に「王御膳旧跡」、左に「大正二年八月廿八日」と刻まれている。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二四八頁。）

（『宗祖七百年遠忌記念誌勅命山日応寺』勅命山日応寺、平成八年、六頁。）

勅使道

王御膳所跡から勅使堂へ向かう道を勅使道という。また王御膳所の東南に小屋口と呼ばれる地名が有り、勅使の供奉をする人々が滞留するために立てた小屋の跡であると伝えられている。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二四八頁。）

不動の滝

報恩大師が修行したと言われる滝で、伝承によると大師の精诚が天に通じ、不動明王が彼の頭上に降りてきたという。この像は石造で四寸二分（約一二・七cm）であるというが、

現在は行方不明である。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二四六頁。）

③石蓮寺（廃寺・真言宗・赤磐市石蓮寺）

石蓮寺は報恩大師によって開かれたとされる備前四十八ヶ寺の一つで、岡山藩が寛文六年（一六六六）に行った寺社整理により廃寺になっている。寺跡には蓮華岩と呼ばれる花崗岩が露出しており、現地に残される石造十三重石塔に用いられた石材が採取された跡であると伝えられている。

石蓮寺建立に関する伝承

『改訂赤磐郡誌』（一九四〇年刊）には次のような伝承が記されている。

伝え云ふ昔報恩大師が此の地に錫を止められた時、不思議にも、此の岩に蓮華が現れた。其の靈験によりて此の地を相して寺を建て、石蓮寺と号したと云ふ。

（岡山県赤磐郡教育会『改訂赤磐郡誌』大真屋書店、一九四〇年、四〇二頁。）

④日差寺（日蓮系単立・倉敷市山地字日差）

日差寺は治承四年（一一八〇）の紀年銘をもつ『金山観音寺縁起』に報恩大師が創建した寺院として登場する⁹。現在は日蓮宗系の単立寺院となっている。

毘沙門天摩崖仏

今日の日差寺の本尊は岩盤に刻まれた毘沙門天像（写真6）で、現在も報恩大師によって刻まれたと伝えられている。幕末に編纂されたとされる『備中誌』の「日指明神」の解説には次のように記されている。

昔日指の神社とて日指山の頂に鎮座せり今尋之山に一ツの旧跡を残し其側の大岩に毘沙門天を彫付たり即ち吉備津宮御崎の本地仏にて賀陽氏の記にも出せり昔吉備津彦命温羅退治の時日指の夜目山主命其子夜目丸御方となり所々の戦ひに打勝給ひ温羅降伏せし事宮内及鬼の城縁起にも出つ日指明神と云うは此夜目山主命夜目丸を祀れるなり其後天平勝宝に至て報恩大師此地に寺を造りしか日指社湮滅せしを悲しみて岩の側に毘沙門の蔵を刻んで彼命の霊を祭りしより世々日指寺是を掌りたり是吉備津の神拾参社の一ツにして本地毘沙門天なれはなり今は日指の神の名は亡ひて里人すら毘沙門とのみいへり其像を以ていへるはさる事なれども願はくは日指明神と唱えて昔のおもかげを伝えまじきものなり

毘沙門天石体尊像略図

日指明神磐石に刻す本地仏毘沙門天図

右二図略之

(吉田研一『備中誌』日本文教出版、一九六二年、二一～二二頁。)

(2) ムラにおける伝承

次にムラに伝わる伝承を取り上げる。金山寺や日応寺など報恩大師伝承を有する寺院の所在地に伝わるものもあり、報恩大師の験力を示すものや清水を湧き出させたというものがある。また桓武天皇が報恩大師に派遣した勅使に関する伝承、報恩大師の名とされることがある芳賀坊の伝承などが確認できる。

①岡山市北区金山寺(天台宗金山寺所在地)

報恩大師開基伝承を持ち、備前四十八ヶ寺の惣本寺である金山寺所在地のムラに伝わる伝承が『岡山民俗』五三号で報告されている。「蛇谷」「報恩大師御杖水」と題されたもので、それぞれその全文を記す。

蛇谷
やだね

昔々金山寺の幽霊の間に大きな蝦蟇^{がま}が住んでいた。又一方蛇谷に大きな蛇がいたがこの両者が相争った。ところが蝦蟇も大きいし蛇も大きいので共にのみこむことが出来ず闘争はいつはてるともわからなかった。これでは屋敷が出来ぬというので報恩大師は蝦蟇を法力で幽霊の間に押し込むと蛇は「綱引き」(門前南数百米の所)の所から「ここから帰ってはならぬ、ここで祭ってやるから」といつて追い出された。これより綱引きの縄を蛇の形にするのだという。尚その縄は大きな樟を相手にはっていたが地蔵様が出来てからはその首にまいてするようになった。(後略)

(有森猛「岡山市金山の伝説と民謡」『岡山民俗』五三号、岡山民俗学会、一九六三年、四頁。)

報恩大師御杖水

報恩大師が金山へ来られるときのどがかわいて困られた。時に早魃で水がなかった。大師がどこかに水はないかと岩の間に杖を立てられた所水がふき出した。この水はどんなににがらそうとしてもにがらぬという。

(有森猛「岡山市金山の伝説と民謡」『岡山民俗』第五三号、一九六三年、四頁。)

現地には碑が建てられており、正面に「報恩大師御杖水」向かって左側面には「施主の名前とともに「昭和五年四月吉日建之」と刻まれている(写真7)。

②岡山市北区日応寺(日蓮宗日応寺所在地)

北区日応寺は報恩大師伝承をもつ日応寺所在地のムラであり、『馬屋上村誌』に記されている伝承を次に示す。

勅命山日応寺・報恩大師

日応寺を建てたのは、報恩大師といわれるお坊さんだった。報恩大師は、桓武天皇の病をみごと平癒し、そのほうびとして「望みがありやー、何でも言ええー」といわれて「備

前の国に四十八か寺を建てさせてくれー」と望み、許されて最初に立てたのが日応寺であり、「勅命山日応寺」となったのである。

又、馬屋下郷生まれの芳賀坊という人も、この日応寺で修業し、当時の天皇の四人の内三人まで加持祈祷に成功し、そのため日応寺も天皇の加護によって、ますます栄えたのである。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二八八～二八九頁。】）

不動の滝

日応寺勅使堂のさらに奥に、小さな滝が現在も流れている。この滝は、日応寺の生みの親である報恩大師の修業の場と伝えられている。報恩大師が桓武天皇の病平癒の役を賜わるのに、競争相手が一人いたという事である。そして競争相手と比べてみると、報恩上人よりその人の背丈のほうが、五部高かった。そこで報恩上人が、この不動の滝にうたれると、突然お不動様が天から降ってきて、報恩上人の頭に当たり、こぶができ、競争相手に勝利し、無事天皇の病を治し、四十八か寺建立を許されたというものである。なお、この滝では、栄西も修行したと伝えられている。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二九〇頁。）

③岡山市北区芳賀

報恩大師産湯の井戸

北区芳賀は、岡山市西部にある農村で近世の津高郡に位置する。日応寺のある北区日応寺から南へ五キロほど隔てた場所にある。

顕本寺（日蓮宗）境内の南西部にある山の中腹には報恩大師誕生の際に使用した「産湯の井戸」が存在している（写真8）。同寺は明治期の創建であり伝承との関りはない。江戸中期に著された『備陽国誌』には芳賀村に報恩大師の宅地の跡があることが記されている。

『備陽国誌』元文二（一七三七）年

報恩大師。へ一本に芳賀村の人なり。金山寺の寺記に見えたり。へ芳賀村に宅地の跡と云所あり。

（吉備群書集成刊行会『吉備群書集成』一、歴史図書社、一九七〇年、一七四頁。）

④岡山市北区富吉付近

北区富吉は日応寺がある北区日応寺の南側にある山間の農村である。『馬屋上村誌』に芳賀坊の伝承が記されている。芳賀坊は報恩の名とする伝承もあるためその全文を次に示す。

高清水へへ内は割注

御津郡誌に「馬屋上村大字三和狼谷と大字吉富及び、馬屋下村大字芳賀との境なる山腹にあり。道の西側にある小さな井戸をいう。古書に高清水とて載す。如何なる謂れあるにや。」と書かれてある。

言い伝えでは、芳賀坊が、杖でついたら水が出たので高清水と呼ばれるようになったということである。

（馬屋上小学校創立百周年記念事業馬屋上村誌編集委員会『馬屋上村誌』馬屋上小学校創立百周年記念事業常任委員会、一九七四年、二九四頁。）

⑤岡山市北区田益

北区田益は北区芳賀や北区吉富の東側にある農村である。このムラには報恩大師の口承伝承があり、報恩の名前として芳賀坊の名を伴った伝承が語られている。二〇一六年に刊行された『横井のむかし話』に収録されている。その要約を次に示す。

大師の杖つき井戸（岡山市北区田益）筆者要約

田益にある小原山の峰続きに大坂谷という所があり、その中腹に北側に面して一メートル四方の小さな井戸があった。石材を採取するために壊されたが、この井戸はどんなに日照りが続いても枯れることが無かった。村の人々は枯れることのない井戸を大師のおかげだと大変ありがたく思っていた。大師は布教のためこの道を通ったが、大坂谷の辺りは一息入れるにはちょうど良いところであった。ところが汗が出てもののどき渴きを潤す水が湧いているところがなかった。大師は皆の願いを叶えるために、錫杖で地面を一突きすると澄み切った水がこんこんと湧き出した。道行く人々はこの水でのどを潤した。村の人々はこの水を大切にするため井戸にした。誰が言い出したか分からないが、「大師の杖つき井戸」と言われるようになった。

大師というと弘法大師を思い浮かべるでしょう。（中略）今から一二〇〇年ほど前、馬屋上地区の芳賀（現岡山市北区芳賀）に幼い時の名を快賢というお坊さんがいた。一五歳の時、馬屋上の日応寺（日蓮宗・岡山市北区日応寺）で修業した。芳賀坊とも言われて、立派なお坊さんになった。三十歳の時高野山で修業して、都に知れ渡るほどの名高い坊さんになった。孝謙天皇の病気を治し、天皇は「報恩」という名を与えた。報恩は桓武天皇の病気も治した。報恩大師は備前に帰って日応寺を修業するお坊さんを鍛えるところにした。また金山寺その他四十八のお寺を作った。報恩大師はお寺を建てるために、何度も小原山の峰を通った。

（後略）

（横井のむかし話編集委員会、『横井のむかし話』第二集、みつ印刷（印刷）、二〇一六年、五一〜五四頁。「第6話大師の杖突き井戸」）

（3）まとめ

寺藏文書にみられる報恩大師伝承は、その寺の開基や中興として語られることが殆どである。それに比べて口承伝承として伝えられているものは報恩大師の事績をより具体的に述べたものがみられる。報恩大師伝承が人々の間に浸透し、現代においても語り継がれていることが明らかになった。

（本節は『日本文化史研究』第五一号（二〇二〇年三月）に掲載した「備前における報恩大師の口碑―芳賀坊快賢と清水の伝承を中心に―」を加筆修正したものである。）

おわりに

報恩大師は奈良時代の大和を中心とする地域で活躍したとされる。その伝承は奈良や高野山、京都清水寺などに伝えられているが、それを遙かにしのぐ数の伝承が備前・備中で確認できる。中世以来の山岳寺院を中心に多数の寺院が報恩大師伝承を持ち、民間における口承伝承と報恩大師信仰の存在は備前・備中地域にみられる大きな特徴である。第一章で明らかになったように、時代によって伝承を主張する目的に変化がみられ、今日も報恩大師信仰と口承伝承にみられるように生きた民俗として人々に伝承されている。

近年では平成二三年に「備前四十八ヶ寺の集い」が明王寺（天台宗・岡山市東区竹原）で行われて以来、毎年備前四十八ヶ寺を構成する寺院などで開催されている。さらに報恩大師生誕一三〇〇年とされる平成二九年には、惣本寺とされる金山寺で法会が行われた。

また報恩大師開基伝承を有する最上稲荷山妙教寺（日蓮宗・岡山市北区高松稲荷）では、同じく平成二九年を報恩大師生誕一三〇〇年として、同寺の月刊誌である『最上教報』に二〇一七年一月号から一二月号にかけて、報恩大師ゆかりの地を紹介する記事が連載されるなど、伝承を有する寺院を中心に再び報恩大師に注目する動きが広がっている。

このように現代においても備前・備中では報恩大師が必要とされており、これらの動きについて今後注視していきたいと考える。

【註】

（１）奥の院の報恩大師像は、現在弘法寺の塔頭の一つ、東寿院にある。

（２）難波俊成「報恩大師と備前四十八ヶ寺伝承」『岡山民俗文化論集』岡山民俗学会、一九八一年、二八二頁。

（３）片山廣道『故郷地名随想』、片山共夫、二〇〇〇年、一五頁。

- (4) 同前、一六頁。
- (5) 財団法人鈴木学術財団『大日本仏教全書』講談社、昭和四七年、二七〇～二七一頁。
- (6) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、昭和三〇年。
- (7) 拙稿「瀬戸内市牛窓町千手の民俗 調査報告」『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第一八号、二〇一八年、七一頁。
- (8) 作者野口紋太郎 校閲者 徳田智圓『千手山奥ノ院報恩大師ノ数へ歌』。
- (9) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、二五頁。

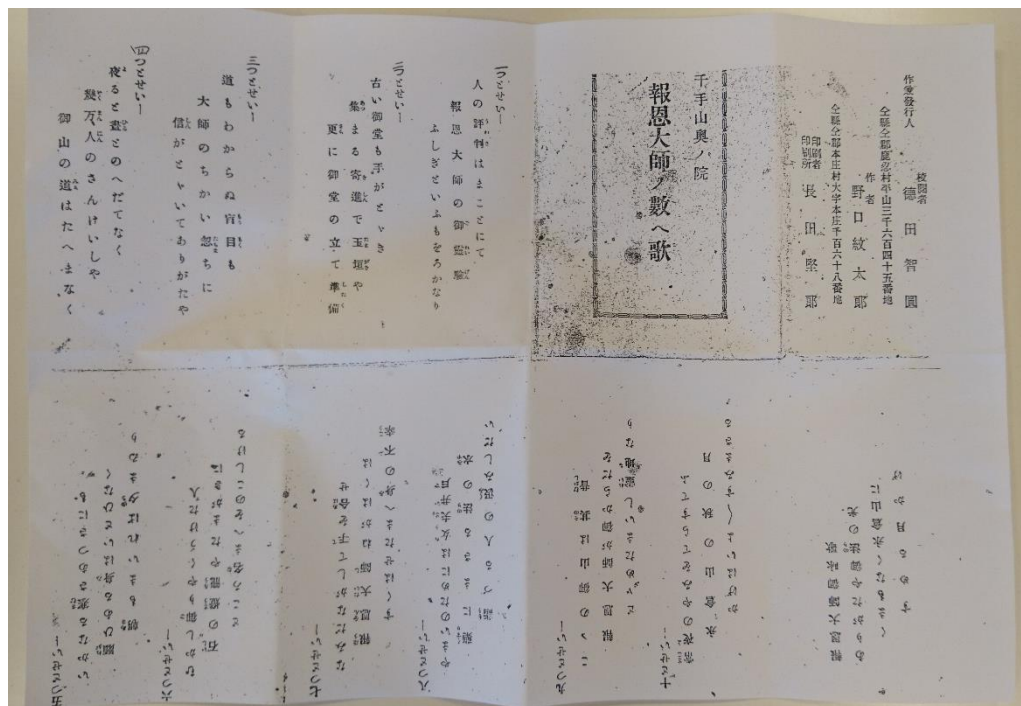


写真 2 『報恩大師ノ数へ歌』



写真 1 弘法寺奥の院 報恩大師供養塔



写真 5 日応寺・王御膳所跡の碑



写真 8 報恩大師産湯の井戸



写真 4 棟に刻まれた「報恩大師」の文字



写真 7 「報恩大師御杖水」と刻まれた碑



写真 3 赤磐市穂崎の報恩様



写真 6 日差山・毘沙門天摩崖仏

第二節 現代の智明権現信仰

はじめに

本節では備前四十八ヶ寺で祀られる智明権現について考察したい。備前四十八ヶ寺を構成する寺院には智明権現を祀る寺が複数含まれている。そのうち大賀島寺（天台宗・瀬戸内市邑久町豊原）では、本地仏である地蔵を神輿に載せて神輿渡御を伴う権現祭りが現在も執行されている。智明権現は伯耆大山寺（鳥取県西伯郡大山町）の本尊であることから、備前四十八ヶ寺と伯耆大山寺の関連が想定される。

ここでは現在に継承されている智明権現の祭り二事例を調査し、神事と祭祀組織について報告する。そのうえで備前四十八ヶ寺に智明権現が勧請された歴史的な背景について分析したい。

一 智明権現を祀る寺院

備前四十八ヶ寺には現在天台・真言・日蓮の各宗派の寺院が含まれているが、第一章第二節で構成寺院の大部分はかつて天台宗であった可能性が高いことがわかった。その成立は中世末期に金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）にいた豪円のもとで、天台寺院の優位性の確保と宇喜多氏の政治的な意向を反映して行われたと推察した。

表1は現在備前四十八ヶ寺のうち、智明権現、または大山信仰の存在が確認できる寺院の一覧である。各寺では智明権現の本地仏である地蔵の木像や石像を祀るほか、屋外に「大山智明大権現」などと刻んだ石塔を建てる場合がある。ただし、智明権現の本地仏は地蔵であるため、智明権現であることが忘れられ、地蔵として祭祀されている例が他にもあると思われる。

まず惣本寺である金山寺では、宝永（一七〇四～一七一一）以降に編纂された『吉備前秘録』に地蔵権現（智明権現の異称）が祀られていることが記されている。^①表1に記した通り、金山寺のある金山山頂には「大山智明大権現」と刻まれた石塔があり、空気の澄んだ日には大山を臨むことができるという。長楽寺（真言宗・岡山市中区今谷）には智明権現社が存在し、明王寺（天台宗・岡山市東区竹原）にはかつて智明権現を祀る社がり、現在も本地仏である地蔵の木像（写真1）が伝えられている。最明寺（真言宗・岡山市東区福治）には権現堂があり、本殿に地蔵の石像が安置されている。また妙光寺（真言宗・赤磐市石上）のあ

る大松山の山頂には熊山神社と大山宮の遙拝所がある。⁽²⁾ どちらも智明権現を祀っていることから大山信仰が存在していることがわかる。大賀島寺では地蔵の木像を祭祀している。円城寺（天台宗・吉備中央町円城）には「大山智明権現」と刻まれた石塔が存在する。以上のように現在も智明権現が祀られている寺院とかつて祀られていた寺院が備前四十八ヶ寺のうち六ヶ寺を数える。

現在、智明権現を祀る寺院のうち、大賀島寺では毎年権現祭りが行われている。また備前四十八ヶ寺以外では近世の熊山でも地蔵権現（智明権現の異称）の祭りが行われており、明治以降は熊山神社春祭りとして現在も続けられている。次に大賀島寺と熊山の祭りを検証した上で、なぜ智明権現がこのように祭祀されるようになったのか、智明権現の勧請について考えてみたい。

二 大賀島寺の権現祭り

備前の寺院で行われる規模の大きな祭りや行事はいくつか知られているが、智明権現の祭りについてはこれまであまり注目されてこなかった。本地仏である地蔵を神輿にのせて渡御を行う事例は伯耆大山寺が知られるが、全国的に見ても数少ない。ここではまず大賀島寺の権現祭りについて考察したい。

（１）大賀島寺の概要

大賀島寺（天台宗・瀬戸内市邑久町豊原）は報恩大師伝承をもつ備前四十八ヶ寺の一つである。山号は大雄山といい寺の位置する山の名称も同じである。大賀島寺や大ヶ島の集落、両者の位置する山は一般には「オオガシマ」と呼ばれている。同寺の境内にある権現堂には智明権現が祀られており、毎年四月二十九日には「権現祭り」が行われる。この祭りは、寺の周辺にある村落によって行われているが、これらの村落に含まれるすべての家が大賀島寺の檀家というわけではなく、非檀家も含まれている。つまり大賀島寺の檀家圏を超えて祭祀組織が形成されているのである。また権現祭りで神輿を担ぐことができるのは大ヶ島、大橋、円張生まれの長男のみであったことや、檀家が一軒も存在しない邑久郷が祭りでダンジリを引く。

同寺の智明権現は、邑久郡や上道郡南部の村々で牛馬の神として信仰を集めていて、かつては年に一度の権現祭りや毎月二四日には牛馬を連れて参拝する人が多く、帰りには参道脇にあるクマザサを刈り取って持ち帰り、牛馬に与えたという。戦後は邑久郷などで酪農家が増え、牛を飼う人々は毎月二四日に参っていた。権現祭り当日には雨がよく降るといい

「オオガシマのおおぐそ流し」と言われている。これは祭り当日に多くの人々が牛を連れて見物に訪れ、牛の落とした糞が雨水で流されるという解釈がされている。「おおぐそながし」という言い回しは備前の熊山や伯耆大山でも言われる。

大賀島寺智明権現のお札があり、檀家総代が初穂料を集める際に各檀家に配布する。権現祭り当日には権現堂の境内で潤徳の人々によって販売されている。この札は持ち帰ると納屋や牛舎に張られる。

(2) 権現祭りと祭祀組織

大賀島寺の権現祭りは毎年四月二四日に行われていたが、昭和五二年頃に権現祭りが再開されてから祝日である四月二九日に行われるようになった。周囲の村々は大変賑やかな祭りであるため「けなり祭り」と呼んでいたという。「けなりい」とはこの地方でうらやましいという意味である。

地元の人々によると「大賀島寺ではなく智明権現の氏子による祭り」であるといい、主催者も大賀島大智明権現保存会が務めている。檀家でない家を含む地区や全く檀家の存在しない地区が祭りに参加することの意味はここにあるようだ。

次に平成三一年四月二九日の祭り当日に行った調査の結果と、その前後に実施した話者からの聞き取りの結果を報告したうえで、文献史料を用いて祭りの変化を検証したい。

権現祭りの展開

祭り当日の午前一〇時二〇分から客殿で円張、邑久郷、仁生田、豊安の順にシャギリの奉納が行われる(写真2)。シャギリとは笛や太鼓、鐺鉦などを用いたお囃子のことである。

本来は小学生の男児のみがシャギリを行うが、現在も小学生の男子だけで続けているのは邑久郷のみで、他の地区では女兒や中学生も加わる場合がある。一二時四五分から各地区がダンジリ小屋の前にダンジリを出し、その中に子供達が乗ってシャギリを行う(写真3)。

一三時からは権現堂で法要が行われる。これに合わせて先達、稚児(女兒)、僧侶の順で客殿から権現堂に向かう。その後は各地区のダンジリが円張・邑久郷・仁生田・豊安の順で御旅所に向かう。

各地区はシャギリを囃子ながら、途中斎竹に囲まれた場所を通り抜け、墓地の西側を通って御旅所まで進む。御旅所を取り囲むようにダンジリが並ぶ。御旅所には四隅に竿を建ててヤグラ状に組み、上部には円の中に大の字を記した幕が張られている。大の字は大賀島の大、大山の大に因んだものであるという。

法要の後、智明権現の御神体である地蔵(木像)が本殿から神輿へ移される。この際、拝殿の外側から地蔵が見えない様に、神輿が白い幕で覆われる。地蔵を移す僧侶と数人のコシ

カキ（神輿を担ぐ人）のみが幕の内側に入ることを許される。一般の信者は拝殿に上がることはできない。

地蔵が神輿に遷されると神輿を権現堂から出し、同境内の南に据える。一四時から拝殿前でコシカキと稚児によって小学生以下を対象にしたお菓子投げが行われ、続けて一般向けの餅投げが行われる。その後御旅所に向けて神輿が出発する。稚児、僧侶、神輿の順で御旅所へ向かう。順路は図1の通りである。神輿は大ケ島、大橋、円張、邑久郷の男性によって担がれる。彼らをコシカキと称する。人数は一六人とされるが、実際には二〇人ほどで担いでいる。

神輿を据える際のウマ（台）二つを大橋の二名が、供物の入った長持を大窪の人が運ぶ。また、かつては神輿の後ろを前後に水を汲んだ桶を天秤棒で担いだ人がついて歩き、神輿を据える際には水を柄杓で撒いてその場を清めていたという。

神輿は持ち上げた時と下ろす前に、コシカキたちが神輿を波打つように上げ下げする「ネル」という動作を行う。ネル場所は権現堂の中、権現堂の境内、本堂前、鐘楼門内側、権現堂東側入り口前、斎竹の内側、御旅所である。本堂前、鐘楼門内側、権現宮東側入口前では神輿を下ろさない。神輿は墓地の東側を通過して御旅所へ向かう。各ダンジリの一行は神輿が見えるようになるとシャギリをはじめめる。

御旅所の奥には石造りの地蔵が常時安置されている。神輿が御旅所へ到着すると地蔵の前に神輿が据えられ、僧侶による般若心経の読経が行われる。この時御旅所に据えた神輿の周りを僧侶の間に稚児が一人ずつ入って、時計回りに歩きながらマワリドキョウを行う。その時僧侶は散華を行い、人々はその散華を拾いに行く。ここでの法要が終るとダンジリが御旅所を出発する。帰りは墓地の東側を通過して斎竹の間を通り、境内のダンジリ小屋に戻る。

道中シャギリを続け、ダンジリ小屋に到着した後も全てのダンジリが戻るまでシャギリを続ける。そして神輿も元の来た道に戻り、復路も斎竹の間で輿を下ろす。復路でも斎竹、本堂前、権現堂前でネル動作をする。神輿が権現堂へ戻ると境内の南に神輿を据え、二回目のモチ投げが行われる。その後神輿が権現堂へ入り、ご神体が本殿へ戻されて一七時三〇分ごろには一連の行事が終了する。平成の始め頃までは、子ども神輿があり、男児女児に関わらず担いでいた。その後豊原コミュニティハウス（コミュニティ協議会）の子ども神輿がしばらくの間担がれていた。

祭り前の日曜日に大賀島大智明権現保存会の人々約五〇名が大橋にある豊原コミュニティハウスに集まり、餅投げ用の餅を約六俵分（三六〇キロ）つく。

前日または前々日には境内の清掃が各地区によって行われる。この際、潤徳地区は権現堂の境内を清掃し、当日には権現堂の境内、拝殿に向かって左手にテントを張って権現様のお札を販売する。

円張での聞き取り

以前は御旅所へ向かう道は墓地の東側のみで、西側の道は無かった。大戦中の昭和二〇年にも権現祭りは行われた。その当時は長男のみがシャギリに参加するが、役割が大太鼓一名、カンコ（小太鼓）一名、カネ二名、ツツミ二名の計六人分の役しかなく、参加できないものもいた。参加しない子ども達は祭りに来なくてもよかった。シャギリに参加できるのは本来小学生で、その後は笛を担当する場合がある。笛に年齢制限はなく上手な人はいくつになっても担当する。また当時は、客殿で奉納されるシャギリは地区ごとに順番に行われるのではなく、四地区が一度に奉納していた。そのため笛や掛け声が大きくないとシャギリを行う子ども達はやりにくかったそうである。また潤徳が行っていた大名行列は、通称ヒーサーと呼ばれ、ヤッコや挟箱、ヒーサー（一〇メートルほどの鎗をもった人）がいて、ヒーサーは二人一組で、槍の下部を互いに投げては受け取るという動作を繰り返していた。大名行列は潤徳が行っていたが、昭和二〇年の大水で道具が流されたため行われなくなった。

大橋地区は神輿の飾り紐にアカネという赤い布を巻きつける。かつては祭りの際に観客がこの赤い布を奪い合っていたという。目的は不明であるが、境内のクマザサを持ち帰って牛馬に与えることと同様の目的があったのではないかということである。

（話者 昭和九年・一九年円張生まれの方より）

邑久郷での聞き取り

戦時中は祭りが行われていなかったが、小学校六年生の頃にシャギリが再開された。邑久郷のうち用木ようぎが始め、二〇三年は用木のみでやっていた。それ以後は清野きよのと島之路しまのじ、用木と竹田、松江と納岡のなか、吉塔（東吉塔・中吉塔・西吉塔）の四つの組に分かれて順番に権現祭りでシャギリの奉納とダンジリを担当していた。しかし伊勢湾台風（昭和三四）で大賀島寺境内にあるダンジリ小屋が破損し、邑久郷のダンジリも被害に遭った。以後はすべてのダンジリを持つ地区がシャギリの奉納をやめていた。その後昭和五二年ごろに邑久郷がシャギリを再開し、二〇三年経てから他の三地区もシャギリを再開した。話者は笛を作成していたそうで、肉の薄い竹の方が音が良く響いたという。現在は購入している。

またコシカキについては円張が勢力を持っており「円張のもんじゃ担がせん」と言っていた。しかし、コシカキの人数が少なくなり昭和五五〇五六年頃から邑久郷の人々も神輿を担ぐようになって今日に至るという。

また、話者が幼い頃に聞いた話では乙子と神崎は千町川を舟で上ってきたという。大橋のあたりで船をおり、大ヶ島の西側を登るナナガリとよばれる道を通って権現祭りにやってきました。これら二つの地区がいつまで参加していたかは分からない。

かつては円張には鍛冶屋が多くあり、祭り当日や毎月二四日には大賀島寺境内で販売していた。祭りの日には出店が一〇数店並んでいたという。

邑久郷などは山（大ヶ島）の南に位置することから山南といい、円張・豊安・仁生田など北側に位置する地域をヤマキタといった。

（昭和十一年邑久郷生まれの方より）

以上が権現祭りの現地調査の報告である。牛馬の神として信仰を集めていること、かつては鍛冶屋が農具などの販売も行っていたことから、権現祭りは農作物の豊作を祈願する祭りであることが窺える。境内の北方にある御旅所からは同木異体の地藏権現を祀るとされる熊山と、遙か彼方に大山を望むことができる。地域の人々は「権現様が年に一度遊びに出かけられる」と伝えている。大山を望むことができる御旅所に向き、大山と熊山を背後に神輿を据えて、本来一体である智明権現の供養を行うのである。

また昭和前期から今日に至るまでの間に祭りの様子が変化していることがわかった。権現祭の始まりや近世・近代の様子は不明である。『改訂邑久郡史』（一九五四年刊）には次のように記されている。

花雲隴なる四月二十四日、大権現の尊像（座像三尺五寸）を神輿に遷しまいらせ、豊原村円張、今城村仁生田、太伯村神崎邑久郷の山車、邑久村豊安、太伯村乙子の御座船、豊原村潤徳の挟箱・鎗・鉄砲等の供奉華やかに御旅行所に移御、こゝにて行わるゝ莊厳なる法楽を拝せんとて群集する善男善女は一山を埋む^③

この記述にみられる豊原村や今城村という村名は明治の市町村制によるもので、明治期以降の祭りの記載と察せられる。これにより神崎^{かんざき}（現岡山市東区神崎町）や乙子^{おとこ}（現岡山市東区乙子）、も役割をもつて祭りに加わっていたことがわかる。

権現祭りの祭祀組織

表2は権現祭りの祭祀組織を表にまとめたものである。広域に祭祀組織が形成されている。大賀島寺の智明権現の祭りは檀家に関わりなく祭祀のための組織によって執行されてきた。

現在熊山神社では春祭りが行われている。この祭りは近世には地蔵権現の祭りであった。ここでは現在の祭りを調査し、また近世からの祭りの変遷について検証したい。

(1) 熊山神社と靈山寺の概要

熊山神社（赤磐市奥吉原）（写真4）は和気郡南部の熊山山上にある。昭和一五年に編纂された『改修赤磐郡誌』によると、「此の社は、伯耆の大山寺とともに、牛馬の神として尊信厚く、四月二十四日を以て祭日とし、遠近参拝者が極めて多い。（中略）拜殿の両脇には、牛・馬各一体の木像を据え、多く陶製牛馬の小像を供えて居る」と記されている⁽⁴⁾。

同社の前身は地蔵権現で、大賀島寺、伯耆大山寺の智明権現像とともに同木異体の伝承をもち、その社僧を勤めるのが天台宗の帝釈山靈山寺であった⁽⁵⁾。また熊山の地蔵権現は熊山権現の名でも呼ばれている。靈山寺の主要な伽藍は熊山神社から南に一〇〇メートルほど離れた場所に有った。その付近には熊山遺跡の名で知られている石積みがある。その南側の一段低い場所には熊山遺跡の管理棟があり、この建物が建てられる前には、その少し北側に「下の社務所」（図3）などと呼ばれる建物があった⁽⁶⁾。また遺跡の東側へ進むと突き当りには猿田彦神社があり、その手前北側に熊山神社春祭りの御旅所が設けられている。熊山遺跡の西側には近世の靈山寺歴代住職等の墓地が残されている。

同寺は備前四十八ヶ寺には含まれないものの、大賀島寺と同様に別当である靈山寺が地蔵権現の祭祀を行い、地蔵権現の神輿渡御を伴う祭りが行われていた。神仏分離以降、ご神体は大国主命に変わり、現代では熊山神社の祭りとして継承されている。今日の祭りにみられる神事と祭祀組織を報告するとともに、熊山における地蔵権現の歴史に迫ってみたい。

(2) 現代の祭り

熊山神社の行事は元旦祭と春の大祭の二つで、現在は他社⁽⁸⁾の宮司が兼務している。春の大祭はかつて旧暦の四月二四日であったが、後に月遅れの五月二四日となり、さらに新暦の四月二四日に変わった。さらにその後は、二四日に近い日曜日に行われていたが、平成一二年からは四月の第三日曜日に行われている⁽⁹⁾。祭りの主催者は熊山神社総代会であり、奥吉原四人・吉原四人・千鉢一人・勢力一人・弓削三人の一三名で構成される。

表3は平成二七年に行われた祭りの配役を表にしたものである。この役割をいくつか説明しておきたい。2の塩湯所役は小さなカメに入った塩水を持ち、榊の枝で塩水を振り清めながら進む。5の鼻高面は天狗面とも呼ばれる。その次に6・7の獅子が続く。14の神輿は奥吉原六人、吉原六人、千鉢二人、勢力二人、弓削四人の計二〇人で担ぐ。担ぎ手は「興かき」と呼ばれる。この内前後一人ずつ舵取りの役割を担当する。役割は特定の村落や家に固定されない。ほとんどの役は男性が務めるが、鉄砲役を担う子どもについては近年は男女を問わない。

現地調査は祭り当日の令和二年四月一九日に行う予定であったが、新型コロナウイルスの全国的な拡大により、当年の御神幸は中止になった。令和二年四月から五月にかけて、赤磐市吉原在住の方から祭りについて聞き取りを行った。以下に祭りの様子を報告する。

近年の祭りは当日一〇時三〇分より熊山神社拝殿で祭典が行われる。その後、神輿役の清め神事が行われ、宮司により本殿から神輿へと祭神である大国主命の御魂移しが行われる。この時宮司はご神体を袂で隠し、見えないようにする。その後、召し立て役の司会により御神幸が進行する。現在は神社の本殿・拝殿の周りを時計回りに三回（以前は五回）回り、その後拝殿前で御旅所神事を行う。図2の配置で修祓、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、宮司玉串を奉奠、神社総代玉串（輿かき代表・子供代表・崇敬者代表らも順に拝礼）、撤饌、宮司一拝の順で行われる。その後御魂を本殿へお返しして祭りは終了する。

話者が経験した祭りは話者が神輿を担いだ昭和三〇年代には図3に示したように、神輿は神社から霊山寺跡に向かい熊山遺跡を時計回りに一周したあと、遺跡前の広場で神輿を練る。「練る」とは走ったり、神輿を高く上げたりという動作を行き来しながら繰り返し行う動作のことをいう。熊山遺跡東側の広場から猿田彦神社へ向かう付近が坂になっており、勢いの付いた神輿が道をそれたり、舵取りがうまくできなかったりして、露天商の営む屋台を一、二台潰すことがあったという。この付近はかつて霊山寺の本堂があったと伝えられる場所である。

その後、御旅所のある猿田彦神社（写真5）の前へ向かう。かつてはここで御旅所神事を行っていた。その後、現在の熊山遺跡管理棟の北側にあった「下の社務所」に行き休憩した。ここでは酒が振舞われた。その後、御旅所へ戻り神輿を担いで神社へ戻る。

行列の警護役は、塩湯所役の次に二名、御櫛持所役の次に二名の計四名で、観客の整理のほか主に御神幸が順調に進むよう配慮する。御旅所では休憩中も神輿の側を離れることなく見張りを行う。また神輿裁判所役は、神輿役の間に起こったいさかいの仲裁や、先に述べた神輿の事故などの対応にあたる。その後、来た道を通って神社に戻り、御魂を本殿にお返しし祭りは終了する。

神輿が御旅所や熊山遺跡に向かっていった昭和三〇年代には、熊山遺跡前の広場には六・七軒の屋台が並び、警護所役が必要なほどの参詣者があったという。昭和四〇年代以降は高度経済成長により就職などでムラを離れる若者が多くなり、徐々に祭りが縮小されたという。

『熊山町史』（平成六年刊行）には筆者が行った調査では聞くことのできなかった事象がいくつか記されており、次に引用しておく。

祭礼には、熊山神社はもちろんのこと、末社の猿田彦神社、遠く離れた鍛冶神社（中略）にも必ず神饌を供える。

猿田彦神社前方から熊山遺跡（石積）の手前にかけての辺りを馬場と呼んでいた。

以前の祭礼には、神輿がこの馬場を練ったものである。⁽¹⁰⁾

熊山には鍛冶神社が祀られ、祭りには必ず神饌が供えられるとある。農具などを手がける鍛冶屋との関係がみえ、熊山が農業神を祭祀する場である様子が窺える。

また今日の熊山神社春祭りにみられる祭祀組織は地蔵権現の祭祀組織を引き継いだものと考えられ、大賀島寺同様に寺檀関係に関わらず隣接する村落によって構成されていることがわかる。以上が近年の祭りである。

(3) 近世における地蔵権現の祭り

次に熊山の歴史を検証したい。霊山寺跡にある熊山遺跡は、奈良時代の仏塔末頃の仏塔とみられ、その頃には霊場として機能していたと考えられる。⁽¹¹⁾ここでは熊山神社の前身である地蔵権現の歴史を探ってみよう。

宝永六年（一七〇九）に編纂された備前国の地誌『和気絹』には次のように記されている。

一、熊山権現。当山鎮守也。祭日は四九月の廿四日なり。俗説に此山魔所なり。さるによって祭日朝卯刻に空に向て無玉鉄炮を打出す。しからされば大勢群集の人の中に一人づゝ失せけるとなり。⁽¹²⁾

また同書の「帝釈山霊山寺」の解説には次のように記されている。

鎮守は地蔵権現^{祭日は前にあり。但、縁起には節分立春両日とあり。}。開基は唐僧鑑真和尚といへり。いにしへの兵火の後取り立てる人なし、近年邑久郡大ヶ島等覚院兼帯の由。誠に晴天に山上より見渡せば、播磨淡路四国の表、備中美作因幡伯耆の大山までみゆ。⁽¹³⁾

この記述から宝永六年の時点では地蔵権現が祀られていて、四月と九月の二四日に祭りが行われていること、さらに当時の霊山寺が大賀島寺の本坊である等覚院の兼帯であることが分かる。

地蔵権現の社僧を務めた霊山寺は明治初期に荒廃したまま廃寺となり、古文書などの史料はほとんど残されていないようである。しかし昭和二八年に岡山県文化財部会が行った金山寺文化財調査で、熊山霊山寺に関する記録がいくつか確認され、その一部が『吉備考古』⁽¹⁴⁾八七号に掲載されている。その中に霊山寺戒光院の住職、舜祐⁽¹⁵⁾による天保一二年（一八一四）の「末寺分限御改書上帳控」があり、当時の霊山寺の概要や由緒が詳しく記されている。そこには境内に関する記述の中に「旅所」が見える。また「一祈滅檀家無御座候尤御國中配札御免、但年中収納雑穀金銭取集凡十両斗」とあり近世の霊山寺が檀家をもたず、国中の配札や信者からの供養による収入があったことが見える。地蔵権現については「一、鎮守熊山大権現 一間半四面 並拜殿」とある。さらに「一、大山智明権現 二尺五寸四面」と

あり、末社とみられる祠に大山の智明権現が祀られていることがわかる。これは現在も本殿の背後にある大山神社の祠であると思われる。

(4) 近代における祭りの変化

明治になると熊山は大きな変化を迎える。仙田実氏は著書『靈山熊山』に次のように記している。

靈山寺の社僧が寺の宝物を売り払い、もう一人の社僧新置信敬と対立した。奥吉原の人々は怒り、新置を擁して夜中に熊山地蔵権現の本尊（地藏菩薩）と什物を奥吉原の東光山薬王寺に下ろし、一時ここに預けた。まもなく薬王寺に接して御堂を建て、それを靈山寺戒光院と名づけた。なかに本尊を納めたが、名前を「延命地藏大権現」に変え、新置を新住職にあてた。地元ではこの年を明治七年と言いつづけている。このことは官憲の知るところとなり、下山を強行した人々は罰せられた。神仏分離の実施を「渡りに舟」とばかり利用して寺を守ろうとしたのだが、無届の点を責められたのだった。⁽¹⁶⁾

筆者が調査を行った時点ではこれほど詳しくはないものの、同様の話を聞くことができた。このように神仏分離が行われ、山上の靈山寺は放置され、地藏権現が祀られていた場所には後に大国主命を祀る熊山神社となり今日に至っている。これは大山寺で智明権現を祀る冬宮（現大神山神社奥宮）が明治以降、大己貴命（大国主命の異称）を祀るようになったことと対応する。

また仙田氏が同書の中で引用している花沢京次氏の日記には、明治末年から昭和初期にかけての祭り当日の様子が記されている。この中で花沢氏は「熊山様の日」「熊山権現祭り」⁽¹⁷⁾「熊山神社祭礼」などと表現し、天候が良いと大勢の参詣があったことが記されている。今日の大山寺智明権現と大神山神社は共に牛馬の守護神として信仰され、双方で牛馬のお札が販売されている。また大山寺では昭和十二年までは祭りに合わせて五月二四・二五の両日、牛馬市が開かれ、無数の牛馬が取引されていたほか、牛馬を連れて参詣するものが多数いたという。⁽¹⁸⁾

四 智明権現の勧請

(1) 金山寺との関り

智明権現勧請の経緯を直接知ることができる史料は確認できない。しかし伯耆大山寺との関係が想定される。まず備前と大山を結ぶ存在として一つ目に考えられるのが豪円である。豪円は大山山麓のムラに生まれ、大山寺で出家した後比叡山東塔の地福院に入ったと

される。大山寺や比叡山の再興に尽力したとい⁽¹⁹⁾う。備前では天正三年（一五七五）に金山寺を再興したほか、備前四十八ヶ寺の確立にも関わった可能性がある。大賀島寺を含む備前四十八ヶ寺では豪円の影響や惣本寺である金山寺との関りの中で智明権現が勧請された可能性が考えられる。

次に熊山靈山寺への智明権現の勧請を考えてみたい。同寺は備前四十八ヶ寺には含まれないが、金山寺末寺の天台寺院であった。金山寺に伝わる天保一二年（一八四一）の「末寺分限御改書上帳控」のうち、靈山寺の由緒が記された部分には「一開基唐僧鑑真和尚」と「一中興金山遍照院円忠」の二段からなり、その後ろに天和年中とする「熊山由来略縁起」をのせている。この内「一中興金山遍照院円忠」の部分には近世における靈山寺再興の様子が記されており、その全文を次に示す。

一中興金山円忠 右当山開基已後上代、中古之変化宗門の様子等は古記等無之相知不申候中頃は真言宗にて大滝の別院の由申伝へ大滝山は和気郡真言地にて報恩大師開基四十八ヶ寺の其一場也。金山寺の古寺領帳にも大滝山領の内二町五反十五代熊山権現と御座候由、その後何の時代退転致候哉慶長年中の頃亡所致居申様子其頃当山麓奥吉原村理右衛門と申者大滝山の西光坊と申合再興を企一字を建立致し、西光坊居住十三年にして死亡致、其跡住職致者も無之再興又力に難及由にて奥吉原村の檀那理右衛門並び大滝山の住侶円光坊宝池坊金山寺へ参り遍照院円忠法印（法印は豪円僧正の嫡弟也）へ当山を可相渡間天台地に改め再興住職等の事相頼度旨再三頼に付円忠法印其旨領掌致され其後国主宰相様へ被相願宰相忠雄公山林境内御寄附材木人夫等御寄進被成本堂並権現本社拝殿等建立成就仕候旨右之由来元和八年円忠法印へ記置候権現本社棟札今に御座候右御寄附の山林下里村より伐荒し申に付是又円忠法印被相願荒尾但馬守殿在判山林御制札被下今に御座候。右再興の後も無縁無檀の高山孤絶の所にて相続の便無御座故住職も連綿不致、又々衰微致寛文の頃本堂本社如形相残居申計にて無寺無住に相成居申に付延宝三年遍照院賢厚法印当山再興の儀大ヶ島等覚院亮海に被申付等覚院命を請けて国表に段々御訴訟申上候處竹林等拝領仰付に付く等覚院相働自力を以て寺建立堂社修覆等仕候然れども永々相続の便無御座今日貞享二年亦復賢厚法印種種御取合を以初て社領二十石坂根村にて御寄附被仰付御折紙被下置候是より以後当今に至る迄無恙相続仕権現の靈威日に彌増繁盛の一山と罷成難有儀に奉存⁽²⁰⁾候。

この内容によると、中世末期から近世初頭の熊山は真言宗となっており、大滝山福生寺の別院となっていた。その後退転していたものの、慶長年中に奥吉原の理右衛門と大滝山の西光坊とが一字を建立して西光坊が居住し、一三年の間住職を務めた。西光坊が亡くなった後は、理右衛門と大滝山の円光坊・宝池坊が金山寺へ出向き円忠に熊山を天台寺院として再興

することと、住職の配置を依頼している。二度にわたり、奥吉原の理右衛門が再興にかかわっている様子から、奥吉原にとって靈山寺が重要な寺であることが伺える。また理右衛門とともに真言宗である大滝山の僧が金山寺に再興を依頼していることについては、近世初頭の金山寺が他宗派寺院や神社まで管轄する寺社総監の地位にあったことによるものと考えられる。⁽²¹⁾

再興を懇願された円忠は、大山寺から備前に入り金山寺などを再興した豪円の弟子とされ、円忠を通して大山の智明権現との関わりが窺える。④さらに金山寺の賢厚は、大賀島寺の亮海に熊山再興を命じたとある。大賀島寺にも大山を本拠とする智明権現が祀られ、口伝ではあるが円智（豪円）によって再興されたという伝承があり、大賀島寺を通じて地蔵権現がもたらされた可能性も考えられる。大賀島寺には亮海の位牌と石塔（写真6）が存在し、その銘文から熊山を再興したことが確認できる。位牌の正面中央には「当院住持兼熊山中興権大僧都法印亮海大和尚位」、その右に「正徳元（一七一）辛卯年」、左には「十月廿八日」と刻まれている。石塔にも同様に「梵 大阿闍梨法印亮海」向かって右側面に「正徳元^{辛卯}年」、左側面に「十月廿八日」、中台の背面には「当山住持 兼 熊山中興」と刻まれている。これらの史料から大賀島寺の亮海によって熊山靈山寺が再興されたことは確実と言える。熊山靈山寺と大賀島寺はともに天台宗である金山寺の末寺であり、宝永六年（一七〇九）以降に成立したとされる『吉備前秘録』では金山寺にも地蔵権現が祀られていることが確認できる。⁽²³⁾つまり天台宗寺院の本末関係の中で智明権現が勧請された可能性が考えられる。靈山寺は江戸時代初期に金山寺の末寺になり、その配下で二度にわたり再興されていて、この時期に地蔵権現が祀られるようになった可能性がある。

熊山の地蔵権現と大賀島寺、大山寺の智明権現は同木異体とされていて、関係の深さを物語っている。

（2） 児島五流との関り

また近世に備前四十八ヶ寺を霞としていた児島五流によって智明権現が勧請された可能性が考えられる。児島五流とは、備前の児島郡にある新熊野神社（倉敷市林）に依拠した熊野系の修験である。現在児島郡は本州と陸続きになっているが、近世初頭まで備前南部の瀬戸内海に位置する大きな島であった。児島五流の歴史は、承久の乱で児島に流された後鳥羽上皇の王子頼仁親王に始まり、その弟である覚仁法親王を尊灌院の中興一世とし、頼仁親王の子に尊滝院・伝法院・大法院・報恩院・建徳院を開かせ、熊野五流に因んで児島五流と称したことに始まるとされる。⁽²⁴⁾現在は尊滝院（倉敷市林）のみが存在する。

宝永六年（一七〇九）に編纂された『和氣絹』に収録された記録によると児島五流が備前四十八ヶ寺を霞としていたことがわかる。その記録は天和三年（一六八三）のものとされ、次のように記されている。（傍線は筆写）

一、霞と云袈裟下の事（備前瓶井山・金山・脇田・武佐^{半カ}・御野・小豆島・作州本山・槇山、除日向一）右大法院。（豫州一國、安芸之内豊田郡、紀州之内日高郡。）右報恩院。備前岡山、并四十八寺。作州本山、槇山西山寺。）右建徳院。（讃州備後二ヶ國、并備中之内浅口郡。）右伝法院。塩飽七島・備中之内松山・連島七浦（島イ）、肥後。）右尊滝院。

備前児島は五流手同行と云ふ。古来より入組⁽²⁶⁾也。

ここに児島五流の一つである建徳院の霞として「四十八寺」が記されている。宮家準氏は、児島五流と大山の関係について「児島五流は中世から近世にかけて大山を修行道場にしており、現在も五流一山の祖霊堂は大仙智明権現とよばれている。」（写真7）と述べている。⁽²⁶⁾

また近世の地誌である『備陽記』と『作陽誌』の記述から「大山は近世末まで、五流一山住職の一世一度の修行道場であった。聖護院門跡の大峰入峰に供奉する際には、それに先立って大山で修行した。修行に際して大山と久米郡本山寺を関連づけて、本山寺から大山寺へ行くのを順峰、大山から本山寺へ行くのを逆峰になぞらえてもいた（『作陽誌』）。こうしたこともあって、五流では近国の天台・真言寺院へ大山先達免許の補任状を出していた（『備陽記』）」⁽²⁷⁾と指摘している。児島五流にとって大山と智明権現が重要な存在であったことがわかる。

大山先達の補任状を出していた近国の天台・真言寺院が児島五流の霞であるとみられ、その中に備前四十八ヶ寺が含まれているものと考えられる。つまり、今日の備前四十八ヶ寺やかつての熊山にみられる智明権現は、修験である児島五流の霞で祀られていることになり、その勧請に児島五流が関わっている可能性がある。つまり智明権現の勧請は児島五流の影響下で行われていたことが推察される。

おわりに

備前では智明権現の祭りを二例確認することができた。そのうちの大賀島寺では現在も地蔵を神輿に載せた渡御が行われている。このような祭りが明治の廃仏毀釈により廃されることなく今日まで継続されていること、さらに江戸期の熊山霊山寺でも行われていたことが明らかになった。

大賀島寺とかつて地藏権現が祀られていた熊山神社はともに塀で囲まれた空間で祀られており、両寺において重要な位置づけにあったことが分かる。また両者はともに寺が智明権現の祭祀を担うという点では大山寺と共通している。さらに大賀島寺と熊山からはそれぞれ互いの位置する山を臨むことができるほか、天候が良ければ大山も見ることができ。このような環境も大賀島寺と熊山で規模の大きな祭祀・祭りが行われていることと関係していると考えられる。

伯耆大山寺は修験道の道場として栄えた寺で、そこに祀られる智明権現は神仏習合が強く表れた神である。その智明権現が大山寺から備前にもたらされたことは明らかであり、地藏を神輿に乗せて渡御を行う大賀島寺と熊山地蔵権現の祭りもまた大山寺の影響を受けたものであると考えられる。大山・大賀島寺・熊山では、祭りの後には「おおぐそ流し」の雨が降るといわれる。智明権現が祀られている地域はいずれも農耕地帯である。この雨は田植前の慈雨であり、何れの祭りも農耕神の智明権現に豊作を祈願する予祝であると考えられる。

智明権現の勧請については、豪円が中世末期に備前四十八ヶ寺を構成した際に、出身地である伯耆大山寺の智明権現を勧請した可能性があると推察した。また近世には修験道である児島五流が大山と関わりを持っていたほか、近世には備前四十八ヶ寺が児島五流の霞とされていることから、これらの寺院の智明権現が児島五流の影響下で祀られている可能性が高いことを述べた。大山寺出身の豪円も山林抖擻をする修験僧であった可能性が考えられるだろう。備前で祀られるようになった智明権現はいずれも農耕神として定着し信仰されている。

（本節は『岡山民俗』二四〇号（二〇一九年二月）に掲載した「備前大賀島寺と権現祭り」にみる寺と村落―大智明大権現の祭祀と祭祀組織―」を加筆修正したものである。）

【註】

（１）『古備群書集成』一、歴史図書社、一九七〇年、五二九頁。

（２）岡山県赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』全、岡山県赤磐郡教育会、一九四〇年、二二六頁。

（３）小林久麿雄編『改訂邑久郡史』下巻、邑久郡史刊行会、一九五四年、三九〇頁。

（４）前掲（２）、四一一頁。

（５）『撮要録』日本文教出版、一九六五年、一九二五頁。熊山権現の項目に「社僧帝釈山靈山寺戒光院」とある。

(6) 話者によるとかつてここで生活する夫婦がいたという。この夫婦とは潮見定秋氏夫妻のことで、熊山遺跡に関する調書などを執筆している。潮見定秋『熊山遺跡』熊山町、一九八一年。

(7) 本殿基壇の延石には「願主 邑久郡 下笠加 森太郎 右衛門 種正 及大破 四世小平太 種直 天保三 辰歳再 建立」と刻まれている。『熊山町史』通史編下巻、熊山町、一九九四年、六九八頁には「近年改築されて新しいが改修前には六角のお堂であった」とある。

(8) 現代になってからは安仁神社(岡山市東区西大寺一宮)の宮司が兼務している。

(9) 仙田実氏が著書『靈山熊山』に、花沢京次氏の日記から、明治四五年から昭和七年にかけての祭りの日時、様子を引用している。明治四五年には五月二十四日であったが、大正一二年から四月二十四日になったことがわかる。これは養蚕が盛んになった事による変更であるとし、日記の記述から当時も熊山権現という呼称が、一般には用いられていたことがわかるとしている。仙田実『靈山熊山』、日本文教出版、二〇〇三年、一五三～一五五頁。

(10) 熊山町史編纂委員会『熊山町史』通史編下巻、熊山町、一九九四年、六六八頁。

(11) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第一八巻考古資料、岡山県、一九八六年、四一八頁。

(12) 「和気絹」『吉備群書集成』一、歴史図書社、一九七〇年、二五頁。

(13) 同前。

(14) 「熊山雑記 其の二」『吉備考古』八七号、吉備考古学会、昭和二十八年。執筆者については「編集子」とあるものの雑誌内にその名が確認できない。前号にあたる八六号の「熊山雑記」は大元琢壽氏の投稿である。

(15) 熊山遺跡西側の墓地に舜祐の無縫塔がある。銘文は正面に「法輪院舜祐塔」、背面に「嘉永六丑年八月廿七日」、上台向かって右面「本当山円城寺一代舜栄法印弟子俗姓備之中州」上台正面「窪屋郡岡本氏某息当山戒光院一代」と刻まれている。円城寺は岡山県吉備中央町にある天台寺院で、備前四十八ヶ寺のひとつ。

(16) 仙田実『靈山熊山』、日本文教出版、二〇〇三年、一四八～一四九頁。

(17) 同前、一五二～一五五頁。

(18) 石田寛・横山英治「大山博労座―牛馬市研究・第二報」『岡山史学』第六・七号、一九六〇年。

(19) 市古貞次・堤精二・大曾根章介・堀内秀晃・益田宗・篠原昭二・久保田淳・揖斐高・市古夏生(編)『国書人名事典』第二巻、岩波書店、一九九五年、二〇四～二〇五頁。

(20) 『吉備考古』八七号、吉備考古学会、一九五三年、三四～三五頁。

(21) ①難波俊成「報恩大師と備前四十八カ寺伝承」『岡山民俗文化論集』土井卓司先生古稀記念、岡山民俗学会、一九八一年。②岡山市史編集委員会『岡山市史』宗教・教育編、岡山市役所、一九六八年、一二四頁。藩主池田光政の時より、天台宗のみを支配するようになったことについて述べられている。

(22) 前掲(3)、三八一頁。

(23) 「吉備前秘録」『吉備群書集成』一、歴史図書社、一九七〇年、五二九頁。同史料は宝永以後に編纂とされる。

(24) 宮家準「近世児島五流の歴史と伝承」『岡山民俗』二四一号、令和二年。

(25) 吉備群書集成刊行会『吉備群書集成』第一輯、歴史図書社、一九七〇年、九八頁。

(26) 宮家準『大山の歴史と信仰』宮家準編『大山石鎚と西国修験道』山岳宗教史研究叢書一二、名著出版、一九七九年、四五頁。

(27) 宮家準『修験道と児島五流―その背景と研究―』岩田書院、平成二五年、一一二～一二三頁。

付図・付表・写真

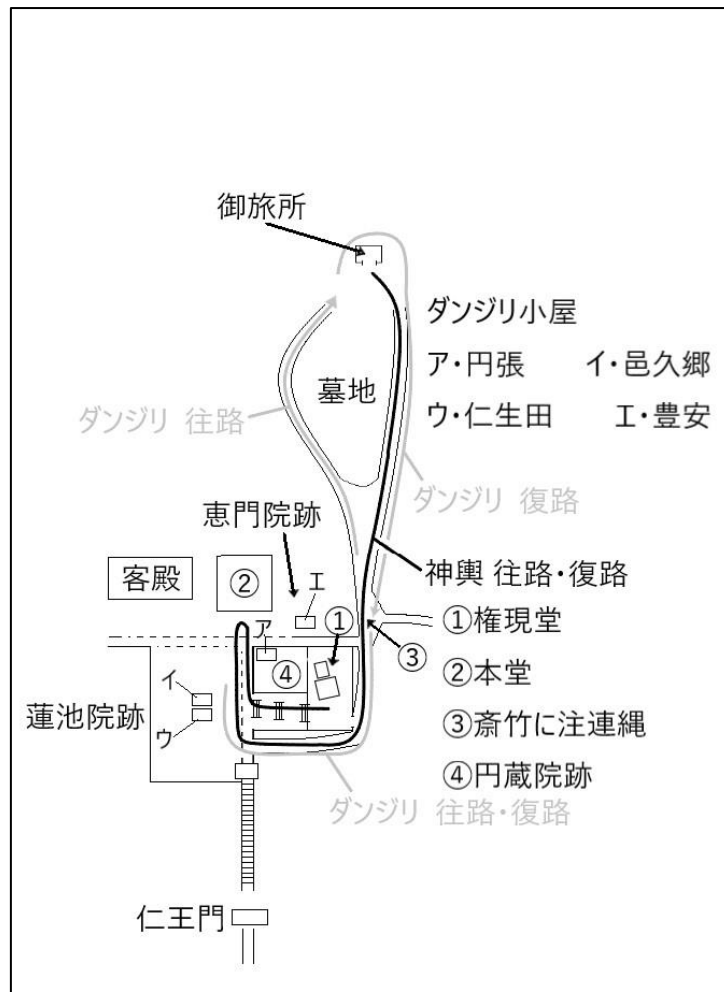


図 1 権現祭り御神幸順路

表 1 備前四十八ヶ寺のうち智明権現を祭祀する寺院

寺院名※1	宗派	形 態	大山を目視できる寺院
金山寺	天台	金山山頂に「大山智明大権現」と刻まれた石塔がある。	金山山頂から
長楽寺 (岡山市中区今谷)	真言	智明権現社を祀る	
明王寺	天台	観音堂に木像を祀る。(かつては本堂裏に智明権現を祀る社があった)	
最明寺 (岡山市)	真言	権現堂の本殿に石造を祀る。 (昭和初期まで4月24日に大祭が行なわれていた。)	
妙光寺	真言	所在地である大松山の山頂に大仙宮と熊山の遙拝所がある。	大松山山頂から
大賀島寺	天台	木像	大雄山御旅所付近から
円城寺	天台	「大山智明大権現」と刻まれた石塔(松本坊跡付近)	

※1 備前四十八ヶ寺を構成する寺院のなかに同名の寺がある場合は所在地を記した。

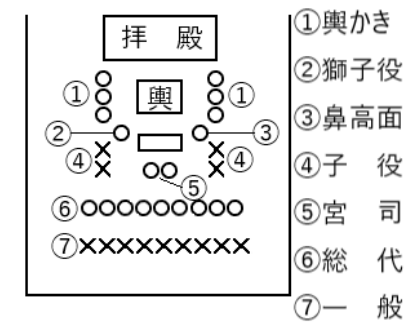


図 2 御旅所神事の配置

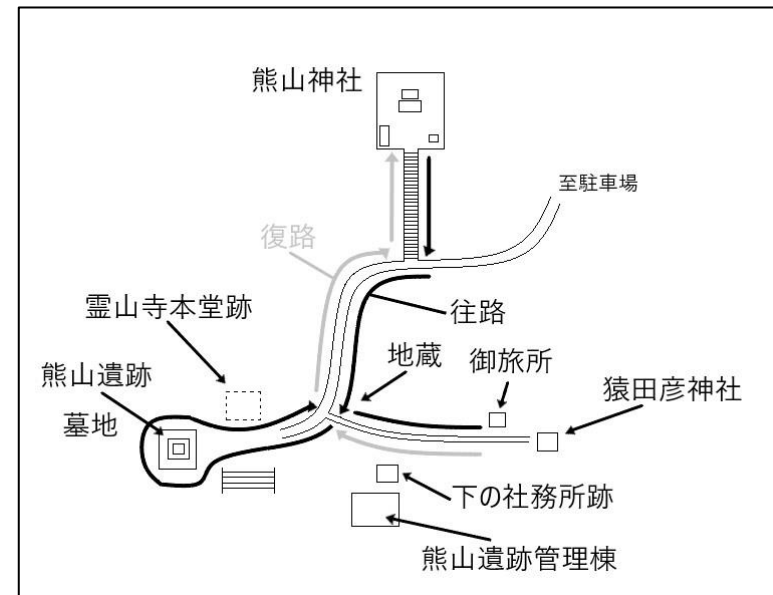


図 3 春祭り御神幸順路

表 3 春祭りの配役

行列順序	役 割		担 当	備 考
一	召し立て役			祭りの司会進行を務める
1	先	大麻所役	奥吉原区区长	
2	次	塩湯所役	奥吉原区総代	塩水の入った瓶をもつ
3	次	警護所役	2名	
4	次	太鼓所役	勢力区総代	
		〃	弓削区区长	
5	次	鼻高面所役	奥吉原区区长代理	
6	次	獅子頭所役	吉原区区长	
7	次	獅子後持所役	吉原区	
8	次	鉄砲所役	奥吉原・吉原区子ども10名	男児女児問わず。 H27は、スポーツ少年団など 上がって来た子供10名が担 当した。11:10より希望者を 探しくじ引き。
9	次	金幣所役	弓削区総代	
10	次	白幣所役	吉原区総代	
11	次	神饌唐櫃所役	奥吉原区総代	御旅所神事用の供物が入 る。前後2人で担ぐ。
		〃	千鉢区総代	
12	次	御櫛持所役	弓削区総代	
		〃	奥吉原区総代	
13	次	警護所役	2名	
14	次	輿裁判所役	(今回は無し)	
15	次	御神輿	輿役20名	奥吉原6人、吉原6人、千鉢2 人、勢力2、弓削4人。この中 から前後1人ずつ舵取り役を 務める。
16	次	宮 司		

表 2 権現祭り祭祀組織

村落名	コシカキ	ダンジリ	シャギリ	その他	保存会設置地区※1 (H31年4月現在)	地区全体の戸 数※2	大凡の 檀家割合※3
大ヶ島	○				○	8戸	大部分
大 橋	○			神輿の飾り紐に赤い 布を巻く	○	16戸	大部分
円 張	○	○	○		○	80～90戸	大部分
豊 安 (旧：包松村)		○ H29まで	○		○	もとは20～ 30戸※4	大部分
潤 徳 (旧：江村)	大名行列（挟箱・鎧・鉄砲など大 名行列）（S20年の大水まで）			祭礼当日、権現堂の 前で権現様のお札を 販売	○	約30戸※4	大部分
大 窪					○	約70戸※4	半分
仁生田		○ H27まで	○		○	約40戸	半分
東 谷					○	約15戸	1軒
長 沼					○	約140戸	数件
松江・納岡 (邑久郷)	○ S55・56年 頃から	○	○	S34年までは吉塔を含 め、4つの組が4年 に1回の輪番でシャ ギリを務めた。S52年 頃に再開してからは 吉塔を除いた3つの組 が一つの邑久郷とし て参加している。	○ S34年の伊勢湾台風で祭 りが中止されるまでは吉塔 を含めた4つの組に分かれ て参加。S52年頃に再開 してからは吉塔をのぞく3 つの組が垣根をこえ一つ の邑久郷として参加してい る。		なし
用木・武田 (邑久郷)						202世帯	なし
島ノ道・清野 (清野の内幸島分を除 く) (邑久郷)							なし
吉 塔 (邑久郷)					—	99世帯	なし
神 崎		○		だんじり (昭和初期までか)	—	531世帯	なし
乙 子		御座船	御座船	御座船(昭和初期までか)	—	96世帯	なし

※1権現祭りを担う地区は、戸数により会費を大賀島大智明権現保存会に納めている。地区ごとの保存会はそれぞれ名称が異なるようである。

※2多くの地区では正確な戸数を把握することができず、住宅地図や聞き取りによる凡その戸数。世帯数は令和元年8月岡山市統計による。

※3檀家数の割合については水田の宅地化が進む以前の旧町内を基準とする。戸数の記載のない地区については確認することができなかった。

※4豊安・潤徳・大窪の3地区は平成20年代に水田の宅地化が進み、他から移り住む家が増加した。戸数は宅地化が進む以前のおおよその戸数。あたりに移り住んだ人々も地区として祭りを担うため権現祭りを担う一員となる。



写真 3 円張のダンジリと
シャギリ奉納・平成 31 年



写真 2 客殿内でのシャギリ奉納
(邑久郷) 平成 31 年



写真 4 熊山神社 (旧地藏権現)



写真 1 明王寺の智明権現



写真 6 大賀島寺にある
亮海の石塔



写真 5 御旅所（左）と猿田彦神社



写真 7 児島五流の大仙智明権現

第三章 民間寺院の成立と先祖信仰

近世になると先祖信仰を目的とした寺が村々に建立されるようになる。民間寺院については竹田聴洲氏の研究があり、著書『民俗仏教と先祖信仰』のなかで『蓮門精舎旧詞』の分析を行い、浄土宗民間寺院の開創年代・開山僧・開創檀越など、民間寺院のもつ一般性を見出している。『蓮門精舎旧詞』とは、元禄八年（一六九五）から同一一年にかけて、浄土宗の総本山である京都知恩院と総録所江戸増上寺が提携して、全国にある浄土宗寺院の末寺の由緒について一斉調査を実施し、その結果をまとめたものである^①。

竹田氏は『蓮門精舎旧詞』を分析し、民間寺院のもつ一般性を見出し、一〇の項目を示している。筆者はこの内(1)から(3)に示された三つの点を重視して備前・備中の民間寺院について検証を行いたい。その記述を次に示す。

(1) 民間寺院は従来何らの先蹤のないところに全く新しく開創される以外に、既存の堂庵や廃跡などをうけつぎ、これを拠点としてその復興・回生という形で成立することが多く、寺伝の上で開創と中興としばしば同態異称であった。

(2) 近世・近代に生存した寺院（浄土宗）の過半は全国を通じて文亀（寛永（一五〇一）一六四三年）即ち戦国末から近世初頭の一世紀に成立し、殊にその後半、天正（寛永の約七〇年間にその事例は圧倒的密度で集中している）。

(3) 民間寺院は開創檀越が土・庶・単・複いずれであるを問わず、有縁の追善のための広義の菩提寺たることを以て成立の根本動機とし、従って最初から先祖（先祖化の可能な者も含む）の祭場たることを第一義として成立した場合が寺院の一般成立事例の中で抜群の比重を占める^②。

『蓮門精舎旧詞』の記載は浄土宗寺院のみであるが、竹田氏は京都府にある現存諸宗派寺院の成立時期を分析し、天正から寛永期間に宗派を問わず寺院の開創が多くみられることを明らかにしている^③。筆者はこれらを踏まえ、文亀から寛永の期間に武士・庶民・単独・複数を問わず有縁の追善を目的として成立した寺院を民間寺院の定義としたい。

また竹田氏は『蓮門精舎旧詞』を分析した結果、備前に浄土宗寺院が一〇か寺あり、その内開創時期に関する記述がある寺院が九か寺、さらにその内の天正から寛永（一五七三）一六四四）にかけて開創された寺が七か寺、正保から承応（一六四四）一六五五）にかけて開創された寺が二か寺あることが示されている。また残る二か寺の内一か寺は寛永期に、もう一か寺は正保期に中興され、いずれも開創者や中興者に関する記載は無かったようである^④。

筆者はこれまで備前・備中の民間寺院成立の実相を明らかにしたいと考えてきた。しかし、岡山藩が寛文六年（一六六六）に実施した寺社整理で民間寺院の多くが廃寺になったとみら

れ、その実態を示す史料はなかなか見出すことができなかった。ところが備前・備中で調査を行なうなかで、民間寺院の成立過程を窺うことができる事例をいくつか確認することができた。本章ではこれらの事例をもとに備前・備中における民間寺院成立の一端を明らかにしたいと考える。

第一節 備中日差寺と福山寺に起源をもつ民間寺院の成立

はじめに

日差寺（日蓮宗系単立・倉敷市山地）は倉敷市山地の日差山ひさしやま上に現存し、福山寺は総社市西郡の福山山上にあった寺である。この内日差山は『金山観音寺縁起』（治承四年・一一八〇）にも登場する寺院で、報恩大師伝承とその弟子とされる智久の伝承を有している。⁽⁵⁾

幕末に編纂された『備中誌』には日差山と福山の周囲に広がる平野部の農村に、日差寺と福山寺に起源を持つとする寺院が多数記されており、その記述から近世初期に中世的な祈祷寺院が解体され、その子院がムラに移り民間寺院に姿を変えたものであると考えられる。いずれの寺も近隣村落に檀家を持ち、その葬儀や先祖信仰を担っている。

『備中誌』は備中国全体の地誌で、著者・成立年代はともに不明であるが、その内容から嘉永六年（一八五三）以降の編纂とされる。⁽⁶⁾ 本節では『備中誌』に記された日差山と福山を起源に持つ寺院を一つずつ確認し、その民間寺院としての性質について竹田聴洲氏の研究をもとに検討したい。

一 日差山宝泉寺の成立と先祖信仰

『備中誌』には日差寺に起源をもつ寺院が複数記されている。そのうち宝泉寺（真言宗・倉敷市矢部）（写真1）は、『備中誌』の記述や同寺の成立に関わったとみられる友野氏の持つ史料から、宝泉寺が民間寺院として成立した過程を窺うことができる。また友野氏と宝泉寺の本尊である聖観音については興味深い伝承がいくつか伝えられているほか、宝泉寺は檀那寺ではないにもかかわらず古くから友野氏の先祖信仰に関わり、正月の初観音の際には友野氏の代表者が寺を訪れるという関係が今日も続いている。

ここでは民間寺院としての宝泉寺の成立と、友野氏との関係について検討してみたい。

(1) 宝泉寺の成立

宝泉寺は日差寺塔頭の一つである満願坊を前身とする寺院で、江戸期以降の坊号も満願坊である。先に『備中誌』には「慶長年中日差山を下りて盾築山に遷りし後寛永十三年今の地に転ず⁷⁾」とあり、現在の鯉喰神社(倉敷市矢部)西側に寺を構える前は、ここから八〇〇メートルほど南東にある楯築山(倉敷市矢部・楯築遺跡所在地)にまず寺を構えたことが記されている。この楯築山に寺を設けたとする記述は、戦国期以来の土豪である友野氏に伝わる『友野氏由来・系図』にも記されている。同史料の成立年代は記されていないが、大坂夏の陣に際し大坂へ登ったことなど元和年間(一六一五―一六二四)の事績までが記されているため、元和以降に成立した史料であると推察される。友野氏が民間に身を置き、近世的なイエとして歩みだした際に、由緒をまとめたものと考ええる。同史料にある友野氏と宝泉寺に関する記述は次の通りである。

友野氏其先出自菅原氏、是固所見旧記並諸書也、先祖往昔信州友野地領有仍改氏焉、然其後移居備中津坂郷云矣、

心浄大師津坂駅官ノ子ニシテ報恩大師ノ弟子トナリ、難行勤行ノ後、同大師ヨリ日差山日差寺ヲ賜ハル、智久法師ト称セシガ、適々桓武天皇御眼症ノ時、禁中ニ加持セシメ給ヒシニ、忽チ御平癒シ給ヒヌ、天皇叡感斜ナラズ、汝ハ正直清浄ノ心ヲ持テリトテ、心浄大師ノ号ヲ賜ヘリ、後日日差山ニ遷化セリ、乙大師ノ廟トテ宏壮ナル堂宇アリタリ。菅原朝臣散位津坂盛英、津坂駅官ノ後孫高倉院ノ嘉応年中禁裡ノ大番トシテ、上京三年在勤シテ帰ル、矢部ノ楯築山山林及境、内ヲ宝泉寺ニ施ス、直書ヲ同寺有セリト、冥応後集ニ載ス⁸⁾

これは同史料の冒頭部分にある記述である。引用か所の最後の部分には楯築山の山林を宝泉寺に寄進したことが記されていることから、慶長年間(一五九六―一六一五)に行われた満願坊の楯築山への移転は友野氏の援助によって行われた可能性が高いと考えられる。

次に、友野氏と本尊である観音との関係を検討したい。まず友野氏と観音について『宝泉寺縁起』⁹⁾には次のように記されている。

寛永十三年丙子年惡逆之徒、山内ニ観音像差置事不快也トテ庭瀬撫川ノ海ヨリ流ス。同年十一月十四日備前国御野郡福島村之海辺江尊像破損シテ流レ寄り給フ。(中略)寛永十四丁丑年正月十四日御尊像備前国川口へ御遷座ノ由、備中国へ伝え聞ク。へ宝泉寺住侶并山手村友野某、其外檀越ノ面々八人へ、以往川へ流シ奉ル時ニ尊像ノ欠ヲチ残体宝泉寺ニ留マリ所持スルニヨリ同二月十日蓮華座并ニ御足備足シ奉ル¹⁰⁾。

『備中誌』によると寛永一三年(一六三六)は宝泉寺が楯築山から現在地へ移転したとされる年である。ここでも友野氏の名が登場し、惡逆之徒によって流された観音が備前に流れ

付き、後に宝泉寺の僧や友野氏らがこれを聞きつけ、観音が宝泉寺に戻されることになったとある。この記述からも近世の友野氏と宝泉寺の関係が深い様子が表われている。

(2) 宝泉寺と友野氏

ここで先に引用した『友野氏由来・系図』の引用か所に戻りたい。この由来にはまず備前における友野氏の事績を述べる前に、日差寺を報恩大師から譲り受けたとされる心浄大師(智久)に触れ、心浄が「津坂駅官ノ子」であることを記している。その上で友野氏の先祖である津坂盛英が「津坂駅官ノ後孫」であるとしている。明言していないが友野氏と心浄大師が同族であることを示唆している。

『備中誌』にはこの津坂盛英と日差山観音に関する利生譚が収録されていてその全文を次に示す。

或説に報恩大師草創天平勝宝六年より五百十五年を経て高倉天皇嘉応年中備中山手庄津坂駅人散位津坂の盛英さんいという云人禁中の大番として上京せり在勤三年有て十二月晦日我本国へ帰るとて洛の五條の橋を過ぎる折節途中にて年頃十二三計りの小僧に行逢たり小僧云く汝は何国の国何の所へ行人ぞ盛英答て云く我は備中国山手村へ行ものなり小僧云我も備中へ行ものなり幸せによりき連れなり同道して下らんと打連れて行小僧云我道を行事飛ぶがごとく汝追付事叶ふまじ是に取付けとて腰に三尺計りの手巾を付て取らしむ盛英其言のことくなし都を辰の刻と思しき時発足せしか行程六十里の道を短き日に申の刻には早く備中矢部村に帰り着ぬ盛英僕従に五條に別れ八日過ぎて山手に帰り其時小僧六十里の道すがら暫時に汝と我と二人友として下りたり以来駅子の姓をやめて友野と改め号すべし(中略)件の小僧は日差山の観音なり右一巻の書を与え給ふ是観音の縁起也友野氏繁昌して世人普く知る所也

其縁起今に友野氏に持伝へたりと云々⁽¹¹⁾

大番役の勤めを終えた盛英は、京都五条の橋の付近で二一三歳の小僧に出会い、盛英は小僧の腰に付けた手巾につかまって飛ぶようにして備中国矢部村に戻った。すると小僧は駅子の姓をやめて友野と名乗ることを勧め、自らは日差山の観音であることを告げた。これをきっかけに姓を津坂から友野に改めた主張している。『観音冥応集』所収の「友野氏観音御利生ノ事」にも同様の説話が記されている。⁽¹²⁾

このような伝承がいつ形成されたのかは分からないが、これによって友野氏の権威付けが行われるとともに、日差寺あるいはその後身の一つである宝泉寺と関係を主張していることがわかる。

(3) 家意識の発生と先祖信仰

先に引用した『友野氏由来・系図』にある津坂盛英に関する記述の後には、中世の事績が

記された後、近世初期の友野石見守について「友野石見守入道高盛始メ吉右衛門ト称ス、岡谷城主ニシテ毛利氏ノ麾下始メ石川氏ニ属ス、窪屋郡大内郷を領ス、此屋敷ノ先祖ナリ、中興英主トス」と記している、友野石見守が実質的な初代であり、家祖として意識していることがわかる。友野石見守は天正一九年（二五九二）に没したことが記されている。

その後は石見守嫡男の弥右衛門が大坂夏の陣に加わったものの、所領の召し上げに遭い民間に身を置くようになったことが記されている。⁽¹³⁾ 二代目である弥右衛門には「無妻」とあり子供がなかったようで、その次の代は石見守の弟である平兵衛の嫡男、喜右衛門が継いでいて、「元和ノ頃庄屋職仰付ラレ」と記されている。さらにその息子とみられる吉右衛門の代にも「岡谷村庄屋ヲ勤ム」と記されている。その次の代には岡谷姓を名乗るようになり、さらに後には備前岡山の山崎町に移り、山手屋という家号を設けて商売を営んだことが記され、以後昭和に至までの系図が記されている。⁽¹⁴⁾

『友野氏由来・系図』を収録している『山手村誌』は、「徳川政権による兵農分離政策のもと村方役人の途をたどった典型的な例」と述べている。中世から近世への移行にともない、庶民の間でイエ意識がもたれるようになるなかで、友野氏においても近世的なイエ意識が持たれるようになった。⁽¹⁵⁾ そのなかで日差山の心浄大師と同族であることやイエの伝承が整理されるときにも権威付けが行われ、『友野氏由来・系図』は明文化した由来として成立したものと考える。そのころには石見守からみて孫や曾孫の代となり、イエの先祖を祀る必要が生じてきたものと思われる。

現在の総社市岡谷には友野姓の家が複数あるが、そのうち八軒の友野家が毎年持ち回りで五月の連休中と九月に先祖祭を行っている。現在もご先祖祭には宝泉寺の住職が出向いている。

（４）まとめ

日差寺の子院である満願坊が慶長年間に独立し、宝泉寺となる。その詳しい経緯は詳らかではないが、有力な壇越が土豪である友野氏であった。友野氏も同氏に伝わる『友野氏由来・系図』には同氏は大坂夏の陣（慶長二〇年・一六一五）以後兵農分離により民間に身を置き庄屋職を担うようになったことが記されている。同氏の実質的な家祖を天正一九年に没した友野石見守として、同時期に友野氏が近世的なイエとして確立したことを物語っている。

竹田聴洲氏は『蓮門精舎旧詞』に記された開創外護者について開創と形態の両面から分類し、A「開創の外護者を（公家・将軍）大名・領主級武士とする寺」、B「開創の外護者を地侍・藩臣級武士とする寺」、C「開創の外護者を単独の庶民とする寺」、D「開創の母体を庶民の信仰集団とする寺」、E「開創の母体を惣村（総郷）とする寺」、F「開創の外護者を

正史・稗史上の在俗名士に仮託する寺」などに大別している。⁽¹⁶⁾宝泉寺は土豪である友野氏の援助を受けて独立しているため、実質的にBに当てはめることができるだろう。

また竹田氏は同じく『蓮門精舎旧詞』を分析し、天正(一五七三)一五九二から寛永(一六二四)一六四四にかけて民間寺院の成立が集中していることを見出しており、宝泉寺が楯築山に移った慶長年間はこの時期に収まる。現在宝泉寺は近隣村落に檀家を有し、これらの家々の先祖供養を担っている。つまり友野氏や周辺村落の先祖信仰を担い、後にこれらの家々と寺檀関係を形成したものと考えられる。

二 日差寺に起源をもつ民間寺院

『備中誌』には宝泉寺のほかにも日差寺を起源に持つとする寺院が複数記されている。これらの寺院についても検討を行うことにする。

日差山日差寺(日蓮宗系単立・倉敷市山地)は倉敷市山地にある日差山(写真2)の山上にある。⁽¹⁷⁾現在は無住であり、倉敷市山地の字日差の人々が管理している。現在同寺に檀家はなく、日差の人々は受法寺(日蓮宗・倉敷市山地)の檀家であるという。⁽¹⁸⁾日差寺の本尊は報恩大師が刻んだとされる磨崖仏の毘沙門天像で、旧暦で行われる初寅大祭には大勢の参拝客が方々から訪れる。

中世の日差山の歴史は、古文書などの記録が残されていないため不明である。しかし、『金山観音寺縁起』(治承四年・一一八〇)には備前金山寺(天台宗・岡山市北区金山寺)の次に創建した寺として登場するため、この地域の重要な寺院の一つであったことが窺える。また寺跡から出土した瓦により、平安期には寺院が存在していたと考えられる。⁽¹⁹⁾

(1) 解体前の日差寺

『備中誌』は幕末に編纂された備中国の地誌である。同史料によると、日差山に起源を持つ寺院は廃寺として記されているものも含めると一四か寺あり、山を下りた寺々は日差山の東側に広がる平野部の農村に寺を移している。これらの内、現存する寺院は近隣村落に檀家を持ち、葬儀や追善など先祖信仰を担っている。

まずは『備中誌』にある日差寺の概要を確認したい。同寺に関する記述は次の通りである。

開山報恩大師人王四十六代孝謙天皇御宇天平勝宝六年伽藍と日指の山峯に造る

本堂正観音の像を安置す報恩大師の作其所今本堂山といふ薬師堂今ツイシの内に在と云

愛染堂 今愛染畑と云其外堂塔多数有

興聖坊	多門坊	玉藏坊	浄土坊	曼荼羅坊
満願坊	井上坊	養福坊	見松坊	成福坊
持宝坊	吉祥坊	宝蔵坊	宝蔵坊	石橋坊
大蔵坊	実相坊			

此他猶有へけれども不詳仁王門は今山地村日差に在仁王畑と云来る又古道の跡有今は山と成畑と成て知れ難し又山下に在て岡の寺とて数坊有とも悉くは知がたし

神皇坊 円光坊 百々坊 牧山坊 受法坊⁽²⁰⁾

日差寺には聖観音を安置する本堂や薬師堂・愛染堂・仁王門などがあり、山上に多くの塔頭を抱えるほか、山麓にも「岡の寺」とよばれる数坊があったことなどが記されている。江戸時代後期の史料ではあるが、おおよその規模を窺うことはできるだろう。

『備中誌』によると、近世初頭の天正一〇年（一五八二）に行われた備中高松城水攻めの際に、小早川隆景が日差山に、吉川元春は日差山にある釈迦ヶ嶽、不動ヶ嶽に陣を構えた。この時山上の伽藍は悉く陣場となり、伽藍も破壊されたという。その後慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いの後、この辺りは宇喜多氏に代わって撫川城主戸川肥後守達安の所領となり、その子である土佐守の代に領内の寺院を日蓮宗に改宗させた。改宗に応じない寺は退去させた。日差寺も改宗しなければ寺領を没収して取り潰すとしたため寺僧はこれに怒り、寛永一三年に山上に所有する寺を処々に遷したとある⁽²¹⁾。もとの日差山には日蓮宗の日差寺が残るものの事実上の解体に至ったようである。この引用文から庭瀬藩主となった戸川氏が日差寺を含む、領内の寺院に日蓮宗への改宗を迫ったことがわかる。

次に『備中誌』に記されている日差山を後にした寺々に関する記事を示す。

日差山も改宗なくは寺領を没収して滅却せんと⁽²²⁾の旨、寺僧怒て山上に所有の寺を処々に移す。寛永十三年也。其寺院には満願坊は矢部村楯築山の側に日差山法泉寺と号し、興正坊は上庄村にて弘福山西方院と改め、曼陀願坊は下庄村に移り、浄土坊は両部山無量院、見松坊は法輪山蓮華院と号し共に下庄村に行、其外大蔵坊は大内田、石橋坊已下五坊は三手村に移り、西安坊受法坊は改宗して山地村に至り、依之山上の寺坊は悉く滅し本尊観音は山地村の内田氏川へ流すと云々。

或説に此像讃州志度寺に有とも云其外諸堂悉く打毀つア、天平勝宝六年より今九百年余に至て戸川氏の為に廃亡せし戸川氏もまた幾ならずして子孫絶二万五千石の采地没収せられ給ふ仏家にいう因果とや云へし⁽²³⁾

ここには戸川氏の日蓮宗への改宗命令が寛永一三年であったこと、寺ごとに移転先の村が記されている。

(2) 日差山を下りた寺々

次に『備中誌』に記載のある日差山を下りた寺々を検証したい。主に寺院の名称、宗派、本尊、移転に関する記述抜き出すことにする。(各寺院の名称は視認性を高めるため、寺院の名称は太字にした)

①「満願坊」の後身寺院

日指山満願坊宝泉寺 普賢院末也

古義真言宗 本尊正観音 脇立不動 毘沙門

慶長年中日差山を下りて楯築山に遷りし後寛永十三年今の地に転す宝泉寺旧跡日差山にて満願田というよし⁽²³⁾

先に取り上げた倉敷市矢部(都宇郡矢部村)にある日差山宝泉寺である。同寺は日差山の山号と当時の坊号を引き継ぎ、新たに宝泉寺という寺号を設けていることがわかる。先ほどの引用部分には寛永一三年に日差山を下りたとあるが、ここではすでに慶長年中(一五九六―一六一五)に楯築山(倉敷市矢部)に移り、寛永一三年に現在地に移転したことが記されている。

②「興正坊」の後身寺院

弘福山 西方院 興正坊 元日指山衆徒にて興性坊報恩大師の法脈なり

本尊阿弥陀

寛永十三年戸川氏領内日蓮宗と改められし時日指山去て爰に移る⁽²⁴⁾

現在、倉敷市上東(都宇郡上庄村)に真言宗系単立寺院の西方院として存在している。⁽²⁵⁾

③「曼陀願坊」の後身寺院

日指山曼荼羅坊 曼羅寺

古義真言宗普賢院末寺是も日指山の衆徒にて此地に遷りしなり〇〇年中舜嘗といへる代宮内普賢院を兼任し終に本坊を彼地に引移せり普賢院の條に出す。⁽²⁶⁾

『備中誌』にある普賢院の説明には、「往古ハ真言宗金剛寺と合し吉備津宮社僧の寺なるよし慶長十六年御朱印配当の寺也此寺元南の方畑中に有寛永年中上庄村曼荼羅寺舜嘗住持の時今の地に遷し金剛寺と曼荼羅寺とを合して一寺となす」と記されている。⁽²⁷⁾ 舜嘗は、普賢院の中興開山であり、寛永二年(一六四四)に入寂している。⁽²⁸⁾

先に示した引用文には下庄村に移ったとあるものの、かつての上庄村である倉敷市上東の小字に曼荼羅寺という場所がある。ここには明治二三年まで靈福寺があり、地藏堂や墓地が存在する。

④「浄土坊」の後身寺院

両部山無量院浄土坊 報恩大師法脈也

是も宝性坊と同じく日差山の衆徒也 本尊阿弥陀⁽²⁹⁾

『庄村誌』によると両部山靈福寺が上東字曼荼羅寺にあったといい、明治二三年に宝性寺と合併し宝福寺になっている⁽³⁰⁾。また宝福寺の一五〇メートルほど南東に南瓜庵（写真3）があり、この場所は両部山無量院浄土坊の境内であるという⁽³¹⁾。先に示した引用文の傍線④に、「両部山無量院（中略）下庄村に行」とあるため、日差山から南瓜庵の場所へ移った後に、曼荼羅寺跡へ移転した可能性が考えられる。両部山の山号が一致するため、無量院浄土坊が後に寺号を名乗り、靈福寺になったとみられる。

⑤「見松坊」の後身寺院

法輪山蓮光院宝性寺 報恩大師の法脈を継たり

日指山衆徒の坊中にて見松坊といひしが寛永十三年戸川氏内心帰依にて領分の寺々彼宗派に改れし時其命に応ぜす日差山を去て爰に移る

本尊如意輪觀音⁽³²⁾

倉敷市下庄にある真言宗の宝福寺の前身寺院の一つで、『庄村誌』によるととは⑤宝性寺と称しており、明治二三年に上東字曼荼羅寺にあった④両部山靈福寺と合併し宝福寺と改称した⁽³³⁾。

⑥「大蔵坊」の後身寺院

大内山無量寺大蔵坊 始日指山と云

此寺も日指山衆徒にて報恩大師の統を継て寛永三年此地に来る 本尊阿弥陀⁽³⁴⁾
現在の岡山市北区大内田には同様も名称をもった寺院は存在していないが、真言宗の千手寺が存在しており、『備中誌』には同寺について次のように記されている。

遍光山蓮花寺千手院 始は日指山と云

是も日指山衆徒の内にて報恩大師の法脈也しか寛永三年戸川氏の領内の寺々内心法花宗に改られし時彼の地を去りて此地に遷る 本尊千手觀音⁽³⁵⁾

大蔵坊と千手院は、戸川氏の改宗要請を拒否して移転したこと、大蔵坊とともに報恩大師の法脈であることが記されている。千手院は現在、偏光山蓮華院千手寺と称している。『千手寺に伝わる近世史料には偏光山蓮華院千手寺とあり、『備中誌』の名称は誤りのようである。

⑦「石橋坊已下五坊」の後身寺院

清明山鏡善寺 古義真言宗宮内普賢院末

里諺曰此地昔五坊有 持宝坊 吉祥坊 宝蔵坊 宝蔵坊 石橋坊と云々真言宗開
山報恩大師中興快重法印大永元年三月建立本尊地藏古作也
享保記二日今僧の云処古ハ天台宗にて其時の張札二日

定御影供役者之事

伝供 侍従

祭文 宰相

表白 宝蔵坊

唱礼 宝蔵坊

経頭 勝織坊

讃頭 吉祥坊

右依衆議所定如件

大永七年三月廿一日

依之見之大永中四坊有しと見ゆ侍従宰相等天台宗多く名付ける所也四坊の天台宗
廃せしや今ハなし⁽³⁶⁾

『備中誌』の賀陽郡三手村の項目に記されている寺院である。五つの坊の中に石橋坊の名
がみえることと報恩大師開基とあることから、同寺が「石橋坊已下五坊」の後身寺院であ
ろ。

⑧「受法坊」の後身寺院

妙信山受法寺 妹尾盛隆寺末

古しへ日指山衆徒の寺坊也しを領主戸川氏改宗せしめられ寛永二年中興慈眼坊日定
也或云真珠院日領延宝七年九月廿七日寂と見へたり又云妙信と云尼僧日蓮宗の始め
なる故妙信山と号すと云う

天文二年の書付に日差山の涅槃像を奪いて今は此受法寺に在と云⁽³⁷⁾

現在の倉敷市山地日蓮宗の受法寺がある。日差寺にあった塔頭の内、現存する寺院として
は唯一改宗を受け入れた寺院であるが、先に示したように『備中誌』には「西安坊受法坊は
改宗して山地村に至り」とあるように当初の場所から現在地へ移転し、日差寺からも独立し
たようである。

以上が『備中誌』編纂当時存在する寺院として記されている寺院であるが、同史料には廃
寺となった寺院も記されているため、これらについても確認しておきたい。

日差山 西安寺日差村に旧跡あり

日蓮宗盛隆寺末（もと日差寺衆徒の寺坊なりしを寛永年中に改宗せし也）

日指山槇山寺

日蓮宗盛隆寺末いつれの頃か廃寺と成是も日差山の寺坊也しを改宗せしならむ

日差山神皇寺

開山報恩大師也いつれの頃にや廃寺せられたり

同 日差山円光坊

同 日差山百々寺

両寺共日差山衆徒の内にて報恩大師法脈の寺也改宗せずして廃寺と成⁽³⁸⁾

これらの寺はいずれも日蓮宗であるため、戸川氏の改宗命令を受け入れたようであるが、その後廃寺になっている。

(3) まとめ

日差寺に起源をもつ寺々は戸川氏による日蓮宗への改宗命令をきっかけに、村々へ移転したとされる。戸川氏の改宗命令は寛永一三年とされるが、『備中誌』の記載によるとそれ以前の慶長年間や寛永三年に移転したことが記されている寺院も含まれる。また改宗を拒否し、ムラへと移った寺院はいずれも真言宗であり、その直前の日差寺も真言宗であったと考えられる。また日差寺を構成する子院の中には日蓮宗に改宗したものもあり、これらの寺院は戸川氏の改宗命令を受け入れたものと考えられる。

『備中誌』に記された日差寺を構成する子院がムラに移ったとする時期は、江戸時代初期の慶長から寛永にかけてのことで、竹田聴洲氏が示した民間寺院の成立が集中している時期と一致している。竹田氏はこの時期について次のように述べている。(一)内の元号と西暦は竹田氏の示した区分をもとに筆者が補足した。

I期(正保→元禄・一六四四→一六九六)に全国的に確立を見る寺請檀家制が庶民の「家」を前提としていくことからすれば、このH期(天正→寛永・一五七三→一六四三)は久しい戦国動乱の中で流動してきた都鄙社会が、統一封建制への過程で新しく定型化される方向の決定的となった時期であり、また地域社会の構成契機である農庶個々の小さい「家」が広般に簇生し、兵農分離と領主の検地を介して普遍的になったことは少なくとも有力な原因の一つであろう⁽³⁹⁾

日差寺を離れ村々に寺を構えた寺院のうち、現存する寺院はいずれも近隣村落に檀家を有している。移転当初はムラの先祖信仰を担う民間寺院として成立し、後に寺檀関係が形成されたものと考えられる。日差寺解体のきっかけは戸川氏による日蓮宗への改宗命令であったとされるが、備中東南部にあたる日差寺周辺でもこのような動きがあり日差寺において各子院が村々の先祖信仰を担う動きがあったものと推察し、戸川氏の改宗命令により堰を切ったように、日差寺が解体され、その子院による民間寺院形成が進んだものと考ええる。

また赤田光男氏は仏堂の成立について考察を行い、ムラなどに設けられた仏堂についても、葬祭儀礼や先祖信仰を目的として設けられたものがあること、また堂以前、堂以後の堂に代わるべき存在についても言及しており、墓制研究上詣墓石塔に代わるものとして仏壇・位牌・塔婆・盆棚・地神・地主神・氏神・山神・荒神・ニソノ森・荒神森・モリドノ・タチワラ・道祖神・猿田彦大神祠・地蔵祠・庚申塔・屋敷神・霊山・霊場」などとも関連する間

題であるとしている。⁽⁴⁰⁾

本節では『備中誌』の記載から、日差寺に起源を持つ民間寺院の成立について検討を行った。日差寺に起源をもつ寺院が存在する倉敷市下庄には先に取り上げた南瓜庵があるほか、倉敷市上東には集会所の一角に仏像などが祀られるなど、集会所に堂の機能を併せ持つものが存在する。下庄・上東の両地区にはムラごとに荒神が祀られ、墓地在隣接している場合も見られる。またこれらの荒神は拝殿部分が集会所とされている場合も見受けられる。墓地在隣接して設けられているのは日差山を起源にもつ寺々も同様で、現存する寺院のすべてに墓地在隣接しており、受法寺・西方院・霊福寺ではかつて両墓制の存在も確認されている。⁽⁴¹⁾今後これらについても調査を行うことで、この地域における先祖祭祀の実相を明らかにできると考える。

三 福山寺に起源をもつ民間寺院

福山寺は日差山西側の尾根続きにあるに福山（総社市西郡）の山上にあった寺で、『備中誌』には日差寺と同様に、福山寺を起源に持つとされる寺院が複数記されており、福山北麓の村々や南にやや離れた現倉敷市帯江の丘陵上など、いずれも農村部に移転している。

まずは『備中誌』で福山寺について検証した後、同寺を起源に持つ各寺院の検討を行うことにする。

(1) 解体前の福山寺

『備中誌』には福山寺について次のように記されている。（傍線・番号筆者）

福山 福山寺〈福山の絶頂に在しか今廃して軽部村に遷す〉

開山不詳或云禪宗報恩大師金堂経堂山門僧房鎮守帝釈堂三重塔其外諸堂巍々として建並しか乱世相續き殊に建武中庄常陸介兼祐此地を城郭として楯こもりしを大江田式部太輔氏経攻之常陸介叶はすして大江田に降りしかは是より氏経又居之て足利勢をさへきらんとす時に建武三年足利直義西国より大軍を卒しおし登りて此城を攻む山上山下軍勢ならぬ地はなしと云大江田氏経しばしば防戦すといへとも敵は目に余る大軍也所詮こらゆへくも見へされば終に落城して播州近く三石へ引退く是に於て直義城に火をかけ焼立れば流石に福山寺も此時に至りて回祿しぬ浅原寺国分寺なども焼失せり是より後は昔のことく諸堂も建立出来ず漸昔の形を残せり

応永七年南禅寺一麟の書し吞海寺靈岳禅師の伝に七歳喪父登福山寺勤学すと有之回祿後六十年余応永の頃に至りても学徳の僧住職せしと見えたり

往古数坊有しか中古一山十二坊

小池坊 東坊 西坊 乾坊 玉蔵坊 奥坊 天神坊 万福坊 鍛冶屋坊 真如坊
惣持坊 宝積坊⁽⁴²⁾

建武三年（一二三六）に起こった福山合戦により城とともに福山寺も焼失し一旦は廃寺となったようである。しかしその後応永七年（一四〇〇）には福山寺に僧がいたことを示す史料を挙げている。この続きには日差寺同様に福山寺を構成する寺々の名称とともに移転先である村の名を記している。次にその部分を示す。

福山開基せし頃は海近く民居山溪に在しか追々新開出来してより次第に人家を移し山頭溪間は自ら稀に成よつて元和年中 小池坊 乾坊 玉蔵坊 西坊は帯江村に移し夫より後奥坊は西郡へ鍛冶屋坊は三和村に引移りて真言宗と也ぬその年を経に従ひ諸坊追々山より下り本坊も破壊に及びて終に福山寺を軽部村に移し福山寺の名を法積院と改む三重塔其外仏宇も宝積院へ引取福山寺爰に至て退転す⁽⁴³⁾

福山から移転した理由について、かつては民家が山麓に位置していたが、それまで海であった地域が陸地となつて新たに開かれ、人々は次第に家を移すようになった。そのため寺を村々に移したとし、その移転時期は元和年中（一六一五～一六二四）とある。

（2）福山を下りた寺々

次に日差寺同様に『備中誌』に記載のある福山を下りた寺々を検証したい。ここでも主に寺院の名称、宗派、本尊、移転に関する記述抜き出すことにする。

⑨「小池坊・乾坊・玉蔵坊・西坊」の後身寺院

福山正智院駕龍寺 帯江村に有り 本寺高野山

元来福山寺十二坊の内にて小池坊とて彼地に在しか花園天皇正和年中小池坊法印頼有乾坊東坊西坊玉蔵坊等を率ひて福山より帯江村五日市の山中に遷り凡四百余年を経高観の代元文四年より宝暦七年の間に本堂山門十六羅漢堂など諸堂造立し宝暦九年十一月力士門成る同十月十王堂建つ本尊聖観音恵心僧都の作也とそ小池坊の本尊を遷したるか戸川氏の家寄附有⁽⁴⁴⁾

花園天皇の時、正和年中（一二三二～一二三七）に、福山寺の小池坊が乾坊、東坊、西坊、玉蔵坊を率いて帯江村の五日市へ移転したことが記されている。前項の引用文には元和年中とあるため、時代が大きく異なっている。現在同寺は倉敷市帯江に高野山真言宗の備福山正智院駕龍寺として存在している。

駕龍寺に伝わる宝暦一二年の『備中窪屋郡帯江村備福山駕龍寺縁起』にも同様のことが記されている。

⑩「奥坊」の後身寺院

同福山奥坊

福山衆徒十二坊の内也寛文六年備前仏法破却の時廃せらる⁽⁴⁵⁾

冒頭の「同」とはその前に記された寺院と同様に「廃寺」であることを示している。西郡村に移転したと前項の引用箇所にあるように同寺は岡山藩領にあったため、寛文六（一六六六）年の寺院整理の際に廃寺となったものとみられる。

⑪「鍛冶屋坊」の後身寺院

鍛冶屋坊 本福山十二坊の一也後爰に移す

福井山般若寺鍛冶屋坊

本尊薬師如来

往古福山の峰に在彼地十二坊の一也後三和村に遷す今本寺国分寺⁽⁴⁶⁾

三和村は現在の総社市三輪のことと思われ、現在も真言宗の般若寺がある。同所に福井山医王院般若寺がある。

⑫「本坊」の後身寺院

同 法積院 軽部村

元来福山山福山寺大伽藍成しか衰微して坊中諸方へ移り建武三年足利直義福山城合戦之時諸堂烟消せし後は草堂にて後刈部村に遷し法積院と改め三重塔其外仏堂悉く引取と云元和の頃小堀遠州公より寺領高三石を免す廃寺と成て大日堂一字残れり塔の有し跡今塔の元と云免除高之内壹石除今村内に残れり⁽⁴⁷⁾

寺院名の前に記された「同」はその前に記されている寺院と同様に廃寺であることを意味している。軽部村への移転時には主要な建物を新たな境内へ移すなど、福山寺の本坊としての位置づけが表れている。この本坊が福山を下りたことによって福山寺の塔頭がすべて他所に移転し、福山寺の歴史が途絶えたことが記されている。その後ほどなくして岡山藩領であるため寛文六年の寺社整理で廃寺になったようである。

軽部村は現在の総社市清音軽部に当たる。また、『備中誌』には隣接する柿木村には同じく廃寺となった「宝積院」があり「同宝積院 柿木村二在 寛文年中破却せられし時還俗す」と記されている⁽⁴⁸⁾。柿木は軽部村の枝村であるため、法積院と宝積院は重複して記された可能性がある。寺跡とされる場所に、現在も大日堂とみられる小堂が残されている。

以上が引用文中に記されていた福山寺から他所へ移転した寺院であるが、このほかにも福山寺を起源とする廃寺寺院がいくつか記されているため確認しておきたい。

廃寺不断山万福寺

往古福山寺衆徒十二坊の内也寛文六年還俗し寺坊破却す⁽⁴⁹⁾

廃寺天神坊 真言宗

福山寺の余属小屋天神宮の社僧也寛文六年寺坊破却す⁽⁵⁰⁾

両寺ともに所在地については記されていないが、万福寺については総社市清音輕部にふらんどふ不断堂墓地の場所にあったとされている。これらの廃寺はいずれも寛文六年に寺坊が破却されたと記されていて、岡山藩領であったため寺社整理の際に廃寺になったとみられる。

(3) まとめ

福山からおりた寺院の内、現存する寺院は真言宗の駕龍寺と般若寺のみである。いずれも日差山の寺院と同様にムラにおいて寺檀関係を形成している。福山寺は福山の山頂（標高約三〇〇メートル）付近にあったとされ、日差寺（標高約一七〇メートル）と比べても非常に高い場所に寺を構えていた。檀家の参拝にも不便な場所であり、檀家を獲得するためには寺を平地に移した方が有利であったと考える。その寺を山からムラに移したとされる時期も、日差山同様に竹田氏が示した天正から寛永にかけての民間寺院成立が「圧倒的過密」になる時期と一致している。

おわりに

本節では主に『備中誌』の記述から日差寺と福山寺を起源に持つ民間寺院の成立過程を明らかにした。日差寺と福山寺はともに中世の祈祷寺院であり、祈祷を目的とした寺院であった。日差寺を起源に持つ寺院の一部は戸川氏の政策により日蓮宗になったが、大部分は真言宗であり、福山寺を起源にもつ寺院はすべて真言宗である。そのため解体直前の日差寺と福山寺は真言宗であったと考えられる。

竹田氏は天正から寛永にかけて民間寺院の開創が集中することについて次のように述べている。（H期は天正から寛永・一五七三～一六四三、I期は正保～元禄・一六四四～一六九六）

I期に全国的に確立をみる寺請檀家制が庶民の「家」を前提としていることからすれば、このH期は、久しい戦国動乱の中で流動してきた都鄙地域社会が、統一封建制への過程で新しく定型化される方向の決定的となった時期であり、また地域社会の構成契機である農庶個々の小さい「家」が広範に簇生し、兵農分離と領主の検地を介して普遍的になったことは少なくとも有力な原因の一つであろう⁽⁵¹⁾。

日差寺と福山寺も同様の理由から子院が「家」の先祖信仰を担う目的でムラに移ったものと考えられる。日差寺の場合は戸川氏による日蓮宗への改宗命令を拒否したため、多くの子院が日差寺を去ったとされるが、ムラの先祖信仰を担う動きはすでにあり、戸川氏の命令によつ

て日差寺の解体が促進されたものと考ええる。

赤田光男氏は「村の祖霊祭祀堂型の仏堂は治病・招福を祈る現世利益的な祈禱場の性格から、中世後期に至ると菩提供養や極楽往生を願う場へと移り、やがて期熟してそれが檀家菩提寺への過程をたどるケースが多かった」と述べている。⁽⁵²⁾赤田氏は村堂を対象に考察を行っているが、日差寺・福山寺の解体と、両寺を構成する子院が村々に移り民間寺院へと姿を変えたことと同様の変化をたどっていることがわかる。

【註】

- (1) 竹田聰洲『民俗仏教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年、四〇五頁。
- (2) 同前、六九〇八七頁。備前国にある浄土宗寺院の分布については上道郡に一〇か寺、児島郡に一か寺があるとしている。竹田氏は備前における浄土宗の民間寺院については特に述べていない。但し岡山藩の場合浄土宗寺院は天台・真言・日蓮の三宗派で大部分が占められ、浄土宗寺院の分布も岡山城下やその周辺部に限られることから浄土宗寺院のみの分析では民間寺院成立の傾向を検討することは困難である。
- (3) 前掲(1)、四〇五頁。
- (4) 同前、一一九五〇一二〇四頁。
- (5) 藤井駿・水野恭一郎『岡山県古文書集』第二輯、山陽図書出版、一九五五年、二五〇三頁。
- (6) 平凡社地方資料センター『岡山県の地名』日本歴史地名大系第三四巻、平凡社、一九九九年、九五〇頁。
- (7) 吉田研一編『備中誌』日本文教出版、昭和三七年、一二九頁。
- (8) 山手村史刊行委員会『山手村史』史料編、山手村、二〇〇三年、四一〇四一二頁。
- (9) 本来の『宝泉寺縁起』は昭和二二年に火災で焼失している。現在の『備中日差山宝泉寺縁起』は当時の住職が昭和一三年に書写されていた吉田謙三氏蔵本を底本として、友野家所蔵「日差山縁起」の写本を参考にして、新たに縁起を作成したという。中川真弓「『観音冥応集』と宝泉寺縁起―蓮体の備中における書写活動をめぐって―」『詞林』第四一号、二〇〇七年、五九頁。
- (10) 『宝泉寺寺蔵文書』。
- (11) 前掲(7)、一二七頁。天平勝宝六(七五四)年から五百一五年後は文永六(一二二六)年で龜山天皇の時代であるため誤りであろう。
- (12) 神戸説話研究会『宝永版本 観音冥応集―本文と説話目録―』研究叢書三三五、和

泉書院、二〇〇六年。

(13) 前掲(8)、四二一頁。

(14) 前掲(8)、四一三～四一六頁。

(15) ①竹田聰洲『民族仏教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年。②赤田光男『日本村落信仰論』雄山閣、一九九五年。

(16) 前掲(1)、九七頁。

(17) 『岡山県地名』日本歴史地名体系三四、平凡社、一九八八年、七二一頁。

(18) 平成三二年二月一〇日、初寅大祭の際に日差寺において日差地区の方から聞き取り。

(19) 倉敷市史研究会『新修倉敷市史』第二巻 中世・古代、倉敷市、平成一一年、二六六頁。

(20) 前掲(7)、一二四頁。

(21) 同前、一二八～一二九頁。

(22) 同前、一二九頁。

(23) 同前、一二九頁。

(24) 同前、一一頁。

(25) 前掲(17)、七二〇頁。

(26) 同前、一五頁。

(27) 同前、一八七九頁。

(28) 同前、一八七九頁。

(29) 同前、一五頁。

(30) 『庄村誌』倉敷市、昭和四六年、二二〇頁。

(31) 同前、二三七頁。

(32) 前掲(17)、一五頁。

(33) 前掲(30)、二二〇頁。

(34) 前掲(7)、一一四・一一五頁。

(35) 同前、一一四・一一五頁。

(36) 同前、一五四三頁。

(37) 同前、一一八頁。

(38) 同前、一一八・一一九頁。

(39) 前掲(1)、一二二頁。

(40) 赤田光男『祭儀習俗の研究』日本民俗学叢書、弘文堂、一九八〇年、四八頁。

(41) 加原耕作「庄村及び福田村の両墓制」『岡山民俗』九〇号、一九七〇年。

- (4 2) 前掲(7)、一九五〇～一九六頁。
(4 3) 同前、一九五〇～一九六頁。
(4 4) 同前、三一五頁。
(4 5) 同前、一九六頁。
(4 6) 同前、二五五・二五六頁。
(4 7) 同前、二五〇頁。
(4 8) 同前、二五〇頁。
(4 9) 同前、二五〇頁。
(5 0) 同前、二五五・二五六頁。
(5 1) 前掲(1)、一二二頁。
(5 2) 前掲(4 0)、四九頁。



写真 2 日差山 (写真中央の峰)



写真 1 宝泉寺本堂



写真 3 下庄 南瓜庵

第二節 岡山市東区瀬戸町大井における民間寺院の成立と先祖信仰

はじめに

岡山市東区瀬戸町大井^{だいい}（以下大井）（写真1）は備前国の東部、吉井川右岸に位置する稲作を中心とした農村である。東に隣接する瀬戸町万富には鎌倉時代に東大寺の瓦を焼いた万富東大寺瓦窯跡があることはよく知られている。近世には備前国磐梨郡大井村^{だいむら}であり、今日でも近隣の地域では「だいむら」の呼称も用いられている。大井を含む瀬戸町域は日蓮系寺院の檀家が多い地域であり、そのなかには日蓮宗不受不施派や不受不施日蓮講門宗の檀家が点在している。大井には江戸時代前期に蓮久寺という不受不施派の寺が存在したものの、岡山藩が寛文六年（一六六六）に行った寺社整理により廃寺になった。大井にあるいくつかの個人宅には同寺で祀られた仏像が伝えられているほか、近世の不受不施派の様子を示す記録も確認することができる。本節では大井における民間寺院の成立と不受不施派信仰の展開について明らかにし、あわせて先祖信仰の展開についても検討を行いたい。現地調査は令和二年夏から翌三年の夏にかけて実施した。

一 瀬戸町大井の概要

瀬戸町大井には八四戸（令和二年六月現在）があり、上^{かみ}（カミンジヨウ）・西^{しも}・下^{むかい}・向井^{やまのはた}・山端^{かわうち}・川内^{かわぞと}・川外の七つの村組がある。さらに組を超えて同族であるカブウチが存在する。檀那寺は大部分の家が妙興寺（日蓮宗・瀬戸内市長船町福岡）で、正妙寺（日蓮宗不受不施派・赤磐市稗田）の檀家が四戸ある。

大井を含む瀬戸町域には日蓮宗寺院が多数存在しているが、岡山藩主池田光政が寛文六年に行った寺社整理によりその全てが廃寺となった。大井村には蓮久寺があったが同寺もこのとき廃寺となり、同寺の檀家だった人々は邑久郡福岡村の妙興寺（日蓮宗・瀬戸内市長船町福岡）の檀家になったようである。そのなかには表向きの檀那寺と付き合いをしながら、実際には不受不施派の教えを信仰する内信者がいたと考えられる。現在大井には四戸の不受不施派寺院の檀家が存在するが、近世の弾圧下にとどの程度の家が不受不施派の内信者であったかはわからない。

氏神は集落の北側山上にある神時神社（岡山市東区瀬戸町鍛冶屋）で、大井と鍛冶屋を氏子としている。享保六年（一七二一）に編纂された岡山藩の地誌『備陽記』によると「一天

神 鍛冶屋村之内ニアリ神田一反二十四歩⁽¹⁾とあり、これを明治三年に旧号の神時神社に復したという。大井集落のなかには神号免とよばれる三角形の広場があり、その北東部の一角には神時神社遥拝所の社殿が設けられ、神号免の南側入り口には「天神宮」と刻まれた鳥居がある。この神号免で毎年八月二四日に大井村踊り⁽²⁾が行われていることはよく知られている。

大正一三年に編纂された『太田・吉岡村誌』によると、「而して岸本・額田・荒木等諸氏がこの地に移住したと云ふのは殆ど同時で、約三百年以前の事で有ります。是に依りて考えますと、村落としては慶長、元和の頃、大に発達したものの様に思われます。(中略)口碑によりますと、井上氏は此村最初の住者だと。又昔村の無かつた以前には、村の中央を流れてゐる向谷と云ふ細川を以て界とし、東は多田原西は鍛冶屋村であつたが、何時の頃か此両村を割いて此大井村を置いたのだから、此村は土地が他村に較べて非常に狭いのであると。」と記されている。⁽⁴⁾

また村名の由来については、その地に古くからいた井上氏の勧めにより、岸本氏の先祖である大江氏が開拓したので両者の一文字をとって村名にしたとされる。⁽⁵⁾当初村名は「おおい」と呼んでいたが、岡山藩主池田大炊頭継政が藩主になったため、正徳五年(一七一五)に「だい」と改称したという。

二 大井における蓮久寺の成立と不受不施派の信仰

(1) 蓮久寺の成立

今日の大井は大部分が日蓮宗と不受不施派の家である。神号免から西北に一〇〇メートルほど離れた所に寺屋敷とよばれる畑があり、ここが蓮久寺跡とされている。その西側に隣接して道成敷^{どうじょうやしき}とよばれる敷地があり墓地になっている。ここに題目が刻まれた一石五輪塔があり、地輪部には「天文三年(一五三四)甲午 三月四日 日堤尊位」とある。題目が刻まれていること、僧の名に日号が用いられていることから、中世末期にはこの地に日蓮宗の僧がいて、信仰の拠点となる施設が存在していた可能性がある。近世初期までに大井に日蓮宗が伝えられていたことが窺える。

『瀬戸町史』には蓮久寺の遺物として次のような文書が示されている。

坊号事 (慧教庵保管)

宣称蓮住坊日信

右攸任若件

天正十八年庚寅三月廿八日

日典花押^⑥

蓮住坊日信の名を授けた日典は備前国御野郡野々口村出身の僧で、不受不施派の祖である日奥の師にあたる。同記録は、日蓮宗が不受不施派と不受不施派に分裂するきっかけとなった、文禄五年（一五九六）の秀吉による方広寺千僧供養以前のものである。^⑦

次に蓮久寺の仁王門に関する記録をみてみたい。大井に伝わる伝承では、蓮久寺が廃寺になった際に、仁王門が宗堂村（現瀬戸町宗堂）の妙泉寺（日蓮宗不受不施派・蓮久寺の本寺）に移されたが、その後妙泉寺も廃寺となったため、願興寺（天台宗・岡山市東区瀬戸町肩脊）に移されたという伝承がある。『瀬戸町誌』には『願興寺文書』に含まれる仁王門に関する古文書が掲載されている。その内容は次の通りである。

寛永三歳岩生郡大井村山名清兵衛建之仁王門。

元禄十四^{辛巳}天六月仁王像再興施主磐梨郡大井村山近八兵衛、山主栄雄代。

天保四癸巳歳三月同再興施主磐梨郡大井村山近林治、山主大乘院憲性代。

願主連盟委敷相分兼申候故、此度改而一枚に書直し棟に納置申候、尤今年の再興願主は仁王尊像御腹に納置申候。

備前国磐梨郡中津山願興寺

天保四^{癸巳}三月

大乘院

光明院

右の通写懸御目に申候已上。

大乘院

大井村 林治様^⑧

ここには大井村の山名氏と山近氏の名がみえるが、現地調査により確認したところ山近氏は山名氏が改称した名であり、どちらも同じ家の人物であることがわかった。まず寛永三年（一六二六）の記録は蓮久寺に仁王門が建てられた際のものである。その後の元禄一四年（一七〇一）と天保四年（一八三三）の記述は願興寺に移転されてからの記述である。仁王門が蓮久寺を離れてからも施主である山名・山近氏がその再興に関わり続けていることは大変興味深い。

次に、大井の個人宅に伝わる蓮久寺の日蓮像、鬼子母神立像十二体、三宝尊像にみられる銘文が『瀬戸町誌』（一九八五年刊）に記されており、これらについて検討したい。（一部個人名が記されている部分は略す）

①日蓮座像

（個人名のため略す）

銘 奉造立日蓮大正人 右意趣者現世安穩後生善処祈者也 施主 仁左衛門

承応二年巳三月二十八日

大井村 蓮久寺開山 日新花押

②鬼子母神立像十二体（『太田吉岡村誌』）

銘 □趣者村中勸進造立者也 施主□中別メハ清兵衛 □□大井村

蓮久寺開山 日新花押

③三宝尊像（『太田吉岡村誌』）

銘 奉造立多宝如来 右趣者父宗永靈三十三年忌菩提祈者也

施主 清兵衛内義妙教

奉造立釈迦如来 右趣者村中勸進仕本尊令造作者也

施主蓮久寺開山 蓮住坊日新花押^⑨

ここに示した三点は『太田吉岡村誌』（一九二四年刊）にも記されている。^{（一〇）}

①の日蓮座像（写真2）、②の鬼子母神立像十二体、③のうち釈迦如来像には「蓮久寺開山日新」と記されていることから、日新が蓮久寺の開山であることがわかる。このうちの①には承応二年（一六五三）と記されているため、この時期に寺として調べられたことがわかる。

②と③の多宝如来の施主にみられる「清兵衛」は寛永三年に仁王門を造立した山名清兵衛で、山名氏が蓮久寺の造立に強く関わっている様子が窺える。さらに②と③の釈迦如来像については「村中勸進」によって造立されたことが分かったともに、①には「現世安穩後生善処祈者也」、③の他方如来には「父宗永靈三十三年忌菩提祈者也」とある。つまり同寺は江戸時代初期に山名氏をはじめとするムラの人々によって建立されたことが推察されるところに、先祖供養と現世利益を祈る場所であったことがわかる。さらに中世以来の墓地に隣接していることも寺が先祖供養の場であることを物語っている。

その後蓮久寺は寛文六年の寺社整理で廃寺になり、先に示した①と③の仏像はそれぞれ施主の家に戻され現代に至るまで祀られている。^{（一一）}

（2）不受不施派の信仰と日新

次に、日新に関する史料を検証していきたい。日新によって開山された蓮久寺は寛文六年（一六六六）の寺社整理で廃寺となったが、文政年間（一八一八～一八三〇）に作成されたとみられる『撮要録』には同寺について次のように記されている。

○大井村

法永山蓮久寺蓮住坊 本寺同右

住僧出寺

跡株御払^{（一二）}

これにより当時の住僧は還俗せず、寺を去ったことが分かるが、『瀬戸町誌』によると『池田家文庫』に含まれる岡山藩の延宝七年（一六七九）の留帳には次のような記録が残されている。

延宝七年己未十月二日（留帳）

一、磐梨郡大井村籠舎入共被赦

右趣意は大井村法蓮と申す者、延宝六年の正月二十五日に相果て候処に蓮住房と申す不受不施坊主にて葬仕候由、所の庄屋承り今程御法度の坊主にて弔仕候段、沙汰の限りと申し急ぎ旦那坊主を呼び、弔仕り候えと法蓮俵共に申付候え、もつともと申し、邑久郡妙興寺へ申し遣し候え、代僧に同宿参り、死骸改め申さず候ては弔仕る事罷りならず候由申に付、法蓮子供又は庄屋年寄村中共に書物仕り、此度俵共心得違誤り申し候、後日に於て妙興寺を旦那と頼申す上は、此度の誤り御免候て弔い給候えと建つて申に付き妙興寺代僧も弔仕り埒立申し候、以下略⁽¹³⁾

岡山藩は寺社整理の際に宗派にかかわらず還俗を促している。還俗する代わりに寺地・寺田を与え生活を保証するという懐柔策をとっている。その結果還俗を受け入れるもの、還俗を拒み本寺に帰還するものなどがいた。不受不施派場合は不受不施派に転向しない限り寺院存続の道は閉ざされ、僧も不受不施派に転向する以外には僧として生きる道は残されていない。そのため不受不施派僧は還俗を受け入れる。または制法を維持する場合は寺宝をもつて行方を眩まし、その後密かにムラに戻って信者の指導を行つたとされる。それまでの寺を失った信者はその後新たな寺の檀家になったとされるが、密かに不受不施派の教えを信仰するものを内信者と呼んだ。⁽¹⁴⁾

ここに示した延宝七年の留帳には「蓮住房」の名が見られることから、廃寺の際に寺を去つたのは蓮住坊日新であったとみられる。先に示した『撮要録』には「住僧出自」とあることから、日新は寺社整理で蓮久寺が廃寺になった際に寺を出たようである。その後大井村に戻り葬儀を行うなど、内信者の指導を行っていたことが分かる。

道成敷の日新の石塔には、正面に「妙法蓮住院日新覺位」、向かつて右側には「延宝八年（一六八〇）庚申十二月廿日」とあることから（写真3）、蓮久寺が廃寺となった一四年後に亡くなっていることがわかる。また石塔に向かって左側の面には、「御題目三十〇⁽¹⁵⁾ 山近直平」と刻まれており、この名が日新の俗名なのか石塔を建てた人物の名前なのかは判断が付かなかったが、山近氏と関わりの深い人物であることが伺える。⁽¹⁶⁾

三 蓮久寺跡の墓地における先祖信仰

蓮久寺跡に隣接する道成藪に墓地がある。大井には別に西の山などに墓地があるが、道成藪にある石塔は豊島石の家形蘭塔など比較的古いものがあり、中には中世とみられる五輪塔や一石五輪塔がある。豊島石製のものは風化が進み破損したものも含まれ、文字の判読ができないものも多くみられる。昭和末期から平成初期にかけて一部整理が行われた場所があり、かつての景観とは変化している。道成藪に対して西の山の墓地にみられる石塔は比較的新しく、花崗岩製の位牌型や方柱型の石塔が目立つ。道成藪に墓を持つ家も新しい石塔は西の山に設けられている。行政による火葬がはじまる以前から火葬で、集落北方の山中に焼き場があったという。

また道成藪に墓をもつのは大井村にある一部の同族に限られ、そのうちの三つの同族がご先祖回向と称する同族祭祀を現在も行っている。これについて令和二年から三年にかけて聞き取り調査を行った。ここでは調査内容を記す。

現在、A姓のカブウチは四月の第一日曜日、B姓とC姓は第三日曜日に行っている。これは同じ日にご先祖回向が集わないように調整したためであるという。⁽¹⁷⁾ご先祖回向は近年まで道成藪に墓をもつもう一つの同族でも行われていたという。またご先祖回向は道成藪に墓をもつ同族のみで行われていて、その他では確認することができなかった。

(1) A姓のカブウチの事例

A姓のカブウチは道成藪に墓地をもち、四月の第一日曜日にご先祖回向を行っている。今から三〇年ほど前(令和二年現在)までは、四月の中頃に行っていたという。これは同氏初代の命日が三月九日であるため、その月遅れに行っていたということである。

現在カブウチを構成する家は、大井に一四戸、近隣の地区に出ている家が二戸存在する。かつて戸数の多い頃には二〇戸ほどあった。大井に住む家が毎年輪番で宿を務める。前々日までに道成藪の墓掃除を行い、ご先祖回向の前日早朝(八時半〜九時)には、新たに宿を務める家の人が、ご先祖さま(初代の位牌が入った厨子と「源氏(A)家先祖累世之尊霊」と記された掛軸など)を前の宿に迎えに行き、オカンキ(看経)をする。その後、新たな宿の家にお連れしてお床(床の間)に向かって右側に題目の御本尊(曼荼羅)、左に「源氏(A)家先祖累世之尊霊」と記された掛け軸を掛け、その前に設けた祭壇に厨子を安置しオカンキをあげる。その後、当日の朝までに祭壇に膳を供える。昔は参拝者用の会席膳を女性陣(台所方)が用意をしていたが、現在は仕出し膳をとる。現在カブウチは、三〜四戸ずつの三組に分かれており、女性陣は台所で配膳などの準備をし、男性陣は「ご先祖回向」を行う。導師は檀那寺である妙興寺の住職が務める。オカンキの後、道成藪の墓にお参りし、お参りが終ると宿の家に戻り記念撮影をして会食をする。宿の家ではその後一年間「ご先祖さま」

の位牌を祀るが、平素は祭壇を用いず、お床へ厨子を安置し、仏壇同様にお茶やご飯を供える。

近年は一軒の家に一人がご先祖回向に参加するのみであるが、かつては家族で参加していた。また檀那寺の僧はかつて交通の便が悪い頃には、法事やご先祖回向の際は前日に訪れ泊まっていた。前日にもオカンキをあげていたという。また近代以前には、毎年A姓の本家でご先祖回向を行っていたが、その家がなくなってからはカブウチが輪番で宿を務めるようになったようだという。

「ご先祖さん」の位牌はA氏初代の位牌で、正面にはその夫婦の法号が刻まれ、背面には没年が記されている。初代の没年は「寛永十五年寅年三月九日亥也」、その妻の没年は「寛永十七年八月九日亥也」とある。

初代は天正五年九月五日に大井村に移り住んだという。その際に同村の井上氏の援助で大井に定住することになったとされる。先の日蓮像の施主である仁左衛門は同氏の本家から最初に分家した家の人物で、現在その子孫宅に日蓮像が伝えられている。

(2) B姓のカブウチの事例

大井には現在、B姓の同族を構成する家は五軒ある。⁽¹⁸⁾ご先祖回向は四月第三日曜日に行う。現在はお床にマンダラ(本尊)を掛け、株家のものが集まってオカンキをする。B姓のカブウチも妙興寺の檀家であるが僧は呼ばない。その後、道成藪の墓へ参り、会食をする。

かつてはカブウチに古くから伝わる曼荼羅を宿の家に輪番で回し、ご先祖回向を行っていたが、近年は用いていない。またかつてはムラの外へ出ているものや子どもが集まり、大変賑やかであったという。朝一〇時から晩の七、八時ごろまでオカンキを行っていた。

(3) C姓のカブウチの事例

C姓のカブウチでは、毎年四月の第三日曜にご先祖回向を行っている。かつて大井に同族を構成する家は一五戸あったが、現在は一〇戸ほどであるという。ムラの外に転出している場合もあるが、ご先祖回向の際には大井へ戻って参加する場合もある。ご先祖回向の宿を勤める家は年ごとに輪番で交代する

ご先祖回向は四月の第一日曜日にその年に宿を勤める家で行われるが、前日に前年の宿を勤めた家から三柱の法号(各二文字)が記された位牌(背面にはなにも記されていない。)が入った厨子を迎えに行き、自宅のお床(床の間)に祭壇を設けて祀る。ご先祖回向当日は檀那寺である妙興寺の僧を頼み、カブウチの人が集まりご先祖回向を行う。参加は性別、年齢にかかわらず、希望するものが参加するという。オカンキの後、供物を三つに分け、道成藪の墓地、西の山にある墓(道成藪の墓地から移転されたもの)のほか、同族を構成する特定の家の裏に設けられた祠に参り、それぞれの場所に供物を供える。その後かつては会食

を宿の家で行っていたが、現在は料理屋へ行きその後解散する。

祠のある家には小さな蔵があり、ここにご先祖回向に使用する祭壇やお膳、食器などが収納されているという。

またC姓のカブウチを構成する家は、現在一〇戸程度の内三戸が不受不施派寺院の正妙寺（赤磐市稗田）の檀家である。宿を勤める家が妙興寺の檀家である場合にはご先祖回向の際に、同寺の僧を頼むが、不受不施派の家が宿になった場合は、僧は頼まずカセットテープを流すという。僧を頼むようになったのは平成に入ってからのことである。

同氏も井上氏のすすめで大井村に定着したと伝えている。

（4）まとめ

蓮久寺跡の墓地で先祖祭祀を行っている同族があり、寺があった頃の名残であると考えられる。A姓の同族ではかつては本家でご先祖回向を行っていたと伝えられているほか、C姓の同族にはある一軒の家がご先祖回向に必要な道具を保管し、この家に同族神的な祠が祀られている。このことからこの家が本家であることが推測されるとともに、本家が先祖の祭祀を担っていたことがわかる。その後分家が増えるに従って輪番で宿を勤めるようになったと思われる。またA姓の同族では初代の位牌が祭祀される。これは初代を先祖の象徴として祭祀する始祖崇拜の典型例である。

おわりに

近世初期に大井村に存在した日蓮宗不受不施派の蓮久寺は、ムラの家々に伝わる仏像などに記された銘文から近世初期に大井村の人々によって建てられたこと、日新によって開山されたことがわかる。また三宝尊像に記された銘文から大井村の山名氏が父宗永の三十三年忌の菩提を祈っていることが記されているほか、蓮久寺跡が中世以来の墓地に隣接していることから同寺が村の先祖供養を目的として建てられた民間寺院であると推察する。またご先祖回向を行っているABC姓は中世にはいずれも武士であったという。これらの同族はいずれも道成藪に初代からしばらくの間の石塔をもっている。このうちA姓とC姓は近世初期に大井村の井上氏のすすめで同所に定着したという伝承をもっており、この時点で近世的なイエ意識を持つようになったと考える。竹田聴洲氏は「家」の広般な簇生とそれを前提とする寺檀制度により民間寺院の開創が促進されたことを指摘して⁽¹⁾いて、大井村における蓮久寺の開創も同様の理由によると考える。

また赤田光男氏は惣における政治や宗教行事の場であった宗堂について、荘園制が解体

され、「惣」という村落共同体の結合が発生し、この惣の寄り合いの場として惣堂が建設された。この惣堂が政治的な会議の場となり宗教行事や芸能の場にもなった。この惣堂に素朴な仏菩薩が祀られたことが仏教の民間への定着を示すもので、個人や一結衆が石仏、石塔、石碑が造立し、さらには民間寺院が草創されたとしている。民間寺院では僧侶による様々な法会が行われたほか、民間の葬儀が仏教民俗となり年忌法要が営まれるようになること、寛永一五年（一六三八）頃に成立する檀家制により寺と家とが強く結ばれ家には仏壇や位牌が、墓地には個人ないし夫婦単位の石塔が発生すること⁽²⁰⁾を述べている。

蓮久寺は蓮住坊日新によって開かれるものの、寛文六年に行われた岡山藩の寺社整理により、代が変わらないうちに廃寺となった。しかし、日新は寺が廃寺になった後もムラに残り、葬儀を行ったことが明らかであり、しばらくの間は不受不施派の内信が行われていたと思われる。

本章では備前・備中の民間寺院の成立について考察を行った。備中に位置する日差寺（倉敷市山地）と福山寺（廃寺・総社市西郡）は共に中世の祈祷寺院である。両寺では近世のはじめに子院が近隣の村々に移転し、ムラの先祖信仰を担う民間寺院へと姿を変えていることが明らかにになった。また備前に位置する岡山市東区瀬戸町大井ではムラの先祖信仰を担う民間寺院として蓮久寺が創建されたことがわかった。以上のように民間寺院成立に関する二つの事例を見出すことができた。

【註】

- (1) 石丸定良『備陽記』日本文教出版、一九六五年、七〇頁。
- (2) 瀬戸町誌編纂委員会『瀬戸町誌』瀬戸町、一九八五年、三七二頁。
- (3) 大井村踊りは毎年八月二四日の晩に行われている。番神堂の裏にある牛神の祭りとして行われ、過去に一度行わなかったことがあるが、その時に牛の病が蔓延したため、以来台風などがあっても欠かすことなく毎年行われているという。（映像資料ビデオテープ）岡山民俗学会『大井村踊り（赤磐郡瀬戸町）』岡山の祭りと芸能一五、岡山民俗学会。
- (4) 『太田吉岡村誌』岡山県赤磐郡太田村吉岡村立千種尋常高等小学校組合、一九二四年、二七四頁。
- (5) 平凡社地方資料センター『岡山県の地名』日本歴史地名大系三四、平凡社、一九八八年、四二六頁。出典として（岸本胖内碑文）と記されている。
- (6) 前掲（2）、二六九頁。
- (7) 大井で現在も行われている大井村踊りの存在はよく知られており、毎年八月二四日の

夜に牛神の祭りとして行われる。雨が降っても蓑笠を着て踊らなければ牛が病気になるという。この行事は大井では「おどりまつり」とよばれ、宝暦年間に始まったとされる（番神堂の裏にある牛神の祠には「奉開眼牛神宮 神力如是心天歡喜 大井村中 宝暦六子十一月日妙興寺」と記された札が納められている。）。しかしこの起源には別の説がある。日典の出自は野々口村の大村氏と言われており、その速夜が旧暦の七月二十四日にあたるため、本来は日典の供養のために行われるものではないかという説がある。『瀬戸町歴史事典』瀬戸町教育委員会、二〇〇六年、一一六頁。

(8) 前掲(4)、二八六～二八七頁。

(9) 前掲(2)、八〇七～八〇八頁。

(10) 前掲(4)、二八六頁。

(11) 筆者が令和二年に行った現地調査で確認。

(12) 『撮要録』日本文教出版、一九六五年、一四九九頁。

(13) 前掲(2)、八〇八頁。

(14) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第六卷近世一、岡山県、一九八四年、七二〇～七二二頁。

(15) □は「才」に見えるが、他の石塔には「御題目三十部」と戒名の右上に刻まれているものがあり、これと同様の意味であると考ええる。

(16) 令和二年の現地調査で山近直平も山近氏の先祖であることが確認できた。

(17) 第二日曜日に行わないのはこの日に町内の行事が行われることによる。

(18) 本家とされる家が大井にあるものの、ご先祖回向における役割などは特に聞くことができなかった。

(19) 竹田聰洲『民俗仏教と祖先信仰』東京大学出版会、一九七一年、一二二頁。

(20) 赤田光男「大和国田原郷における惣堂と寺院信仰」『奈良学研究』第二三号、二〇二二年。



写真 2 大井の集落 (西側から撮影)



写真 3 日蓮座像



写真 4 日新の石塔



写真 1 道成菰の墓地 (写真右側が寺屋敷)

第四章 日蓮宗不受不施派の信仰

第一節 備前における不受不施派の特徴

はじめに

近世初期の備前には日蓮宗寺院が多く存在したが、岡山藩が寛文六年（一六六六）に実施した寺社整理でその多くが廃寺になった。

寛文六年の寺社整理以後、不受不施派については受不施派に転向しない限りは存続することができなくなった。受不施派に転向しない僧侶は還俗以外に選択肢が残されておらず、不受不施派を堅持する僧は地下に潜伏した。また信者の中には密かに不受不施派の信仰を継続する内信者と呼ばれる人々がいた。

現在も不受不施派の檀家が多いムラでは弾圧下の葬儀の様子が伝承されており、表向きの檀那寺の僧によって葬儀が行われた後に、再び不受不施派の僧によって葬儀がやり直されたこと、棺に収められ受不施派の帷子などはすべて取り出されて不受不施派のものを棺に入れたこと、また法号も檀那寺の僧によって付けられるが、不受不施派のものに付け直されたことなどが伝承されている。

本章では筆者が備前・備中各地で行った調査をもとに不受不施派信仰の実相に迫りたい。本節では不受不施派の歴史的展開や信仰集団である内信者組織の概要について自治体史などをもとに確認しておきたい。

一 不受不施派の信仰と歴史的経緯

近世初期の備前に不受不施派寺院が多く存在した理由として、京都妙覚寺の末寺が多かったことがあげられる。同寺には不受不施派の祖が属していた。日奥が主張した不受不施義とは宗祖日蓮以来の制法であり、信仰心のない者からの布施は受けず、施しもしないというものである。『岡山県史』は備前が京都妙覚寺の勢力基盤であり、「備前法華」の実態は「不受不施法華」であることを指摘している^①。

まずは不受不施派の発生から江戸幕府によって禁じられるまでの展開について確認しておきたい。文禄四年（一五九五）に豊臣秀吉は京都方広寺に大仏をつくり、千僧供養を行うため各宗派に出仕を命じた。日蓮宗にも出仕が命ぜられたが、不受不施義を守り出

仕を拒む不受不施派と妥協を受け入れる受不施派に分裂し日奥は妙覚寺を追われることになる。その後慶長四年（一五九九）に日奥は大坂城に呼び出され、徳川家康の前で受不施派と対論することになった。不受不施義を堅持する日奥に対し、家康は対馬流罪を命じた。

その後、慶長一七年（一六一二）に日奥が赦免され、不受不施派は勢力を盛り返したが身延山久遠寺を拠点とする受不施派が不受不施派の池上本門寺の日樹らとの対論を幕府に願ひ出た。対論は寛永七年（一六三〇）に江戸城で行われた。いわゆる身池対論である。勝敗はすでに受不施派の工作によって決まっており、不受不施派は破れ、日樹は流罪となった。

寛永期には寺院の本末関係が固定されるようになるが、日蓮宗については本末関係が確立されない状態が続いていた。幕府は寛文元年（一六六一）に本寺違背の末寺に対し、本寺に従うよう指示し、受け入れないものは寺を出ることを命じた。これに対し、備前国内に多くの末寺をもつ妙国寺（廃寺・現岡山市北区御津金川）は末寺一〇〇か寺が連判し不受不施義を堅持することを誓っている。

寛文四年から五年にかけて幕府は諸大名と寺社に朱印状を公布する。受不施派の策謀により寺領安堵の朱印状は將軍からの供養であるとし、手形の提出が求められたが、不受不施派の多くは手形の提出を拒否した。しかし不受不施派の中には將軍からの寺領安堵は慈悲の施しであると勝手に解釈して手形を提出したものもあり、このような不受不施派を非田不受不施派や非田宗と呼び、元禄四年（一六九二）まで存続した。寛文五年には幕府により諸宗寺院法度が出され、これにより不受不施派は布教活動を禁じられることになった。⁽²⁾

二 岡山藩における寺社整理と内信

岡山藩は、幕府の諸宗寺院法度を受けて、寛文六年に不受不施派に限らず諸宗派を対象とした寺社整理を実施し、宗門改の寺請にかり神職請を実施している。不受不施派については受不施派に転向しない限り存続することは不可能となり、僧侶も受不施派に転向するか還俗する、あるいは不受不施派を堅持する場合は寺を去る、のいずれかを選択する必要に迫られた。不受不施僧に限らず還俗する場合は寺を屋敷として与えられるなど生活を保障する懐柔策も取られた。しかし、不受不施派の制法を堅持する場合は、寺宝をもって行方を眩まし、頃合いを見てムラに戻り、信者の指導を行ったとされる。このような僧を清僧または法中とよぶ。

またそれまでの寺を失った人々は一旦神職請けになるが、貞享四年（一六八七）に寺請

けに戻されたことをきっかけに、新たな檀那寺の檀家になったと考えられる。しかし、神職請や新たな檀那寺の寺請をうけながらも、不受不施派の教えを信仰し続けた人々がいる。このような信仰を内信と言い、このような人々を内信者と呼ぶ。内信者は不受不施派の教えを信仰しているものの、表向きには神職、あるいは他宗派の宗門改を受けているため外濁内浄の存在であった。そのため不受不施僧の法中は、内信者からの布施を受けることができず、生活が成り立たない。そこで清者、あるいは法立とよばれる宗門改を受けていない内外俱浄の人物が施主の役割を担っていたとされる。清者と法中は言わば無戸籍の状態である。

寛文五年に不受不施派が禁じられた後は、各地に出寺僧のグループが形成され、その中でも有力寺院の出寺僧が指導的立場に立った。彼らは地方法灯とよばれ、それぞれの地方の法中を支配するようになった。さらに法難によって流された僧侶は流聖と称され、すべての罪を逸脱された特別な権威を持つ存在として信者の尊敬を集め、地方法灯もその権威に服したという。不受不施僧の流刑先が元禄法難以降は伊豆七島に固定され、以後は常に流聖が存在するようになり、享保期（一七一六―一七三五）から後は年に二、三回の内緒便が仕立てられ、島との連絡が比較的容易に行えるようになったという。このころから日珠を含む流聖は「お島様」と称され教団を統括するようになる^③。

このような方法で不受不施派が禁じられてから明治初期の再興に至る約二〇〇年にわたり、信仰が維持されたのである。その間には法難とよばれる厳しい弾圧を何度も経験したほか、不受不施派もその後いくつかの派に分裂することになる。備前・備中では不受不施派の他に講門派（現不受不施日蓮講門宗）、久米右衛門派（昭和末期に不受不施派に帰入）、白川門流日題派などが存在し、筆者はそれぞれのムラで調査を実施した。これらについては後の節で報告と考察を行うことにしたい。

三 本妙院日珠

筆者が和気町益原と岡山市北区御津矢原で不受不施派に関する調査を実施した際に、本妙院日珠という不受不施僧の名を見聞きすることがあった。和気町益原の杉本家には日珠（文化一四年没・享年五六歳）による曼荼羅本尊などが複数所蔵されているほか、現在は『法泉寺文書』として法泉寺（不受不施派・和気町益原）所蔵の古文書にも日珠から杉本家に宛てられた書状が多数含まれている。

日珠は備前の出身で本妙庵五世晋応院日恩に弟子入りし、後に赤坂郡矢原村の本妙庵六

世になる。^④寛政五年（一七九三）に、寺社奉行への天下諫暁を行い、三宅島に流された。その後「お島様」として内信者から崇められ、三宅島から方法灯を通じて各地の僧と内信者を把握し、全国規模の内信者組織を作り上げた^⑤とされる。彼の信徒は備前・備中・美作・因幡・讃岐・上総・大坂・江戸・山形・三宅島など全国に及んでいたという。

今日の御津矢原には日珠が庵主を務めた^⑥とされる本妙庵が現在もムラの人々によって維持されているほか、現地調査の際には日珠に関する伝承を聞くことができた。

四 不受不施派の再興

不受不施諸派は寛文五年から明治初期の約二〇〇年にわたって弾圧を受けながらも信仰を守り続けてきた。そのなかでも特に厳しい弾圧を法難^⑦といい、二〇〇年の間に何度も繰り返されている。なかでも天保九年（一八三八）に始まった天保法難は「総滅の法難」といわれるほどの大規模なものであった。幕府は全国一斉に不受不施派の取り締まりを行い、不受不施派では昭光院日恵一人を残して捉えられ、日珠によって構築された内信者組織も崩壊することになった。^⑧講門派も中核であった大坂高津の衆妙庵が摘発され、小僧であった久米右衛門が宝物をもって現在の岡山市東区瀬戸町森末に逃れ法脈を伝えた。これが昭和五〇年代まで存続した久米右衛門派形成のきっかけになっている。^⑨また白川門流日題派はこのとき孝善院日養を失い、以後僧侶不在のまま信者によって信仰が維持されている。^⑩

難を逃れた不受不施派の日恵は弘化二年（一八四八）に備前に帰り、信者への布教と僧侶の育成に尽力した。このとき日恵が弟子としたのが後に不受不施派の再興運動を推進する日正である。日正は天保法難で崩壊した内信者組織の再建を進めた。

日正は安政五年（一八五八）に大樹庵を和気郡益原村の杉本弥七郎宅裏に再建して、備前一带の拠点とした。その後、文久元年（一八六一）の皇妹和宮の將軍家降嫁を記念して大赦が行われ、日正はこの大赦が不受不施派に適応されることを見込んで、三宅島に流罪となっている日妙の赦免を幕府と朝廷に訴えることにした。幕府には弟子の日徳を、朝廷には同じく弟子の日猷を派遣し、日正は備前で指揮をとることにした。文久三年四月二〇日に日猷と日徳は益原村の大樹庵を出発し、それぞれ幕府と朝廷に出訴した。この出訴は失敗に終わったが入牢にはならなかった。その後、岡山藩では不受不施派の取締りが強化されたが、上坂した日正は西南雄藩による倒幕が必至の状態であることを察知し、幕府が倒壊すれば不受不施派の弾圧が解かれると考えた。しかし、倒幕後、日正は新政府に不受不施派再興を願い出たものの、再興は叶わなかった。^⑪

本格的な再興運動が始まったのは明治八年のことで、日正は政府に再興を願い出るために五月二二日に大樹庵を出発したが、まもなく巡査につかまり岡山県庁に引き渡されるが、事前に戸籍を東京に移していたため、岡山県では対処できず釈放されることになった。東京に到着した日正は教部省に向かい不受不施派再興の願書を提出したが、思うように行かなかった。しかし当時はキリスト教も解禁されており、新聞でも不受不施派禁止の不当性が論じられていたという。

九月に日正は再び教部省に願書を提出する。今度は岡山県令高崎五六に対して事前に協力を要請するなど周到な準備を行った上で願い出ている。実際に高崎は教部省に再興許可を促しており、ついに明治九年四月一〇日に不受不施派が公許されるのである。⁽¹⁰⁾

備前が不受不施派再興の舞台となり、再興後には不受不施派の祖山である妙覚寺が現在の岡山市北区御津金川に再興されたほか、講門派（現不受不施日蓮講門宗）の本山である本覚寺が岡山市北区御津鹿瀬に再興されていることから全国的に見て備前是不受不施派信仰の盛んな地であることが表れている。

おわりに

江戸時代初期の備前には不受不施派寺院が多数存在した。その要因としては日奥の属した京都妙覚寺の末寺が多数存在したことがあげられる。このような地域で不受不施派が弾圧されたために、多くの内信者が潜伏するようになったと考えられる。岡山藩が寛文六年に実施した寺社整理では、他宗派寺院と共に多数の日蓮宗寺院が廃寺になっている。

次節以降は各事例をもとに備前・備中各地で展開される不受不施派信仰の実相に迫りたい。

【註】

(1) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第六卷近世一、岡山県、一九八四年、七一二～七一七頁。

(2) 同前。

(3) 同前、七三五～七三六頁。

(4) 長光徳和・妻鹿淳子『日蓮宗不受不施派読史年表』開明書院、一九七六年、一六七頁。

- (5) 前掲(1)、七三五～七三六頁。
- (6) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第八卷近世三、岡山県、一九八七年、七三〇頁。
- (7) 同前、七三三頁。
- (8) 中務克己「白川門流日題派の調査―幻の信徒を訪ねて―」『岡山県史研究』第一二号、一九九〇年。
- (9) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第九卷近世四、岡山県、一九八九年、六二八～六二三頁。
- (10) 和気郡史編纂委員会『和気郡史』通史編下巻Ⅱ、和気郡史刊行会、二〇〇二年、三五〇～三五三頁。

第二節 和氣町益原の不受不施派信仰

はじめに

和氣町益原は備前東部を流れる吉井川沿いの農村である。近世の不受不施派弾圧下では東備地域における内信の一大拠点であり、全国的に見ても不受不施派信仰の盛んなムラである。筆者は平成二〇年から二一年にかけて、現地調査を実施した。その結果、同所で江戸期に庄屋を務めていたとされる杉本家に伝わる近世の史料から、弾圧下の様々な信仰の様子を垣間見ることができた。杉本家に不受不施派僧を匿った蔵があることはすでに先学にも取り上げられているが、^①同家に伝わる本尊や位牌などの所蔵史料について調査を行ったのは初めてのことである。

また和氣町益原の法泉寺（日蓮宗不受不施派）には弾圧下に益原村に設けられていた大樹庵や内信者宅に伝えられたとみられる古文書が、明治初期の同寺再興後に『法泉寺文書』として収蔵されている。ここには江戸期に三宅島に流されていた不受不施派僧と杉本家とのやりとりの様子をみることができる。本節では杉本家所蔵史料や『法泉寺文書』にみられる杉本家あての書状などから不受不施派内信の実相に迫りたいと考える。

一 和氣町益原における法華信仰の歴史的展開と杉本家

現在の和氣町益原には一二〇戸ほどがあり、^{あらすな しんちよう}荒砂・新町・中組・小保子・段の下・原上・原下の七つの村組に分かれている。明治以降に他宗教に改宗した家もあるが、もとはすべてムラの中にある大樹山法泉寺の檀家である。氏神は法泉寺西側の尾根上に鎮座する益原八幡宮がある。「鳥居の前で靴紐がほどこけても礼をしていると思われるはいけないので結ばない」という話が聞かれる。また家々の屋敷内にある常設の祭祀場所は仏壇のみで、神棚が祀られることはない。他宗派や他宗教への信仰をしない不受不施義が徹底されていたことがわかる。

寛文五年（一六六五）年に幕府が不受不施派を禁止したことを受けて、岡山藩は翌六年に不受不施派を中心とした寺社整理を実施した。江戸時代後期に編纂されたとみられる資料集『撮要録』の巻二十九「廃寺社之部」には寛文期に廃寺になった寺院が記されている。益原村には次の三か寺があった。

○益原村

大樹山法泉寺 本行坊 本寺岡山蓮昌寺

住僧還俗正斎

寺株田地山林賜同人後売払

善正坊 右本行寺寺中

住僧出寺

田畑山同村五郎左エ門預

教伝 無寺号山号

日蓮宗先常閑起縁寺

住僧還俗十右エ門

田地山林賜同人後売払^②

いずれも日蓮宗であり、不受不施派であったために廃寺となったと考えられる。岡山藩は寺社整理と同時に宗門寺請制を廃止し、神職請を行っているので、益原村の人々は現在の益原八幡宮の神職請になったものと考えられる。その後、貞享四年（一六八七）には、後を継いだ池田綱政によって寺請に戻され、^③その後は和気郡浦伊部村（現備前市浦伊部）の妙圀寺（日蓮宗・不受不施派）の檀家になったとみられる。しかし、表向きには神職請や新たな檀那寺の檀家になっても、実際には内信者として信仰が継続されたのである。弾圧下においては、大樹庵が密かに設けられ、信仰の拠点となっていた。表1は長光徳和氏と妻鹿淳子氏編著の『日蓮宗不受不施派読史年表』に掲載されている大樹庵庵主の系譜をもとに、大樹庵の歴代庵主を表にしたものである。^④

法泉寺が寛文六年に廃寺になった際に正覚院日了が大樹庵を設けたことがわかる。日了は法泉寺三世日儀の弟子である。

内信は明治九年に不受不施派の再興が許されるまでの約二〇〇年にわたって続けられた。大樹庵は明治一一年四月三〇日に第十教会所となり、五月二三日に同教会が公許され、一月に本堂が落成している。

筆者が檀那寺であった妙圀寺住職に依頼し、同寺の記録を確認してもらったところ、明治九年五月二一日に益原村で葬儀が行われたのを最後に、以後益原村で葬儀を行った記録は確認できないことがわかった。つまり不受不施派の再興後は妙圀寺の檀家をやめ、名実ともに不受不施派に復帰したことが分かる。第十番教会所は明治三六年にかつて益原村に存在した大樹山法泉寺の寺号に復している。

弾圧下の益原村では文化一〇年（一八一三）に檀那寺に内信が発覚したり、^⑤文政年間には益原村の全戸主が岡山に連行され、不受不施僧日学が処刑された文政の法難が起こった^⑥りしている。また安政五年（一八五八）に日正が杉本家の裏に大樹庵を再建して備前一带

の拠点とし、以後明治九年にかけて展開される不受不施派再興運動の起点にもなった。不受不施派再興を目的として文久三年（一八六三）に幕府と朝廷に対して行った出訴の際にはこの大樹庵から日正の弟子である日徳と日妙が出発した。^⑦明治八年に始まる再興運動の際には日正が大樹庵を拠点としていた。^⑧このように幕末から明治九年に至るまでは、大樹庵が不受不施派の中心に位置していたことがわかる。

杉本家には「お島様」である日珠によって作成された本尊や仏具などが伝えられているほか、日珠をはじめとする不受不施僧から杉本氏にあてられた書状が『法泉寺文書』のなかに多数含まれている。杉本家は内信者組織のなかでも重要な役割を担っていたと考えられる。現在も杉本家の蔵（写真1・1）には不受不施僧を匿ったと伝えられる隠し部屋（写真1・2）が残されており、『日正聖人略伝』によると日正は安政五年に大樹庵を益原村杉本弥七郎裏に建立したという。^⑨蔵の隠し部屋が大樹庵であった可能性が高い。

ここでまず杉本家の概要を説明しておきたい。杉本家は江戸時代には庄屋を務め屋号を「和多屋」といった。同家の初代は万治三年（一六六〇）に没した寂妙院常休である。その後江戸後期には二軒の分家を設けている。杉本家は初代から不受不施派であった可能性が考えられるが詳細は不明である。杉本家所蔵史料や『法泉寺文書』から内信者組織の中で、一定の役割を果たしていることが窺えるようになるのは四代目源八郎（宗意）（安永七年（一七七八）没・享年六五）、五代目弥三郎（修善）（文政十一年（一八二六）没・享年八〇歳）の頃からである。特に「お島様」である日珠が杉本家に授与した曼荼羅本尊や書簡は複数みられ、江戸後期には杉本家が有力な檀越であったことがうかがえる。

また日珠が備前国和気郡益原村の杉本氏と連絡を取り合うようになる背景には、備前が全国的にみても内信者が多く存在する地域であったことや、備前が日珠の郷里であることなどが考えられる。日珠が庵主を務めた矢原村の本妙庵は大樹庵のある益原村から西に一五キロほどの場所にあり、日珠と杉本家は互いにある程度の素性を知っていたものと推測する。

二 『法泉寺文書』にみる内信

法泉寺には近世の弾圧下における古文書が多数所蔵されている。その中には不受不施派の高僧から大樹庵の庵主や益原村の内信において重要な役割を果たした杉本氏に宛てたものが含まれている。『法泉寺文書』はマイクロフィルム化されたものが岡山県記録資料館に所蔵されており、これをもとに調査を行った。

元禄期以降、不受不施派僧の流刑地はほぼ伊豆七島に固定され、法難や諫曉僧によって常に不受不施僧が在留している状態になっていた。彼らは「御島様」とよばれ、島から本土各地に指令を出し、法中組織、内信組織を統轄した。このような流僧との連絡方法としては年に数回内緒便が出され、書簡や物資のやりとりが行われたのである⁽¹⁰⁾。

杉本家には日珠に関する史料が多数伝えられており、内緒便で運ばれたと考えられる。また『法泉寺文書』には、三宅島の日珠と杉本氏とのやりとりの様子を窺うことができる文書が含まれている。

ここでは本妙院日珠の書状をいくつかとりあげてみたい。日珠は三宅島流僧の「お島様」として、不受不施派の頂点にいた僧である。日珠はその後本土の法中^{ほつちゅう}（清僧）・法立^{ほつりゅう}（清者・施主）・内信者などの指導を行い、各地に点在していた不受不施派組織の統一を行っている。

『法中条目』寛政七年（一七九五）の日正による写し（明治五年）

『法中条目』は日珠が内信者組織を統一した際に作成したものである。『法泉寺文書』には明治五年に日正によって筆写されたものが含まれている。これは自らの後継者である本妙庵七世了智院日祇、源清こと大樹庵庵主勇行院日長、惣法中、清者中に宛てられたものである。その全文は次の通りである。

條目

一、僧侶者勿論清者中男女等内信者方之佛壇尔て礼拝之儀自今以後堅可為停止之事但當流之佛壇於別有之者可拜其別仏壇右之渡拙僧在國之時分師匠江相窺処仏壇令開眼候間其開眼を見當尔て候俣不苦因而礼拝仕来との事尔て候於是拙僧義も尤之義尔て存居候処数年之間篤与令勘弁候得者内信者方之佛壇者受不施寺之持分ニ而有之候故令混雜事為尔而候出家之人々者格別出家之人々者別段仏壇も難調依之只今迄之通り開眼札を目當ニ平生体ハ礼拝有之事も可然事尔て候大家ニ而奥の間等も有之方者別仏壇勸請尔て可為本意事歟

一、佛事祈祷之節者先聖方之御本尊を奉懸其前ニ而廻向祈祷等可被相励之事但別仏壇有之輩者其前ニ而勤候故隠不及本尊ニも無之輩者床之間尔ても若床の間無之方者壁尔ても不苦紙を貳三枚程継ぎ壁假張して其上に先聖方之御本尊を奉懸其の前ニ而佛事作善祈念祈祷を可被相勤候事

一、僧侶并清者中者先哲之御本尊を一幅ヅツハ常に被離身ヲ間敷候事附タリ清浄師之本尊取持無之内信者方之家へ参候節者自身取持之其本尊を奉懸始終導師相勤候而可然之事右此条之先師数年之間同一ニ被致置候事故拙僧心附候得共大令心痛種々摧肝膽篤与勘弁之上思定而漸く今般比條目令治室申送事尔て候實ニ未來世大切之

事尔候之間少も混雜無之様相等可被申事肝要之至尔て候、只今迄者未刻已前尔て候得者罪謗ニハ相成間敷候得共立刻已後者其旨吃与可被相守候但シ内信者方者内信心之一分ニ而世間を憚事尔て候得者今迄之通り開眼札を申請相互ニ常尔ハ其開眼を目的ニ拝候事も不苦、僧侶ハ勿論清者男女等者格別之事ニ而候間只清者のみ相頼廻向を受候とも其時者清湯之本尊を奉懸廻向祈念申可受様ニ御披露可有之候猶又唱導師之事者先格之通相勤候儀可然令存候但外獨之佛壇を除き清浄之御本尊を奉懸其前ニ而相勤可被申候若又久先哲方之本尊一幅も取持無之内信者清浄之御本尊を奉懸其前ニ而相勤可被申方江ハ余斗取持有之同致之内より讓合を相互ニ信心相守候様ニ御示教可被成候右之趣三老達篤と御内談之上惣法中意合熟談清者中男女も可被申渡候内信者中ニも其段御披露可有之候已上

卯三月九日認

日珠在判

了智院貴師

源清貴師

惣法中 并

清者中に至迄

副啓右之趣何連も被致證得候ハバ請書一札早速相認可被送越候已上

日珠聖人御真跡也因加装表以蔵干本妙精舎之寶庫者也

明治五年壬申夏五月吉辰

傳燈沙門

日正 花押^(一一)

本文中に「僧侶并清者中者先哲之御本尊を一幅ツツハ常に被離身ヲ間敷候事」とあり、僧侶と清者は普段から肌身離さず本尊を携帯するように定めている。杉本家には後述の写真9・10・13のように非常に小さな曼荼羅本尊が存在する。この本尊を大切に携帯し、信仰していたのだろう。

このほかにも杉本家には日珠が開眼した小型の法華経を記した卷子や『如説修行抄』の折本があつて、いずれも数センチ程度の小さなものであり、携帯用に作成されたものと考えられる。また床の間にかけて用いる大きさの曼荼羅本尊も複数所蔵されている。

日珠から大樹庵源清に宛てた書簡 午三月

次に同じく日珠から大樹庵庵主源清に送られた書簡がある。午三月とあることから寛政一〇年（一七九八）か文化七年（一八一〇）に送られたものと考えられる。これは三宅島にいる信者の干支や出身地、その人物の来歴などが記されており、島での信仰の様子を窺うことができる史料である。日珠は三宅島の善勝庵に居住し、流僧でありながらも僧侶としての扱いを受けていること、島でも布教活動を行って多くの信者を集めていることがわかる。

日珠から杉本氏宛ての書簡 買物覚 五月七日

これは「買物覚」と記された文書である。五月七日に日珠から杉本氏へ宛てられた書簡であるが、この書簡が記された窺うことができる記載はない。もぐさ・真麻・銅製の鍋・反切紙・薬・香附子・砂糖漬生姜・柑子など日用品や薬とみられるものの購入を杉本家に依頼したもので、島と備前の内信者との密接な関係を知ることができる重要な史料である。その内容は次の通りである。

買物覚

一もぐさ	三千丁
一同 袋もぐさ	壺袋
一麻を	百文分
一青そ	百文分
一唐銅鍋 <small>カラカネナヘ</small>	壺つ
八九寸クライ	
一日向半切	三百枚
一花色中用	六十枚
若無之候ハ先日之通	
花色間合にても宜候	
一伏答	五両
先日五両と袋御座候得とも除り	
薬少ク処存候故掛テ見候処三両	
御座候薬種屋懸間違と存候	
何分此度又々五両御調頼存候	
一香附子	五両
一忠御川ら	三両
一唐白芒	壺両

一砂糖漬生姜 三百文斗

先日砂糖生姜と書付遣候得ハ

干姜糖四箱参候尤朝之

産七ツツ請申候

又々用向有之候ハバ跡より

可申遣候何分右之趣頼存候恐

五月 七日認

日珠

久本氏

外二

一百文分

卅

くわし

御調被下候⁽¹²⁾

宛名が久本氏とあるが、「久」は杉の異体字である「杻」の木偏を略したもので、不受不施僧との通信により内信が発覚するのを防ぐ目的があるものと推察する。

日珠から杉本修善宛ての書簡 未三月十三日

次に日珠から杉本修善に宛てられた未三月一三日の日付がある書簡を見てみたい。寛政十一年（一七九九）、または文化八年（二八一）のものであろう。まず、信者中や杉本家の人々に対しての挨拶の後、日珠が島で勤行に努め無事に過ごしていること、日珠が差し出した法要に関する書簡の到着を推察していること、杉本氏の密書や届け物が届いたことを伝えている。また追記の形で平井六郎兵衛という人物の消息を伝え、彼が正行庵で仏・法・僧の三宝に奉公している事を喜び、また智鈴法師もきつと喜んでいるだろうと記している。さらに滅罪を願うべきであること、『如説修行抄』が杉本家に届いているだろうことを述べている。正行庵は讃岐三野軍高瀬村にあった不受不施派正行寺の法灯を継ぐ庵で、もとは同村にあったが、いつのころか備中国都宇郡山田村に移転した。平井六郎兵衛が杉本修善とどのような関係にあったのかは分からないが、杉本家新家の墓地には同時期以降、岡山城下児島町出身の平井氏の石塔がいくつかみられる。平井氏が杉本家に身を寄せていたことなどが考えられよう。次にその全文を示す。

又候平井六郎兵衛殿も只今は正行庵迄御退き三寶之御奉公相勤後申候旨拝し歛

入申候智鈴法師も定め而悦と存候何卒罪除消滅願事可存候以上如説修行抄も相届候と察候一筆令啓上候、兼御信者中御家内中共、御堅固ニ而御信心隆

盛御凌被成候旨、歓悦之至令存候、此方拙僧義も無相替朝暮勤行罷在候条、可被安御意候然ハ何角諸法用之義と去年便りニ相遣候、定而相届候由と察入申候、從其方御届物等何連も相達申候、別施主を以而致受袖候、御返書等も旧年差遣候間、是も又相達候由と察入申候、御家内中へも御信者中へも宜様に御趣知被下候様ニ慎入申候、尚何も致重便之時恐惶謹言

未三月十三日認 日珠 花押

杉本修善殿⁽¹³⁾

三 杉本家にみる不受不施派信仰

杉本家には弾圧下の信仰に関する史料が多く残されており、杉本氏個人のもののほか大樹庵や講などで使用されたと思われるものが含まれている。杉本家に信仰に関わる多くの史料が残されているのは、庄屋という社会的な地位に加え、内信者集団のなかで重要な存在であった事を示している。次にこれらの史料を一つずつ検証し弾圧下における内信の様子を明らかにしていきたい。

(1) 杉本家所蔵の曼荼羅本尊

(1) 曼荼羅本尊(写真2)

杉本家の蔵にある隠し部屋で保管されていたといい、大樹庵で用いられた本尊とも伝えられている。弘安五年(一二八二)の年紀をもつ日蓮の曼荼羅本尊を板に陰刻したもので、文字には鍍金が施されている。中央には「南無妙法蓮華經」と記し、その下には日蓮の花押が刻まれている。四隅に四天王の名を配し、左上に「大毘沙門天王」、左下に「大増長天王」、右上に「大持国天王」、右下に「大広目天王」と刻む。毘沙門天と増長天の間には愛染明王の梵字が、持国天と広目天の間には不動明王の梵字が刻まれている。題目の左には「南無釈迦牟尼仏 南無浄行菩薩 南無安立行菩薩 南無普賢菩薩 南無弥勒菩薩 南無大迦葉尊者等 釈提桓因大王 大月天王 大明星天皇 十羅刹女 大竜王 阿闍世王 南無妙楽大師 南無伝教大師 八幡大菩薩」の名を刻む。右には「南無多宝如来 南無上行菩薩 南無無辺行菩薩 南無文殊師利菩薩 南無薬王菩薩 南無舍利弗尊者 大梵天王

第六天魔王 大日天王 鬼子母神 轉輪聖王 阿修羅王 南無龍樹菩薩 南無天台大師
天照太神 仏滅度後二千二百三十余年之間 一閻浮堤之内未曾有大曼荼羅也」と刻まれ、
左下のすみには「弘安五年壬午子年月」とある。

板曼荼羅自体の制作年は記されていない。個人の所有する曼荼羅は紙に記し掛軸に仕立てたものが一般的であるのに対し、この板曼荼羅は大変立派である。大樹庵の本尊として祀られていた可能性は高いと考える。

(2) 日沍曼荼羅本尊 寛文九年（一六六九）（写真3）

中央には題目を記し、その下に「日蓮大菩薩」「日沍（花押）」と記す。題目の左には「伍番神呪」の文字と愛染明王を示す梵字が、右には「三十番神」の文字と不動明王の梵字が記されている。右下には「寛文九年己酉卯月日」とある。

不受不施僧、明静院日沍による本尊で、岡山藩が寺社整理を行った三年後のものである。年記のある杉本家所蔵史料のなかでもっとも古い。

日沍は明静院日沍といい、美作弓削川島氏の生まれである。日沍は寛文六年に肥後国人吉に流され、相良遠江守に預けられた。その後延宝四年（一六九六）七月九日に六一歳で亡くなっている。⁽¹⁴⁾ この本尊には寛文九年とあることから、流刑先で作成されたものとみられる。

(3) 日珠曼荼羅本尊 寛政九年（一七九七）（写真4）

中央の題目の下には「孟蘭盆会供養」「日珠（花押）」と記されている。題目の左には「南無釈迦牟尼仏 南無十方分身諸仏 南無淨行安立行菩薩 邈輪颯陀菩薩 南無迦葉阿南尊者 帝釈天王 四大大王 十羅刹女 八幡大菩薩 五道冥官 三国伝灯祖師 南無日朗日像菩薩 久遠成就日親大聖人 日堯日了聖人 日新日腰日縁聖人 信行院日遶大德位 一結清信士女各例□ 自得院道教得受院妙教各霊」と記され、さらに左上には「如從飢国来忽遇大王膳 正見邪見利根鈍根等雨法雨而無懈倦 中奉諸賢聖下及六道品（愛染明王の梵字）」と記されその下に「六親眷属一門法界有無両縁 法界萬霊咸皆作仏」「授与之修善杉本弥三郎」とある。右には「南無多宝如来南無三世十方諸仏 南無上行死辺行菩薩 南無曼殊室利菩薩 南無身子目連尊者 大梵天王 三光天子 鬼子母神 天照太神 閻魔法王 天台伝教大師 南無日蓮大菩薩 大僧正大覚和尚 日典日奥大聖人 日通日位聖人 正行院日遶大德位 一宗如法代々戦師等 随信院宗意正源院妙信各位」とあり、さらに右には「如以甘露 灑除熱得清凉 貴賤上下特戒毀戒威儀具足及不具足 此食色香味上供十方仏（不動明王梵字）」とある。さらにその下には「先祖代々諸精霊等七世父母」「寛政九〇歳丁巳朱明十月認之」と記されている。

「于蘭盆会供養」と記されており、杉本家の盆に用いた本尊であることがわかる。ここに

は日蓮宗の神仏や僧の名前とともに「先祖代々諸精霊等七世父母」と記されているほか、この曼荼羅本尊を授かった弥三郎両親である「随信院宗意」と「正源院妙信」の法号が記されている。不受不施派で先祖信仰が行われていることが分かる。

(4) 日珠曼荼羅本尊 寛政一二年（一八〇〇）（写真5）

題目の下には「女中看経講中一結」「日珠（花押）」と記されている。題目の右には「演暢実相義開闡一乘法」左には「廣導諸群生令速成菩提」とある。その下檀、題目の左には「幽玄院妙持於路久 妙運於富士」、「右には清光院妙善於奈賀 妙盈於ま貴 妙得於波ま」の法号と俗名が記されている。この内「清光院妙善 於奈賀」は杉本弥三郎の後妻である。この本尊が杉本家に保管されているということは、杉本家が女中講の中心的存在であったと考えられる。

看経かんきんとは経を黙読することをいう。不受不施派は弾圧当時、声を出して読経すると、役人に見つかる可能性が高くなるので、経を目で追う「看経」が行われていたという。

(5) 日珠曼荼羅本尊 享和四年（一八〇四）（写真6）

題目の下には「法華擁護三十番神」と記され、日珠の名と花押が記されている。左には「八幡大菩薩 松野尾大明神 春日大明神 大比叡大明神 聖真子権現 八王子権現 赤山大明神 三上大明神 苗鹿大明神 熱田大明神 広田大明神 気多大明神 北野大明神 貴船大明神」、右には「天照太神 加茂大明神 大原大明神 平野大明神 小比叡大明神 客人大明神 稲荷大明神 祇園大明神 健部大明神 兵主大明神 吉備大明神 諏訪大明神 気比大明神 鹿島大明神 江文大明神」の名が記されている。左上には「諸仏皆歡喜」、右上には「現無量神力」とある。右下には「于時享和四年閏逢困敦孟春吉辰認之」、左下には「法号 宗和 杉本源蔵授与之」と記されている。

宗和こと杉本源蔵が日珠から授かった本尊である。この本尊は日蓮宗の守護神である三十番神の名前が記されていて、その供養に用いられた本尊である。

(6) 日珠曼荼羅本尊 文化七年（一八一〇）（写真7）

外題に「廿四日御タンシキノ御本尊」とある。題目の下には「日蓮大菩薩」と記し、日珠の名と花押がある。右には「文化七庚午年二月六日認之」、左には「断食同前心願貳四日之間修行中御本尊也」とある。外題は後に書かれたものとみられる。

(7) 日長曼荼羅本尊 文化一一年（一八一四）（写真8）

題目の下には「日蓮在御判」と記し「勇行院源清 日長（花押）」とある。四隅には右上に「大持国天王」右下に「大広目天王」、左上に「大毘沙門天王」左下に「大増長天王」の名を配し、持国天と広目天の間には不動明王の梵字、毘沙門天と増長天には愛染明王の梵字が記されている。題目の左には「南無釈迦如来 南無普賢菩薩 十羅刹女 南無淨行

安立行菩薩 大日月明星天王」、右には「南無多宝如来 南無文殊師利菩薩 鬼子母神 南無 上行无辺行菩薩 大梵帝釈天王」と記されている。「文化十一年戊六月廿一日於江戸下谷認之」「授与之杉本於道 妙通」とある。

妙通こと杉本於道が、大樹菴庵主である勇行院日長から生前に授かった本尊である。右下には「江戸下谷之認」と記されており、現在寛永寺がある上野辺りが下谷と呼ばれる地域であった。日長はこの本尊を書いた年の九月に江戸の寺社奉行に出訴し、翌年の二月二日に江戸で牢死している。⁽¹⁵⁾ 日長が江戸で記した曼荼羅本尊と考えられる。

(8) 曼荼羅本尊(写真9)

(右) 日進曼荼羅本尊 文化一二年(一八一五)

題目の下に「南無日蓮大菩薩」、その左に「得精日進(花押)」とある。四天王の名はなく、左右に愛染・不動の梵字を記す。題目の左右には法華經を守護する神仏や不受不施僧の名を記している。「文化十二歳戊四月廿三日於自證庵認之」「息災延命 杉本尾三知女郎 二世安楽」と記されている。

得精は本覚院日進のことで、日進が阿部備中守に出訴する約一か月前の日付が記されている。⁽¹⁶⁾ 「自證庵認之」とある。自證庵は江戸青山から益原村へ移転した庵で、江戸の本現山自証寺の法灯を継ぐ庵である。⁽¹⁷⁾ 日進は大樹庵の僧で、八丈島に流され文政元年(一八一八)十一月六日に三十一歳で亡くなっている。⁽¹⁸⁾ 女郎とは「女藹」のこととみられ、浮世を捨てて仏に帰依した女性のことをいう。この本尊は「息災延命、二世安楽」、つまりこの世とあの世における安楽を祈願していることがわかる。

(左) 日学曼荼羅本尊 文政四年(一八二一)

題目の上、右側には「奉祈誦神呪品」左には「三百卷成就」とある。題目の下には「日蓮大菩薩」と記され、「源淨院日学(花押)」とある。右端には「唯我一人」、左端には「能為救護」と記され、左右に愛染・不動の梵字を記す。題目の左右には法華經を守護する神仏の名が記され、「文政四辛巳載九月四日奉書之」、「巳歳男、寅歳男、亥歳男、丑歳男、戌歳女、巳歳女、息災延命 授与之」とある。花押から源淨院日学によるものであることが分かる。日学は文政二年(一八一九)九月十三日益原法難の時に岡山へ出訴して入牢、文政七年(一八二四)二月二七日に岡山で牢死している。⁽¹⁹⁾ この本尊には入牢後の年紀が記されている。二点が一つの軸に表装されているものの、それぞれは小型のものであり、携帯用に作成されたものと考ええる。

(9) 曼荼羅本尊(写真10)

(右上) 日至・日学曼荼羅本尊 文政三年(一八二〇)

題目の上部には左に「不老不死」、右に「病即消滅」、題目の左に「天人常充滿」、右に

「我此土安穩」、題目の下には円で囲んだ大黒天像の版が押され、左に「不未会得」右に「無量珍宝」とある。その下には右に「無量院日至（花押）」左に「源浄院日学（花押）」と記されている。「文政三庚辰八月吉日認之」「授与之杉本氏妙通」とある。

妙通こと杉本道に授与された本尊である。作成者である源浄院日学は文政二年に岡山に出訴し入牢、文政七年（一八二四）二月七日に岡山で死亡していることから出訴、入牢以降の年紀が記されていることになる。

（右下）日学曼荼羅本尊 文政三年（一八二〇）

題目の上部左には、「令得安穩」、左には「除其衰患」と記している。題目の下には「日蓮大菩薩」と記し、「源浄院日学（花押）」とある。四隅には四天王の名を、左右には愛染明王と不動明王の梵字を記し、題目の左右には法華經を守護する神仏の名を記している。「文政三年庚辰□春吉□」「益原邑杉本於美知授与之」とある。於美知とは杉本道のことである。

（左上）日学・日至曼荼羅本尊 文政三年（一八二〇）

題目上部右に「令百由旬内」、左には「無諸衰患」と記されている。題目の下には「日蓮大菩薩」、「源浄院日学（花押）」「無量院日至（花押）」と記されている。四隅には四天王の名、左右には愛染・不動の梵字を記している。題目の左右には法華經を守護する神仏や不受不施僧の名が記されている。「文政三庚辰十二月吉祥日」「授与之清信士本行院立玄日法」と記されている。同家には「本行院立玄日法」の位牌があり、文政六年に三七歳で亡くなったことが記されているほか、後述する(16)過去帳にも法号が記されている。杉本家と関係の深い人物であることは推察されるが、同人物と杉本家の関係を示す史料は得られていない。

（左下）日学曼荼羅本尊 文政三年（一八二〇）

題目上部の右には「神通力故」「増益壽命」、題目の下には「日蓮大菩薩」「源浄院日学（花押）」と記されている。四隅には四天王の名、左右には愛染・不動の梵字が記されている。題目の左右には法華經を守護する神仏の名が記されている。「文政三年庚辰正月一日奉写之」「益原邑杉本氏娘於幾授与之」とある。幾は下新家、杉本源蔵の娘杉本幾のことと思われる。

これら四点もそれぞれは非常に小さなもので、携帯用に作成されたものを一つにまとめて表装したものとみられる。

(10) 日祇曼荼羅本尊（写真11）

題目の下には「日蓮在御判」と記し、その左に「了智院日祇（花押）」と記している。（写真2・写真7）と同様に四天王の名と愛染明王・不動明王の梵字を配している。

題目の左には「南無釈迦如来 南無浄行安立行菩薩 帝釈天王 大月天王 大黒天王 十羅刹女 八幡大菩薩」、右には「南無多宝如来 南無上行无边菩薩 大梵天王 大日天王 大明星天王 鬼子母神 天照太神と記している。その下に三名の法号が記されており、「妙柔 嘉永二酉年 八月六日」「無上院妙玉霊 嘉永六年丑八月廿四日命日」「暁夢 安政三辰暦 九月十六日」とある。

この本尊は本妙庵七世、了智院日祇によるものである。日祇は天保二年（一八三一）七月一七日に死亡している⁽²⁰⁾が、そこに記された三名の命日は、嘉永六年（一八五三）八月二四日、無上院妙玉霊、嘉永二年（一八四九）八月六日、妙柔、安政三年（一八五七）九月一六日、暁夢となっていて、いずれも日祇の死後に亡くなっている。

実物をみるとこの三名の法名、命日については墨の濃さから明らかに後に書き込まれたことがわかる。つまり生前の日祇によって作成された本尊に、後にそれぞれの法号が書き込まれたものと考えられる。

この三名は杉本家の仏壇で一つの位牌で祀られている。墓地の石塔を確認したところ妙柔と暁夢の二人には一つの石塔に法名が刻まれていたが、無上院妙玉の墓は見つけることができなかった。命日からみて、七代目、清三郎（榮壽）、道（妙通）夫婦の子供と考えられる。授与者については記されていない。

(11) 日正曼荼羅本尊 安政六年（一八五九）（写真12）

題目の下には「南無日蓮大菩薩」と記し、四隅には右上に「大提頭頼蛇吒天王」、右下に「大毘楼博叉天王」、その間に不動明王の梵字、左上には「大毘沙門天王」、左下には「大毘楼勒叉天王」、その間に愛染明王の梵字を記す。題目の左には「南無釈迦牟尼仏 南無実十方身諸仏 南無浄行菩薩 南無安立行菩薩 南無邈輸跋陀菩薩 南無身子目連尊者 千眼天王 八大龍王 大明星天王 大黒天王 十羅刹女 八幡大菩薩 恵文大師 伝教大師」、右には「南無多宝如来 南無東宝善徳仏 南無上行菩薩 南無无边行菩薩 南無殊室利菩薩 南無薬王勇施菩薩 大梵天王 提婆達多 大日天王 弁財天女 鬼子母神 天照太神 龍樹大師 天台大師」とある。さらにそれより下には不受不施派僧の名を記しており、左に「南無大覚大僧正 南無日典上人 南無日樹聖人 南無日遵聖人 南無日尊聖人 蓮生院日法大徳 正覚院日了大徳 長遠院日起聖人 清順院日近聖人 本性院日学大徳 立円院日信聖人 行法院日観大徳 久遠院日然大徳 要行院日富覚位 理山院日澄覚位」、右に「南無日朗日像菩薩 南無日親大聖人 南無日奥大聖人 南無日述聖人 南無日庭聖人 善正院日相大徳 正覚院日儀大徳 持正院日縁聖人 遠成院日源聖人 善受院日浄徳位 善行院日清聖人 経行院日要聖人 立行院日善覚位 正行院日遊大徳 孝行院日忠覚位」、最下段には右から「如法院日来覚位 円住院日寿覚位 浄光院日隆覚位

勇行院日長大徳 本覚院日進大徳 清浄院日諦覚位」とある。この最下段右側には「宣妙院 日正（花押）」「安政六年 己未南呂吉祥日」とあり、左側には「法号 瑞光院法玉妙通日研 杉本於美智授与之」と記されている。安政五年に日正によって杉本家に大樹庵が再建された翌年のものである。杉本於美智（道）が生前に日正から授かったものである。

(12) 日真曼荼羅本尊 明治二年（一八六九）（写真13）

題目の右には「受持法華名者福不可量」、左に「慈眼視衆生福聚海無量」とある。非常に小さな本尊で、巻けば容易に携帯できる。陽山日真は大樹庵二五世の善妙院日真で明治四年に没している。題目の下には大黒天を描き、その下に「筆者 陽山日真（花押）」とある。その右に「杉本鉄九郎西歳 如意円満授」、左に「明治二年己巳十一月吉辰」とある。

(13) 日正曼荼羅本尊（写真14）

題目の下には「瑞光院法玉妙通日研霊」、その脇に「万延元庚申年 八月十六日」とある。その下には「日正（花押）」と記されている。題目の左に「南無釈迦牟尼仏」左に「南無多宝如来」と記している。さらにその右には「願以功德普及於一切」、左には「我等與衆生皆共成仏道」とある。「明治四年辛未四月吉辰」「杉本弥七郎授与之」とある。大樹庵庵主で後に不受不施派を再興に導いた宣妙院日正が作成した本尊である、ここに記された法号は杉本道のものであり、道の供養を目的として息子の弥七郎に授与されたことがわかる。

(2) 杉本家所蔵の仏像・仏具など

(14) 厨子入り大黒天・弁財天・歳徳善神像 享和三年（一八〇三）（写真15）

向かって左側の扉の内側には「南無妙法蓮華経」、その右には「当知是処」、左には「即是道場」と記され、題目の下には「大黒尊天」、右に「弁財天女」、左に「年徳善神」と記されている。右側の扉には「開示悟入□知見」「于時 享和三大□ 昭陽大淵献」、その下には「功德主 修善」とある。「昭陽」は癸、「大淵献」は亥の異名で、修善は杉本弥三郎のことである。

(15) 仏飯器・日珠花押入り 文化元年（一八〇四）（写真16）

佛前にご飯を供える器で、台脚の裏に日珠の花押が書かれている。
箱書は次の通りである。

文化元甲子之九月九日佛器一ツ三宅日珠尊聖御開眼大黒天弁財天歳徳善神去る秋
より當春まで日珠尊寫に而御祈念御供之佛器裏ニ御名判付

戴仕□致置者也

本妙院日珠聖人

御開眼

文化元甲子霜月六日

持主

実相院修善

本行院立玄

三宅島で日珠が開眼した大黒天、弁財天、歳徳善神の祈念、祈祷に使用したことが記されている。

杉本家の仏壇には(14)大黒天・弁財天・歳徳善神が安置されていて、これらの像を納める厨子に記された紀年銘が一致する。この三尊が日珠によって開眼された可能性がある。

(16) 過去帳・日珠花押入り 文化二年（一八〇五）（写真17）

この過去帳には日珠の花押があり「功德主 杉本修善」とあることから弥三郎の代に、日珠によって開眼されたことがわかる。折本になっていて中央の折り目上に朔日から三十日までの日付を記し、その下に題目を書き、さらにその下にその日の三十番神の名を書き込んでいる。下部には杉本家の先祖の法名、命日、俗名の他に法立・施主の法名、俗名なども書き込まれていて、上部には僧の名が書かれている。

(17) 日珠位牌 文化一四年（一八一七）（写真18）

日珠の位牌で、杉本家の仏壇に置かれている。表には「妙法 本妙院日珠聖人」背面には「文化十四年丁丑十二月十五日」と日珠の命日が記されている。

以上の通り、曼荼羅本尊を含め同家には日珠による史料が多数所蔵されており、日珠と杉本氏の深い関係が窺える。ここに示した日珠によって開眼された史料はいずれも三宅島から送られてきたものである。

同家には「蔵に日珠上人がいた」という話も伝えられている。曼荼羅本尊については孟蘭盆や女人看経講、故人の追善など目的に応じたものが授与されていることがわかる。

また写真8は日長、写真9の右側は日進、左側は日学の作成であり、それぞれ出訴直前に作成したものであり、日長は出訴後に江戸で牢死している。このような命がけの諫曉を行った僧らの存在は、内信者らの感情を強く揺さぶったものの考えられ、人々の信心をより篤くしたことは確実であろう。

（3）檀那寺の法号と不受不施派僧による法号の比較

不受不施派は近世の弾圧下において、死者があった場合はまず檀那寺による葬儀を行い、その後不受不施派僧によって葬儀をやり直していたとされる。また法号についても当然、檀那寺と不受不施派の双方から与えられたはずである。そこで杉本家の法号について調査

させていただいた。調査では杉本家の石塔・位牌・過去帳に加え、弾圧下の檀那寺であった寺院の協力を得て、杉本家の法号について情報を提供して頂いた。これらを比較して、不受不施派の法号を見出してみたい。

表1は杉本家の位牌・過去帳・石塔に記された法名と檀那寺の記録に見られる同一人物の法号を比較したものである。なお双方の史料が残っており、比較が可能なもののみを取り上げた。また明治九年の不受不施派再興に伴う変化を見出すため、杉本家で確認できる明治時代の法号も表に加えた。

表1の①は文政十一年（一八二八）に没した杉本弥三郎、③は天保二年（一八三一）に没したその後妻の法号で、同一の石塔に法号を刻んでいる。弥三郎の法号は檀那寺から与えられたものが「實相院修善日行」で、杉本家の位牌と過去帳には「實相院修善日寶」と記されている。一方で石塔には最後の日号を除き「實相院修善」と刻んでいる。また弥三郎の後妻は檀那寺から「清光院妙善日修」という法号を与えられているが、杉本家の位牌と過去帳には「清光院妙善日玉」と記され、石塔には「清光院妙善」と刻まれている。以上のように弥三郎とその後妻の法号については檀那寺によるものと、位牌・過去帳に記されたものでは、日号に違いが見られる。つまり位牌と過去帳にみられる法号が不受不施派のもので、檀那寺による法号の一部を改めることで不受不施派の法号にしたものと考えられる。石塔については檀那寺と不受不施派に共通する部分を刻んでいることがわかる。

表1の②は文政十三年（一八三〇）に没した杉本清三郎、⑤は万延元年（一八六〇）に没した妻である道の法号で、同じ石塔に法号が刻まれている。檀那寺から与えられた清三郎の法号は「善達院清光灵」であるが、杉本家の位牌・過去帳・石塔には「戒法院栄壽日詣」と刻まれている。妻の道には檀那寺から「善修院妙光信女」という法号が与えられているが、位牌には「瑞光院妙通日研」、過去帳には「瑞光院法王妙通日研」、石塔には「瑞光院法王妙通日研」と刻まれている。清三郎と道の法号は檀那寺によるものと杉本家の史料に見られる法号では大きく異なっており、石塔にも不受不施派の法号が刻まれている。また道の法号は位牌・過去帳・石塔では少し違いが見られ、過去帳と石塔には「法王」あるいは「法玉」の二文字が加えられており、内信者のなかで高い地位にあったことが窺える。また石塔には正面に「杉本氏先祖代々諸靈魂」向かって右に清三郎、左に道のものが刻まれている。

表1の④は嘉永六年（一八五三）に没した⑦弥三郎の娘の法号である。檀那寺からは「妙玉女孩」という法号が与えられている。杉本家の位牌には「無上院妙玉信女」、過去帳には「無上院妙玉」、石塔には「妙玉童女」と刻まれている。これについても①③と同様に檀那寺から与えられた法号をもとに不受不施派の法号を付けたものと考えられる。

表1の⑥は明治六年に没した⑦弥三郎の娘の法号である。檀那寺からは「妙洗信女」の法号を与えられているが、杉本家の位牌・過去帳・石塔には「蓮華院妙生」と記されており、②⑤と同様に檀那寺と不受不施派の法号とは全く異なっている。

表1の⑦は明治七年に没した弥三郎（弥七・弥七郎とも・①とは別人）のもので、檀那寺から「心照院法鏡」の法号が与えられ、杉本家の位牌には「心照院法鏡日不」、過去帳と石塔には檀那寺と同様の「心照院法鏡」の法号が記されている。これは①③と同様に一部を改変することで不受不施派の法号にしていると考えられ、ここでは「日不」という日号を付与して不受不施派の法号としている。

表1の⑧は明治九年一月に没した貫一の妻の法号である。檀那寺から「妙順信女」の法号が与えられているが、杉本家の位牌には「圓理院妙淨信女」、過去帳には「円理院妙淨信女」、石塔には「円理院妙淨」と刻まれている。これは②⑤⑥などと同様に檀那寺の法号は活用せず、不受不施派で付けた法号を使用していることがわかる。

表1の⑨は明治九年七月に死亡した女兒のもので、杉本家の位牌・過去帳・石塔には「妙幼孩女」と記されているが、檀那寺の記録には同日に一致する人物の法号は確認できなかった。これは明治九年四月一〇日に不受不施派が公許されたことによるもので、すでに杉本家が檀那寺から離脱しているものと考えられる。表1の⑩は⑨に次いで明治二三年に亡くなった美加の法号である。やはり檀那寺の記録には同日に一致する人物の記録は見られなかった。

杉本家の法号と檀那寺の法号を比較することができたのは文政一一年から不受不施派が再興される明治九年までの約五〇年である。不受不施派と檀那寺では全く違う法号を付ける場合もあれば、檀那寺による法号を一部改変して用いる場合もある。檀那寺の法号を用いず、不受不施派の法号を石塔に刻んだ例があった。これは不受不施派の信者であることを白日に晒すことになり、信仰心の強さを表わしているものと考えられる。調査時に、役人などがムラに来たときは石塔を池の中に投げ込んで隠したという伝承も聞くことができた。これは石塔に刻まれた法号などから内信が発覚する可能性があったことがわかる。発覚の危険をおかしてでも、不受不施派の信者であることを貫いていたことが知れる。

筆者がこれまでに調査を行った不受不施派の村落では表向きの檀那寺はすべて日蓮宗（受不施派）寺院であった。寛文六年の寺社整理で不受不施派寺院が廃寺になった場合は、その後新たに檀那寺となる寺院も同じ日蓮宗である受不施派寺院を選ぶ場合が多かったものと推測される。両派は同じ日蓮宗であるため、共通する部分が多く、人目に付く曼荼羅本尊や石塔に刻まれた法号なども初見で見分けることは困難である。内信者が檀那寺を受不施派寺院としたことは、内信が長く続いた要因の一つであると考えられる。

四 和気町益原における現代の不受不施派信仰

現在の益原村は大部分が不受不施派である法泉寺の檀家であり、本来はすべての家が不受不施派であった。荒砂・新町・中組・小保子・段の下・原上・原下の七つの村組に分かれていて、各村組の不受不施派の家で「講社」を構成している。これが講や寺の行事が行われるときの単位となる。

平成二〇年から翌二一年に掛けて行った現地調査で、数名の話者からムラや各講社、各戸で行われる行事や儀礼について聞き取りを行った。その結果を次に記す。

(1) 講社ごとの行事

オヒマチ (新町)

一月・五月・七月・九月の各第一日曜日に行われる。七月はウドンコウとよばれ、参加者にうどんが振舞われる。当日は当番の家が宿となり、床の間へ曼荼羅を掛けて法華経を読むオカンキが行われる。その後男性は法泉寺へ行きオカンキを行う。男性陣が寺に行っている間に女性はごちそうの用意をする。煮しめ・酢の物・汁など本来は精進であったが、後に魚が出されるようになった。また近年は仕出しを取っていたが、現在はムラの中へきた鶴飼谷温泉に行つて食事をする。

オカンキ (新町)

毎月一二日、二二日に行われていたが、今では一二日のみに行われている。晚七時頃になると講社の人が宿の家に集まつて、お床に本尊を掛けてオカンキを行う。このときはお茶が出される。

死亡から初七日まで (新町)

死者があつた場合、初七日まで毎日講者の人が死者の家に行つてオカンキを行う。八日目は寺の婦人会の人が来てオカンキを行う。また納骨までの間はお床に位牌棚を設置し、逮夜ごとにタイヤガンキが行われる。

大覚様の灯明番 (新町)

講社ごとに行われるもので、大覚様に付属する灯籠などの灯明番である。新町は大覚様の一番中心部である題目碑周辺にある三つの灯籠の番を担当している。夕方日が暮れ始めると灯明を灯し、線香を上げに行く。新町講社の家長の名前が書かれた板が毎日次の家へと送られている。メンバーに変更があつた場合は板を削つて書き直すといい、以前に比べると板がかなり薄くなつてきたという。

(2) ムラの行事

再興会

不受不施派が再興されたことを祈念して始められた行事で、寺の講堂を会場に青年団による劇や踊りが催されていた。近年は入道による寺の行事が行われるのみになっている。

ワケエモンコウ

益原の青年団によって行われていた講で、講の宿に当たった家が会場となり、お床に青年団所有の本尊をかけてオカンキを行う。この講が行われていたのは昭和三〇年頃迄で、最後にはオカンキをせずに茶と菓子を食べて帰ることもあったという。日時は不明。

大覚様

大覚大僧正真筆といわれる題目が刻まれた石碑が、法泉寺西側にある御先師様の中にある。現在「大覚大僧正会」が五月一日・一二日・一三日に行われている。会場は寺の本堂で法会の当日には当番の講社の女性が炊事に行き、本堂でオカンキが行われる。

(3) 家毎の儀礼

御経頂戴

現在も他家から嫁、あるいは養子として不受不施派の家に入るときは、寺で御経頂戴という儀礼が行われる。これを受けて初めてその家の一員として迎えられる。

五 不受不施派檀家の年中行事

不受不施儀を堅持する不受不施派では、他宗派・他宗教は謗法であるとして信仰せず、一般には家の中に神棚も祀らないとされる。しかし、筆者平成二〇年から二一年にかけて杉本家で行った調査では、正月にはトシガミを祀り盆には先祖を迎えるなど、他宗派寺院の檀家と同様の民俗が展開されていることがわかった。その結果を次に報告する。

正月行事

杉本家の正月行事では旧備前地域で一般に見られる「オカザリ」が取り付けられ、お床（床の間）には鏡もちのほかにはトシオケ（写真19）が置かれる。トシオケとは桶の中に米を入れ、その上に大きい丸餅を二つのせ、小さい丸餅、干し柿、ミカンが入れられたものである。餅やみかんの数は特にきまっていない。杉本家の「トシオケ」に使用される桶の蓋には天保五年（一八三〇）とあり、当時から正月にはトシオケが供えられていたものと考えられる。また蓋の裏には槌松という名前も見られるがこれは杉本家八代目の弥三郎（弥七・弥七郎）郎の幼名である。お床に掛けられる掛け軸は、近年では「高砂」である。以前も信仰の対象になるようなものは掛けていなかったという。

盆行事 杉本家で行われる盆行事は基本的には周辺地域に見られるものと同様である。お床には複数の本尊を掛け、机に莫塵をかけた棚に位牌を並べ、その前に供え物をする（写真20）。

不受不施派でも祖霊信仰が重要な信仰であることがわかる。また盆にはカドにミズダナを建てる風習も戦後暫くまでは残されていた。

このように日蓮宗不受不施派でも先祖信仰・精霊信仰といった民俗宗教が根底に生きていることが分かる。

おわりに

益原村では寛文六年の寺社整理で不受不施派の大樹山法泉寺が廃寺になった。その後は法泉寺に代わる信仰の拠点として、法泉寺の法灯を継ぐ大樹庵が密かにムラの中に設けられた。そのため益原村の内信者組織は廃寺になった法泉寺の信仰組織を引き継いだものと考えられる。また後に益原村の人々は受不施派の妙圀寺の檀家となり、内信を続けた。

杉本家の法号からは内信の一端を垣間見ることができた。杉本家では檀那寺のものを一部改変して用いる例と、全く新たに不受不施派の法号を付ける例とが確認できた。人目に触れる石塔にも不受不施派のものを刻んでいる場合がある。益原村の伝承では石塔を池の中に投げ込んで隠したとも伝えられており、内信が発覚する危険を認識した上で人目に触れる石塔に不受不施派の法号を刻んでいたものとみられる。

また杉本家所蔵史料には「お島様」である三宅島流僧、本妙院日珠による曼荼羅本尊や、天下諫曉を行った不受不施僧の本尊が複数含まれている。江戸後期には杉本家が内信者組織の中で重要な存在であったことを物語っており、幕末に同家に大樹庵が設けられたのもそのためであろう。杉本家に大樹庵が設けられたのは安政五年とされ、不受不施僧を匿ったという蔵の隠し部屋が現存する。一方お島様である日珠と杉本氏の連絡は安政五年以前にも行われていた。日珠が作成した曼荼羅本尊のなかには杉本氏個人に授与したものだけではなく断食や女中看経講など講中のものも含まれており、同家が安政五年以前から信仰の拠点になっていたことが窺える。

「お島様」とのやりとりは年に何度か仕立てられる内緒便によって行われ、杉本家に伝わる日珠による本尊や仏具、現在は『法泉寺文書』となっている日珠から杉本家に当てられた書状などはこの内緒便によってもたらされたものと考えられる。命がけで天下諫曉を行った僧らは内信者の崇敬を集めたであろうし、その中には郷里の出身者や身内の僧も含

まれたはずで、彼らの行動は人々の心理に大きな影響を与えたものとみられる。

不受不施派信仰の目的として、先祖信仰に重きを置いていると考える。廃寺になった法泉寺は益原村の先祖信仰を担っていたと考えられ、杉本家の曼荼羅にも個々の追善を目的として授与されたものや、孟蘭盆に杉本家の先祖供養に用いる曼荼羅も確認できた。これらの史料から大樹庵が益原村にある家々の先祖信仰を担っていることがわかる。

不受不施派を含む日蓮宗はこの世に釈尊御領の建設をめざす思想を持つ。つまり現世利益を重んじる宗派であるとされる。しかし杉本家に伝わる史料から信仰の実態は先祖供養、先祖信仰を中心とするものであることが窺える。弾圧下における信仰の目的は先祖以来の宗派による先祖信仰を維持することにあると考える。

和気町益原の大部分の家が今日に至るまで不受不施派を維持した背景には、信仰を継続するために環境が揃っていたものと考えられる。益原はムラの北・東・南を山で、西を川で隔てられ、ムラへの入り口も限られるなど地理的な環境に加え、檀那寺が不受不施派と同じ日蓮宗寺院であったことも内信を維持する上では重要な要素であったと考えられる。これにより近世の弾圧下を通して全戸が内信者という状態が継続され近現代に至ったものと考えられる。

また杉本家では、正月にはトシオケを供え、歳神が迎えられ、盆には先祖霊を迎えて丁寧に祭祀している。不受不施派信仰の基層に先祖信仰などの民俗宗教が生きていることも明らかになった。

(本節は『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第一三号(二〇一一年三月)に掲載した「備前国和気郡益原村「杉本家」所蔵資料から見る不受不施派の実相」を加筆修正したものである。)

【註】

- (1) 相葉伸『不受不施的思想の史的展開』講談社、一九六一年、六二二頁。
- (2) 吉田研一編『撮要録』日本文教出版、一九六五年、一五〇七頁。
- (3) 吉井町史編纂委員会『吉井町史』第一巻、通史編、吉井町、二〇〇五年、三〇五頁。
- (4) 長光徳和・妻鹿淳子編著『日蓮宗不受不施派読史年表』開明書院、一九七八年。
- (5) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第八巻近世Ⅲ、岡山県、一九八七年、七二四頁。
- (6) 同前、七二五～七二六頁。
- (7) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第九巻近世Ⅳ、岡山県、一九八六年、六二九～六

三〇頁。

(8) 和氣郡史編纂委員会『和氣郡史』通史編下巻Ⅱ、和氣郡史刊行会、二〇〇二年、三五〇～三五三頁。

(9) 前掲(4) 一九二頁。

(10) 前掲(5)、一九八七年、七三六頁。

(11) 『法泉寺文書』法泉寺蔵。

(12) 前掲(10)。

(13) 同前。

(14) 日蓮宗不受不施派研究所『不受不施派人名事典』日蓮宗不受不施派研究所、平成一六年、二六頁。

(15) 前掲(4)、一七七頁。

(16) 前掲(4)、一七八頁。

(17) 前掲(5)、七三三頁。

(18) 前掲(4)、一七八頁。

(19) 前掲(4)、一八〇頁。

(20) 前掲(4)、一八二頁。

表 1 大樹庵歴代庵主

	院号・日号	字名	享年	没年月日	備考
大樹庵 開基	日尊			(年不詳)5.1	
2世	善正院日相			寛永17年(1640)8.01	法泉寺2世
3世	正覚院日儀			万治元年(1658)11.30	2世日相の弟子・法泉寺3世
4世	正覚(学)院日了			延宝8年(1680)4.2	3世日儀の弟子
5世	持生院日縁			元禄10年(1697)1.26	4世日了の弟子
6世	善受院日浄	理順		元禄10年(1697)2.8	5世日縁の弟子・備前生まれ
7世	本性(正)院日学			享保8年(1723)6.21	日源の弟子・日笠村市倉にて入水
8世	善行院日清	友善	71	享保14(1729)閏9.23	日源の弟子・三宅島流僧
9世	立円院日信	楚(素)全	48	享保16(1731)11.21	隠岐島流僧
10世	要日院日富	幸清	25	享保12(1727)7.14	日要の弟子
11世	立行院日善	清立	30	享保20(1735)3.17	
12世	行法院日観	理然	74	明和8年(1771)10.19	14世日遊・善行院両師の弟子・ 大樹庵十世とも
13世	久遠院日然	源清 (玄精)	39	宝暦4年(1754)閏2.26	江戸で牢死
14世	正行院日遊	秀観	58	天明元年(1781)8.24	12世日観の弟子・江戸で牢死
15世	孝行院日忠	理観		天明4年(1784)12.27	14世日遊
16世	理山院日澄	理山		天明5年(1785)7.12	14世日遊
17世	浄光院日隆	本城 (周山)	26	寛政5年(1793)10.17	
18世	円住院日寿	日賢	24	寛政7年(1795)8.17	15世日隆の弟子
19世	勇行院日長	源清		文化12年(1815)2.21	18世日寿の弟子・江戸で牢死・ 俗姓木庭氏
20世	如法院日来	自得		文化12年(1815)8.25	19世日長の弟子・17世とも
21世	源浄院日学	随法		文政7年(1824)2.27	19世日長の弟子・岡山で牢死・ 22世とも
22世	清浄院日諦	了弁		文政11年(1828)3.23	
23世	開悟院日清	友善		文政12年(1829)6.11	
24世	宣妙院日正		80	明治40年(1907)6.22	照光院日恵の弟子・備前生まれ・ 赤木梅次郎の子
25世	善妙院日真	陽山	25	明治4年(1871)10.08	24世日正の弟子・ 岡山万町鳥越源衛の子

参考資料『日蓮宗不受不施派読史年表』 S53 長光徳和 妻鹿淳子 開明書院

表 2 杉本家所蔵史料と檀那寺法号の比較

	史料名	法 号	死亡年月日		俗名・備考
①	檀那寺過去帳	實相院修善日行	文政十一年(1828) 七月十六日	山主引四僧	弥三郎父 八十才
	杉本家位牌	實相院修善日寶	文政十一年子(1828)七月十六日		
	杉本家過去帳	實相院修善日寶	文政十一戊子七月(1828)七月十六日		
	杉本家石塔	實相院修善	文政十一年子(1828)七月十六日		俗名弥三郎 行年八十才
②	檀那寺過去帳	善達院清光灵	文政十三年(1830) 五月二十四日	法鏡寺引導	益原村 清三郎 三十七
	杉本家位牌	戒法院榮壽日脂	文政十三(1830)庚寅五月二十四日		
	杉本家過去帳	戒法院榮壽日脂	五月 二十四日		清三良
	杉本家石塔	戒法院榮壽日脂	文政十三(1830)庚寅五月廿四日		
③	檀那寺過去帳	清光院妙善日修	天保二年(1831) 六月十二日	二僧見届	壽介母 六十六
	杉本家位牌	清光院妙善日玉	天保二辛卯年(1831)六月十二日		
	杉本家過去帳	清光院妙善日玉	天保二年辛卯六月(1831)十二日		
	杉本家石塔	清光院妙善	天保二辛卯(1831)六月十二日 去		同(弥三郎)妻(後妻) 行年六十五才
④	檀那寺過去帳	妙玉孩女	嘉永六(1853) 八月廿四日 送		弥七良 娘
	杉本家位牌	無上院妙玉信女	嘉永六丑年(1853)八月廿四日		
	杉本家過去帳	無上院妙玉	嘉永六丑八月(1853) 廿四日		施主〇女
	杉本家石塔	妙玉童女	嘉永六癸巳八月二十四日(1850)		杉本弥七郎娘 玉口
⑤	檀那寺過去帳	善修院妙光信女	万延元年(1860) 八月十六日	山主引導	益原村弥七母
	杉本家位牌	瑞光院妙通日研	万延元年(1860)庚申八月十六日		
	杉本家過去帳	瑞光院法王妙通日研	万延元庚申八月(1860)十六日		
	杉本家石塔	瑞光院法王妙通日研	萬延元年(1860)庚申八月十六日		
⑥	檀那寺過去帳	妙洗信女	明治六年(1873) 九月廿一日 送		杵本弥三郎娘 二十才 由喜一女
	杉本家位牌	蓮華院妙生	明治六年(1873)酉九月廿一日		
	杉本家過去帳	蓮華院妙生	明治六年酉九月(1873)廿一日		
	杵本家石塔	蓮華院妙生	明治(6年)酉(1873)九月廿一日		
⑦	檀那寺過去帳	心照院法鏡	明治七年(1874) 六月廿四日	玉仙見届	杵本弥三郎 享
	杉本家位牌	心照院法鏡日不	明治七年(1874)乙戌六月二十五日		
	杉本家過去帳	心照院法鏡	明治七年乙戌六月二十五日(1874)廿五日		
	杉本家石塔	心照院法鏡	明治七(1874)明治七甲戌年六月二十五日卒		杉本彌三郎 行歳四十六歳
⑧	檀那寺過去帳	妙順信女	明治九年(1876) 一月二日送り		杉本貴一妻
	杉本家位牌	圓理院妙淨信女	明治九年(1876)一月二日		
	杉本家過去帳	円理院妙淨信女	明治九年一月(1876)二日		
	杉本家石塔	円理院妙淨	明治九年(1876)子一月二日		
⑨	杉本家位牌	妙幼孩女	明治九年(1876)丙子七月二十五日行		
	杉本家過去帳	妙幼孩女	明治九(1876)丙子七月二十五日去		
	杉本家石塔	妙幼孩女	明 九 七 月 十五日		
⑩	杉本家位牌	心法院妙経日止	明治廿三(1890)庚寅四月十日		
	杉本家過去帳	心法院妙鏡	明治二十三年四月(1890)		金川駒井杉本美加
	杉本家石塔	心法院妙鏡	明治廿三(1891)寅四月十日		杵本美加六十四



写真 3 曼荼羅本尊
三十番神・五番神



写真 2
板曼荼羅



写真 1-1 杉本家の蔵



写真 1-1 隠し部屋の出入口

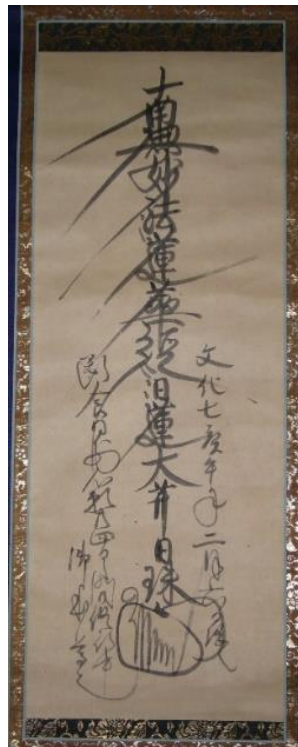


写真 7 曼荼羅本尊
タンシキノ御本尊

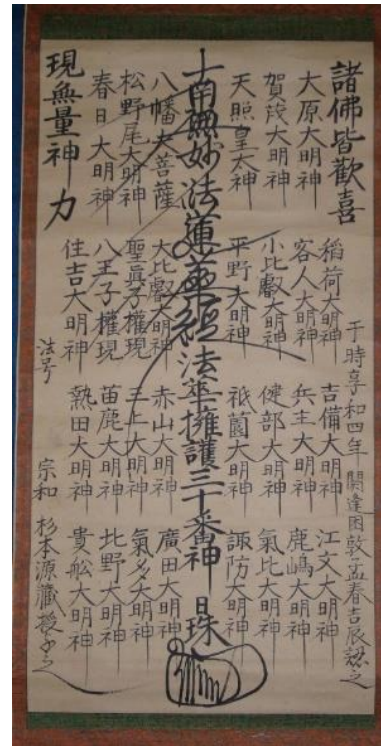


写真 6 曼荼羅本尊
法華擁護三十番神

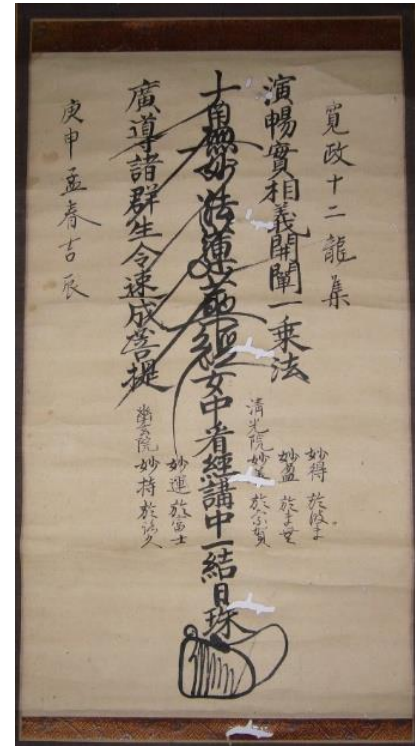


写真 5 曼荼羅本尊
女中看經講



写真 4 曼荼羅本尊
盂蘭盆供養



写真 11
曼荼羅本尊



写真 10
曼荼羅本尊



写真 9
曼荼羅本尊

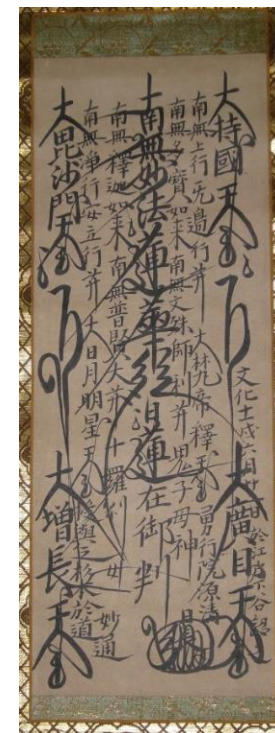


写真 8
曼荼羅本尊



写真 15 厨子入り大黒天・弁財天・歳徳善神像



写真 14 曼荼羅本尊



写真 13
曼荼羅本尊



写真 12
曼荼羅本尊



写真 17-1 杉本家過去帳



写真 16-2 底部
日珠花押



写真 16-1 仏飯器 側面

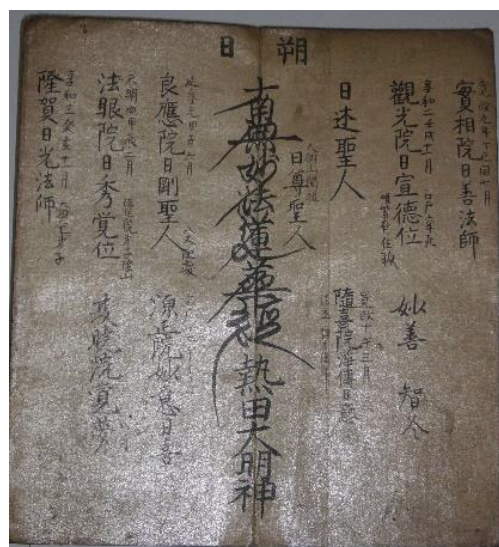


写真 17-2 朔日の頁



写真 16-3 箱



写真 19 トシオケ



写真 20 - 2 盆



写真 20 - 1 盆



写真 18-2 日珠背面
背面



写真 18-1 日珠位牌
前面

第三節 岡山市北区御津矢原の不受不施派と不受不施日蓮講門宗の信仰

はじめに

岡山市北区御津矢原（写真1）は旭川沿いの農村である。同所に隣接する御津金川は、備前国における日蓮宗不受不施派の本寺、妙国寺が近世の初めまで存在していた地域である。本節で取り上げる御津矢原は近世の矢原村であり、第二節の杉本家史料のなかに登場した日珠が庵主を務めた本妙庵があった。日珠は「お島様」として内信者の崇敬を集め、内信者組織を構築したことはよく知られている。^① また同所には不受不施派のほかに講門派の家も存在している。

御津矢原の調査は平成三〇年の六月から九月にかけて行った。その結果、内信者から不受不施僧に布施をする際に施主の役割を果たした清者の石塔を発見することができた。本節では調査によって得られた成果から矢原村における内信の実相に迫りたい。

御津矢原には不受不施派と不受不施日蓮講門宗の二つの不受不施系の檀家が存在している。ここではまず両派が成立した歴史的背景について述べる。日蓮宗は、秀吉が行った方広寺での千僧供養をきっかけとして受不施派と不受不施派に分裂し、さらにその後いくつかの派に分かれることになる。弾圧下の天和二（一六八二）年に日向の佐土原に流配中の日講と備中国都宇郡津寺村にいた覚照院日隆らの津寺派（講門派）は、内信者は他宗派の供養を受けており謗法を犯しているので、清と濁とは別でなければならぬ、つまり立法が内信者とともに同座で看経したり、導師を勤めたりするべきではないと唱えていた。^② この主張を行う派閥を不導師派と呼ぶ。これに対して過酷な弾圧を受けていた備前国では、内信寺や内信僧が存在することはできず、早くから教団の維持は内信者を重視しなければならない状況であった。そのため現在の不受不施派に通じる導師派を支持する声が多く挙がった。元禄二（一六八九）年に両派は分裂して、不導師派である講門派（津寺派）と、導師派である日指派に分かれることになった。その後日指派はさらに里方とよばれる導師派と、奥方と呼ばれる先例派に分かれ、先例派は元禄四（一六九一）年に講門派と合併した。^③

このようにして、不受不施派は二派に分裂する。御津矢原に不受不施派と講門派が存在することになった経緯は不明である。おそらく両派に分裂した当時、矢原村にそれぞれの派に所属する法中が居たと考えられる。

昭和一六年に、日蓮宗不受不施派と日蓮宗不受不施講門派が合併し、本化正宗となったものの、昭和二一（一九四六）年には再び分裂し、日蓮宗不受不施派と不受不施日蓮講門宗となった。

― 御津矢原の概要と不受不施派信仰の展開

御津矢原は岡山県の三大河川の一つである旭川左岸にある農村で、ムラの東には寺山（妙見山）や赤磐富士、猿掛山などが南北に続いている。岡山藩における近世の地誌『備陽記』（享保六年・一七二一）では赤坂郡の「矢原村」として確認できる。⁴

御津矢原の北部には真言宗と天台宗の檀家が、寺山の北西部には講門宗、それより南側の地域には不受不施派の檀家が存在し、最南部の大園も不受不施派の檀家で構成されている。各宗派の檀家は、それぞれの地域に比較的集中して分布している。本節では、講門宗、および寺山から赤磐富士の西麓に分布している不受不施派の信仰について述べる。

御津矢原の氏神は檜村布施神社である。不受不施派の家では、第二次世界大戦前までは、靴の紐が解けても鳥居の前で屈んではいけないと言われたが、戦時中には参拝が半ば強制されるようになったため、その後は特に神社に参ってはいけないとは言わなくなったという。講門宗では神社に参ってはいけないとは言わないということであった。

（1）不受不施派の概要

不受不施派の家は三八戸あり、岡山市北区御津金川の妙覚寺の檀家である。ムラの中には信仰の拠点となる本妙庵（写真2）がある。御津矢原の西側、旭川を挟んで対岸にある金川城は日蓮宗を庇護した中世松田氏の居城跡があり、御津矢原も松田氏の影響下で日蓮宗が信仰されるようになったと考えられる。

『備陽記』『赤坂郡古寺之事』⁵によると、矢原村には日蓮宗の法昌山宗祐寺という寺があり、塔頭として慈眼坊と円明坊があった。本寺は金川村妙国寺であるため不受不施派寺院であったことがわかる。

また寛文元（一六六一）年の「本末諸寺異体同心掟状之事」⁶は宗祖日蓮以来の不受不施を固く守っていくことを誓った不受不施派寺院の連判状で、ここに「矢原 宗祐寺春山（花押）、慈眼坊（花押）、円明坊（花押）」と記されている。宗祐寺は春山が住職を勤めていたこと、本坊の他に二つの坊が存在していたことが分かる。

その後、岡山藩は寛文五（一六六五）年に幕府が不受不施派の寺請を禁止したことをうけて、翌寛文六年に寺社整理を実施した。不受不施派に限らずその他の宗派や神社までもが整理の対象となった。矢原村の宗祐寺もこの時に廃寺となったようである。これまで宗祐寺を信仰の拠点としていた人々は、後に他宗派寺院や受不施派寺院の檀家になるわけである。御津矢原の伝承によると日応寺（日蓮宗・岡山市北区日応寺）の檀家であったと言われている。

寛文六年の寺社整理の際、岡山藩主池田光政は、弾圧の一つの手段として、還俗を奨励し、還俗した僧侶に対してそのまま寺地・寺田を与えて生活を保障するという懐柔策を行っている。⁽⁷⁾ 不受不施派である妙国寺の末寺では、九二か寺の内、七六か寺の僧が還俗し、その後還俗した住職が寺宝を持って行方を晦ましている例が多く見られる。その後密かにムラへ戻り、不受不施僧である法中を中心に隠れ庵が設けられ、そこを拠点として内信者組織が形成されたという。⁽⁸⁾

矢原村には不受不施派の本妙庵と大教庵があった。本妙庵は矢原村にあった宗祐寺を引き継ぐものではなく、津高郡河内村の枝村富谷にあった生前山本妙寺がその前身となったようである。⁽⁹⁾ 大教庵は同じく本妙寺の坊である大教坊を前身とするが矢原村またはその枝村である大園に存在していた。⁽¹⁰⁾ これらの庵は、法難など必要に応じて移転するため近世を通じて同じ場所に存在していたわけではない。本妙庵はムラの伝承によると寺山(妙見山)山頂にあったとされる。現在、本妙庵とその東にある「御先師」と呼ばれる石塔群(写真3)は、共に寺山山頂にあったものを、明治に入ってから下ろしたものであると言われている。

(2) 講門派の概要

講門宗の家々は霊源寺(岡山市北区伊福町)の檀家が一五戸、本覚寺(岡山市北区御津鹿瀬)の檀家が二戸存在する。御津矢原における講門宗の拠点として、シタノカワとよばれる所にオツヤ堂(写真4)がある。近世の弾圧下には矢原村に講門派の東智庵があった。⁽¹¹⁾

講門宗講中の拠点であるオツヤ堂には、備前に初めて日蓮宗を布教した大覚大僧正の石塔(写真5右端)がある。これは大覚がこの地を訪れたことに因んだものであるという。大覚は一四世紀中期に松田氏の庇護をうけて布教を行っている。⁽¹²⁾

二 矢原村における不受不施派の内信

話者の協力を得て行った現地調査と文献調査では、弾圧下に行われた内信の様子を物語る伝承や史料を得ることができた。次にその内容を報告する。

(1) 弾圧下の伝承

まず御津矢原で行った聞き取り調査で得られた、不受不施派内信の様子を記す。

寺山にある庵で法中(不受不施僧)を導師としてオカンキ(看経)が行われる際には、見張りを立てて行われる。役人が来るとすれば、金川を経由して「渡し」を使って旭川を渡り、矢原村にやってくる。庵のある寺山は見晴らしがよく、見張りからの伝達も届きやすい場所であるという。法中は夜中に手拭いで顔を隠して人目を忍んでやってくるという、家の納戸

で数人が集まって、あまり大きな声を出さずに題目を唱え、説教を聞くなどした。その後、法中が次の所へ行くには山中に秘密のルートがあつて、時間を合わせて僧を送り、次の所の迎えの者がやって来る。

話者が幼い頃に聞いた話では、表向きには日応寺(受不施派)の檀家で、宗門改の際には、米・麦などを納めたという⁽¹³⁾。

明治初期の不受不施派再興から一四〇年以上経過した今日においても、弾圧下の信仰の様子が具体的に伝承されているのである。

(2) 清者の石塔

今回の調査では寺山山上にある個人宅の墓地で「清者」と刻まれた石塔(写真6)を発見することができた。清者とは法立ともよばれ、内信者から不受不施僧である法中に布施をする際に施主の役割を果たす人物である。清者は檀那寺の宗門改を受けていない、言うならば無戸籍者で、内外俱浄の存在であつた。清僧である不受不施僧は自らの信者であっても、檀那寺の宗門改を受けた内信者は内浄外濁の存在であるため、直接布施を受け取ることができなかった。内信者の布施は施主を担う清者を介すことで浄化され、法中が受け取ることが可能になるのである。

今回見つかった石塔は豊島石と見られる凝灰岩性で、風化が進み判読が困難な部分もあるが、正面には「妙法開蓮院浄香」、左に「清者 大□太□」、右に「文化十四丁四月廿日」(二八一七)と刻まれている。この墓地を所有する家の過去帳には一二日の頁に「文化十四年六月 開蓮院浄香」と記されている(写真7)。石塔と過去帳では没した月日が異なるが同一人物であり、同家の過去帳に法号が記されていることから「開蓮院浄香」は当家の出身であるか、関わりの深い人物であると推察する。過去帳の上段は不受不施派の僧侶が記され、下段には同家の先祖の法号が記されている。「開蓮院浄香」が僧であるかどうか不明であるが下段に記されている。

他の不受不施派村落にでも、清者の墓であるという伝承を聞く事があるが、この石塔のようにそのことを明確に刻んでいる例は、これまでの調査地では確認できなかった。墓石に清者であることを刻むことで不受不施派信仰が明るみになる可能性があり、法難を引き起こすことにもなりかねない。

(3) 日相・日義の石塔

本妙庵に隣接する「御先師」の石塔の中に、文化四年(一八二二)に起こった「矢原法難」で命を落としたと伝えられる日相と日義の石塔がある。一つの石塔の表に「妙法 明了院日相得意」右側面に「明 文政四巳霜月五日」、裏に「妙法 通達院日義法師」、左側面に「通文政四巳極月八日」と刻まれている。「矢原法難」については『御津町史』に次のように記

されている。

文政四（一八二一）年六月一六日、赤坂郡矢原村原文丈介の宅に日相・日義の二僧が宿泊していたのを探知した捕吏は、夜三更（一二時）その家に進入し、蚊帳を切り落として二僧を捕らえたという。家主五郎右衛門、庵地主（白髭）岸右衛門及び、（白髭）幸八を縛り、また組頭三郎等四人を拘束して岡山に護送し獄に投じた。日相は同年一月四日、日義は一二月八日共に牢死したが他の四人は不明である。⁽¹⁴⁾

普段法中は、庵ではなく民家などに宿泊していたことが伺える。日相の死亡日が石塔と町史とは異なっている。

（4）日珠の石塔と「日朝さま」の信仰

矢原村の本妙庵第六世、本妙院日珠上人は寛政五（一七九三）年に天下諫曉を行い三宅島へ流された後、島から内信者の指導を行い、内信者組織を構築した僧侶である。⁽¹⁵⁾ 御津矢原では日珠は、天下諫曉に先立ち自らの石塔を立てて出立したといい、また目の神様として信仰を集める「日朝さま」の石塔を建立したことなどが伝えられている。「日朝さま」の祭りは現在も行われており、かつては近隣の不受不施派檀家に限らず、方々から他宗派の人も訪れていたという。

日珠の建立と伝えられる日朝の石塔（写真8）は「御先師」の石塔のなかにある。日朝の石塔は花崗岩製の石塔で、寛永法難の前六聖人、寛文法難の後六聖人、日典、日親、日奥などと共に日朝の名が刻まれた石塔と、豊島石製の石塔の二つがあり、後者の石塔が日珠建立と伝えられている。

日朝とは行学院日朝（一四二二～一五〇〇）のことで、身延山一世法主を務め明応九年（一五〇〇）に没している。日朝は両目を失明したものの、その後完治したとされることから、目の神として信仰を集めるようになったという。日朝様の祭りは、近世の弾圧当時から行われているとされ、『御津町史』には次のように記されている。

七月三十日は矢原にある日朝さまのお祭りである。不受不施禁制のころは、表は眼病の神様としての日朝さまのお祭り、人目につかぬ奥の間では内信の人々がひそかに集まっていた。不受不施の地下活動である。近郷から不受不施の信徒はもちろん眼病の靈驗をちようだいしようと一般の人も多数お参りする。⁽¹⁶⁾

この伝承から、日朝さまの祭りに見せかけて実際には不受不施派のオカンキが行われていたことが窺える。内信を行う上での智恵であると考ええる。

（3）まとめ

近世の矢原村は「お島様」となる本妙庵日珠が庵主を務めた本妙庵が存在するなど、内信の盛んなムラであったことがわり、弾圧下の信仰に関する伝承もそのことを裏付けるもの

である。「清者」と刻まれた石塔は、このムラに施主の役割を担う清者が実在したことを示すものであり、あえて「清者」と刻むことは信仰心が篤いことの表れであると考ええる。

三 現代における不受不施派と講門宗の儀礼

御津矢原では今日も熱心な信仰が展開されている。本節執筆に伴う調査で得られた行事や慣習を次に記す。

(1) 現代における不受不施派の行事

日珠上人の法要 平成二九年から始められた。一月二〇日に本妙庵で行う。

ツキナミガンキ 一月七日を除いて毎月二九日に矢原の三講社が共に本妙庵で入道が導師になって行う。しかし七月は日朝様のお祭りがあるため、一月は日珠上人の法要が行われるようになったため行わない。

お日待ち 正月、五月、九月の都合の良い日に行く。お寺さん（妙覚寺の僧侶）が来て一四時から本妙庵で行われる。一月は二〇日の日珠上人の法要に合わせて行うようになった。

日朝さま 祭りに先立ち七月二四日に本妙庵と、寺山山頂にある妙見様、そこに至る道の清掃を行う。「日朝さま」は七月三〇日から三一日にかけて行われ、御津矢原では七月三一日が日朝様の命日であると言われている。三〇日の朝六時から行灯やテント張りなどの準備を行い、一二時頃からはお参りが始まり、お供えのお返しにパンとコーヒ―牛乳が渡される。一九時には妙覚寺から僧が来て行法ぎょうほうと称する法要が一時間ほど行われる。その後も夜通し庵に籠り、お参りの人にお接待をする。二日目は昼前後になると片付けを始めるが、かつては午後四時ごろまでは続けていたという。二日間夜を通して行うため、講中の檀家と入道とで幾つかのグループを作り、交代しながら番をすることになっていた。平成二九年からは三一日のみ行われるようになっている。

この法要では僧侶の後ろに入道が座り、さらにその後に信者が座る。庵内に入りきらないため、表に張られたテントの下へ村内の檀家や他地域からの信者が座る。

おこう 妙覚寺で行われる。一月一七日日に「花もち」「まんがりこ」と称するもちをつき、一八日の朝にやや硬くなった餅に色を付けて細工をする。これを本堂の仏前に供える。各家でも「マンガリコ」「花もち」と称する餅を作成し仏壇へ供えていた。家の男性が餅をつき、女性が細工をする。様々な色や形のものを作る。

毎月一五日には寺山山頂にお参りし、その際に掃除をする。山頂には「妙見大菩薩」、「祇園大明神」、「養牛安全」などの題目石がある。通称「妙見さま」、「うしがみさま」と呼ばれ

ている。

お経頂戴 嫁や養子を迎えた時、子どもが生まれた時などにお寺でお経頂戴を受け、正式に檀家となる。

(2) 現代における講門宗の行事

お日待ち 正月、五月、九月の都合の良い日に行く。シタノカワにあるオツヤ堂で一〇時から行われる。昔はおにぎりなどを用意していた。

しんがさんにち 四月三日のことで、大覚大僧正の命日である。オツヤ堂で行われる。

おこうさま 一月一二日に寺で行う。或は「おこう、おぞうこう」と称す。日講さまと、日像さまのお祭りであるという。

ツキナミガンキ 昔は講中において輪番で行っていた。その後会社などに努める人が多くなり、オツヤ堂で行うようになったが、今は行われていない。

講門宗における慣習 婿を迎えた際にはお寺で拝んでもらい、正式に檀家・家族として迎えられる。

おわりに

御津矢原には「お島様」となる本妙庵日珠を輩出した本妙庵が現在も存続している。天下諫曉により三宅島流僧となった日珠は、島から内信者組織の再構築を行ったとされ、前節で取り上げた杉本家にはその日珠による史料が多数伝えられていた。日珠は三宅島で没しているが、御津矢原の本妙庵境内にある御先師の石塔郡の中にも二つの石塔が建てられている。日珠を輩出した本妙庵が近世以来存在していることや弾圧下の内信の様子を今日まで伝えている伝承からも不受不施派信仰の盛んなムラであることがわかる。

特に内信者から不受不施僧である法中に布施をする際に、施主の役割を果たした清者の石塔を発見することができ、矢原村に清者が実在したことが明らかになった。人目に付く可能性のある石塔に清者であることを刻むことは、法難を引き起こす可能性もあるが、信仰の証として建立したと考えられる。

また御津矢原の特徴としては不受不施派と講門宗が併存していることをあげられる。同じムラに二つの派が存在する理由を知ることではできなかった。矢原村の西側には中世に日蓮宗を庇護した松田氏の居城金川城があったところで、その金川村には寛文六年の寺社整理まで、備前に多くの末寺をもつ不受不施派の妙国寺があった。近世の矢原村は中世以来の信仰を継承したものと考えられる。さらに不受不施派の信仰を継続することができた要因

として、御津矢原は山と川に挟まれた、ムラに入る経路も限られるなど内信を維持しやすい地理的環境があったことが考えられる。――

（本節は『岡山民俗』二三九号（二〇一八年十二月）に掲載した「御津矢原における日蓮宗不受不施派および不受不施日蓮講門宗の信仰」を加筆修正したものである。）

【註】

- （1）岡山県史編纂委員会『岡山県史』第六卷近世Ⅰ、岡山県、一九八四年、七三五～七三六頁。
- （2）御津町史編纂委員会編『御津町史』御津町、一九八五年、三三四頁。
- （3）前掲（1）、七二八頁。
- （4）石丸定良『備陽記』日本文教出版、一九六五年、三一〇頁。
- （5）同前、四二七頁。
- （6）前掲（2）、三二五頁。
- （7）前掲（1）、七二二頁。
- （8）岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第七卷、近世Ⅱ、岡山県、一九八五年、七三三頁。
- （9）同前。
- （10）前掲（2）、三三三頁。
- （11）同前。
- （12）同前、一二三頁。
- （13）平成三〇年六月から九月にかけて、民俗調査を行った。その際に話者から提供された情報である。
- （14）前掲（2）、三三五頁。出典については記載がない。御津矢原では「矢原法難」について同様の内容が伝承されている。
- （15）岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第八卷、近世Ⅲ、岡山県、一九八五年、七三六頁。
- （16）前掲（2）、八九一頁。



写真 1 本妙庵



写真 2 御津矢原全景 中央が寺山



写真 4 オツヤ堂



写真 3 本妙庵にある御先師墓所



写真 7 開蓮院浄香の法号が
記された過去帳



写真 6 「清者」と刻まれた石塔



写真 5 オツヤ堂裏の石塔



写真 8 日珠の石塔（左と中央）と
日朝の石塔（右）

第四節 岡山市東区瀬戸町における久米右衛門派の信仰

はじめに

岡山市東区瀬戸町（旧赤磐郡瀬戸町）（以下瀬戸町）は、備前国磐梨郡の東部に位置し、その広範囲に日蓮系寺院の檀家が分布している。寛文六年（一六六六）に岡山藩主池田光政が実施した寺社整理では、町域にあった全ての寺院が廃寺となった。天台宗の一か寺（後に再興）を除き全ての寺が日蓮宗であり、これらの日蓮宗寺院は不受不施派であったため廃寺になったと考えられる。現在でもこの地域には不受不施派や不受不施日蓮講門宗（旧講門派）の檀家が存在する。

現在瀬戸町鍛冶屋にある慧教庵を拠点に信仰を続ける不受不施派寺院法泉寺（和気町益原）の檀家である三十三番講社の人々は、昭和五七年まで不受不施派の一派である久米右衛門派として信仰を行っていた。慧教庵の名は不受不施派に帰入した際に、法泉寺の住職から授かった名称で、それまでは「御庵」^{（1）}の名が用いられていた。御庵は現在も通称として用いられている。

久米右衛門派の御庵は、かつて鍛冶屋から南西に三キロほど離れた岡山市東区瀬戸町森末に存在していたが、大正一五年に鍛冶屋に移されたという。久米右衛門派の始まりは天保法難の際に講門派の本拠地である大坂東高津衆妙庵が摘発され、小僧久米右衛門が森末の御庵にたどり着き、消えかかった法灯を伝えた。その後明治初年の講門派再興の際になんらかの理由で久米右衛門派として分離した。^{（2）}講門派の再興は明治一五年である。

久米右衛門派は僧侶不在のまま信者のみで信仰が維持されていた。昭和五七年に不受不施派に帰入するまでは、弾圧下と同様に特定の日蓮宗（受不施派）寺院の僧によって葬儀を行った後に、久米右衛門派によって再度葬儀を行い、法号も同派のものに付け直したという。同派の信仰や儀礼は、弾圧下における内信の様子を現代に伝える貴重な事例である。現地での聞き取り調査は令和元年一〇月から翌年九月にかけて行った。調査で得られた内容を報告し、同派の歴史的展開や不受不施派信仰の実相に迫りたいと考える。

一 久米右衛門派の概要と歴史

昭和期の久米右衛門派の信仰は鍛冶屋にある御庵を中心に展開されていた。鍛冶屋は約一二〇戸からなる農村で、下の条（写真1）・中村・奥の条・山の谷・五反河内^{（3）}の五つに分

かれ、現地ではこのような村組をヒラ（平）と呼ぶ。氏神はムラの北東方向の山上にある神時神社で、氏子には鍛冶屋のほか東側に隣接する大井^{だいゐ}がある。鍛冶屋の家々の檀那寺は、実教寺（日蓮宗・瀬戸町鍛冶屋）、妙興寺（日蓮宗・瀬戸内市長船町福岡）、法泉寺であり、このほかに不受不施日蓮講門宗の檀家も五反河内に四戸が存在する。久米右衛門派は現在、法泉寺の三十三番講社となっており、同講社は不受不施派に帰入するまでの久米右衛門派の組織をそのまま引き継いでいる。信仰の中心となるのは瀬戸町鍛冶屋にある御庵とよばれる建物で、不受不施派となつてからは慧教庵と名付けられたが、現在も通称として御庵の名称が用いられている。

かつて久米右衛門派であつた三十三番講社の家は、鍛冶屋の下の条に最も多く、同村組三〇戸中の一六戸、同じく鍛冶屋の五反河内に四戸、瀬戸町万富に二戸、鍛冶屋から岡山市中区と瀬戸町瀬戸へ出た家が一軒ずつあり、合計二四戸が存在している。下の条はかつて全戸が久米右衛門派であつたが、他宗派や他宗教に変わった家や、他所から移り住んだ家などがあり現在のような状況になっている。久米右衛門派では法泉寺の三十三番講社になる以前から自らのことを講仲間と称していて、主に不受不施派への帰入以前の講仲間を示すものとして「内信の人」という表現も用いる。また今岡（現岡山市北区今岡）にも四戸ほどの信者がいたが、鍛冶屋周辺の久米右衛門派信者が法泉寺の檀家になったため、日心寺（日蓮宗・岡山市北区日心寺）の檀家となった。

久米右衛門派の御庵は現在鍛冶屋下の条にあるが、かつては瀬戸町森末にあつた。久米右衛門派の歴史はこの森末にあつた御庵から始まるようである。森末にあつた御庵は森末庵または森庵の名でも呼ばれていた。

天保法難の際に、講門派の中心的な庵であつた大坂東高津の衆妙庵が摘発された。その際に小僧久米右衛門が衆妙庵の宝物をもつて逃れ、現在の瀬戸町森末にあつた御庵にたどり着き、消えかかった法灯を伝えた。その後明治初年に施主代の河内日允が恵蓮院日心と何らかの妥協をしたことに反発した人々が再興された講門派から分離し、久米右衛門派を名乗つたといふことである。^{（3）}

その後大正一五年に曼荼羅本尊や古文書とともに御庵を鍛冶屋下の条に移転したと伝えられている。^{（4）}さらに久米右衛門派の人々は昭和五〇年代までは特定の日蓮宗寺院に葬儀を頼んでいたが、昭和五七年には新たに葬儀を行ってくれる寺院を求めて、不受不施派に帰入し法泉寺の檀家になった。

次にかつて御庵があつた森末と、現在御庵がある鍛冶屋下の条における不受不施派の展開について見ていきたい。江戸時代後期に編纂された『撮要録』によると、森末村には日蓮宗である妙光寺と正行寺の二か寺があつたが、寛文六年に岡山藩が実施した寺社整理で廃

寺になっており不受不施派であったと考えられる。妙光寺については住僧が還俗し、寺の屋敷などはそのまま還俗人が賜っている。正行寺については「住僧出寺」とあり、不受不施派への転向や還俗を拒否し行方を眩ましたことが分かる。⁽⁵⁾このような僧は頃合いをみてムラに戻り、密かに内信者の指導を行ったことが考えられる。⁽⁶⁾妙光寺は森末にある奥ノ堂池の下に、正行寺は同じく森末の青木池の南側、現在西番神とよばれる番神堂の下辺りにあったとされる。

森末村の人々はこれらの寺が廃寺になった後に、新たな寺の檀家になったとみられるが、信仰を継続する内信者が存在し、森末には内信の拠点となる御庵（森末庵・森庵）が開かれる。現地での調査では、「西番神（番神堂）の付近で見張りを立てて集まりをしていた」という伝承を聞くことができた。明治初期に久米右衛門派として分離する以前は講門派であり、現在も森末にはかつての講門派である不受不施日蓮講門宗の家が複数ある。

森末の御庵の場所については、『瀬戸町誌』によると番神堂（西番神・青木池の南側付近）青木池の南側付近）の下にあった入矢林太家の裏納屋二階が、内信の集会所であったという伝承があり、ここが御庵であったとされるほか、森末の妙光寺跡にあったともいわれている。⁽⁷⁾

次に、現在御庵がある鍛冶屋の久米右衛門派と不受不施派の歴史についても確認しておきたい。『撮要録』によると鍛冶屋村には道覚寺があったが、寛文六年の寺社整理で廃寺になった。「住僧出寺」とあることから不受不施派を堅持し寺を去ったことが窺える。⁽⁸⁾道覚寺が廃寺になった後に、新たな寺の檀家になったはずである。鍛冶屋の久米右衛門派では昭和五〇年代に至るまで、特定の日蓮宗寺院に頼んで葬儀を行っていたことから、この寺が檀那寺であった可能性が考えられる。⁽⁹⁾また鍛冶屋での調査時には「千種山の藪に僧を匿っていた」という伝承を聞くことができた。

久米右衛門派が講門派から分かれたことは現在では伝えられておらず、御庵が森末から鍛冶屋に移された経緯も聞くことはできなかった。御庵を森末から鍛冶屋に移した理由については、今日の森末には久米右衛門派の家はなく、鍛冶屋下の条には多い。信者の多いムラに信仰の拠点を置くために移転されたものと考ええる。

二 森末にある内信者の墓と御庵の位牌

かつて久米右衛門派の御庵があった森末には、導師を務めるなど信者を指導する立場にあった人物のものと考えられる墓地がある。また御庵には同様の立場にあったとみられる

人物の位牌が祀られている。久米右衛門派には昭和五七年に不受不施派に帰入するまで僧侶が不在であり、俗人が導師を務め信仰を維持してきた。ここでは森末の墓地にある石塔と、御庵にある位牌を調査した。

墓地（写真2）は森末にある西番神（番神堂）のやや南にあり、正行寺跡や御庵もこの付近にあったとされる。久米右衛門派の人々が四月二八日のオオガンキ様の際に参拝する。盆と正月、春と秋の彼岸には当番の班が掃除をする。かつては正月にも講仲間でお参りをしていたという。この墓地に特定の呼称はなく、どのような人物の墓であるかも伝えられていない。現在この墓地には一一基の石塔が有り、反時計回りにおおよそ年代順に並んでいる。表1は石塔の銘文を書き起こしたものであるが、文化年間の石塔が存在することから、この墓地は天保法難で久米右衛門が大坂衆妙庵から逃れてくる以前からの墓地であることがわかる。1の石塔には「法師」、2の石塔には「大徳」とあり、僧であると考えられる。また7から11は明治期に建てられたもので正面に法号、側面に没年月日と俗名が刻まれており、俗人のものであることがかる。

森末の墓地にある石塔は、森末にあったころの御庵に関係するもので、久米右衛門派が講門派から分かれた際にこの墓地を引き継いだものと考ええる。今日では森末に住む講門派の人がお参りすることはないという。

次に御庵に祀られている位牌について分析する。今日御庵には御先師とよばれる位牌が一二柱祀られている⁽¹⁰⁾。その内の一つには正面に「行覚院日朝上人」、背面に「仏滅度後四百十年十月建立 元和十七年三月十七日去 森末常在山妙光寺開山師」と記されている。これは妙光寺の信者であった人々の子孫が御庵を信仰の拠点としたために同庵に伝えられ、庵と共に大正一五年に鍛冶屋に移転されたものと考えられる。

また位牌の中には久米右衛門のものも含まれていて、正面に「妙法 慧教院 覚位」、背面に「安政四丁巳歳十一月三日 俗名糸右エ門」とある。久米右衛門が大坂から森末の御庵に逃れて、ここで生涯を終えたのであろう。一方墓地に石塔は確認できなかった。

このほかには石塔同様に俗人の位牌も九柱が祀られている。位牌と対応する石塔は、表1の7・8・9・10・11である。これらの俗人の位牌は僧侶にかわって導師を務めるなど、信者を指導する立場にあった人物のものであると考えられる。

鍛冶屋の国定若松氏が導師を務めた後は、今岡（現岡山市北区今岡）の富山財八氏、さらにその後は鍛冶屋の弓本氏が導師を務めていたという。国定氏については石塔（表1の11）と御庵の位牌がある。御庵にある最も新しい位牌が富山氏のものである。それ以後も導師を務める人がいたものの固定された役割ではなく、年長者の男性が順に務めていたようである。信仰を指導する立場にあった人の位牌を御庵に祀って靈魂供養していたことがわかる。

三 久米右衛門派の儀礼と信仰

(1) 御庵における年中行事

久米右衛門派の拠点である御庵(写真3)は不受不施派へ帰入した際に、法泉寺より「慧教庵」の名が与えられている。それ以来オカンキの方法は今日の不受不施派と同様に行われるようになっていくが、御庵での行事は基本的に久米右衛門派のものを引き継いでおり、当時の信仰を経験している方も大勢いる。

鍛冶屋での現地調査では森末に御庵があった当時の伝承も聞くことができた。鍛冶屋では森末にあったころの御庵のことを「ごあんもと」とも称している。この森末の御庵が鍛冶屋に移される以前に、オオガンキ様とよばれる行事の際には導師を務める人物が一か月前から御庵に泊まりオカンキをあげていた。これは行事に伴い一か月間「オカンキをためる」必要があったためとされる。

ここでは御庵で行われる行事について聞き取り調査の結果を報告する。表2は、平成三一年に慧教庵で行われた行事の一覧であるが、これらの行事は久米右衛門派のものを引き継いでいる。近年は講仲間の負担を軽減するため、毎月行われる「十二日様」と他の行事を合わせて行うようになり、従来の日程から変更される場合もある。個別の行事については基本的に旧来の日程で記す。

十二日様(毎月一二日) 十二日ガンキともいわれる。毎月一二日の一三時から行われる。

法泉寺の三十三番講社となつてからは、講社長が導師(おせんだち)を勤め、二五分程度お経をあげる。

お日待ち(一月一五日・九月一五日) 現在は御庵でオカンキをし、茶話会をするが、かつては「ごちそう」を用意していた。

彼岸(春分の日・秋分の日) オカンキ、茶話会をする。

オオガンキ様(四月二八・二九日) 二八日の一三時からご開帳と称し、題目の下に「日蓮大菩薩」と記された大きな曼荼羅「オオマンダラサマ」を掛け、オカンキをする。晩にもオカンキを行う。昭和の中頃には夜間に御庵の番をするため、導師を務める人が布団を持って行き泊まっていた。二九日の朝九時からオカンキをし、森末のお墓へ参る。その後食事をし、一五時にはゴヘイチョウと称し、曼荼羅を片付ける。平成三二年から二八日のみで行うようになった。昭和四〇年代まで今岡(岡山市北区)から信者が来ていた。

お参りに来た人々に振舞うため宿で炊事をする。カミ・シモ・ナカ・五反河内の四班に分

かれ年ごとの輪番でその班の宿に集まる。赤飯のおしぬぎ、ダイコン・タケノコ・ねじ干し（大根）などの煮しめ、チシャモミ（チシャの酢の物）などを作る。後に仕出し屋からとった海苔巻きになったが、今は大手鰻頭とお茶のみになっている。日蓮聖人の立教開宗会にあたる。

しんがさんにち
新ヶ三日（五月三日） オカンキと茶話会をする。大覚大僧正の命日にあたる。

夏祈禱・雨祝い 決まった日に行うのではなく、必要に応じて行っていた。

盆・初盆（八月一四日） 盆のオカンキは一四日の午前八時から御庵で行われる。その後、講仲間に初盆の家がある場合はその家に講仲間が出向き、オカンキをしていた。初盆が複数ある場合はその全ての家を回り同様にオカンキを行う。一軒の家に一時間ほどかかるという。五年ほど前（令和二年現在）からは初盆の家が準備をし、御庵に講仲間が集まって初盆のオカンキを行う。その際初盆のある家は自宅の仏壇から過去帳を御庵へ持って行く。過去帳のことを「過去帳さま」という。久米右衛門派の家々では位牌を作らない。

また近年は、例年行われる盆のオカンキについては、八月一二日に毎月の「十二日様」と一緒に行うようになっていいる。

お講（十一月二日） 食紅で色を付けたモチで、花などの形をした「まんがりこ」と呼ばれる供物を作る。御庵の本尊の前に設けられた祭壇に、重箱に入れて供える。かつては多くの家々が自宅で作ったものをお供えし、品評会のようなであった。近年は「まんがりこ」を供える家も少なくなり、一軒当たり千円をお供えしている。

（2）儀礼と信仰

次に家とムラにおける儀礼と信仰に関する調査の結果を報告したい。久米右衛門派の人々は、不受不施派に帰入するまで内信を行っていたが、特に葬儀は弾圧下に準ずる形で行われており、近世における内信の様子をよく伝えている。ここに記す葬儀の様子は主に戦後から不受不施派に帰入する昭和後期までの様子である。

葬儀 死者があった際には下の条の集会所に久米右衛門派の人が集まり、経帷子やハタ、提灯や龍頭、蓮の花や小判といった葬儀や葬列に用いるものを作成していた。葬列に用いる題目を記したノボリも内信の人が書いた。死装束の白い着物も白いサラシを縫って作成した。棺は寝棺で、かつてはムラの講仲間にいた大工が作製していた。集会所が出来たのは今から五〇年以上前（令和二年現在）で、それ以前は死者の家で準備をしていた。

葬儀はまず日蓮宗寺院の僧によって行われ、法号も与えられるが、その後、久米右衛門派の導師によって葬儀がやり直され、法号も久米右衛門派のものに付け直される。日蓮宗寺院の僧によって行われる葬儀には、久米右衛門派以外の者も訪れ、また他宗派の者の葬儀がある場合にも参列する。

逮夜には毎回内信の人が集まり、オカンキをしていた。そのたびに家の人はお膳を用意し、さらに内信の人が帰る際にはオカンキの実と称し、パンや菓子などを土産に持ち帰ってもらった。子どもたちがこれを家で楽しみに待っていたという。平成一四年からは一・三・五回目の逮夜のみになり、家の人が用意するのはお茶とお菓子、持ち帰ってもらう「オカンキの実」となり、食事は用意しなくなった。

昭和五七年に不受不施派に帰入した後、子が他宗派の家に嫁や養子に行き、家に跡継ぎが残っていない場合、死者の子であっても他宗派の檀家であるため、不受不施僧は葬儀に関わる布施などを受け取ることができない。死者がありその家に跡継ぎがない場合は、その家のすでに亡くなった家族の名で僧に布施を行う。

墓制 かつては火葬が行われていた。千種山の裏で講中の人が集まり皆で行う。割り木を用い、灯油や濡れムシロを掛けて火をつけた。昭和四〇年頃を最後に、西大寺斎場（岡山市東区富崎）か東山斎場（岡山市中区門田本町）で火葬にするようになった。墓は講中で特にとまった場所にあるわけではなく、基本的には同族ごとに墓地を持っている。山や丘陵に設けられる場合が多い。単墓制である。

嫁入り 久米右衛門派の当時、同派以外からの嫁入りや婿入りの際にお経頂戴が家の仏壇の前で行われた。今日の不受不施派でもお経頂戴は寺か檀家宅で行われる。

題目石 鍛冶屋にはムラの中に題目石がある。

家の中にあるカミ・ホトケ 家の中にある神仏の祀り場所は仏壇と台所に普賢菩薩を祀るオドクウサマがある。ご飯を炊いたときやお茶を沸かしたときは、湯気が出ているあいだに仏様（仏壇）へお供えする。よその家（かつては久米右衛門派以外、今日では不受不施派の檀家以外）からもらったものは仏壇に供えてはいけないといい、今でもこれを守る家がある。講仲間からもらったものは良い。また初物や貰い物などはまず仏壇にお供えする。

トシガミサマには常設の棚があり、正月のみ祀る。鍛冶屋の久米右衛門派の家では以前から、神棚を祀ってはいけないとは言わない。

氏神 鍛冶屋は隣接する大井^{だいい}とともに神時神社の氏子である。氏子として毎年千円納めるが、お参りはしない。受験の年などには元日朝五時からお参りすることもあった。また四国八十八ヶ所へのお参りなども行うべきではないとされる。

下の条の番神堂 番神様とよばれ、ヒラ（村組）の番神堂である。毎月一日にヒラの人があつまりオカンキをする。令和二年現在は五人ほどが毎回参加しているという。この番神堂は久米右衛門派のものではなくヒラのものであり、宗派に関係なく参加する。

（3）久米右衛門派の信仰

不受不施派に帰入するまでは、基本的に弾圧下の内信と同様の信仰が継続されており、講

仲間の人々は帰入以前のことを内信と言っている。御庵でのオカンキ（お看経）などでは、声に出さず題目を繰り返す心の中で唱えるのみであった。またオカンキの際に久米右衛門派以外のものが近くに來た際などは、牛の売り買いなど余談ばなしをしてごまかしたと伝えられる。

久米右衛門派から三十三番講社となった今日でも御庵が信仰の拠点であり、寺に準ずるとされている。室内の正面中央には祭壇がおかれ、最上段の中央に日奥聖人の小さな位牌、向かって右に厨子に入った大黒天、左には厨子に入った誕生仏が安置されている。背後には御本尊（曼荼羅）が掛けられている。祭壇にむかって右側には仏壇状の棚があり、日蓮上人像や御先師の位牌、過去帳などが祀られている。

また複数の題目を記した曼荼羅（本尊）がある。女性は触れてはいけないと言われていた。不受不施派に帰入するまでは僧侶もおらず、経本もなく、ひたすら題目を心の中で唱えていた。「南無妙法蓮華經」と念ずるごとに数珠を一つ繰り、一周すると数珠に付いた数取玉を一つ上げる。

久米右衛門派の時代には葬式や法事、御庵での行事は特定の人物が導師を務めるなど中心的な役割を担っていたが、特定の家に固定していたり、特別な条件が設けられたりということとはなかった。必然的に信心のある年配の男性が務めていたようである。不受不施派に帰入し法泉寺の檀家となつてからはそれまでになかった入道とよばれる役割ができた。

おわりに

久米右衛門派の特徴は明治初期に不受不施派や講門派が再興された後も、不受不施派寺院の僧によって葬儀を行ったあとに、久米右衛門派の人々により再度葬儀が行われたこと、オカンキの際に声を出さずに題目を念じていたことなど、内信時代同様の信仰を現代に伝えたことにある。

このような信仰が継続された理由として、久米右衛門派を名乗っていることから、久米右衛門によって伝えられた大坂衆妙庵の伝統を継ぐ講門派の正統な教え・信仰を守っているという強い思いがあったと考えられる。

（本節は『岡山民俗』二四一号（二〇二〇年十二月）に掲載した「岡山市東区瀬戸町における久米右衛門派の信仰―現代に伝わる不受不施派の内信―」を加筆修正したものである。）

【注】

(1) 久米右衛門の院号が「慧教院」であり、これに因んでいる可能性が考えられるが定かではない。

(2) 長光徳和・妻鹿淳子編『久米右衛門派鍛冶屋庵(旧森末庵) 文書』長光徳和、一九六六。

(3) 前掲(1)。

(4) 『改訂瀬戸町の歴史散歩』瀬戸町の文化財を語る会、一九九六年、二〇一頁。現地での聞き取りでは、昭和の初め頃ということであった。

(5) 『撮要録』日本文教出版、一九六五年、一四九九～一五〇〇頁。

(6) 岡山県史編纂委員会『岡山県史』第六卷、近世Ⅰ、岡山県、一九八四年。

(7) 瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町誌』瀬戸町、一九八五年、二七九・七五五頁。

(8) 前掲(5)、一四九九～一五〇〇頁。

(9) 同寺は現在瀬戸町鍛冶屋にあるが、この場所に移ったのは明治三十七年のことで、それまでは妙興寺と同じ邑久郡福岡村にあった。

(10) 祭壇に祀られる日奥のものは除く。

表 2 平成 31 年の御庵の行事

月	日	時 間	行事内容
1	1	10時～	お正月
	12	13時～	十二日様・お日待ち
2	12	13時～	十二日様
3	12	13時～	十二日様
	21	9時～	お彼岸
4	12	13時～	十二日様
	28	8時～	御開帳
		11時～	お看経(オカンキ)
			お看経終了後森末御墓所参り
		15時～	御閉帳
5	3	13時～	新ヶ三日・十二日様
6	12	13時～	十二日様
7	12	13時～	十二日様・夏祈禱・雨祝い
8	12	13時～	十二日様・お盆
	14		初盆の家々が準備し、時間などを連絡する
9	12	13時～	十二日様・お日待ち
	23	8時～	お彼岸
10	1	13時～	十二日様
11	12	13時～	十二日様・お講
12	12	13時～	十二日様

表 1 森末にある久米右衛門派の石塔一覧

	正面	左側面	右側面	西暦	形	石材
1	慧口院日壽法師	四月上浣七日	文化三寅口星宿	1820	位牌型	豊島石
2	妙法 三智院日修大徳	なし	なし		位牌型	砂岩
3	妙法 口日院日口	不明	不明		位牌型	豊島石
4	妙法 圓明院日口口位	不明	不明		位牌型	豊島石
5	不明	不明	不明		位牌型	豊島石
6	妙法 恵口院日普	十月廿七日	文化十三子天	1816	位牌型	花崗岩
7	恵実院教是	十月八日 国村忠三郎 行年四十二	明治七期甲戌年	1874	方柱形	花崗岩
8	妙法 新若口修実	行年三十五 俗名 口口	不明		位牌型	花崗岩
9	妙法 恵宝院道位	俗名 徳治	明治十三口口年三月六日	1880	位牌型	花崗岩
10	妙法 笑顔院静寂信士	国歳吾吉 行年六十九才	明治四十一年十一月八日	1908	方柱形	花崗岩
11	妙法 妙講院法信信士	国定若松 行年五十七才	明治四十二年四月十四日	1909	方柱形	花崗岩



写真 2 久米右衛門派の人々が参る墓地



写真 1 北東方向からみた鍛冶屋下の条付近



写真 3 鍛冶屋下の条にある御庵（現・慧教庵）

第五節 岡山市北区加茂の政所講中にみる白川門流日題派の信仰

はじめに

岡山市北区加茂は備中東南部の平野部にある農村である。近世には備中国都宇郡加茂村といわれ、花房氏が治める旗本領であつた。⁽¹⁾ その中の政所まじりと呼ばれる集落には、日蓮宗不受不施派の一派である白川門流日題派の信仰を続ける政所講中がある。同派には僧侶がおらず信者のみで信仰を守り続けている。また政所講中には京都中京組長栄講中からもたらされたオタカラと呼ばれる史料が伝えられている。その中には曼荼羅本尊や遺齒・遺髪・遺骨などが含まれている。

政所講中での現地調査は、平成二七年から二八年にかけて行つた。調査の結果をもとに備中旗本領における不受不施派の信仰と、京都から伝えられたオタカラの意味について考えてみたい。岡山県における同派の研究は中務克己氏によって行われており、同氏の研究に導かれながら政所講中における信仰の実相に迫りたいと考える。

一 白川門流日題派と政所講中の信仰

白川門流日題派は寛文七年（一六六七）に、蓮華院日題が不受不施派の主流から分派した流派である。⁽²⁾ 幕府が不受不施派を禁止した二年後、岡山藩が寺社整理を実施した翌年にあたる。

その後、天保法難により京都で孝善院日養が捕えられて獄死したことで法灯が途絶え、僧侶不在の状態となつた。その後は京都中京組長栄講中（以下京都長栄講中）を中心に各地の信徒によって僧侶不在のまま信仰が維持されたと考えられる。⁽³⁾

しかし、京都長栄講中は次第に衰退し、明治一八年（一八八五）には途絶えることになった。そのとき山崎茂兵衛、芳兵衛兄弟は、同講中の什宝を信者の多い備中妹尾（現岡山市南区妹尾）に運んだが、その妹尾でも信者が減つたため、昭和一七年に政所へ什宝を移したといふことである。⁽⁴⁾ これが現在政所講中に伝えられているオタカラである。

政所には現在五〇数戸あり、その内政所講中を構成する白川門流日題派の家が二四戸ある。政所講中は東と西に分かれ、平成二七年八月現在で、東が一三戸、西が一戸ある。かつて政所講中の檀那寺であつたと言われる宗蓮寺（日蓮宗・岡山市北区津寺）の檀家は現在政所には一軒もない。

政所講中では、内信当時の伝承を現在も聞くことができる。講中の話者によると戦後になっても夜遅い時間に講中の人が集まってオカンキを行っていたほか、話者が幼いころに祖母から聞かされた話では、魚取りなど殺生をしてはならない、講中の信仰に關することは他言してはならないなど、厳しく言い聞かされたという。

この地域の氏神としては政所の北東二〇〇〜三〇〇mのところに加茂神社があるが、講中のものは参拝せず、尻を向けて通れと言われたという。時代の流れと共にこのような意識は徐々に薄れ、オカンキも早い時間に行われるようになっていくが、講中の結束は強く信仰を守っていきこうという意識は大変強い。

二 政所講中における信仰の変遷と石塔調査

政所で白川門流日題派の教えが信仰されるようになった経緯は不明であるが、ムラの周辺にある宗蓮寺や蓮休寺はもともと天台宗で、近世初期にこの地域を統治することになった花房氏が日蓮宗に改宗したと伝えられる⁽⁵⁾。政所講中の伝承によると、同講中は本来宗蓮寺の檀家であったが、同寺が受布施派に転向したため、政所講中の人々は信仰を維持するため檀那寺から離れ、石塔も同寺の墓地にあったものを、現在の墓地(写真1)に移転したと伝えられている。

政所講中の石塔をみるとおおよそ江戸期のものには法号が刻まれ、明治以後のものには法号が刻まれず、正面にも俗名などが刻まれたものがみられる。前者の石塔に刻まれた法号は檀那寺の僧によるもので、後者は僧侶不在であるために法号を付けることができないためであるという。つまり後者は檀那寺から離脱後のものである。その時期を知るために、政所講中の墓地で石塔調査を実施したところ、法号が刻まれた石塔では明治一五年の没年が刻まれたものが最も新しく、法号が刻まれていない石塔では、明治一二年の没年が刻まれたものが最も古いことが明らかになった。弾圧の脅威が無くなった明治一〇年代前半に離脱が進んだようである。現在政所講中の墓地として使用されている土地は、宗蓮寺の墓地から石塔を移転する際に、この地域の地主から田を分けてもらい墓地にしたと伝えられている。

三 京都長栄講中からもたらされたオタカラ

政所講中には京都中京組長栄講中の史料が伝えられ、これを「オタカラ」と称している。講中の方々がその管理を岡山県記録資料館に依頼したところ、大量の文書や曼荼羅本尊の他、遺歯、遺髪、遺骨などが多数含まれていることが明らかになった。同史料に含まれる遺歯、遺髪、遺骨は、あらたに建立された供養塔内に納められた。現在実物をみることはできないが、講中の小山實氏が写真などの記録に残されているので、その記録に頼りながらこれらの史料について検討を行いたい。小山氏の記録にある遺歯・遺髪・遺骨は表1の通りである。

御先師様 遺歯二六本

この遺歯はガラスのビンに入れられ、ホルマリン漬けにされていたという。それを覆う袋に「御先師様」と書かれており、日養上人と言い伝えられている。納められている歯の数は二六本である。

山崎國弘木箱入り遺歯三二本

木箱には山崎國弘とありその下には花押が記されている。不受不施派を含む日蓮宗の僧はよく花押をもちいるが、この山崎國弘は僧侶に準ずる立場にあつたのではないだろうか。遺歯は三二本で一本ずつ紙に包まれている。この内一九本の包み紙には年・月・日・時間・歯の名称などが記されている。最も古いものは「天保五年（一八三五）六月五日 前は（齒）左り」と書かれ、一番新しいものには「元治二（一八六五）年二月九日八つ時 下奥は 上下三十式枚納」とある。これらの歯は生前に歯槽膿漏などで抜け落ちたものと思われ、虫歯のように齧蝕したものも含まれている。また包み紙の多くに「芳兵衛」と書かれ、箱の墨書に山崎國弘とある。同一人物であるとみられる。

山崎茂兵衛の遺髪

包み紙に明治五年（一八七二）申六月十一日 山崎茂兵衛六十九才と書かれている他には情報はない。しかし明治一八年に京都長栄講中が活動を停止し、当時その代表者であつた山崎芳兵衛と山崎茂兵衛の兄弟が、信者の多い備中妹尾に京都長栄講中の什宝を運んだとい⁶い、両名が僧侶不在となつた京都長栄講中のなかで高い地位にあつたことが推定される。両名が自らの歯・髪も備中へと運んでいることがわかる。

妙蓮尼の遺骨、遺髪、遺歯

妙蓮尼については「二妙蓮尼骨 辰 ○十六日」と墨書のある曲げ物に入れられた遺骨（内容物の写真は無い）、「妙法 妙蓮尼」などと書かれた紙に包まれていた白髪混じりの遺髪、「みつえ」と書かれた紙に包まれていた遺歯（写真で見る限り二〇本程度か）がそれぞれ伝えられている。この遺歯については、遺髪と一緒に包まれていたようである。「みつえ」という俗名の女性とみられる。

歯と髪については、生前に保存した可能性があるが、遺骨は明らかに死後のものである。その時期は不明である。

5 陶磁器に入った遺歯多数 記入無し

6 陶磁器に入った遺骨 記入無し

5・6については記録がなく、誰のものはわからない。

これらの遺歯・遺髪・遺骨が政所講中に伝えられ理由は伝えられておらず、保管し続けている目的も不明である。死後に遺骨を霊場などに納骨する例は、高野山奥の院や奈良の元興寺などがよく知られており、多所多祭による死者供養である。⁽⁷⁾ 政所講中に伝えられた長栄講中の遺歯・遺髪・遺骨も同様の目的が考えられる。

生前に抜け落ちた生歯を納める例は、長野県松本市の牛伏寺（真言宗）で確認されている。赤田光男氏は、同寺の近世中期から明治期に作成された絵図や図面に「骨堂」が描かれていることに注目し、その跡地の発掘が原明芳氏によって行われた。その結果、合わせて四二〇八本もの歯が出土し、その内生歯が四〇六〇本、焼歯が一四八本であったという。松本歯科大学の金銅英二氏による鑑定の結果、ほとんどの歯が高齢者層のもので、歯周病や齲蝕により抜けた歯、または抜いた歯である可能性が高いということであった。また、新潟県佐渡市小木町の蓮華峰寺の骨堂からも生歯が発掘されている例も紹介している。⁽⁸⁾ いずれの例も生前に抜け落ちた歯であり、当人の死後に追善を目的として納められた、あるいは生前に逆修のために納められた可能性が考えられる。

白川門流日題派の場合は、他の不受不施諸派と同様に寺を失い、公に信仰を継続することが不可能となったこと、天保法難で日養を失い以後僧侶不在になったことなど、同派の事情が関係していると考えられる。

長栄講中からもたらされた遺歯・遺髪・遺骨は不受不施僧である日養のものとされる遺歯と、以後は講中のなかで高い地位にあった俗人のものとみられる。京都での信仰が維持できなくなったため、信仰が行われる地域で供養されることを望み、オタカラとともに伝えられたものと推察する。

おわりに

白川門流日題派は天保法難以来僧侶不在となり、以来今日に至るまで信者のみで信仰が維持されている。政所講中が檀那寺から離脱した後の石塔に法号が刻まれているのはそのため、近現代における政所講中の特徴といえることができるだろう。

また、日題派の中心組織である京都中京組長栄講中からもたらされた遺齒・遺髪・遺骨は同派最後の僧である日養のものと、日養亡き後に日題派のなかで中心的な役割を務めた人物のものである。つまり法脈を伝える僧と、僧にかわって信者を指導した人々のものであり、信仰の拠り所になり得るものである。僧を失い法脈の断絶に追い込まれながらも、同派の信仰を維持する望みを託して保存され、政所講中に伝えられたものと推察する。また遺齒・遺骨・遺髪をオタカラのなかに納めるのは、死者供養であり、日題派を信仰する人々のもとで供養してもらう目的があったものと考ええる。

筆者が本章で取り上げた不受不施諸派の内信は、いずれも幕府によって不受不施派が禁じられる以前に形成されていた不受不施派寺院との関係を引き継ぐものであると考えられる。それらの寺院は基本的にはムラの先祖信仰を担っていたとみられる。寛文五年の幕府による弾圧の際に廃寺、または受不施派寺院に転向した場合に、人々は表向きには新たな檀那寺に属するものの、実際には不受不施派の教えを信仰する内信者となり、従来の信仰を続けた。つまり不受不施派信仰の基底には先祖信仰があり、弾圧下においても先祖信仰が行われている。約二〇〇年にわたって弾圧に耐えながら信仰を継続した根底には、先祖が信仰した宗派による先祖信仰を守り続けたという強い思いがあったものと考ええる。

(本節は『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第一七号(二〇一七年三月)に掲載した「岡山市北区加茂政所講中にみる白川門流日題派信仰―檀那寺からの離脱時期と講中に伝わる遺齒―」を加筆修正したものである。)

【注】

- (1) 『日本歴史地名大系34 岡山県の地名』平凡社、一九八八年、六二八頁。
- (2) 中務克己「白川門流日題派の調査―幻の信徒を訪ねて―」『岡山県史研究』第一二号、一九九〇年、一一八頁。
- (3) 前掲(2)、一二六頁。
- (4) 同前。
- (5) 前掲(1)、六二八頁。
- (6) 前掲(2)、一二六頁。
- (7) 高田照世「大和高山の本願寺における位牌祭祀」『日本文化史研究』四三、二〇一二年。

(8) 赤田光男「牛伏寺の祖霊信仰―観音浄土と納骨習俗」『牛伏寺誌 歴史編』所収、牛伏寺誌刊行会、二〇一三年、五九八頁。

表 1 京都長栄講中の遺歯・遺髪・遺骨一覧

人 名	遺物	年月日	表 記	数量・容器	西暦
1 御先師様	遺歯	于時 天保十三年寅七月大吉日		歯26本・ガラス瓶 木箱	1842
2 山崎國弘	遺歯	内容物・包み紙の表記			
		天保五年辰六月五日	前は左り		1834
		天保十三年寅七月十七日 四つ時	芳兵衛之前は		1842
		天保十四年卯 正月廿六日 六つ半時	芳兵衛		1843
		天保十五年辰七月十九日 六つ時	前は右		1844
		天保十五年辰十二月廿二日	前下は		1844
		弘化三年午三月廿五日	下は		1846
		弘化四年未正月廿八日	下は芳兵衛		1847
		弘化四年未七月廿六日	下は口		1847
		嘉永元年四月十一日	芳兵衛下は	歯32本・和紙	1848
		嘉永元年九月十四日	左上のきは 芳兵衛		1848
		嘉永二酉 閏四月廿日	上左おく		1849
		嘉永三戌、四月十八日	左下のキハ 芳兵衛		1850
		嘉永四亥正月三日	左下 芳兵衛		1851
		嘉永四亥正月四日	右下きは芳兵衛		1851
		嘉永五子七月十七日	是は右の上は きは 芳兵衛		1852
		嘉永六丑二月十九日	芳兵衛は		1853
		嘉永六丑二月十九日	芳兵衛 下は		1853
		元治二丑二月九日 八つ時	下奥は 上下三十枚納		1864
3 山崎茂兵衛	遺髪	明治五年申六月十一日	六十九才	和紙	1872
4 妙蓮尼骨	遺骨	辰 口(月)十六日		丸木箱	
	遺髪			和紙	
	遺歯		みつえ	和紙	
	遺歯			歯20本程度 陶磁器・和紙	
6	遺骨				



写真1 政所講中の墓地（奥）
と焼き場（手前）

結語

全四章で備前・備中地域における仏教民俗の展開を考察した。結語として各章で明らかにしたことを以下に記す。

第一章では備前・備中の報恩大師伝承の展開について論じた。第一節では、大和から備前への報恩大師伝承の伝播について考察した。備前の報恩大師伝承は大和の子島寺（真言宗・高市郡高取町観寛寺）を起源とする伝承がもたらされ、金山寺（天台宗・岡山市北区金山寺）の『金山観音寺縁起』（治承四年・一一八〇）で、備前独自の伝承として確立されたものと考えられる。

また先行研究により備前には報恩以前に智久の伝承があり、ここに報恩の伝承を付与することで備前独自の伝承が形成された可能性があることが指摘されている。都で活躍した高僧である報恩の伝承を導入することで寺の権威付けを図ったと考える。また勧進に伴って報恩大師伝承が主張されていることがわかった。天台宗の金山寺に報恩大師伝承が導入されたことで、備前・備中の天台寺院間で伝承が拡大した可能性が考えられる。

第二節では中世後期における備前四十八ヶ寺の成立について論じた。先行研究によると備前四十八ヶ寺を構成する寺院は天台宗であったとされているが、後に構成寺院のなかにも真言寺院がみられるようになる。さらに中世の武将である松田氏の政策により日蓮宗が勢力を拡大し、松田氏の改宗要求を拒否した金山寺が焼討ちに遭っている。この日蓮宗の拡大に危機感を覚えた金山寺を中心とする密教寺院勢力が日蓮宗に対抗するために結束した可能性があると考える。

その後、伯耆大山寺（天台宗・鳥取県西伯郡大山町）出身の豪門が金山寺へ入り、宇喜多氏の庇護のもと天正三年（一五七五）に金山寺を再興する。このほかにも備前四十八ヶ寺に含まれる複数の寺院に豪門によって再興されたとする伝承があり、豪門が備前四十八ヶ寺の成立に関与していることが垣間見える。その後天正一九年（一五九一）には禅光寺（安住院・真言宗・岡山市中区国富）の寺蔵文書に備前四十八ヶ寺の名が初めて確認でき、文禄四年の『備前国四拾八ヶ寺領并分国中大社目録』によって、構成寺院を知ることができる。難波俊成氏は天正三年から文禄四年の二〇年の間に備前四十八ヶ寺が形成されたと推察している。筆者もこの時期に豪門によって金山寺を中心とした天台寺院の地位や勢力の確立が計られるとともに、宇喜多氏による政治的な思惑とが合わさり、真言宗と日蓮宗を含んだ備前四十八ヶ寺が成立したものと考ええる。

第三節では備前・備中にみられる近世の報恩大師伝承と、備前四十八ヶ寺の巡礼について論じた。備前四十八ヶ寺の成立によりその中核寺院であった金山寺がもつ報恩大師伝承を構成寺院が取り入れたこと、主に勧進に伴って伝承を主張したことが明らかになった。江戸期には報恩大師伝承を取り入れ、縁起を作成する寺院が増えることが判明した。この背景には、庶民の寺社参詣が活発になる中で、信仰を集める狙いがあったと推察する。

次に中期以降に備前四十八ヶ寺で行われた巡礼について論じた。金山寺に伝わる享保一五年（一七三〇）に作成された「備前四十八ヶ寺巡礼かがみ」の版本により、庶民によって巡礼が行われたことが確認できた。また弘法寺奥の院には報恩大師が祀られ、他の寺院でも報恩大師像を祀るようになる。これらによって報恩大師を庶民の信仰対象にしようとしていたことがわかる。

近世になると備中でもいくつかの寺院が報恩大師伝承を取り入れた縁起を作成するようになる。また報恩大師伝承をもつ山岳寺院の日差寺が解体され、新たに民間寺院が形成される過程で、報恩大師伝承が引き継がれ、拡大している様子が明らかになった。

第二章では現代の報恩大師信仰と智明権現の祭りについて論じた。第一節では民俗調査で得られた報恩大師信仰について報告を行った。弘法寺奥の院と赤磐市穂崎で祀られている報恩大師の事例を報告したほか、口承伝承として語り継がれている報恩大師伝承について論じた。報恩大師信仰が生きた信仰として人々に浸透していることが明らかになった。

第二節では備前における智明権現の祭りについて論じた。智明権現は伯耆大山寺の本尊である。現在、大賀島寺（天台宗・瀬戸内市邑久町豊原）の権現祭りでは本地仏である地藏を神輿にのせた渡御が行われている。明治初期の神仏分離政策の後も神仏習合の形を保ったままの祭りが執行されていること、牛馬や農耕の神として信仰されていることが明らかになった。江戸期には熊山の霊山寺（廃寺・天台宗・赤磐市奥吉原）でも同様の祭りがあった。大賀島寺と熊山からは大山を遠望できる。大山を望むことができる地域に大山信仰が広がっていた可能性を指摘した。

第三章では、備前・備中の民間寺院の成立について論じた。第一節では中世の山岳寺院である日差寺（倉敷市山地）と福山寺（総社市西郡）が解体され、それぞれの子院が周辺村落に移り、ムラの先祖信仰を担う民間寺院に姿を変えていることが明らかになった。

第二節では瀬戸町大井に近世初期に存在した日蓮宗不受不施派の蓮久寺が、先祖信仰を担う民間寺院として創建されたことがわかった。同寺は寛文六年の寺社整理で廃寺になったが、寺跡の墓地に先祖の墓を持つ複数の同族は現在もご先祖回向を行っており、寺で先祖

信仰を行っていた当時の名残であると考えられる。

第四章では備前・備中で信仰される日蓮宗不受不施派と不受不施諸派の信仰について論じた。第一節では、自治体史などで不受不施派の信仰と歴史的経緯について確認した。三宅島流僧で内信者組織を確立した日珠は備前の出身であり、備前との関わりが強い僧であることを確認した。

第二節では和気町益原の信仰を取り上げた。特に杉本家に伝わる江戸期の弾圧当時の伝承と史料から、内信の実相に迫った。その結果、今も杉本家の蔵にある隠し部屋が益原村の信仰の拠点である大樹庵であった可能性があること、杉本家には三宅島流僧の日珠をはじめとする不受不施僧から授けられた曼荼羅本尊や仏具が多数伝えられていること、『法泉寺文書』にも日珠などの不受不施僧から杉本氏に宛てられた書簡が多数含まれていることがわかった。杉本家が内信者組織のなかで重要な役割を果たしていたことが考えられる。

また同家の位牌・過去帳・石塔と弾圧当時の檀那寺に伝わる法号を比較した結果、檀那寺による法号を一部改変して用いる事例と、不受不施派で新たな法号を付ける事例が確認でき、弾圧下に展開した内信の実相に迫ることができた。さらに不受不施派の基層には先祖信仰があることが明らかになった。

第三節では御津矢原の不受不施派と不受不施日蓮講門宗の信仰について考察した。ここには日珠が庵主を務めた本妙庵があり、現在も信仰の拠点になっている。調査の際に「清者」と刻まれた石塔を確認することができ、近世の矢原村に内信者から不受不施僧である法中に布施をする際に、施主の役割を担う清者が実在したことをつかめた。

第四節では、岡山市東区瀬戸町鍛冶屋の御庵を中心に展開されていた久米右衛門派の信仰について論じた。同派の特徴は僧侶不在のまま信仰が維持され、題目を声に出さず心の中で唱え、葬儀では日蓮宗寺院による葬儀の後に久米右衛門派による葬儀を行うなど、弾圧下と同様の信仰を継続していたことにある。このような信仰が昭和の終りまで続けられた理由としては、天保法難の際に久米右衛門によって伝えられた大坂衆妙庵の伝統を受け継ぐ講門派の正統な教え、信仰を堅持しようという強い思いがあったと考えられる。

第五節では岡山市北区加茂の政所講中における白川門流日題派の信仰について論じた。政所講中でも昭和に至るまで、信仰に関することは他言無用とするなど厳しく信仰が守られてきた。同派も天保法難以来、僧侶不在のまま信者のみで信仰が維持されている。政所講中には京都中京組長栄講中のオタカラが伝えられ、その中には曼荼羅本尊などともに遺歯・遺髪・遺骨が含まれていた。これらの遺歯などは多所多祭による追善や逆修を目的とし

たもので、日題派の信仰を行う人々によって供養されることを望み、備中の政所講中にもたらされたものと考えられる。

以上のように仏教が民俗化する過程と仏教民俗の諸相について論じた。報恩大師の伝承と報恩大師信仰、智明権現や不受不施諸派の信仰は備前・備中における仏教民俗の特徴といえる。最後に明らかにしたことをもとめておきたい。

・平安末期から現代までの報恩大師伝承を時代ごとに検証したことで、伝承を主張する目的と仏教が民俗化する過程を明らかにすることができた。中世前期には天台寺院の優位性を示すものとして報恩大師伝承の存在が主張され、中世後期には勧進に伴って伝承が民間に拡大したことが推察される。江戸期には庶民の信仰心の高まりを受け報恩大師伝承を取り入れた縁起を作成する寺院が増加し、報恩大師信仰が庶民に浸透し報恩大師ゆかりの備前四十八ヶ寺の巡礼が行われるようになる。現代でも赤磐市穂崎や弘法寺奥の院で報恩大師が祭祀され報恩大師信仰が定着し、報恩大師が地元之恩恵をもたらしたとする口承伝承が語り継がれている。

・近世初頭には中世的な山岳寺院が解体され、先祖信仰を担う民間寺院に姿を変える事例や新たにムラの人々により民間寺院が創建される事例がみられ、仏教が民俗化する様子が顕著に現われている。

・山岳寺院には農耕や牛馬の神である伯耆大山寺の智明権現が勧請され、今日に至るまで信仰されている。

・岡山藩の寺社整理により多くの不受不施派寺院が廃寺になったことで、内信という方法で信仰が継続された。不受不施諸派の信仰の基層には先祖信仰があり、死者の追善や先祖供養も重要な要素である。

本論の執筆にあたっては調査などで多くの方々に協力をいただいた。ここに深謝申し上げる。

初出一覧(「新稿」は学位論文提出時の新稿)

第一章 報恩大師伝承と備前四十八ヶ寺の展開

第一節 「報恩大師伝承の伝播に関する試論―大和から備前への伝播と備前における伝承の確立―」(『奈良学研究』第二二号 二〇二〇年)

第二節 「備前における報恩大師伝承の拡大と備前四十八ヶ寺の成立」(『奈良学研究』第二三号 二〇二一年)

第三節 「備前国における報恩大師信仰と備前四十八ヶ寺巡礼―聖による霊場形成の可能性」(『日本文化史研究』第五〇号 二〇一九年)

第二章 現代における報恩大師と智明権現の信仰

第一節 「備前における報恩大師の口碑―芳賀坊快賢と清水の伝承を中心に―」(『日本文化史研究』第五一号 二〇二〇年)

第二節 「備前大賀島寺と権現祭りにみる寺と村落―大智明大権現の祭礼と祭祀組織―」(『岡山民俗』二四〇号 二〇一九年)

第三章 民間寺院の成立と祖先信仰

第一節 「備中日差寺と福山寺に起源をもつ民間寺院の成立」(新稿)

第二節 「岡山市東区瀬戸町大井における民間寺院の成立と祖先信仰」(新稿)

第四章 日蓮宗不受不施派の信仰

第一節 「備前における不受不施派の特徴」(新稿)

第二節 「備前国和気郡益原村「杉本家」所蔵資料から見る不受不施派の実相」(『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第一三号 二〇二一年)

第三節 「御津矢原における日蓮宗不受不施派および不受不施日蓮講門宗の信仰」(『岡山民俗』第二三九号 二〇一八年)

第四節 「岡山市東区瀬戸町における久米右衛門派の信仰―現代に伝わる不受不施派の内信―」(『岡山民俗』二四一号 二〇二〇年)

第五節 「岡山市北区加茂政所講中にみる白川門流日題派信仰―檀那寺からの離脱時期と講中に伝わる遺齒―」(『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第一七号 二〇一七年)